IS（インフィニット・ストラトス）精霊と赤き竜とＩＳと

しゅーろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ精霊と赤き竜とＩＳと
（インフィニット・ストラトス）

【Ｎコード】
Ｎ１１１３Ｕ

【作者名】
しゅーろう

【あらすじ】
遊戯王ＧＸの十代と５Ｄ，ｓの遊星がＩＳの世界へクロスオーバーします。オリジナルの敵などを出したりしていきます。
まだまだＩＳを完全に理解しているわけではないのでゆっくりになると思いますがそれでもよろしければ見てください
（インフィニット・ストラトス）

設定（随時更新予定　ネタバレあり）（前書き）

とりあえず、設定を作ってみました。随時更新していこうと思います。

設定（随時更新予定　ネタバレあり）

十代
時期　パラドックスを倒してから約1か月後
ＩＳ　決闘英雄（バトル・ヒーロー）→銀河英雄（ギャラクシーヒーロー）
機体の色はかなり濃い赤
待機状態は左手人差し指にはめる灰色の指輪
初期段階では訓練機にも劣るスペックだったが、ファーストシフトした際にスペックがパワーアップした。その際左腕に大きなカードを組み込めるような空間ができた

オベリスクと戦う前の晩に第二形態移行をした
その際、左腕が輝くようになった
戦闘方法
十代のモニターに手札5枚と場が展開される
ものすごくわかりやすく言うと一人でデュエルをするかのように相手と戦う
モンスターの召喚・維持・魔法と罠の発動によってＩＳのシールド・エネルギーが減る。破壊された時も減る。
減り方はカードによって様々
召喚したモンスターの力を十代のＩＳに変換させる。例えば、フェザーマンならば、空中での機動力と速度の上昇など

現在、Ｎ・ネオス・ユベル・Ｅ－ＨＥＲＯは使えない　（エラーが起こる。ただし一部のサポートカードは使える）
だが、銀河英雄（ギャラクシーヒーロー）になったことで、使えるようになった。ただしＥ－ＨＥＲＯは本調子ではないらしい
実は十代の使用しているデッキの中身とＩＳで戦う時に出てくるカードの中身は同じ

デッキを調整すれば同時にＩＳで出てくるカードにも変化が出る
新たな力として、シールド・エネルギーを消費することで十代の周りだけネオスペースと同じ効果のある空間を作り出せるようになった。これにより、コンタクト融合がよりやりやすくなった

他の二人の期待に比べ、自身とＩＳの相性が非常に良いため、ＩＳの能力をほぼ完ぺきに使いこなしている。もはや体の一部とまで言われるほど

遊星
時期　ジャックとの決着から数週間後
次元の精霊の力で赤き龍の痣が背中に描かれた。（セイヴァー・スターを出すときに刻まれる感じ）本物とほとんど変わらない力を持っているらしい
ＩＳ　絆星
機体の色は夜空のような薄い黒
待機状態は星の模様の入ったチョーカー　機体はできているが未完成状態……だったが、オベリスクと戦う前の晩に完全完成　少し模擬戦を行った程度だがほとんど能力は把握できている

最初は全く動かなかったが、ほかの訓練機と同じレベルで動くことができる。しかし武器などが何もないので、戦うことはできないといってもよい
１７話現在、このＩＳの存在を知っている人はいるが、動くことを知っている人は十代と千冬だけ

基本的に戦い方は十代と同じでデュエルをするかのように戦う。ただし遊星の場合、ライディング・デュエルで戦うためスピードカウ

ンターの存在により時間がたつたびにＩＳの速度が上昇していく
自身の操作でも速度はもちろんあげていくこともできるため、クリア・マインドも理論上可能

他の二人の機体に比べ、移動性能・速度は一番である。遊星を抜かせるものはいないのでは、と言われるほど

遊戯
時期　アテムが冥界に帰ってから数週間後

後からやってきた初代デュエルキング

ＩＳ　アテム
機体の色　砂漠の砂のような色
待機状態は千年パズルと同じ形のペンダント　色も同じ　遊戯の記憶の中にあったアテムをデータ化しているため話すことができる
原作みたいに入れ替われるのはＩＳを起動している時かつ遊戯の許可が出た時のみ
特殊な力として、眠っている相手に触れることで、その夢の中に入ることができる。遊戯自身も眠ってしまう
またその夢の中で特別な空間を作ることができる。ただし十分くらいまでしか持たない
この二つの力は次元の精霊からもらったものらしい

基本的な戦い方は上記の二人と同じ
大きな違いは遊戯とアテムの二人の心を切り替えること　（マイン

ドシャッフル）

二人のデッキの中身はもちろん違うので、これによりさらに多くの戦術で戦うことができる。

ただし心を切り替える場合、場の状況を一度リセットしないといけない。つまり準備万端の状態で戦うことができない

遊戯は主にサイレント系やガジェットを使う

アテムはブラック・マジシャンを主軸に戦う

相手からしてみれば一度に二人の相手と戦わなければならない感じ

戦術の多さでは一番ではないかと噂されている

プロローグ（前書き）

初めまして、しゅーろうといいます。
初投稿で、初のＩＳの小説です。うまくいくかわかりませんが、よろしくお願いします。
最初はプロローグなので短めです。

プロローグ

十代サイド

パラドックスの襲撃から1ヶ月が経とうとしている。俺は今でも世界の様々なところを旅している。勿論、ユベルとファラオ、魂だけの大徳寺先生も一緒だ。

さて、今日の寝床を探そうと思い、街に向かう途中、俺は地面に落ちていた変な機械を見つけた。

「何だこれ……何かの機械のコアに見えるけど……」

ユベルや先生に聞いてみたがわからないみたいだ。怪しいものだが、これが何か知りたくなったため俺はこの機械を持っていくことにした。ユベルから反対の意見もあったが、説得をして持っていくことにした。

少し歩くと、先ほどの機械が急に光始めた。俺たちは何もできないまま、その光に包まれてしまった

遊星サイド

ジャックとの決着後、俺はイェーガー市長に長期の休暇を言い渡された。どうやらかなり長いこと休んでいなかったため、体調を心配されてしまった。まあ、確かに徹夜続きだったからちょうどいいかもしれない。

気晴らしにD－ホイールで、郊外に行った。そのとき見慣れない機械が落ちていた。

「何かのコアのようだが見たこともないものだ……これは一体？」

俺はそれを回収して、自分の部屋で調べてみようと思った。

しかし、ネオ童実野シティにつく前に、俺は不思議な光に包まれた。

プロローグ（後書き）

プロローグ終了です。
次回の更新は未定ですが、なるべく早く書きたいです。

第1話　次元の精霊の願い（前書き）

第1話始まります
まだまだ手探り状態なのですが、頑張っていきたいと思います。

第1話　次元の精霊の願い

「クリ～……クリ～！」

十代の精霊の内の一体であるハネクリボーが、十代の体をゆすっている

といっても体がとても小さいので、体当たりしているのだが……

「う、う～ん……ハネクリボー？」

体当たりを数回続けると、十代の意識は戻った。すぐに周りを見渡してみるが、白い景色ばかりで、何もわからない。そう思った時、少し離れたところに、人と赤い何かがあった。

十代とハネクリボーはすぐにその人のところへ駆け寄った。同じように気絶していたため、相手の体をゆすった

しばらくするとその人は目を覚ましたが、その正体に十代は驚く。目を覚ました人も十代の顔を見るなり驚いた

「まさか……もう会うことはないと思っていたのに……また遊星に会えるなんて……」

「ええ、俺も会えないと思っていました。お久しぶりです……十代さん」

お互いに驚いたが、すぐに落ち着き状況を判断し始めた

とりあえずわかっていることは謎の機械のせいでここに飛ばされたことくらいか

これからどうなるのか考えていた時、二人の前に何かが現れた

体が光っており、女性のように見えるが明らかに人ではなく、何か神秘的な感じがした

「遊城十代と不動遊星……ですね。良かった……あなたたちのような心の強きものがここにきてくれて……」

その女性の言葉に警戒をする二人。いきなり何を言っているのか訳が分からなかったからだ。

「貴様は何者だ！　目的は何だ！？」

威嚇するかのように遊星は聞いた。

「私は次元の精霊。赤き龍の友でもあります」

そういった瞬間、彼女の後ろに赤き龍が現れた。その事実に二人は驚いて言葉が出なかった

「私はあなたたちにお願いがあってここへ連れてきました。ある世界を救ってほしいのです。」

「精霊の力を使って、世界を自分たちの望むように作り変えてしまう……そのような者たちを倒してほしいのです。私が行こうにもこの空間から私は出ることはできません」

「お願いします！　このままでは、彼らの力が強まり、他の次元にも干渉してしまうかもしれないのです」

必死な頼みにこたえたい。そう二人は思ったが、まだ確信が持てなかった

「信じてみてもいいかもしれないんだにゃ～、二人とも。彼女の言葉に嘘は見えないのにゃ～」

「確かに、彼女は精霊だ。そして後ろにいる龍の力も本物だ。恐らく騙してはいないだろう」

急に現れた大徳寺とユベルが賛成の意見を出していた。ハネクリボーも同じ意見のようで頷いている

「……わかった、行かせてもらうぜ」

「誰が相手かは知らないが、見過ごすことができない。その世界の運命を俺たちが変えてみせる」

次元の精霊は十代と遊星の言葉に涙を流しながら感謝をしていた

「ありがとうございます……」

その涙を見て少し気まずい雰囲気になった

彼女が泣き止んだ後、彼女からこれから行く世界について軽い説明があった。
二人が拾った機械はその世界では重要なものらしい。しかしどういうわけか遊星のほうは壊れてすぐには動かないようだ。十代の機械はすぐに稼働できるらしい

どうやって使うかは、彼女自身も詳しくは分からず、その世界に行ってから知ってほしいと言った。

これには少し文句が出たが、彼女の謝罪によってお咎めはなかった。彼女曰く全て次元の行き来をつかさどっているだけで、その先の世界について知ることはあまりしないようにしているらしい

その説明が終わる

「では、あなたたちに幸あらんことを……」

その言葉と同時に十代と遊星の目の前は光に包まれた。その光は最初の時よりも強く何か入り込んでくる感じがした

気が付くと……二人は空にいた

正確には落下中である

「って、なんだよ！　これ」

十代は叫ぶが何の解決にもならない

何とか落ち着いて助かる方法を考えてみる。リュックの中に隠れているファラオと幽霊の状態の大徳寺では無理がある

ユベルの力を使おうと思ったが、自分のデッキは腰のデッキホルダーに入ったまま　落下中に取り出してはデッキを落としてしまう確率が高い

何よりユベルが出てこない

（すまない、十代……次元の移動の時に僕の体が思ったより傷ついた。すまないが休んで治したいからしばらくは表に出られそうもない）

その言葉を最後にユベルは黙ってしまう

一方、遊星はＤ－ホイールに乗り切れず、落下している。落下中でうまく乗ることができない

仮に乗れたとしても着地がうまくいく保証はどこにもない

（このままじゃまずい……いったいどうすれば……）

十代がそう思った時、頭の中に何か情報が入ってきた

（これは？　ええい、迷っている暇はない）

十代は何かを唱えた

「出でよ！　決闘英雄（バトル・ヒーロー）！！」

その瞬間、十代の体にパワードスーツが装着された

「こ、これは一体……？　ともかく遊星を」

急いで遊星のもとに行き、助けることにした。初めて使うものなのだが、なぜか十代には使い方が分かっているようだ

「十代さん……その姿は一体？」

「話は後だ！　とにかく安全に降りよう」

遊星とＤ－ホイールを抱えて、地面に降りた。それと同時に十代を装着されていたパワー度・スーツは消滅し、代わりに小さな灰色の指輪が出てきた。

いったい何が起こったのかを考えようとしたとき

「そこの二人！　何をしている！？」

鋭い釣り目のスーツを着た女性に発見された。

第1話　次元の精霊の願い（後書き）

とりあえず、十代のＩＳを出しました。設定等はまた別の時になるべく早く書きたいと思います

第2話　織斑兄弟との遭遇（前書き）

更新します。
書き忘れていましたが、時期は本編前です

第2話　織斑兄弟との遭遇

目の前にやってきた女性を前に遊星と十代はどうするべきか戸惑った

（どうする……遊星、俺たちのことを正直に話すのはかなり厳しいと思うぞ）

（とりあえず、俺が適当にごまかしてみますから合わせてください）

「言っておくが、何かごまかそうとしたらただじゃおかないぞ」

やってみようと十代が言う前に女性に口止めされた

どのように話していいかわからずにいたが、そんな時に意外なところから助け舟が出た

「私が話してみるのにゃ、少なくとも大人同士の話だから何とかなるはずだにゃ」

大徳寺が出てきて女性に話しかける

「私は大徳寺という者だにゃ。この子たちの……保護者みたいなものですのにゃ。まずは私たちの話を聞いてほしいんだにゃ」

「む、私は織斑千冬というものだ。そちらのお話をお願いしたい」

千冬と名乗った女性は大徳寺の姿を見て少し警戒したいと思ったが、その丁寧な対応に対して、とりあえず話を聞くことにした。少し半透明に見えるのはホログラムか何かと思っているようだ

「なるほど……遊城と不動はこの世界を救うために別の次元から来たか、そして遊城は先ほど機械のスーツみたいなものを装着した……か。にわかには信じがたいな……」

その言葉を聞き、二人はこの世界に来る前に見つけた機械と十代はデュエルディスクを、遊星はＤ－ホイールを見せることにした。恐らくこの世界にはない技術なので、信じてもらうための証拠となるだろうと思っている

「……確かにこの技術は見たことがない……とりあえず、お前たちが別の世界から来たことは信じよう」

「さて、それより気になるのがなぜ遊城がＩＳを使えるのかだ。本来、女性にしか使えないものなのだが……それに不動の持っているのはＩＳのコアだ……いったいどういうことだ……いくらあいつでも別の世界なんて……」

ぶつぶつと何か千冬は考え込こもうとしたがすぐに別の方向を向いた。十代と遊星も千冬と同じ方を向いていた

「……気のせいか……誰かに見られている気がしたが」

「俺もそんな感じがしました」

「だが、一体何だったんだ？……？」

その気配はすでに無いが、あまりここでゆっくりもしていられなさそうということを思った千冬は携帯を取り出し、自分の家へ連絡を取った

「一夏か、まだ夕飯は作り始めていないのか？　いや、ちょうどいい。今日は二人の客を連れて行くから少し多めに用意してくれないか？　すまないな、頼んだ」

「さて、続きは私の家で話してもらおうか。その方が、いろいろと安心だしな」

千冬の提案に乗ることにした十代と遊星。今ここで反対する理由はない

歩くこと数十分、織斑家に到着した。もちろん遊星はバイクを引っ張ってここまで歩いた

「帰ったぞ、一夏」

「お帰り、千冬姉。その人たちがお客さん？」

玄関から一人の男が出てきた。彼こそ、千冬の弟の一夏である

「俺は不動遊星だ。急に押しかけてすまない」

「遊城十代だ。なんだか悪いな」

「えっと、織斑一夏です。あまりおもてなしもできませんがどう……ぞ」

一夏は何か変なものを見たような表情をした

（……十代さんの近くにいる小さな羽の付いた可愛らしい生き物は何だろう？）

「何をボーとしている。私達が家に入れないじゃないか」

一夏は千冬の言葉で我に返り、すぐに二人を招き入れた

（おっと、そうだった。待たせるのはお客さんに失礼だしな……後で聞いてみるか）

そう思い、一夏は夕飯の用意を始めた

第2話　織斑兄弟との遭遇（後書き）

近いうち二十台のＩＳなどの設定を書きたいと思います。
できるだけ早く書けるように努力します

第3話　ＩＳを知るために（前書き）

少し時間がかかりましたが投稿させていただきます。
少し詰め込みすぎた感があるかもしれないです……

第3話　ＩＳを知るために

「これ一夏が作ったのか？　すげぇな！」

「確かに……一つ一つの味付けしっかりとしている」

「ありがとうございます。そんなに褒めていただけるとは思っていませんでした」

夕食時、十代と遊星の感想に素直に嬉しく思う一夏

彼の隣で食べている千冬も声に出して言いはしないが満足しているようだ

ちなみに一夏には、遊星と十代は千冬の知り合いと言ってある

食事も終わり、一夏は片づけや十代達の寝る場所の準備などを始めた

それと同時に千冬は自身の部屋に招き、話を始めた。一夏には重要な話だから聞かないでほしいと言っている

なぜそのようなことをしたのかを十代は聞こうとしたが、千冬は答えてくれないだろうと感じた

「さて、まずは何を話すべきか……とりあえず、この世界についての説明をするか」

ＩＳと呼ばれる世界最強兵器があるこの世界。ＩＳとは、パワードスーツの軍事兵器のこと。一番の特徴としてこの兵器は何故か女性にしか使えない。ゆえに女尊男卑の世界になってしまっている

それを聞いて十代は一つの仮説を考えた

恐らく自分の中にあるもう一つの魂、ユベルを宿していることに何かあるのではないかと。ユベルは雌雄同体の存在。あり得る話であるだが、これは仮説であるため特に言おうとはしなかった

そして、遊星の持っていたコアは千冬の部屋に入った瞬間、星の模様のチョーカーになっていた

ここまで立て続けに不思議なことが起こると何か不気味になってくる

次に十代と遊星が自身について先ほどより詳しく話すことにした

千冬は真剣に黙って聞いていたが、大徳寺が幽霊であることを聞いた時、少し疑いの目をした

「信じてほしいんだにゃ～！　嘘は言っていないのにゃ～」

「……私自身、幽霊なんて初めてだからな……まあいい、いると仮

定しておく」

そのまま話を聞き、千冬はある考えに至った

「不動、遊城、お前たちに提案がある。ＩＳ学園という所に通ってみないか？」

「ＩＳ学園ってもしかしてそのＩＳを操縦する人を育成する学校ってことですか？」

十代の言葉に頷く千冬。これには大徳寺も驚いていた

「ＩＳ……つまり兵器の使い方を子供たちに教えるということですか……世界を戦争に導こうとしている気がするのですがにゃ～……」

「いや、そうはならないよう様々な条約がある。確かに大徳寺どのの言う通りのことが起きてしまうかもしれないが、今のところそういったことはまだない」

だから安心してほしいと言っている。千冬の言葉を信じることにした３人

「一夏には秘密だが、私はそこで教師をしている。編入などの手続きはこちらで何とかしておける。そのうえ、寮生活だからお前たちの住む部屋も確保できる。そもそもこちらの世界に来たのに戦う力を身に着けることができる。悪い話ではないと思うがどうだろうか？」

千冬の提案に少し悩む遊星と十代。確かにこれからのことを考えるとよいかもしれない

しかし何か裏があるのではないかと疑ってしまう。自分の弟にも隠している所に通わせるのはどういうことなのだろうか

千冬は遊星達が、考えているのを見てあることを話す

「……実は私の弟の一夏は、以前試験会場でＩＳを使えてしまった。そのために特殊ケースとして、ＩＳ学園に通わなければならなくなった。もちろん、他の男性にはいまだに使えないあいつも男一人で不便のことやいろいろあると思う。勝手なお願いをしているのは自覚している。だが……頼む。あいつを助けてほしい」

千冬は二人に頭を下げた。それほどまでに心配をしていることは十分に伝わった

そんな千冬を見て二人は笑顔で承諾した

もちろん大徳寺も賛成している

「ありがたい、入学式は三日後だが、明日ＩＳ学園に来てくれないか？　お前たちの編入についていろいろ手続きがある」

明日のための話し合いが終わったと同時ぐらいに一夏が千冬の部屋を訪ねた

どうやら準備ができたらしい。遊星と十代は一夏に風呂に入るよう勧められた

そこでもう一つ重要なことを見つかった。遊星の背中に赤き龍の痣が描かれていた。その痣からは以前持っていたものと同じような力

を感じた

何故かはわからない。恐らく次元の精霊がやったことだと二人は考えた。

それから深くは考えず、明日に備え寝ることにした。

次の日、遊星と十代はＩＳ学院に行き、様々な検査を始めた。もちろん一夏には内緒である。

そこで、分かったことがいくつかある

一つ、遊星のＩＳ、絆星と呼ばれるものだが、機体自体は問題ないのだが、機能しない。つまり置物と同じ扱いである。研究者がいくら調べても原因が分からなかったため、現状維持となった。一方、遊星の技術を見た研究者たちは、彼の才能を受け入れた。

二つ、十代のＩＳ、決闘英雄（バトルヒーロー）は、訓練機にも劣ってしまう低スペック性能……だった。しかし少し動かしてみると一次移行（ファースト・シフト）というものをしたらしく性能が上がった。同時に左腕に少し大きめのカードが何十枚も入るようなスペースができた

三つ、二人のＩＳは今出ているどの世代にも当てはまらないと言われた

他にもいろいろなことをやった。それこそ、１日以上もかけてけれど……分かったことが少なすぎた。そのため、これからも検査は続けられるらしい。だが、それは同時にＩＳ学園に入ることができるという意味でもある

こうして二人はＩＳ学園に入ることが確定した。新たな生活の幕が上がった

第3話　ＩＳを知るために（後書き）

次回から本編に入っていきたいと思います。

第４話　入学！　ＩＳ学園　波乱の幕開け？（前書き）

遅くなりましたが、投稿します。

第４話　入学！　ＩＳ学園　波乱の幕開け？

学園で用意された寮のある一室にいる二人組と一匹の猫

朝食を取り終え、すぐに準備をしていた。着慣れない制服に違和感を覚えながらも十代はこれからどんなことがあるか楽しみにしていた。だが、遊星は少し緊張しているようだ

彼は今まで一度も教育機関に通ったことがないからだ。そんな遊星を見て、十代は笑顔で話しかけた

「そんな顔するなよ。これからいいことや悪いこと……まあ、何があるかわからないけど、たくさんの思い出ができるんだからさ、笑顔で行こうぜ」

「……そうですね、ありがとうございます、十代さん」

遊星はその気遣いにただ感謝したかった

「十代君、あんまり座学で寝ていると千冬先生に叩かれるらしいから気をつけた方がいいんだにゃ～」

大徳寺は笑いながら、忠告した。彼らが検査している時に、上級生の人たちの噂話を聞いていたらしい。それを聞いて二人は苦笑をしていた

だが、どうあれリラックスできたのは間違いないと思う。彼らはそのまま教室に向かわず、職員室に行くことになっている。そこで千冬と合流し、教室に向かう

「「大徳寺先生　（さん）、いってきます」」

「うん、しっかり頑張ってくるんだにゃ～」

職員室の前についたが、まだ会議中らしい。中の人に待っているよう言われたので、少し待つことになった。その間、いろいろな視線が彼らをとらえていた。興味や疑問、中には羨望のものもあった

（……十代さん、学校ってこういうものなのですか？　何か見られているようですが……）

（いや、違うけど……たぶん男が珍しいからじゃないのか？　ほら、本来ＩＳって女にしか使えないし、そもそも女子の学校に男子がいるのも変な光景だから）

その言葉に納得する遊星だった

「すまない、会議が今終わった。これから私が受け持つクラスに行く。お前たちはそこのクラスだ。当然、一夏も一緒だ」

千冬は、すぐに教室に向かって歩き出した。その姿は仕事のできる人、というのが背中から伝わってきた

「さてと、行こうぜ、遊星！　相棒！　ここから学校生活が始まる

んだ。楽しくいこうぜ！」

「はい！」

（クリ～）

元気よく返事をして、千冬の後について行った

先に千冬が教室に入るとすぐに出席簿で攻撃した音が聞こえた。この音を聞いて二人は

（（千冬さんを怒らすと大変そうだ……））

そう感じた

「さて、緊急に決まったことだがこのクラスに2名新たに生徒が入る。入れ」

そう言われすぐに入る二人。二人が前に立つと千冬以外の人は驚いた

やはり二人が男だからだろう

「自己紹介をお願いする。まずは遊城から」

「はい、遊城十代といいます。少し事情があり、ＩＳ学園に入ることになりました。一応俺もそこにいる一夏と同じくＩＳを動かすことができます。後は……自分の機体も一応あります。これから１年よろしくお願いします」

一礼する。すぐに遊星が話し始める

「不動遊星です。俺も十代さんと同じ事情でＩＳ学園に入学することになりました。自分の機体を持ってはいるのですが、原因不明なため動かすことができません。しかし整備のほうでは役に立つと思います。学校には初めて通うので、分からないことも多いですが、よろしくお願いします」

喋り終えると、少しの間の後……黄色い歓声が響いた

「きゃぁぁぁぁ、男子が二人も入った！！」

「しかもかっこいい、なんだか大人っぽい」

「うんうん、私このクラスでよかった」

他にもさまざまな言葉が飛び交っていた。遊星と十代はその光景に少し呆れた

「静まれ、バカ者ども。遊城は……そこの真ん中の列の空き席だ。不動は……廊下側の空き席に座れ」

すぐに座り、最初の授業が始まった

「久しぶりですね、十代さん、遊星さん」

「ああ、お前も元気そうだな。一夏」

一時間目が終わり、休み時間になると十代と遊星は一夏の席に集まっていた。何かと固まっていると気が楽になる。すぐにそう思えたのだ

「しかし、ここの生徒……すごいよな。何というか……」

「そうですね……俺もこうなるなんて予想してなかったですから」

周りには女子がグループを作って三人の男を見ている

どうやって話そうか、誰が好みだ、友達になれないか、等々

そんな雰囲気に少し疲れそうになる三人だった

「それにしても二人ともＩＳが使えたなんて知りませんでしたよ。どうして最初に言ってくれなかったんですか……」

「ああ、まあいろいろあって……？　誰だ？」

十代が誤魔化しながら言おうとすると、一夏の後ろにポニーテールの子が立っていた

「少しいいか？」

どうやら彼女は一夏に用事があるようだ。一夏によると彼女は篠ノ之箒、一夏の幼馴染らしい

せっかくの再開の時間をつぶすのも悪いと思い、行くように一夏に告げた

「さて、次の授業の準備でもしますか……あ～あ、大丈夫かな？俺」

「頑張りましょう、十代さん」

そう遊星に励まされた十代はゆっくりと席に戻った

ちなみにすぐに一夏は戻ってきて、また叩かれていた

本格的なＩＳの授業が始まった……しかし、理解のできていない生徒がいるらしい

それに気が付いたのか山田先生がここまででわからないところがある人と聞くと二つの手が上がった。十代と一夏の手だ

「えっと……どのあたりでしょうか？」

「「ほとんどわかりません」」

口をそろえて言う。しかしわからないのはこの二人だけらしい

「……織斑、遊城、入学前の参考書は読んだか？」

千冬の質問に素直に答える二人

「古い電話帳と間違って捨てました」

パアン！　一夏はもちろん殴られる

「えっと、参考書なんてもらってないと思うのですが……俺と遊星は今まで検査ばかりで……」

遊城の答えに千冬は思い出した。昨日の夜に研究員の一人が二人に参考書を渡しそびれたと言っていたことを

「それはすまなかった……ん？　不動ももらってないはずだが……大丈夫なのか？」

「俺は今の話を聞いているだけで全部とは言いませんが、大体理解

はしています」

その言葉に驚くクラスメイトと副担任。予習なしでわかる内容ではなかったはずと思っていたからだ

「そうか……とにかく後で再発行しておくから一週間以内に覚えておけ」

「「「わかりました」」」

次の休み時間、今度は十代の席の近くに集まっていた

「しかし、電話帳くらいの厚さの本を一週間以内か……ああは言ったけどきつそうだな」

十代の言葉にうなずく一夏。

千冬を怒らせたくない。そう思って先ほどはすぐに返事をしたが、現実問題厳しそうだ。

そのとき、一人のわずかにロールのかかった金髪の女子生徒が十代たちの元にやってきた

「ちょっとよろしくて？」

「誰だ？　あんたは？」

十代の聞き方に機嫌を悪くしてしまったその女性

「まあ、何ですの、その口のきき方は？　わたくしに話しかけられただけでも光栄なのですからそれ相応の態度というものがあるんではないのかしら？」

そのセリフを聞いただけで、十代と遊星は心の中でため息をついた。すぐに自分がエリートの人だということを自慢する人だと分かったからだ

「悪いな、俺たちは君が誰か知らない。大体十代さんたちは、自己紹介の時いなかったじゃないか」

一夏の言葉にさらに不機嫌になってしまった

「わたくしを知らない？　このセシリア・オルコットを？　イギリスの代表候補生にして入試主席のこのわたくしを！？」

「候補生だかなんだか知らないけど、俺たち今話しているから後にしてくれ」

十代はさっさと話を切り上げた。その様子を見てセシリアは不満そうに自分の席に戻った。それと同時にチャイムが鳴った

「さて、授業を始める前にこのクラスの代表者を決めておかなければならない。まあ、簡単に言ってしまえば、クラス長ということだ。一度決めたらその一年はそのままだからな。自他推薦は問わない……と言いたいところだが、事情で遊城と不動を代表者に選ぶことはできない」

その言葉に少しざわついたが、すぐに代表にしたい人の名前が出てきた

「織斑君がいいと思います」

「私もそう思います」

「では、織斑。それでいいな？」

一夏が反論しようとしたとき、一人の生徒が立ち上がった。セシリアだ

「お待ちください！　なぜ男が代表にならなければならないのですか？　そんな屈辱をわたくし、セシリア・オルコットに受けろとおっしゃるのですか？」

「大体、実力を考えればわたくしが代表になるのが当然！　こんな極東の猿に代表をやらせるなんて……おかしいですわ！　そもそもこんな文化が後退している国に暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしは耐え難い苦痛ですのに……」

「イギリスだって大したお国の自慢がないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

セシリアの暴言に黙っていられなくなった一夏は反論した

「あなた……私の祖国を侮辱しますの！？」

「お前から侮辱し始めたじゃないか、セシリア」

「大体、そんなに優秀なエリートがなんで誰からの推薦もないんだよ？　少なくとも俺はあんたに推薦する気はないけどな」

セシリアの言葉に遊星と十代も加勢した。彼らにとっても気持ちの良いものではなかったからだろう

ここまで言われるとは思っていなかったため、彼女の怒りは爆発した

「あ、あなたたち……決闘ですわ！　代表の座をかけて！」

その言葉を聞いて千冬は少し考え

「……分かった、ならば織斑とオルコットは戦えばいい」

「わかった。やってやる」

「ちょっと待ってください、なぜ残りの二名の名がないのですか？」

一夏は同意したが、十代と遊星の名前がないことにセシリアは気づき反論した

「さっき言っただろう。これは代表者を決める戦い。代表になれない奴らを戦わせる理由がないだろう。そもそも不動の話を聞いてなかったのか？　あいつのＩＳは今使えないんだ」

「しかし……」

「いいぜ、俺はやってやるよ」

十代の言葉に驚くクラスの人たち

「このお嬢様はそうしてくれないと納得しないんだろうし……そうだな、俺が勝ったら一夏が代表ってことでいいか？」

「いいですわよ。まあ、たとえ二人がかりでかかってきたところで負けはしないんですけどね」

セシリアは鼻で笑った

こうして、代表を決めるための戦いが約束された

第４話　入学！　ＩＳ学園　波乱の幕開け？（後書き）

次回十代のＩＳを本格的に使用する予定です

第5話　特訓開始　十代の力（前書き）

書かせていただきます
今回でやっと十代のＩＳの性能が出ます

第5話　特訓開始　十代の力

十代と遊星、一夏はアリーナに集まっていた。千冬にＩＳを特訓したいと相談したところ、放課後にアリーナを予約しておけば利用できる、そして手続きは昼休み中に済ませておいた

どうやらアリーナにはほとんど人がいなかったため貸し切り状態のようなものになっていた。幸いと思い、十代はすぐに準備を始めた。遊星はデータを取るためにパソコンを起動させている。一夏は何かできることはないかと気になって聞いてみた

「そうだな……じゃあ、俺がＩＳを動かしている所を見て勉強してもらおうかな？　今日は訓練用のＩＳが使えないんだろう。見るだけでも勉強になると思うぜ」

十代の答えにとりあえず、納得した様子……少ししていない部分もあるかもしれないが

準備ができたのか、十代は目を閉じて心を落ち着けていた

「来い、決闘英雄（バトル・ヒーロー）」

呟くと十代の指輪が光り、彼の周りに濃い赤色のパワードスーツが装着される

「これが十代さんのＩＳ……」

一夏は少し呆けていた

十代は一度、飛んでみようとする。しかし慣れていないのか不安定だ。十代自身もコントロールできていないようだ。

（う～ん、俺のＩＳって武器とかないらしいからな……いったいどうしたら……ん？）

自分の左腕に何か違和感を覚える。まるでそこにデッキでも入るかのようなスペースがあった。そのスペースについて考えてみた瞬間、細かい光がそこに埋められた。そこにはまるで、デュエルディスクのデッキを装着しているような感じになった

そして、十代の目の前のモニターにカードが５枚並ぶ。そのうえ、まるでデュエルをしているかのような場が出てきた。並んだ５枚のカードは

Ｅ・ＨＥＲＯフェザーマン　ヒーローバリア　融合回収（フュージョン・リカバリー）　ホープ・オブ・フィフス　異次元トンネル―ミラーゲート―

（まさか……なるほど、使い方が分かった）

十代の脳内に何か流れ込んだのか、使い方を知ったため早速やってみた

（フェザーマンを召喚）

その瞬間、十代のＩＳの性能が変化した。移動速度や空中移動のコントロールが、先ほどよりずっと良くなっていた

遊星が使っているパソコンからも同じ反応があるらしい

しばらく自由に飛んでいると左腕のデッキが光る。その瞬間、モニターの目の前のカードが増えた。Ｅ・ＨＥＲＯバースト・レディのカード

再び出してみた。今度は炎の弾丸を打ち出すことができるようになった

次にドローしたカードは、スパークガン……本来この状況では使えないはずだが、使えるという表記が出ている

実際に発動してみると、十代の右手にスパークガンが出てきた。実際の装備と同じように3発の弾丸を打つことができた。もちろんその後スパークガンは壊れた

そこまでの十代の様子とパソコンのデータを見て、遊星はいろいろ考えた

（モンスターを召喚、魔法・罠の発動をするたびに、シールド・エネルギーが減っている……モンスターが存在していると少しずつエネルギーが減っている。さらにスパークガンが破壊された時にもスパークガンを発動した数値と同じ量のエネルギーが減っている。つまり十代さんのＩＳの特徴は……）

考えながらデータをまとめている。一方一夏はただただ見ているだけだった。彼の姿は本当に……

十代は新たなことをする。融合をするみたいだ

「現れよ！　マイフェイバリットカード！！　フレイム・ウイングマン！！」

そう叫ぶと、十代のＩＳの右腕が龍の頭のように変化した。そこから放つことができる炎は先ほどとは比べ物にならないほどの威力があった。さらに飛行速度や移動能力もアップしている。だが、当然のようにシールド・エネルギーの減りも早い

「すげ～、すげ～よ。こんな力が備わっていたなんて……じゃあ、さらに摩天楼―スカイスクレーパー―発動！！」

途端に周りが高層ビルで埋め尽くされる。ただの映像なのだが……

十代は摩天楼の一番上まで飛び、そこから一気に地面に向かって飛び降りる

「スカイスクレーパー・シュート！！」

炎を纏って一気に突撃する。その後も上級モンスターのアドバンス召喚、罠カードの発動などをこなした。しかしいろいろ使いすぎたからか、シールド・エネルギーが尽きた

「……確かに特訓はしてもよいといった……だが……アリーナをこんなめちゃくちゃにしてもよいとは言ってない！！」

千冬の説教が始まった。現在十代は正座中、遊星と一夏は遠くから見ている。怒られるのも当然だろう

アリーナにはいくつか穴が開いており、色々と燃えたような跡が残っている

他に人がいなかったのが幸いだろう。もしほかの人がいたら大事になっていたはず

「いいか？　ＩＳは説明したとおり兵器でもあるからな」

「すみません、俺自身初めてだったので、少し興奮しすぎました」

ここは言い訳せず、謝る。本当に自分が悪かったのだから

「罰として来週の試合までにここのアリーナの整備をしておけ。それと、試合までＩＳの特訓はなしだ！　いいな！？」

その言葉に反対しようとしたが、千冬のぎろりとした眼力に三人は何も言えなくたった

「織斑、急だがお前には寮に住んでもらうことになった。これがカギと荷物だ。今のところ着替えと携帯の充電器で充分だろ」

「えっと千……織斑先生、確か俺って１週間くらい自宅からという

話だったのでは……？」

千冬姉と言いかけて何とか織斑先生という一夏。そして彼の疑問にすぐに答えを得ることができた。一夏というＩＳを使える男子ということで、政府からいろいろと監視という意味もあるらしい

あまりいい気分ではないが、逆らうわけにもいかないのでしょうがない

とりあえず、荷物を受け取った後一夏は十代の手伝いをすることにした

その三人の姿を見ている青い髪の女性がいることに気付いていなかった

「面白そうな生徒たちが入ってきたのね……楽しくなりそうだわ。それにしてもあの子のＩＳ……変わっているわね」

彼女の手には「驚愕」と書かれた扇子があった

「え？　十代さんの部屋って俺の部屋の隣みたいですね」

帰り道、きりのいいところまで片づけをしてから寮に向かっていた

すべて片付いたわけではないが、そんなに長くはかからないだろうと

「じゃあさ、晩飯終わったら俺達の部屋に来ないか？」

「そうだな、お前もたたかわないといけないからな。勉強を見ることなら俺にもできるからな」

勉強と聞いて少し困った顔をした十代だが、一夏は嬉しそうな顔をしていたので、まあいいかということに落ち着いた

話していると、部屋の前についた

「また後で」

「ええ、では」

十代と遊星が部屋に入ってしばらくすると、外がものすごく騒がしくなっていた

「……楽しそうだな」

「悲鳴も聞こえていますが……」

気にしちゃいけない、という感じを十代出していた

「あはは、なかなかすごかったな、一夏」

夕食後、十代達の部屋に集まり、談笑していた。ちなみにファラオは寝ているため、大徳寺先生は出てこられない

「笑い事じゃないですよ……箒に木刀での攻撃がすごかったですし……」

一夏はため息をつきながら答えた。一応勉強を目的としてきたので、持ってきてはいるのだが、彼には聞きたいことがあった

「そういえば、十代の近くに飛んでいる羽の付いた……けむくじゃ

らな小さいの……何ですか？　俺の家に来た時から見えていたのですが……」

その言葉に驚く十代と遊星。彼にカードの精霊が見えていることに

「そうだな……デュエルモンスターズって知ってるか？」

十代の質問に一夏は答える。一応、やったこともあるし知っていると

「そのカードの中にまれに精霊が宿っていたりすることがあるんだ。まあ、宿っていても見えなければ意味がないんだけどな。一夏は見えるのか。遊星は見えないけどな」

一夏は遊星も見えるものだと思っていたから驚いた

「そっか……よろしくな」

握手を求めた。ハネクリボーは羽でちょこんと一夏の手に触れた。心を許している証拠らしい

その後勉強を始める。三人ともＩＳについて詳しいわけではないが、遊星が何となくだが原理などを理解しているためそれを二人に説明する

とりあえず、明日先生に聞く部分などをまとめたり、今日の復習をしたりと少し忙しかった

消灯時間まで、残り３０分くらいになった。勉強を終わらせて、一週間後のセシリアとの戦いに対策を立てようと考えていた

「一応、探してみればセシリアのデータを見つけることができるが……どうする？」

「う～ん、俺はいいや。なんか面白くないしな」

「俺達だけ知っているっていうのも確かに不公平ですね……」

遊星の提案を断ったが、彼は逆に笑っている。二人の意見に賛成なのだろう

「十代さんのＩＳってなんか面白いですよね。あれってどういう風になっているのですか？」

「そうだな……分かりやすく言うとカードを使うと俺のＩＳに対応する感じかな？　まあ、一週間後楽しみにしてくれよ。そう言えば一夏のも楽しみだな」

十代はにかっと笑って答えた。一夏のＩＳはまだ来ていないらしい。先ほどの勉強中に千冬が部屋を訪れ、一夏のＩＳについて説明があった。予備機がないため、彼には専用機が用意されるらしい。下手をすると、ぶっつけ本番になるかもしれない

「そうですね……勝ちましょうね」

ちょうど消灯五分前になる前に、二人の決意は固められた

第5話　特訓開始　十代の力（後書き）

設定にはまだ書かないことにします。
セシリア戦が終わってから書くことにします

第6話　VSセシリア　動かぬヒーロー（前書き）

やっとセシリアと戦います。戦闘描写は難しいです……正直自信がないですが、頑張りたいです

第6話　VSセシリア　動かぬヒーロー

次の日の朝、十代と遊星と一夏、そして同室の箒は朝食を食べていた
その様子を見て、周りの女の子は騒いでいたりしていた。一部の子たちは一緒に食べようと声をかけていた

「「ねえ、ここいいかな？」」

「ああ、いいよ。遊星さんも十代さんもいいですよね？」

二人は頷いた。箒は自分には聞かないのかと少し不機嫌になっていた

「それにしてもたくさん食べるね。やっぱり男の子だからなのかな？」

「俺は朝多く食べるようにしているから」

「ここの飯ってうまいからさ、つい食べたくなるんだよな」

「普段はそんなに多くは食べないが、なんとなく一夏たちに合わせたんだ」

質問の答えは上から一夏、十代、遊星だ。ふと見てみると、一緒に来た子たちの女の子の食事の量が少ないことに一夏は気付いた
女子はあれだけで足りるのか……としみじみ思ってしまった

「しかし、ここの飯って本当にいいよな！　俺が昔行ってたところ

なんて、ほぼ毎日、ご飯とめざしとみそ汁とたくあんだけだったからな～」

「俺の場合は、きちんと食事ができればいい方でしたから。こういうのは素直に楽しみになりますよね」

その言葉に一夏と周りにいた女子が驚いた……いったい彼らはどんな生活をしていたのか……

授業中、三人の男子は一生懸命になっていた。やはり知らなすぎるため、とにかく追いつくためには授業をしなくてはと思っているらしい。十代の場合、それに加えて初日に眠っていたところを千冬に出席簿で殴られ、その痛みを二度と喰らわないために頑張っている

一夏には休み時間になると、分からなかったところをすぐに聞く姿勢がついていた

その様子を見て、千冬は少しご機嫌になっていた

「……まあ、わたくしと戦うのですから、あれくらい頑張ってもらわなければ……」

小声でセシリアはつぶやいていた

放課後、特訓をしようと思ったのだが、昨日十代のミスのため、ＩＳを使った特訓はできない。そのうえ、予備の機体もない。そして彼らは検査で先ほど出て行ってしまった。どうしようかと一夏は考えていると

「おい、一夏。私が鍛えてやる。遊城と不動はＩＳを使えないのだからな」

箒がそう提案してくれた。ちょうどいいと思い、特訓を頼んで彼女についていくことにした

……数十分後、剣道場で倒れていた。この時、一夏は何がちょうどいいだ……と過去の自分に言ってやりたくなっていた。そもそも彼自身、なぜ自分は剣道場にいるのかもわからなかった

「情けない！　まさかここまで堕落していようとは……ＩＳ以前の問題だ！」

「そもそも、女に負けてなんとも思わないのか！？」

「いや……確かにかっこ悪いとかあるけど……」

一夏の答えに不満な箒

「恰好を気にするのか!?　情けない!!　ええい、鍛えなおしてやる!!」

その様子を見て、たまたま道場にいた女子は、一夏が本当に大丈夫なのか？　と不安になっていた

その後特訓……いや、剣道は、３時間ほど続いた

瞬く間に一週間が過ぎた

一夏は、放課後は３時間ほど剣道、夜は十代達の部屋に集まり、勉強会。ハードな日が続いた

「……なあ、箒」

「何だ？」

「十代さんと遊星さんがいたから助かったようなものの……ＩＳに

ついて教えてくれるんじゃなかったのか？」

一夏の問いに箒は顔をそむけた

「箒？」

「し、仕方がないだろ。そもそも機体がないのでは……」

「お、織斑君……ここにいましたか」

箒が何か言おうとした時、山田先生が慌てて入ってくる。そのことに少しほっとしていた箒だった

「と、届きました。織斑君、専用のＩＳが」

一夏のＩＳのあるところに行くと先客がいた。千冬と遊星、十代だ

「来たか、時間がない。すぐに準備をしろ。フォーマットとフィッティングは実戦で行え」

「へえ、これが一夏のＩＳか……かっこいいじゃん。まあ、気楽に頑張れよ」

「一夏……大丈夫だ、今まで勉強してきたことを信じろ」

千冬には指示を、十代と遊星には励ましの言葉を受け取り、一夏は純白のＩＳを装着する

彼には、なんとなくだが使い方が分かってきたのだろう。少しボーとした感じがする

だがすぐにしっかりと意識を持ち

「行ってくる」

「頑張れ……一夏」

箒の言葉を最後に一夏はアリーナのステージに向かった。それを確認すると、十代と遊星は別室に行こうとした。それを不思議に思い、千冬は呼び止めた

「おい、試合を見ないのか？」

「ええ、だって先に見たら不公平じゃないですか……相手が代表だか何だか知らないですけど、俺は正々堂々やりたいんです。じゃあ、隣で待っています」

そう言って彼らは、部屋にこもった。千冬は呆れ半分、面白半分で彼らを見ていた。ふつう、相手の情報を得ておきたい。戦う相手について知りたいと思うのは自然だろう。だが、彼らはしなかった。その心情に感心していた

「ふ、バカな奴らだ」

「……」

箒は少し不機嫌になっていた

十代と遊星は別室に入るとすぐに十代はＩＳを起動させ、遊星はその様子を見ていた

「うし、異状なし！　まあ、何とかなるだろう」

「そうですね……それよりそのＩＳですが……あまり多くのモンスターを展開しない方がよさそうですね。シールド・エネルギーを多く消費してしまいますし」

「だな、それに装備魔法もきついよな。破壊されたときにエネルギーが減るから……」

お互いに意見を言い合い、これからの戦いについて考えていた

３０分くらいしただろうか、ノックの音が聞こえる

「遊城君、そろそろスタンバイしてください」

山田先生の声に反応して立ち上がる。そして遊星に一言

「じゃあ、行ってくる。楽しくやらせてもらうさ」

「はい」

十代の笑顔を見て、遊星も笑顔で返した

（こういう状況でも楽しもうとするなんて……さすがですね）

十代がアリーナ・ステージに入るとセシリアが待っていた。すでに準備ができているようだ

「まあ、とても貧相な装備ですこと……それはそれとして最後のチャンスを上げますわ。このままやってもわたくしの一方的な勝利はもはや揺るがないものと思いますの。ですから今ここで謝れば……」

「そんなことどうでもいいからさっさと始めようぜ」

セシリアの言葉を最後まで聞かず、十代は構え始めた。この行為に

セシリアの堪忍袋の緒が切れた

「では、地面に這いつくばりなさい！」

レーザーライフルからエネルギー弾が発射され、十代はまともに受けた

直撃したのを見て、一夏は不安そうに、箒は当然だという感じだった。彼女にとって十代は戦いをなめていると思っている

しかし、煙が晴れると十代は笑っていた。というより、ほとんどダメージを受けていない

よく見てみると、十代のＩＳの防御力が上がっていることに気付いた

「さすが、クレイマンの防御力だ。ほとんどエネルギーが減ってない」

十代は攻撃を食らう前にクレイマンを守備表示で召喚し、自身の防御力を上げていた

続いてバースト・レディを召喚した。攻撃に移るつもりなのだろう。すぐに炎の弾丸を飛ばして、セシリアを攻める

「何ですの！？　あなたのＩＳは！？」

セシリアは驚きを隠せず、少し冷静さを欠いている。すぐに気持ちを切り替えて、セシリアはビット、ブルー・ティアーズを起動させた

その砲撃に十代は焦った

（まずいな……クレイマンを展開しているから、機動力は落ちている……ここは、こいつを召喚して、火力を上げるか）

「N・フレア・スカラベを召喚」

しかし……十代のシールド・エネルギーが減っただけで、何も変化がなかった。そもそもフレア・スカラベのカードは場に出た瞬間、すぐに手札に戻ってしまった

「……へ？　何でだ！？　もう一度……」

しかし結果は変わらない。その間にもセシリアの攻撃を受けるそのため十代のシールド・エネルギーはどんどん減っていく

「こうなったら……クレイマンとバースト・レディをリリース、ネオスをアドバンス召喚！！」

自身の能力上昇をすべて消してネオスを召喚しようとしたが……先ほどのフレア・スカラベと同じことが起こってしまった

「……！！　まさか、Nとネオスは使えないのか！？　ってうわ」

十代が納得していると、セシリアによる砲撃をまともに受けてしまった。これにより十代のシールド・エネルギーは残り2ケタほどになってしまった。一方、セシリアはまだまだ余裕があるようだ

「何をしているのか知りませんが、そろそろ終幕にいたしましょうか？　それとも降参いたします？」

セシリアの嘲笑とも取れる言葉に十代は笑って返した

「何言っているんだ？　まだまだこれからだろ、俺のターンだ」

その言葉にイラつくセシリア、なぜ彼……いや、男は諦めないのか……

十代は受け答えをしながら、手札交換のカードをうまく使って準備をしていた。そろったのかすぐに行動に出た。Ｏ－オーバーソウルを使ってクレイマンを復活、即座に融合を発動

「手札のスパークマンと場のクレイマンを融合！　Ｅ・ＨＥＲＯサンダー・ジャイアントを召喚」

十代が叫ぶと、彼の周りに電気が発生した

「効果発動、手札のネオスをコストにヴェイパー・スパーク！！」

その瞬間、セシリアのブルー・ティアーズを1機破壊した。驚いている間
に十代の反撃が始まる

「一気に決める！　ヴォルティック・サンダー！！」

両手で電気の塊を作り出して、セシリアにぶつけるために打ち出した。その予想もしない攻撃に彼女は動けなかった。ブルー・ティアーズ達にかばわせようとしたが、本人が動けないためできなかった。絶対に当たる。誰もがそう思った……しかし……攻撃が彼女にあたることはなかった

十代のシールド・エネルギーが尽きてしまったからだ。そのため、電撃の攻撃も消滅してしまった

決着のアラームの後、十代はＩＳを待機状態に戻して、あおむけでアリーナに寝ころがった

「あ～あ、負けたか……でも、楽しかったぜ！　またやろうな」

セシリアは何と返していいのかわからず、黙ってしまった。しかし一人その言葉に不快感を受けたものがいた

「……負けたくせに楽しかった？　前々からふざけた男だと思っていたが……最悪だな」

そう呟くものがいた

第6話　VSセシリア　動かぬヒーロー（後書き）

何とか投稿完了。ペースは……落ちるかもですが、なるべく頑張りたいです

第7話　決定！　クラス代表（前書き）

すみません、少々体調を崩して投稿が遅れました。
しかも物語があんまり進んでない……
それでもよろしければどうぞ

第7話　決定！　クラス代表

試合の後、十代と遊星と一夏、そして箒の４人で寮に向かっていた。
箒は少し肩身が狭そうにしている
その後、十代は千冬に自身のＩＳを軽く説明し、そのまま解散になった

「そっか……一夏も負けたのか……まあ、これから頑張っていこうぜ！　それとさ……一夏の試合の映像、後で見せてくれよ」

「わかりました。じゃあ、夕飯の後に十代さんの部屋に行きますね」

「楽しみにしている……とそうだ！　俺たちは少し用事があるから先に行く。また後で」

遊星がそう言うと、十代も何か思い出したみたいで、二人に一言挨拶をしてから走り出した

「……ふう、やっと静かになったな」

「箒？　どうしたんだよ？　いきなり」

「いや、まあ……なんだ。お前はやっぱりあの二人と話しているのが楽しいのか？」

そんなことを急に聞かれたので、少し驚いたが、すぐに返答した

「まあ、そうだな。同じ男子というのもあるけど、なんだか気が合うからな。えっと……兄ができたみたいな感じかもしれないな」

「兄……か。不動はそう感じるが、遊城はあまり感じないな。彼は子供みたいにはしゃいでいるみたいに見えるぞ」

箒の言葉に一夏は怒らずに納得していた。そういう風に見えるのかと初めて気づいたみたいだ

「そうだな……十代さんは、小さな子供みたいに純真でいろいろなことを見ているんだと思う。そういう気持ちは大事なんだなって見ていると感じるよ」

一夏の明るい笑顔に少しむっとした箒

（まったく……そんな顔をされては何も言えないではないか……）

「まあいい、それよりも一夏……明日から特訓なのか？」

「そうだな。千冬姉にも言われたし……もしかして今回は教えてくれるのか？」

「今回はって何だ！？　まるで私が教えてこなかったみたいじゃないか！」

だって剣道しか……と言おうとしたが、彼女の雰囲気に押されて何も言えなかった

「まあ、一夏がそう言うなら……いいぞ」

箒の機嫌が少し直った。そのことに少しほっとした一夏。そのまま寮に向かった

次の日

「ということで、一年一組のクラス代表は織斑一夏君になりました。あ、一つながりで縁起がいいですね」

山田先生の言葉に驚く一夏。彼は負けているはずなのに何故セシリアがクラス代表ではないのかと

「それはわたくしが辞退いたしましたからですわ！」

いきなりセシリアが立ち上がって話し始める

「勝負ではあなたたちの負けでしたが、考えてみれば当然のこと。わたくしが相手だったのですから……まあ、わたくしも大人げなく怒ってしたことを反省しまして」

「一夏さんにクラス代表を譲ることにしましたわ。ＩＳの操縦には実戦が何よりも大事ですからね」

そうセシリアが終わらすと、クラスの女子は、やっぱりセシリアわかってる、クラスで男子を持ち上げておかないとね、など様々な言葉が飛び交った

一夏は十代達に助けを求めようと見てみたが

（まあ、頑張れ！）　ＢＹ十代

（すまないがどうしようもない）　ＢＹ遊星

そんな視線を感じたため、一夏は逆らうことを諦め、クラス代表になった

セシリアが何か言いたそうにしていたが、一夏は気づかなかった

「というわけで……」

「「「織斑君！　クラス代表おめでとう」」」

パンパーンっとクラッカーが鳴り響いた。代表が決まった日の夜、１年１組のメンバーは食堂を借りて一夏のお祝いをしているようだ

当の本人は、あまり乗り気ではない。やはりいきなりそうなってしまったからだろう

十代はすでにいろいろとお菓子をつまんでいて、遊星はゆっくりと飲み物を飲んでいた。二人は二人でそれなりに楽しんでいるようだ

その様子を見て、一夏も楽しもうと思えた

「はいはーい、新聞部の副部長、2年の黛薫子でーす。今日は話題の子、織斑一夏君、遊城十代君、不動遊星君の三人に特別インタビューしたいと思いまーす」

突然乱入してきた彼女の言葉に一夏はもちろん、十代と遊星も驚いた。なぜ自分たちもインタビューされなければならないのかと

「ではまずは織斑君から、クラス代表になった感想を一言！」

ボイスレコーダーを一夏に向けてインタビューを始めた

「えっと……その……頑張ります」

「もっといいコメントちょうだいよ～」

一夏の顔が、そんなこと言われても……と言うのが誰から見てもわかる

「まあ、ここら辺は適当に捏造しておくとして……次に遊城君！君はそうだな……ＩＳの操縦について一言！」

「え！？　そうだな……まだ乗って間もないけど、いろいろできて

楽しい……かな？」

あまりインタビューを受けたことがないため、少し緊張して答えた

「楽しい……か、まあまあのコメントね。じゃあ最後に不動君！
君はこの学園についてどう思う？」

「……俺は今まで学校というものに通ったことがなかったが……ずいぶん明るくていいところだと思う」

遊星の答えに少し周りの空気が沈んでしまったが、彼の笑顔で元通りに戻った

「ありがとうね。最後に男の子三人で写真を撮ろうかな？　じゃあ並んで！　並んで！　あ、あとでツーショットとか取ってあげるから今はみんな入らないでね」

本人たちの許可なく急いで三人をベストポジションにおいて写真を撮る薫子

気のせいかパシャパシャと何枚……何十枚とシャッター音が聞こえる

その後、クラスの女子からツーショットを頼まれる。気が付くと、歓迎会が撮影会になっていた

最後に全員集合写真を撮ってお開きとなった。三人の男の子は部屋に帰ってベッドにダイブして一言

「「「疲れた！！」」」

第7話　決定！　クラス代表（後書き）

次回、あの子を出します。また、少し変化があるかもです

第8話　登場！　新たな幼馴染　新たな戦いへ（前書き）

書かせていただきます。
鈴登場です

第8話　登場！　新たな幼馴染　新たな戦いへ

「遊城十代、不動遊星……あなたたちに伝えることがあります」

その夜、彼らに語りかける声があった。その声の主は彼らの夢の中に現れている

「あんたは……次元の精霊……どうしたんだ？」

「敵の目的のうちの一つが分かりました……織斑一夏の確保みたいです。彼を自分たちの仲間に引き入れるそうです。申し訳ありませんが……今わかっているのはこれくらいです……また何かわかったら伝えます」

そういって姿を消した。そのまま二人の目が覚めた

「今のは一体……」

（おそらく忠告だろう。気をつけろよ、十代）

「ユベルお前……治ったのか！？」

十代の問いに答えたのはユベルだった。どうやら傷も治ったようで出てこられるようになったらしい。しかし騒ぎが起きるのは面倒だから今までどおり、彼の中にいることにした。一夏には後で説明しようと十代は決めておいた

「織斑君、おはよー。転校生の噂聞いた？」

教室に入るなりそんな話が飛び交っていた

「へえ～珍しいな。いったいどんな奴なんだ？」

「中国の代表生なんだって」

十代がいろいろとクラスの子に聞いている。遊星も少し聞いている

「代表か……いったいどんな奴なんだろうな……」

「中国か……あいつを思い出すな」

一夏は一人何かを考えてみたようだ

「おい、一夏！　女子のことを気にしてないで、お前は来月のクラス対抗戦のことを考えておけ！」

「そうですわ！　実践的な訓練をいたしませんと！　専用機持ちであるわたくしと一夏さんの二人で！！」

箒とセシリアが一夏に対して説教中。専用機持ちは十代さんもだろ……とセシリアに突っ込もうと考えたが、やめた。いらない出来事が起きそうな気がしたからだ

「今のところ1組と4組だけが専用機を持ってるクラス代表なんだから大丈夫だよ」

「その情報、古いわよ！！」

クラスの子が言ったセリフを待ってましたと言わんばかりに教室のドアのところにもたれかかっていた子がいた

「今、2組には中国代表候補生の鳳鈴音、つまり専用機持ちのあたしがクラス代表になったから簡単に優勝はできな……」

バシン！

最後まで言う前に千冬の出席簿攻撃を受けていた。ＳＨＲの時間なのにここにいること。そして通行の邪魔であることが攻撃の理由である

「さっさと自分のクラスに戻れ」

「ハイ……また後で来るからね！　一夏！」

そう言い捨てて鈴は教室を去って行った。クラスの大半が何だったんだろうと首をかしげていた

「どうしたんだよ、お前ら？　今日は先生に注意されてばかりだったよな」

「なんだかイマイチ集中しているように見えなかったが……どうしたんだ？」

昼休み、昼食をとるために一夏、十代、遊星と箒とセシリア、その他クラスメイトの何人か、計十人くらいで食堂に向かっていた時のことである。十代と遊星の指摘に少し対応に困る二人の女子

理由は朝やってきた少女である。彼女は去り際に一夏の名前を親し

げに言っていた。つまり知り合いということは想像しやすい

「「一夏　（さん）のせいだ　（ですわ）」」

箒とセシリアの答えに十代と遊星は苦笑いを一夏は少しあきれ顔になっていた

学食に到着し、券売機で昼食のメニューを選ぼうと思った時

「待っていたわよ！　一夏」

券売機の前に立ちはだかっているのは今朝の女の子

「悪いが、どいてくれないか？　食事の準備ができない」

「ああ、すみません……ってあんたたち誰よ！？　何で一夏以外の男がこの学園にいるのよ？」

遊星の言葉に静かに対応しようとしたと思ったらすぐに大声を上げていた

「とりあえず鈴、騒がしいから落ち着こうぜ。飯も来たから座って話そう」

「そうね……ったく感動の再会もあったもんじゃないわね」

一夏になだめられて、鈴は落ち着いたが小さくぼやいていた。すぐに席が見つかり、みんなが着席した後、一夏が話し始める

「こいつは鳳鈴音、俺の小学校後半から中学2年までの幼馴染だ」

「それでこっちは箒、いつか話したことがあるだろう？　昔、剣術の道場に通っていて、その道場主の娘のこと」

一夏が二人の幼馴染の紹介を終えると、二人はよろしくとあいさつをしていた。しかしその間には仲良くしようというものが感じられなかった

「……で？　そっちの男たちは一体……」

「ちょっとお待ちなさい、わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生の鳳鈴音さん？」

鈴がセシリアを無視して話していたため我慢できずに自分から話しかけ始めた

「……誰？　まあ、たぶんどこかの国の代表らしいけど、あたしほかの国とか興味ないから……それで、そいつらは？」

一蹴した。そのため怒りで顔がものすごく赤くなっていた。被害を受けたくないため、周りの人はほっておいている

「俺は遊城十代、よろしくな。鈴音」

「不動遊星だ。よろしく」

軽く自己紹介をする二人。鈴は途端に興味がなくなったのか一夏に話をふっていた

「あんたクラス代表なんでしょ？　よかったらＩＳの操縦を見てあ

げてもいいけど？」

少し恥ずかしそうにしゃべる鈴。どうしたのかと不思議に思った一夏だが、それよりも操縦を見てもらえるということが嬉しかった

「よかったな、一夏。これで、指導してくれる人が増えるな」

「そうだな。代表生というだけあって彼女の実力も十分だと思う。受けてもいいんじゃないのか？」

十代と遊星は賛成したが

「一夏に教えるのは私の役目だ。頼まれたのだからな」

「冗談ではありませんわ！　あなたは2組、つまり敵になるのですからそのような施しは受けませんわ」

「あたしは一夏に言ってんの。関係ない人は引っ込んでてよ」

箒とセシリアは反対、その反対意見に鈴が反対。ものすごくもめている

「……なあ、一夏。なんかこれ続きそうだからさっさと食べて教室に戻ろうぜ」

十代の言葉に遊星と一夏は頷き、さっさと食べてその場を去った。しかしその行動が少しまずかったと後に一夏は思うだろう

放課後、一夏は十代と遊星の3人でＩＳ特訓をするつもりだった。
しかしそこには予想していなかった人物が2人もいた。ＩＳの訓練機である打鉄(うちがね)を装着している箒とブルー・ティアーズを装着しているセシリアだった

どうやら彼女たちは一夏の特訓の指導をするために来たようだが、肝心の本人に許可を取らないままやってきていた

「さて一夏、特訓を始めるぞ」

「お待ちなさい！　一夏さんと特訓するのはこのわたくしですわよ」

しかも二人ではなく自分が教える！　という雰囲気である。意見が合わない二人はそのままにらみ合う

「そんなに言うなら今二人が戦って勝った方が一夏に教えればいいじゃん」

十代の一言が戦いの火蓋となり二人は早速戦い始めた

「さて……俺達は俺達でやろう。織斑先生の期待に応えるんだろう？」

「ええ、そうですね」

遊星の言葉に一夏の気合が入り、十代と特訓を始めた

この後、女子二人の決着がつく前に特訓しているところを見つかったため、一夏は二人の女の子から説教をされていた

なぜ私とやらないのかと

一夏は思った

（なんで俺……特訓してるのに怒られるんだろう……）

第8話　登場！　新たな幼馴染　新たな戦いへ（後書き）

ちなみに遊星はデータをとったりなんかしています。小説中にいっしょに特訓しているのにその説明がなかったためここで補足

第9話　特訓！　クラス対抗戦へ向けて……（前書き）

書かせていただきます。少しユベルが出ます

第9話　特訓！　クラス対抗戦へ向けて……

あの後、一夏は箒とセシリアに特訓……いや、フルボッコにされていた

更衣室に戻ってきた一夏は何とか歩ける状態だった

「大丈夫？　ほらスポーツドリンクとタオル」

意外なことに待っていたのは鈴だった。もちろん一夏は驚いた

「どうしたんだよ？」

「別にいいじゃない、どうしようとも。それよりも何で昼休みの時、先に帰っているのよ！？」

「お前たち言い争ってたじゃん、俺がなんだか蚊帳の外だと思ってたら十代さんたちが……」

「ああ、分かったわよ……」

「おお、鈴音じゃん。どうしたんだよ」

何か言おうとしたときに十代が更衣室にやってきた。そのため少し彼女は不機嫌になっていた。ちなみに遊星はすでに部屋に戻っている

「？　まあ、いいや。じゃあ一夏、俺は先に寮に戻ってるからな、篠ノ之のやつ不機嫌だから何とかしておかないと後で殴られるかも

な」

十代は去り際にとんでもない爆弾を投下して去って行った。鈴は一夏に詰め寄る

「ど、どどどどういうこと？　日本では男女一緒の部屋ていうのが普通なの？」

「そんなわけあるか！？　政府の命令で、急に寮に入ることになってそれでたまたま同室になっているだけだ！　……でもまあ、幼馴染でよかったよ。知らない人だったら大変だったし……」

一夏の言葉に鈴はつぶやいた。幼馴染なら同室でもいいのか……と。もちろん一夏には聞こえていない

「う～ん、やっぱり一夏ってなんだか戦い慣れしているよな」

「確か前に剣術をしているとか言っていたと思いますよ」

（確かにニャ～、お姉さんがお姉さんだからというのもあるかもしれないのニャ～）

今、彼らは部屋でいろいろと考察している。一夏の手助けになればと思っている

すぐに隣の部屋が騒がしいことに気が付いた。またいつものように一夏が巻き込まれているんだろうな……と三人は考えていた

数分後、一夏が部屋を訪ねてきた。箒に頭を冷やして来いと言われたそうだ

一夏からこれまでの事情を聴いた。大徳寺はたまたまファラオに飲み込まれてしまい、引っ込んでいる

（間違いなく君が悪いね。一夏！　君は約束というものを何だと思っているんだ！）

ユベルが激しく一夏を責めた。突然出てきた精霊に一夏は驚く

一応十代から自分の精霊だと説明しておいた。

（とにかく！　その幼馴染の約束を思い出しておくべきだね）

そこで、ユベルの話は終わったのか消えた

「約束のことはちゃんと考えておいて方がいいだろう……そうだ、

一夏に聞きたいことがある」

遊星はそう言うと、前回のセシリアとの戦いのビデオを見せた。その映像を見ながら一夏に質問した

「なぜいきなりシールド・エネルギーが0になったのか……心当たりがないか？」

「確かに変だよな……第一次移行したってだけで、減るなんてありえないだろうし……」

「……！　まさかあれのせいなのか？」

一夏には心当たりが一つあった。零落白夜、第一次移行した時に出てきた新しい武器である

あれを使ったからなのか……と一夏は予測した

「ほう、気が付くか……大方遊城か不動に言われて気づいたか？」

次の日の放課後、三人で千冬のところに行った。もちろんＩＳについての相談のためだ

「「いえ、気づいたのは一夏でした」」

「遊星さんと十代さんが映像を見せてくれたおかげで気づいたので、二人のおかげです」

三人で相手のことを言っている。この光景を見て千冬は少し笑顔になっていた

「ふ、仲がいいことだ。さて、織斑の想像通り、雪片の特殊能力が原因であの時は負けたんだ」

その後、千冬から説明があった。雪片の特殊能力は自身のシールド・エネルギーを使うことで発動させ、相手のシールド・エネルギーを直接削り取るものである

つまり諸刃の剣であるということを一夏は理解した

「お前の機体は他の機体よりも攻撃特化になっている。おそらく、拡張領域が埋まっているだろう」

千冬の言葉に少し考える一夏と十代。すぐに理解できていないのだろう

「一夏のＩＳは他の装備を追加したりすることができないということ……でいいんでしょうか？　織斑先生」

遊星のフォローで二人は納得し、千冬も頷く

「さすが不動だ。分かりやすい解説感謝する。まあ、その分雪片の威力は全ＩＳ中でもトップクラスだ」

「仮に他の装備を追加したとしてもお前に使いこなせるわけがないからいいだろう。お前のような素人が、射撃戦闘などできるとは思っていない。覚えることが山ほどあるからな」

千冬の言葉に少し心が折れそうになる一夏。そこで新たな疑問がわいた

「そういえば、十代さんもＩＳに関しては初心者なのにどうしていろいろなことができるんだろう……近接武器に射撃攻撃、防御に移動も……」

「ふむ……これは私の推測だが遊城の使っている装備、カードの力を変換してＩＳに能力をつけるものらしいが、カードの効果をしっかりと理解しているからＩＳに能力が変換されても使い方が分かる。というのが私の考えだが……」

「大体あっていますよ。織斑先生」

千冬の考えを認める十代。彼自身体で理解している感じだ

「俺のことはいいとして……先生、一夏が勝つためには必殺の攻撃

を当てる必要があるということですよね？　例えば、すごい速度で相手の懐に入るとか……」

十代の意見を聞いて一夏はそれだ！　という顔をしていた

早速特訓をしようと考え、三人は千冬に礼を言ってすぐにアリーナに向かった

「ふ、本当に騒がしい奴らだ」

そう言うも彼女の顔は笑っていた。自分の弟がここまでいい顔を見せるとは思っていなかった。やはりあの二人のおかげだと千冬は感謝していた。もちろん口に出して言ったりはしないが

その後代表戦までの数週間、一夏はセシリアや十代に頼んで実戦訓練をしたり、箒と剣道の訓練で間合いの感覚を覚えようとしたりしていた

彼のやる気に答えるように箒とセシリアは積極的に協力してくれた。しかし問題が一つ

鈴との問題だ。彼女から来ることはないし、こちらから会おうとしても威嚇して近づくことすら難しい

しかし来週から始まるクラス対抗戦のための最後の特訓の日、鈴がやってきた

「何のようだ!?」

「ここは関係者以外立ち入り禁止ですわよ!?」

箒とセシリアは敵意をバリバリにして鈴を見ていた。当の本人はどうでもいいという感じで一夏に近づく

「あたしは一夏関係者だからいいの、一夏に話があるから脇役のあんたたちはすっこんでてよ」

その言葉に怒りを示す箒とセシリア。かまっているだけ無駄だろうと思い、鈴は彼女たちを無視して話を続けた

「それで……一夏は反省した？」

「この前のことだよな……でもお前俺が何かしようとすると威嚇してたじゃん……」

「あんたねぇ……女の子が放っておいてほしいって言われたら放っておくわけ！？」

「おう」

「え？　そういうもんなんじゃないのか？」

「本人の希望に合わせるべきだろう」

一夏だけではなく十代と遊星も答えた。その答えに鈴は苛立つ

「ああ、とにかく謝りなさいよ！」

「謝るにしても説明してくれなきゃ困るんだが……」

「せ、説明したくないからこう来てるんじゃない」

鈴の対応に困る三人。正直何を言っていいのかわからない。変なことを言ってしまうとまた彼女を怒らせるかもしれないからだ

「じゃあこうしましょう！　クラス対抗戦で勝った方が負けた方の言うことを何でもひとつ聞くっていうのはどう？」

「おう、いいぜ！　その勝負のった！　俺が勝ったら説明してもらうからな」

「それは……」

「おいおい、これなら一夏が勝つんじゃないか？　やっぱりやめたらどうだ、鈴音？」

鈴は十代の言葉に少しむっとした。実際戦う相手じゃないのに何だかむかついたようだ

「やめるわけないでしょ！　一夏、あたしに謝る練習でもしておきなさいよ！　あと十代！　あんたもいつか叩きのめしてやるから覚悟しておきなさいよ！」

不機嫌のまま彼女は帰ってしまった

「なあ、もしかしなくても……」

「一夏、クラス対抗戦はかなり厳しいものになりそうだな」

遊星の言葉にショックを受ける一夏。なぜ自分からハードルを上げたのだろう……そう思わずにはいられなかった

第9話　特訓！　クラス対抗戦へ向けて……（後書き）

次回は原作から大きく変化した部分を書く予定です。

第１０話　謎の襲撃者たち……（前書き）

書かせていただきます
今回初デュエルです

第１０話　謎の襲撃者たち……

クラス対抗戦当日、十代と一夏とセシリア、そして箒はピットから試合を見ることにした。本来なら客席から見るのだが、千冬と山田の許可をもらい、特別にここで見せてもらうことになった

６人はモニターを見ている。試合がそろそろ始まるからである

試合会場では、一夏と鈴が対峙している。お互いに試合開始のアラームを待っている

「一夏、今謝るなら少し痛めつけてあげるレベルを下げてあげるわよ」

「対して下がらないんだからいらねえよ。全力で来い！」

「ふ～ん、まあいいわ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があればどうなるのかわかるわよね」

その言葉に一夏は少し緊張する。どうなるか、それは操縦者に直接ダメージが行くということ。そのことを一夏は理解している

「それでは、試合を開始してください！」

同時にブザーが鳴る。鳴り終わると同時に二人は動いた

一夏の持つ雪片弐型と鈴の両刃の青竜刀がぶつかり合い、勝負が始まった

しかしすぐに一夏は距離を取った。相手の武器との相性が悪すぎる。消耗戦になっては不利になると判断した

「ふ～ん、案外やるじゃない……じゃあ、これはどう？」

鈴の肩のアーマーがスライドして開き、中心の球体が開いた瞬間、一夏は衝撃によるダメージを受けていた

「今のはジャブだからね」

にやりと鈴は笑い攻撃を続けた

「なんだあれは……？」

ピットのモニターから見ていた箒は呟く

「衝撃砲ですわね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生

じる衝撃それ自体を砲弾化して打ち出すブルー・ティアーズと同じ第三世代型兵器ですわ」

「空間自体ってことは、つまり弾の見えない大砲みたいなものなのか？」

「厄介だな……恐らくＩＳのハイパーセンサーで感知はできるが、すでに打たれた後に感知するからセンサーに頼る意味はないだろう」

セシリアの解説に十代と遊星はそれぞれ思ったことを言う。箒はすでに聞いていないようだが

モニターを再び見ると一夏が構えなおした。どうやら仕掛けるようだ

しかしその時

ズドオオオオオン！！

とんでもなく大きな衝撃が走った。アリーナの遮断シールドを突き破って入ってきた何からしい

「え？　システムが動かない？　何で……？」

ピットにいた山田が慌てている。本来アリーナの客席にシャッターが下りて安全になるようになっているはずなのに作動しない。それどころかピットから何も操作を受け付けていない

「どうなっているんですの？　このままでは生徒たちに被害が……」

「先生！　ここの……いや、この施設のコンピューターの制御室は？」

遊星は山田に質問をする。彼の表情には余裕がないように見える

「えっと、ここを出て二つ上に上がったところですが……何を」

場所を聞き終えると、十代と遊星はすぐに現場に向かった。後ろからとめられるような声がした気がしたが、無視して進んだ

「貴様ら……いったい何のつもりだ？」

すでにそこには千冬がいた。制御室の前には二人の男性が立っていた。彼らの左腕にはデュエルディスクがつけられていた

「話すとでも？」

一人の男が笑いながらしゃべる。何故か余裕の表情である

「おっと、織斑千冬さん。悪いですが、俺様たちに危害を加えないようにした方がいいですよ。今俺たちの左腕に着けている装置と扉の開閉装置を連動させました。俺達に直接被害が行けば、即座に開閉装置を破壊し、中の制御装置も破壊します。正しい方法、つまり俺たちのライフを０にしない限り開きませんよ」

こうしておけば、しばらくは時間が稼げる。そう確信していた……二人の男が来るまでは

「なるほど、そういうことか。悪いけど相手になってもらおうか」

「一人ずつ倒すでいいですね。十代さん」

デュエルディスクをつけた遊星と十代が男の前に立ちはだかった

「な！？　何者だ、貴様ら」

「名乗るほどのものじゃないぜ……デュエルだ！」

「織斑先生は下がっていてください。大丈夫です。速攻で終わらせますから」

二人は構えた。それを見て扉の前に立ちふさがっていた男たちも構えた

「「「「デュエル！！」」」」

「「俺様のターン、ジェネティック・ワーウルフを召喚。ターンを終了させる」」

ジェネティック・ワーウルフ　星４　地　獣戦士族
ＡＴＫ２０００　ＤＦＥ１００

攻撃力２０００を誇るレベル４のモンスターが出現した。彼らはすでに勝った気でいる

十代ｓｉｄｅ

「俺のターン……ふっ」

十代は、自分の手札を見て笑った

「手札から魔法カード、融合を発動。現れよ！　Ｅ・ＨＥＲＯフレイム・ウィングマン！」

融合　通常魔法
手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター１体をエクストラデッキから特殊召喚する。

十代のフェイバリットモンスターが召喚された。攻撃力は２１００、相手モンスターの攻撃力を上回っている

「バトル！　フレイム・ウィングマンで攻撃！　フレイム・シュート！！」

炎を飛ばして、ジェネティック・ワーウルフを破壊した

男Ａ　ＬＰ４０００→３９００

更にフレイム・ウィングマンの効果により、破壊したモンスターの攻撃力分、相手にダメージを与える。つまり男は２０００ダメージを受けることになる

Ｅ・ＨＥＲＯフレイム・ウィングマン　星６　風　戦士族
ＡＴＫ２１００　ＤＦＥ１２００
「Ｅ・ＨＥＲＯ　フェザーマン」＋「Ｅ・ＨＥＲＯ　バーストレディ」
このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

男Ａ　ＬＰ３９００→１９００

「くそ、だがまだ私のライフは……「速攻魔法、融合解除！」」

十代の使ったカードに男は絶句した。融合解除、それは場の融合モンスターを融合前の状態に戻す

融合解除　速攻魔法
フィールド上に表側表示で存在する融合モンスター１体を選択してエクストラデッキに戻す。さらに、エクストラデッキに戻したこのモンスターの融合召喚に使用した融合素材モンスター一組が自分の墓地に揃っていれば、この一組を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

十代の場に素材となったフェザーマンとバーストレディが召喚された。二体のモンスターの攻撃力の合計は２２００。つまりこのまま攻撃すれば十代の勝利だ

「二体でダイレクトアタック！！」

男Ａ　ＬＰ１９００→９００→０

遊星ｓｉｄｅ

「俺のターン、手札のモンスターを１体を墓地に送り、クイック・

シンクロンを特殊召喚。さらにスピード・ウォリアーを召喚」

ガンマンのようなモンスターと機械の戦士が出てきた。

「さらに墓地のレベル・スティーラーの効果発動！　クイック・シンクロンのレベルを１つ下げて特殊召喚する」

いきなりテントウムシが出てきてクイック・シンクロンのお腹を貫通して通り、レベルを奪っていった

クイック・シンクロン　星５→４

レベル・スティーラー　星１　闇　昆虫族
ＡＴＫ６００　ＤＦＥ０
このカードが墓地に存在する場合、自分フィールド上に表側表示で存在するレベル５以上のモンスター１体を選択して発動する。選択したモンスターのレベルを１つ下げ、このカードを墓地から特殊召喚する。このカードはアドバンス召喚以外のためにはリリースできない。

「さらにクイック・シンクロンは他のシンクロンと名の付くモンスターのシンクロ素材にすることができる」

クイック・シンクロン　星５　風　機械族　チューナー
ＡＴＫ７００　ＤＦＥ１４００
このカードは手札のモンスター１体を墓地へ送り、手札から特殊召喚する事ができる。このカードは「シンクロン」と名のついたチュ

ーナーの代わりにシンクロ素材とする事ができる。このカードをシンクロ素材とする場合、「シンクロン」と名のついたチューナーをシンクロ素材とするモンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。

「レベル1のレベル・スティーラーにレベル4となったクイック・シンクロンをチューニング！　集いし星が新たな力を呼び起こす。光さす道となれ！　シンクロ召喚！　いでよ、ジャンク・ウォリアー！」

星1＋4＝5

遊星のエースモンスターが召喚される

「ジャンク・ウォリアーの効果発動！　シンクロ召喚に成功した時、自分の場のレベル2以下のモンスターの攻撃力分、このモンスターの攻撃力に加える」

遊星の場にはレベル2のスピード・ウォリアーがいるため攻撃力は900ポイントアップする

ジャンク・ウォリアー　ＡＴＫ２３００→３２００

ジャンク・ウォリアー　星5　闇　戦士族
ＡＴＫ２３００　ＤＦＥ１３００
「ジャンク・シンクロン」＋チューナー以外のモンスター1体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードの攻撃力は自分フィールド上に表側表示で存在するレベル2以下のモンスターの攻撃力の合計分アップする。

「さらに装備魔法、ジャンク・アタックをジャンク・ウォリアーに装備！　バトル！　ジャンク・ウォリアーで、ジェネティック・ワーウルフに攻撃！　スクラップ・フィスト！！」

ジャンク・ウォリアーが勢い良く殴りつけ、モンスターを破壊した。

男Ｂ　ＬＰ４０００→２８００

「さらにジャンク・アタックの効果発動。装備モンスターが相手モンスターを破壊した時、破壊したモンスターの攻撃力の半分を相手プレイヤーに与える」

破片を男に飛ばしてダメージを与える。ジェネティック・ワーウルフの攻撃力は２０００、つまり相手に１０００ポイントのダメージを与える

男Ｂ　ＬＰ２８００→１８００

ジャンク・アタック　装備魔法

装備モンスターが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力の半分のダメージを相手ライフに与える。

「そして、スピード・ウォリアーで攻撃。このモンスターは召喚したターンのバトルフェイズ時、元々の攻撃力を2倍にする」

スピード・ウォリアーの攻撃力は９００、倍の数値は１８００

男のライフと一致する

スピード・ウォリアー　星２　風　戦士族
ＡＴＫ９００　ＤＦＥ４００
このカードの召喚に成功したターンのバトルフェイズ時にのみ発動する事ができる。このカードの元々の攻撃力はバトルフェイズ終了時まで倍になる。

そのまま蹴り上げて男を倒した

男Ｂ　ＬＰ１８００→０

二人とも１ターンで勝負を決めた

立ちふさがっていた男たちは制御室のドアが開くと同時にデュエルディスクから流れた電流によって気絶してしまった

「ち、こいつらのことは後にしておくとして……不動、すまないが急いでシステムの復旧を、遊城はアリーナに向かってくれ。一夏た

ちを頼む」

千冬もすでに謎の襲撃者について知っている。そのため、彼らに頼む

二人は急いで、自分の持ち場に向かった

第１０話　謎の襲撃者たち……（後書き）

カードのテキストを出してますが邪魔でしょうか？　少し気になったので……
デュエル知らない人にはどう思われるのか少し不安です……

第１１話　人間の襲撃者の目的（前書き）

書かせていただきます
今回は少し長いかも＆少し詰め込みすぎたかもです。

第11話　人間の襲撃者の目的

千冬がピットに戻ってきたとき、すでに客席のシャッターは閉まっていた

「織斑先生、一体どこに……」

「すまない、制御室に行っていた。それより状況は……」

「現在、織斑君と鳳さんが謎の存在と交戦中です。すぐに救助を出したいのですが……扉がロックされていて……」

山田からの状況説明を聞くと千冬はすぐに指示を出した。三年の精鋭にシステムのクラックを、教師陣に出撃の準備を

その指示が終わった瞬間、モニターに遊星が出てきた

「織斑先生、今扉のロックを解除しました。すぐに生徒の避難をお願いします。救援用の扉の解除は後5分もあればできます」

その遊星の言葉に山田は驚いた。制御室にいるのは彼一人。それなのにこんなにも早くロックを解除するなんて

一方十代はアリーナのステージに向かっていた。他の生徒が逃げている所を見ると、遊星がプログラムを何とかしたのだろうと考えた

しかし十代は焦っている。正体不明の敵と戦っている一夏と鈴が心配だ。早くいかなければならないが、非難する生徒の数が多すぎて動きづらい

（十代落ち着くんだ。ここで焦ってもしょうがない）

「ユベル……サンキュ、少し落ち着くか」

ユベルに注意され、軽く深呼吸をしてからアリーナのステージに向かった

アリーナに着いたとき

「一夏ぁっ！　男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする！」

箒の声が響いた。一夏に気合を入れるために行ったことだろう。しかしこれはまずかった

一夏と戦っていた襲撃者は箒のほうに向かっていた。叫んだ声に反応したのだろう

（あの女はバカなのか！？）

「バカでも何でもいいけど、とにかくあいつを助けないと……来い！　決闘英雄（バトルヒーロー）」

十代がＩＳを起動させたが、すぐに一夏が出てくれたため、とりあえず様子を見ることにした

何とか謎の襲撃者を仕留めセシリアがとどめを刺した。ように見えたが、実際はまだ動いている。すぐに気付いた一夏は相手の放った光線に飛び込んでいた

「まったく……無茶する奴だ……！」

十代はその様子を呆れてみていたが、何かに気付いたのか、すぐに一夏のもとに向かう

「融合！　フレイム・ウィングマン！！」

自身のＩＳのスピードを上げて一夏の前に立ちふさがった。十代が到着すると同時にワイヤーのようなものが飛んできたため、十代は炎を打ち出して撃ち落した

「早いですね……」

ＩＳを身に着けた二人の女性が、空から降りてきた。一人の女性は二人の男性を抱えている。先ほどの襲撃者を倒すときに破壊した遮断シールドから入ってきたのだろう

突然の登場に誰もが驚いた

「あの男達はさっき戦った奴ら……この襲撃者はお前の仕業か！？」

女性の一人は十代の質問に首を振った

「いいえ、今いるこいつがなんなのかは知りません。しかし、私たちの目的は織斑一夏にあります。悪いことは言いません、彼をこちらに……」

しかし彼女達の周りにはＩＳを身に着けた教師陣がすでに何名か現れている

少し考えた後

「やめましょう、訓練機とはいえこの数の教師陣に代表候補生が二人もこの場にいるのでは、あまりにも私たちが不利です……ここは退かせてもらいます。それと、私たちの伝達ミスのせいでここの生徒にいらない恐怖を与えたことを謝ります。私達はアリーナのシステムを乗っ取り、混乱の隙に織斑一夏を狙っていました」

「しかし覚えておいてください……私たちの組織はこの世界のゆがみを直します。そのためにも織斑一夏が必要なのです。覚悟しておいてください」

一人の女性が謝罪し、もう一人の女性は宣戦布告をしていた。その瞬間、喋っていた女性のＩＳが光り始めた

あまりにも強い光だったので、この場にいた者たちは全て目を背けてしまった

次に見た時には、彼女たちはそこにいなかった

「何だったんだ……それよりも一夏を……」

十代は一夏を抱えて急いで保健室に向かった

「う……？」

眠っていた一夏は目を覚ました。彼は今保健室のベッドの上だ

すぐにカーテンが開いた。そこには千冬の姿があった

「気が付いたか、致命的な怪我はないが、全身に軽い打撲がある。しばらくは苦しいだろうがまあ耐えろ」

現状を説明してくれたが、彼はまだボーとしているため返事があいまいだ

「お前、ＩＳの絶対防御を切っていたらしいからな……よく死ななかったな。まあ、何にせよ無事で良かった。家族に死なれては寝覚めが悪い」

そういう彼女の表情は優しいものだった。恐らく家族だけ……一夏だけに見せる顔だろう

「千冬姉……心配かけてごめん」

一夏の謝罪を聞いて笑った

「お前は私の弟だからな。そう簡単にやられないことくらいは分かっている。心配などする必要もない」

「私はまだ仕事があるから戻るが、お前はしばらく休んだら部屋に戻ってもいいぞ」

そういって千冬は保健室を出て行った

「一夏の様子はどうでした？　随分ひどくやられたと聞きましたが……」

「大丈夫だ。やはりというべきか……あの時のことを全く覚えていない」

「気絶していたから当たり前か」

保健室から少し離れた場所にある空き教室で遊星と十代、そして千冬の三人で話している。この時間にこの場所に来る人はいないからもってこいの場所だ

話は人間のほうの襲撃者についてだ

「あいつらの目的が……この世界のゆがみを直すと言っていたらしいが……」

「この世界のゆがみって……女尊男卑のことか？」

十代の言葉に同意する二人

「そうすると一夏を誘拐しようとしていた理由も想像しやすい。ＩＳを唯一使える男ということになっているからな。男性にもＩＳが使えるということをアピールするためだろう」

「だが、それではなぜおまえらは狙われない？」

遊星の言葉に疑問を投げる千冬。確かに十代もＩＳを使える。今は使えないが遊星にも専用機がある。しかし彼らは二人を狙おうとはしていなかった

「恐らくですが……あいつら、俺たちが異世界の住人だということを知っているんじゃないんでしょうか？　制御室前で戦った奴らがデュエルディスクを使っていたこと、それに対抗しようとした俺たちに対して何も疑問を持っていなかったことが理由です。本来の世界の住人を捕まえないと意味がないとか考えたんじゃないんですか？」

再び考える三人、しかし情報が少なすぎる

「今回はここまでにしよう。恐らく奴らはまた来る。その時に考えた方がよさそうだ。私は次の仕事があるからもう行くが、ここでのことは黙っていろよ」

千冬の言葉に頷く十代と遊星。それを確認すると、千冬は教室を出て行った

「さてと……俺は一度一夏の様子を見に行くけど、遊星はどうする？」

「俺も行きます」

教室から出てすぐに保健室に向かう。走ると怒られるので早歩きで

十代と遊星が保健室に入ろうとした時、中から話し声が聞こえた

「思い出した。『料理が上達したら、毎日あたしの酢豚を食べてくれる？』だっけ？　で？　上達したのか？」

「え、えと、その……」

「その約束ってさ、ただ飯を食わせてくれるっていう意味じゃなくて……『毎日味噌汁を』とかと同じ……」

「な、何言っているのよ！？　誰かに食べてもらったら上達のスピードが速くなるでしょ？　そういう意味よ」

その話を聞いたら入ろうとしていた二人は寮に帰ることにした。今ここで入る必要が感じられなかったからだ

（ふふふ、一夏はしっかりと思い出したようだね。しかし鈴音は何をやっているんだ？　せっかくのチャンスを自分で潰すなんて……素直な人が少ないな）

（何でだろうな？）

（十代には……まあ、分からなくてもいいか）

（どういう意味だよ？）

（そのままでいいということさ）

帰り道、十代とユベルは心の中で会話し合っていた。遊星は何か考え事をしていたため、特に気にしていなかった

寮に帰ってから夕食を取るなどして時間をつぶしている。ふと十代が部屋の外に行くと一夏たちの部屋の前に山田がいた

気になって話しかけてみた

「どうしたんですか？　一夏たちに用事なんですか？」

「ああ、遊城君……そうだ、ちょっと時間ありますか？」

そのまま一夏の部屋に入ると彼女は箒に向かって一言

「えっと篠ノ之さん、部屋の調整がついたのでお引越ししてもらいます。ちょうどいいことの男の子二人いるので、すぐに終わりますね」

山田の言葉に慌てて抗議する箒。すぐにしなければならないのかと

「箒も休まらないだろう。俺なら大丈夫だから」

「そうそう、一夏も大変だろうしな」

二人の言葉カチンと来てキレた箒

「わかりました。今すぐ引越しの準備をします。お前らは手伝わなくていい！！」

その迫力に驚き、頷くしかできなかった二人だった

引越しはすぐに終わって今部屋には二人いる。少しの時間、今日の試合について話していたが、一夏はあくびをしていた

「まだ疲れがたまっているかもしれないので、そろそろ寝ますね」

一夏の言葉を聞いて十代は自分の部屋に戻ろうとした時、ノックの音がした

十代がドアを開けると、そこには箒がいた

「一……遊城か……いつまで部屋にいるんだ？」

「いや、今から一夏も寝ようとしてたから帰るつもりだったんだけど……なんか用か？」

「一夏に用だ！」

箒の声で起き上がってきたのかドアの前にやってきた一夏

そこで、彼女は宣言する

「ら、来月の学年別個人トーナメントだが……私が優勝したら……」

「つ、付き合ってもらう！！」

ピシッと一夏に向けて指をさしながら喋っていた

何に付き合うのか……？　二人の男の子は考えていた

第１１話　人間の襲撃者の目的（後書き）

次回少しオリジナルの展開にします。
少し早めにあるキャラを出します。

第１２話　整備開始！　新たな仲間（前書き）

オリジナル展開です。
うまくいくといいですが

第１２話　整備開始！　新たな仲間

襲撃事件の次の日の放課後

十代と遊星は再び検査をしていた

しかし検査をすればするほど、謎の部分が出てしまう始末

「今日で、検査を終了することにする。今までご苦労だったな」

検査が終了した時、同伴していた千冬に言われ十代は喜んだ。あまりにも退屈だったというのとやはり自分の体を調べられるのはどうにもいい気がしないからだ

しかし遊星は少し難しい顔をしている

「俺のＩＳはやはり……」

その言葉に十代は気づいた。彼のＩＳはまだ動かない。原因不明のままである。検査というのはＩＳの調査もあった

しかしここで終了してしまうということは……と十代は考えた

遊星は何かを考えて千冬に聞いた

「前々から考えていたことなのですが……織斑先生……」

その日の夜、遊星は一夏を部屋に呼んだ

「どうしたんですか……話って？」

「まあ、座るといいんだニャー」

部屋に入った瞬間、一夏は謎の男性に遭遇し、驚いた

「大徳寺先生、あんまり驚かすなよ……ごめんな一夏」

十代が代わりに謝る

「私の名前は大徳寺、この子たちの……保護者みたいなものなのですニャー」

「織斑一夏です」

一礼する一夏

「私は今病気で休んでいるのニャー。でもこの子たちが心配だったから飼い猫のファラオの首にカメラをつけて様子を見ているんだニャー。ちなみに私の姿はホログラムで映し出された映像だからさわることができないのニャー」

一夏は何となくだが、大徳寺の事情を理解した

「まあ、先生はいたずら好きだからこうやってホログラムを使っているんだ。まあ、これからも俺の部屋にいるから」

十代は少しフォローしておく

もちろん、一夏には嘘をついている。これは千冬と相談して決めたことだ。大徳寺が幽霊なんて言っても信用されないだろうし、変な噂が立ってもいけないと思い、大徳寺と千冬の二人で考えた結果、今の感じになった

「それでお話なのですが、一夏君は明日暇ですかニャー？」

「え？　まあ、大丈夫ですけど何ですか？」

一夏の疑問に遊星が答える

「実は今日を持っておれたちの検査が終了したんだ。だがそれは同時に、俺のＩＳの修理の終了も意味していた。そこで俺は前から考えていたことを実行しようと思った」

遊星は先ほど、千冬に相談しようとしていたこと。それは以下のものであった

「俺に自分のＩＳの修理の許可をください」

千冬は少し驚いたが、許可を出した。彼の技術はすでに見ている。問題はないだろうと

「遊星さんが自分のＩＳを……でも、できるんですか？」

「問題ない、俺たちの部屋にあるバイクがあるだろう？　今あるバイクのエンジンは企業に作ってもらったが、昔俺は一から作ったから自信はある」

その言葉にこの部屋にいた一夏は驚いた。前々からすごい人だとは思っていたらしいが、ここまですごいとはという感じだろう

ちなみに十代達は前に聞いていたから驚かなかった

「そこで、一夏にも協力してほしいんだ。十代さんのＩＳを参考に調整するつもりだが、一夏のも参考にしたいし何よりもお前も自分のＩＳをしっかりと理解した方がいいという意見が織斑先生からあったからな」

これは先日の無人ＩＳ事件の際、一夏が誘拐されそうになったため、

その対策の一つである。もちろんこのことは千冬と遊星、十代と大徳寺の４人の秘密である

「……分かりました。俺にできることがあるかわかりませんが、行きます」

「すまない、じゃあ明日の放課後からやろう」

そう遊星が最後にいい、話し合いが終わる

「うんうん、こういう友情はいいもんだニャー」

大徳寺は三人を見て笑顔になっていた

次の日の放課後

「一夏！　早速訓練に行くぞ！」

「ちょっと箒さん！　今日はわたくしと訓練のはずですわよ」

「あたしと特訓に決まってんでしょ？　近距離戦ならあたしだし」

2組から鈴もやってきてすぐに騒がしくなる

「悪いが、一夏は俺たちが借りていく」

「これから整備室に行くことになってるんだ」

「ごめん！」

男子三人組が特訓を断ってすぐに教室を出て行った。ちなみに女子三人組は言い争っていたため、このことを聞いていなかった

「ここが整備室か……」

「うへぇ～何だかすごいところだな」

初めて入った整備室の感想を一夏と十代は言っていた。遊星は少し目を輝かせているように見えた。研究者としての血が騒ぐのだろう

使い方を聞くために近くにいた女の子に話しかけることにした

「ちょっといいかな？」

しかし返事がない。聞こえてないというわけではなさそうだ

「お～い、そこのメガネの子！」

一夏に続いて十代が話しかけてみるが効果がない。困っていると遅れて返事がやってきた

「……何の用？」

「ああ、作業中邪魔して悪かった。この施設を使うのが初めてだったから少し聞いておきたくて」

遊星が丁寧に言うとその女の子はディスプレイに表示させた。この場所での注意事項などを記載したものだった

すぐに遊星はアドレスをメモしておいた

「ありがとう、えっと……」

「いい、その言葉だけで充分……」

そういってすぐに作業に戻ってしまった。これ以上言っても相手の邪魔になるだけだろうと思い、三人で作業に入った

（お姉ちゃんに言われて来たのかと思ったけど……違うのかな？でも……）

遊星はすぐに自分のＩＳを出すことにした

「出てこい！　絆星！！」

首に巻かれたチョーカーが光り、三人の目の前に遊星のＩＳが出てくる

夜空のような薄い黒に染まったＩＳだ。そのＩＳの登場に整備室にいた他の生徒も見に来る。遊星のＩＳを見るのは十代以外みんな初めてだからだ

「へえ、これが三人目の男子のＩＳ……」

「なんだか神秘的な感じがしますわ」

色々と感想が出ていた。そこで、先ほど遊星達が話しかけていた女の子があることに気付いた

（あれ？　あの機体……私と同じで動かないの……かな？）

「俺はこの機体の修理に入る。十代さん、一夏、悪いけど手伝ってくれ」

「おう」

「もちろん」

すぐに作業が始まる。十代は自分のＩＳ決闘英雄（バトルヒーロー）を出して、データを照らし合わせる。一夏は遊星に言われた部品や工具を探し出していた

（……この部分ならすぐに何とかなりそうだ）

持ってきたもらった工具を使って修理を始める。しかしすぐにはうまくいかないようだ

その様子を見て何か気になったのか話しかけてきた女の子がいた

「……少し聞いていい？」

「君はさっきの……そうだ、名前を教えてくれないかな？　君っていうのもなんか変だし」

一夏の質問には遊星と十代も同じ意見だった。しかし彼女は黙ってしまった

「ああ、ごめん、先に名乗るべきだったよね。俺の名前は……」

「知ってる。織斑一夏に遊城十代に不動遊星。君たちは有名人だから……」

「そーだよね、有名人だもんね～おりむーとじゅうじゅうとどうどうは～」

のんびりした口調でダボダボの袖が特徴の女の子が話しに混ざってきた

「本音？　どうしたんだよ、こんなところに！？」

十代が少し驚いた感じで聞いてきた

「ふふん、じゅうじゅう、私はね～かんちゃん専属のメイドさんなんだよ。ちなみにね～私とじゅうじゅうはたまに屋上で日向ぼっこするほど仲良しなんだよ」

その様子を一夏はすぐに想像できてしまった

「本音……かんちゃんっていうのやめて……」

「かんちゃん？　えっと……のほほんさん、本名は？」

「更識簪……」

本人が答えた。少し意外そうな顔を本音はしていた

「あなたたちは……お姉ちゃんに言われてきたの？」

簪は少し冷たい目で彼らを見ていた

「いや、俺達は自分たちの用事で来ただけだ」

「へえ、姉さんがいるんだ」

遊星は自分たちの立場を明かし、十代は姉の発言が気になっていた。とにかく何も関係ないと分かるとすぐに彼女は謝罪した

「……ごめん、変なこと聞いちゃって……私、自分の作業に戻るから」

そのまま戻ってしまった。一夏は何か聞きたいことがあったんじゃないかと思い、話しかけてみた

「ちょっと待って、簪さん。何かほかに聞きたいことがあった感じだったんだけど」

作業を再開し、すぐに集中したため何も聞こえていないようだ

「そういえば、簪のＩＳって訓練機に似てるよな」

「それはそうだよ、じゅうじゅう。かんちゃんはね、日本の代表候補生なんだよ」

「え？　じゃあなんで簪さんは専用機を……」

十代と本音の会話を聞いていた一夏は疑問に思ったことを口に出したが、全部言う前に本音に指を刺される。最も袖で見えないのだが

「おりむーのせいなんだよ。おりむーの白式を作った所とかんちゃんの専用機を作っている所が同じなんだ」

本音の言葉に遊星はすぐに理解する

「なるほどな、一夏という非常に珍しい人のＩＳを作ろうとなって、簪の専用機の開発が遅れる……そういうことだな」

「でもさ……それって一夏のせいなのか？」

十代の言葉を聞いて、少し考えたが、一夏はすぐに簪のところに行った

「簪さん……その……ごめん！！　俺のせいで……」

大きな声でいきなり謝られて少し驚いたが、先ほどの会話を少しだけ聞いていたためすぐに納得した

「別に……確かにあなたのこと……殴りたいとも思ったけど……も

ういい……怒ってないから……それより……作業しないといけないから」

そのまま作業に戻ってしまった

一夏は一息ついて遊星達のところに戻った

「俺達もやりましょう」

こちらも作業を始めた

一時間くらい経っただろうか、遊星のＩＳも少しは動き始めるようになったらしい。同時に十代と一夏のＩＳの微調整もできていた。

しかし、他の人達からは遊星の作業が不思議に思われていた

何故なら遊星はマシンアームを使わずに全て自分の手でやっていて、届かないところは十代か一夏にＩＳを起動させて、抱えてもらっていた

気になって簪が彼らに話しかけた

「……どうしてマシンアームを使わないの？」

「ああ、直接やった方が自分のＩＳに愛着が付くと思っているからな。不便かもしれないが、この方がいい」

「……そう……それから……抱えている君はもう少し自分のＩＳのデータを見た方がいいと思う。何だか見ていてバランスが悪そう」

簪が十代に対して言った

「ありがとう、でも今は遊星の作業優先させたいからさ。後で見ておく。それと多分ないだろうけど、何かあったら言ってくれ。手伝うから」

頷いてお互い作業に戻った。気のせいか簪の顔が少し明るかった

それからもう一時間経ち、整備室の使用終了時間となった

「ふう、まだ先が見えないが、何とかなりそうだ。十代さん、一夏。今日はありがとう」

「いいって、俺も早く遊星のＩＳが見たいし」

「俺もです。遊星さんにはいろいろお世話になっているので……」

「それから箸も助かった」

片づけをしている箸にもお礼を言った。軽くお辞儀をしてそのまま去って行った

「さてと……片付けたら飯にしようぜ。腹減った」

十代の言葉には二人とも同意見だった

食堂で席を探していると、十代は箸が一人で食べている所を見つけた

「あれって簪じゃないか？　一人なんだ……混ぜてもらおうぜ」

「ちょっと、十代さん？」

一夏が止める前に十代は駆け出し、彼女のもとに向かった。向かおうと思ったその時、後ろから箒、セシリア、鈴の三人につかまってしまった。ちなみに遊星も捕まったようだ

「よ、ここいいかな？」

「……何で？」

十代の質問にさらりと返す。あんまり機嫌は良くないようだ

「何でって……一人で食べててもつまんないだろ？　せっかく知り合ったんだからさ」

簪は少しため息をついてどうぞといった。彼の性格は本音と似ているから多分何を言っても無駄だろうと思った

ちなみに十代は海老フライ定食、簪は焼き魚定食

黙々と食べている空気に十代は耐えられなくなって話し始めた

「なあ……」

「食事中は……静かにした方がいい」

「う～ん……簪って何が好きなんだ？　今食ってる魚系？」

「……あなたと話す気はないから」

ぴしゃりと止めてしまう。なんか悔しくなる十代。そこでふと思いつく

「俺のことは十代でいいよ、あなたとか言われるとなんか変な感じがするし」

「……覚えておく」

結局このままあまり話せずじまいだった

簪が席を立ち一人になると、ユベルが十代に話しかけてきた

（どうしたんだい？　あの子にあんなにかまって）

（何だかさ、さびしい目をしているから放っておけなくって……）

その答えにユベルはやれやれという感じに、ハネクリボーは笑っていた

十代も食事が終わり立ち上がった

ちょうど食堂から出ていく簪に挨拶を軽くかわした

その時、簪は首をかしげた

（あれ？　十代の近くに何かいたような……気のせい……かな？）

第１２話　整備開始！　新たな仲間（後書き）

簪ちゃんの口調これであっているのか不安です……
あと１，２話オリジナルをしてから２巻の内容にはいるつもりです。
うまく書けるかは別として早くシャルを出したい……
感想等あればよろしくお願いします

第１３話　ＶＳ鈴　楽しく？　戦う？（前書き）

書かせていただきます。
タイトル通りです。
戦闘がうまく書けているか不安です……

第１３話　ＶＳ鈴　楽しく？　戦う？

昨日と同じく整備室に来ている３人

「う～ん、やっぱりネオス達は使えないんだよな……」

「何が原因なんでしょうね……とりあえず、それらのカードを外して戦うしかないですよね」

十代は自身のＩＳを起動させ、様々なカードを使用してみていた

持っているカードの枚数が多いのと、デッキを組み替えないといけないのとランダムで出てくるため、全てのカードを使用するにはかなり時間がかかる

整備室でいろいろやってみて気が付いたが、どうやらＩＳで戦う時に使われるデッキと現在十代が戦うために使うデッキの中身は同じだつまり自分のデッキの中身を変えれば、ＩＳで戦う時に使うデッキの中身も変わるということだ

「何か違いとかあるんですか？　その使えないカードって……」

一夏は十代に質問してみる。勿論、十代はその答えを知っている。ただ、答える気にはなれなかった。正直、宇宙の波動を取り入れたカードという答えをだれが信じるだろうか……

「まあ、あるにはあるぜ……原因もそれだと思う。ただ……理由は

聞かないでくれ」

十代の言葉を聞いて、三人はそのまま作業に戻った。遊星は自分のＩＳの修理、十代はデッキの調整をすることに、一夏は自身のＩＳのメンテナンスをする

十代がデッキを調整していると近くから視線を感じた。気になって見てみると簪が十代のカードを見ていた

「ん？　簪もデュエルモンスターズやるのか？」

急に話しかけられて少しびっくりする簪、すぐに返事をする

「……ううん、でも見たことはある……」

十代のカードに興味津々な様子

「Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタル・ヒーロー）……十代はヒーローが好きなの？」

「そうだな、やっぱりかっこいいからな」

「……私も……ヒーローは好き」

最後は小さくて何を言っているのか十代には聞こえなかった

特に気にすることもなく作業を続けていた

すると急に整備室のドアが勢いよく開く

「一夏！　やっぱりここにいたのね！　今日は私の特訓に付き合っ

てもらうわよ」

鈴がやってきた。後ろにはセシリアと箒もいる

「そんな約束してないけど……」

「昨日はしていないのですからよいではありませんか」

「そうだぞ！　特訓というものは少しサボると取り返すのが大変になるんだ！　だから私と特訓するぞ！」

セシリアと箒に押され一夏は何も言えなくなる。騒がしくなったことに少しむっと感じた簪

うるさいと注意しようとしたら

「あ～だったらさ、戦って決めようぜ！　お互いに一人代表を出して戦って、お前たちが勝ったらこのまま特訓、俺たちが勝ったら好きにさせてもらうぜ」

「……そうね、あんたにしてはいい考えじゃない」

十代の提案に鈴は乗る

「今空いているのは……第４アリーナですわね。ではそこでお待ちしております」

「逃げるなよ」

そういって三人の女子は去って行った。整備室にいた人たちはやれ

やれという感じになっていた。しかし専用機持ちの試合が見られるということもあり何人かは行く準備を始めた

十代も片づけをして、行く準備をしていた。それと一緒に簪に声をかけていた

「なあ、見に来ないか？　ここで調整ばっかよりも実践を見て学ぶこともあると思うし」

「そうだね～、さすがじゅうじゅう。よくわかってる～行こう、かんちゃん」

勝手に簪の手伝いをしていた本音がすでに簪の手を引っ張っていた。断ろうとも思ったが、おそらく無理と悟った

「ちょっと本音……分かったから……片付けさせて」

本音は簪の手を放して一緒に片づけを手伝っていた

「一夏、頼みがあるんだけど……」

その間に十代は一夏にあることを頼んだ。それを聞いて了解した

「待ってたわよ……って一夏、あんた何で制服のままなのよ？」

第４アリーナに到着するとすでに鈴の準備は完了していた

しかし一夏は準備をしていない。彼女たちは一夏が戦うと思い込んでいたからだ

「こういうことさ」

ピットから十代がやってきた。もちろんＩＳを装着している

「いつだったか、俺を叩き潰すって言ってたよな？　その喧嘩……今買ってやるよ」

十代の言葉に笑う鈴、彼女自身こういう機会を待っていたらしい

「あんたってＭなの、わざわざやられに来るなんて。まあいいわ、ボッコボコにしてあげるから」

（ほう、あの小娘、死にたいらしいね）

「ユベル、手を出すなよ……お前がやると本当に大変なことになるから」

「何ブツブツ言ってんの？　さっさと始めるわよ！」

試合開始のアラームが鳴った

鈴は青竜刀で切りかかる。十代はすぐにカードを読み込ませる

「E・HEROワイルドマンを召喚！」

出てきた大振りの剣で攻撃を受け止める。ぶつかり合ったところから火花が散っている

お互いに間合いを取る。その隙に十代はカードを2枚セットした

「ふ～ん、遠距離だけが得意かと思ってたけど、近距離もできるんだ……じゃあ、これはどう？」

肩のパットがスライドしていく

「衝撃砲か！？」

（クリ？）

（あの見えない砲撃というやつか……だが、大丈夫なんだろう？）

ハネクリボーとユベルの言葉に頷く十代

その様子を見ている簪には何か不思議に見えた

（……昨日も彼のそばに見えた何かが今日も見えてる……何だろう？　羽の付いた小さな子も一緒だ）

ぼやけている為、詳しくは分からないがなんとなく何かいるということだけは分かるようだ

放たれた衝撃砲は十代の持っている剣で受け止めた。ワイルドマン

を出しているおかげで反応がいつもより良かったため受け止めることができた。しかし威力が高いため、少し後ろに吹き飛んでしまう

「あぶねぇ、やっぱりこれはかわした方がいいのか……」

「受け止めるなんてなかなかやるじゃない。でも、今度はかわせるかしら！？」

衝撃砲を連射し始めた。素早く動いてかわすも退路がどんどん潰されていく

攻撃が当たる。客席にいたほとんどの生徒がそう思っていた。だが、一夏と遊星は冷静に試合を見ていた

「もらった！」

「罠（トラップ）カード、ヒーローバリア！！」

十代の前に出てきた盾のようなものが衝撃砲の攻撃を防いだ

「行くぜ、サイクロン・ブーメランを装備！」

いきなり防がれたことに驚く鈴に対して、十代の手に巨大なブーメランが出てきた

「ちょっと！？　あんた一体いくつ武器持っているのよ！？」

鈴の文句に頷くセシリアと箒。彼の戦いを何度か見ているが、いまだ全てを把握しきれていないのである

十代はお構いなしにブーメランを投げる。避けようとしたところを持っている大きな剣で切りかかる。この二段攻撃は避けきれず、ダメージを受けてしまった

「よし！　一発入れたぜ。この調子でいくか」

「あんた……調子に乗ってんじゃないわよ！」

鈴は怒っているように見えたが、冷静に衝撃砲を連射し始めた

今度の連射は先ほどより精密になっている。一度ダメージを受けたことで彼女自身、本気でいかないと負けると思ったのだろう

先ほどまでは少しなめてかかっていた自分を叱りたい。そう自分に言い聞かせていた

しかし彼はこんな状況になったというのに笑顔のまま、むしろより笑顔になったというべきか

「笑っていられるのも今のうちよ！」

「いや、この状況をどうやって打ち破ろうかと考えるとワクワクしてくるからな」

十代の言葉にほとんどの人は呆れる。どうやったらそんな考えになれるのか

「……十代は、変。楽しいって……」

簪がぼそりと呟くが、聞こえたのか一夏と遊星は彼女の言葉を否定

する

「簪さん、十代さんの強さは楽しむことにあるらしいんだ」

「どんなことがあっても楽しむ気持ちを忘れない。だからあの人は強いんだ」

「楽しむ気持ちを……忘れない？　それが……強さに……？」

簪には意味が分からなかった。しかし、十代を見ているとなんとなく思うことがあった

（本当に楽しそうに戦ってる……ううん、どんなことでも……楽しくやろうとしてる感じがする……私とは大違い……）

ちょっとショックを受けるが、首をぶんぶん振って気持ちを切り替え、試合を見ることにした

十代の左腕のデッキが光る。すると彼はデッキの上に右手を乗せた。本来こういうことをしなくても自動で、手札に加わる。だがいつものデュエルをやるかのようにカードを引いた

「俺のターン！　一気に決めてやる！　魔法カード、融合を発動！　手札のエッジマンと場のワイルドマンを融合！！　現れよ！　Ｅ・ＨＥＲＯワイルドジャギーマン！！」

十代が叫ぶと左腕に無数の刃の付いた金色の手甲が装着され、背中には先ほどよりも大きなギザギザした剣を背負っていた

十代のＩＳの変化に客席の人はもちろん、鈴も驚いた。以前、フレイムウィングマンになった時も変化したが、他にも変化があるのかと

「遊星さん、あのカードの効果って？」

一夏の質問の意味が分からない簪、そもそもこのアリーナにいる人で十代のＩＳのことを知っているのは遊星と一夏だけだ

「あのカードは確か相手モンスターに１回ずつ攻撃することができる効果だ。この試合の場合……相手の武装・装甲・本体全てに一度に攻撃することができる……と言う感じか」

遊星の予想通りのことが起こる

「インフィニティ・エッジスライサー！！」

左腕の手甲から何十もの数の刃を繰り出す。衝撃砲で撃ち落とそうとしたが、一つ一つの刃の威力が高すぎて撃ち落せない

鈴の青竜刀や衝撃砲に刃のダメージがたまる

（まずい……このまま喰らったら……）

「終わりだ！！」

すでに十代は間合いを詰めて背負っていた剣を抜き、鈴を直接切り裂いた

試合終了のアラームが鳴った

「ガッチャ！　最高に楽しかったぜ！！」

十代の決め台詞で勝負を終わらせた

「納得いかないわ！　何でＩＳを使い始めてまだ２ヶ月も立ってない奴に負けるのよ！？」

試合後、鈴は十代に文句を言っている

「そう言うなって鈴、どんなベテランでも油断したら初心者に負けるってことだろう。事実、お前十代さんをすぐ倒せるって思ってよな？」

「まあ、確かに少しだけ思ったけど……」

少し鈴はそっぽを向く

「まあ、今回は俺が勝ったけどさ、またやろうぜ、鈴音」

「鈴でいい……遊星もそれでいいから」

十代に対して少し気を許したのか呼び方を変えるように言う

そんな様子を見て一夏は何だかほっとしていた。やはりみんなの仲は良い方がいいからと思っている

少し話していると、簪が帰ろうとしていた。整備室に行くのだろう

それに気づいた十代は彼女に声をかける

「もういいのか？」

「うん……十代のは……特別すぎて参考にならなかった」

そう言われ、十代は少し苦笑いする

「やっぱりそうなるよな……そうそう、昨日アドバイスありがとうな」

「……ううん、大したことしてない。知り合いなんだから……」

そう言って整備室に向かっていた。その時の彼女の表情は、今までよりも少し明るい感じがした。その様子を見ていた本音が十代に話しかける

「珍しいね～かんちゃんってあんまり人にかかわらないのに～じゅうじゅうは不思議な魅力を持ってるんだね～」

そのまま本音は簪の後をついて行った。ノロノロと

（ふ、まあ持っているんだけどね）

（クリクリ～）

十代の精霊は本音の言葉に同意していた

（……ま、少しはいい顔するようになったかな？）

この後、実は調整結果を広いところで試したかったという十代と一夏の言葉に、何で戦ったのか……とうなだれる鈴の姿があった。そのまま女子も含めて訓練が始まった。一夏に攻撃が集中しているよ

うに見えたのはきっと気のせいではないのだろう

（……十代さんのＩＳと俺のＩＳ……大体似ているから何とかなりそうだな）

遊星は一人、整備室に戻って作業をすることにした

こうして今日という日は終わった

第13話　VS鈴　楽しく？　戦う？（後書き）

ちなみに簪は十代のことを知り合い以上、友達未満くらいに思っています。
次回から2巻の内容に入りたいと思います。

第１４話　二人の転校生　屋上で楽しく……（前書き）

書かせていただきます
やっとシャルとラウラ登場です

第１４話　二人の転校生　屋上で楽しく……

十代と鈴が模擬試合を行った翌週、クラスでは何かにぎわっていた

「ねえ、あの噂聞いた？」

「うんうん、何でも今月末のクラス対抗トーナメントで優勝すると……」

「おはよー」

一夏と十代、遊星の三人が教室に入ると集まっていた女子はすぐに散った

何事かと思って聞いてみても何でもないと言われてしまう。気になったが、これ以上は多分無理だろうと思い、やめることにした

すぐに山田先生と千冬がやってきた。皆が座る。千冬が来たからであろう

「おはようございます」

「諸君、おはよう。本日から本格的な訓練を開始する。訓練機ではあるが、ＩＳを使用しての授業になるため、各人気を引き締めるように」

その言葉に少し教室の空気が引き締まった感じだ

「ではホームルームを始めます。本日は転校生を紹介します。しかも二人です」

「「「「えぇぇぇぇ！？」」」」

クラスが騒がしくなる。いきなり二人も来るとなるとそうなるのだろうか

すぐに転校生が入ってきた。驚いたことがある

そのうち一人は男だったから

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。不慣れなこともあると思いますが、よろしくお願いします」

にっこりとした笑顔で挨拶をした

「こちらには僕と同じ境遇の方がいると聞いて……」

そこまで言って彼は十代と遊星の姿を見て驚いた

「え？　僕は男子が一名と聞いていたのですが……」

「ああ、公表はされてなかったが、もう二人いる」

千冬がそう言い終わると、クラスの女子が騒ぎ出した。もう一人の男子が来たからだろう

「更なる男子が来た～～！！」

「今度来た子はすごい美形」

「守ってあげたくなる感じだね」

等々、色々と騒がしくなったため千冬は少し呆れた

「あ～黙れ、お前たち。もう一人の自己紹介ができないだろう」

しかしもう一人の子は一向に喋ろうとしない。見た感じから軍人という感じが分かるような子だ。何だかほかの子を見下しているように見える

「挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

びしっと千冬に向かって敬礼をしていた

「ここではそう呼ぶな。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

ラウラは再び前を見る

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ。以上」

すぐに自己紹介を切り上げる。何かに気が付いたのかラウラは一夏のほうに向かった

「貴様が……」

そういって手を振り上げる

「へえ、ずいぶんと面白い挨拶をするんだな。ドイツの軍人って」

「初対面の相手を殴ろうとするのか」

十代と遊星が軽くラウラを睨んだ。ただそれだけで、彼女は手を止めた

（ち、何だあいつらの感じ……わが軍の中でもあんな迫力をもった奴は少ない）

興がそがれたのか自分の席に着いた。少しボーとしていたシャルルも自分の席に向かった

「ではＨＲは終わりにする。各人すぐに着替えて第２グラウンドに集合！今日は２組と合同でＩＳ模擬戦闘を行う。解散！！」

そういうとすぐにみんな準備を始める。男子はさすがに一緒に着替えるわけにはいかないので、アリーナの更衣室を使う。時間が限られているため、すぐに向かわないといけない

「おい、そこの男子三人はデュノアの面倒を見てやれ」
教室を出る前に千冬に言い渡される
「君が織斑君だよね。初めまして……」
「ああ、いいから先に移動しよう。これから毎回更衣室に行かないといけないから急ごう」
「更衣室で軽く自己紹介だな」
「早くいかないと……」
一夏がシャルルの手を取って駆け出した
しかし少しタイミングが悪かったのか、他の教室から転校生の噂を聞きつけ、情報を得るために廊下にかなりの人数が出てきた
このままでは、遅刻してしまい千冬に叱られてしまう。それだけは避けないとならない
「いけない、逃がすわけにはいかないわ」
「者ども出会え！」
すごい勢いで騒がしくなる
「ねえ、何でこんな風になるの？」

シャルルの疑問に逆に不思議そうに見る十代

「何でって……そりゃ男子は俺達しかいないんだから」

しかしシャルルはまだ疑問そうだ。その様子を遊星は少し疑問に思った

（……まさか、シャルルは……だが、証拠がない……か）

「ＩＳを使える男子というのは今のところ俺達４人だけだからな。そういう意味で珍しいのだろう」

「……ああ、そうだよね」

やっと納得してくれたようだ

そのまま更衣室に着き軽く自己紹介をする

「織斑一夏だ。一夏でいいよ、よろしくな。さてと着替えないと」

「遊城十代だ。俺も十代でいいよ。お前も早く着替えた方がいいぞ」

「不動遊星だ。遊星で構わない。一緒に頑張ろう」

「じゃあ僕のこともシャルルって呼んでくれるかな？」

自己紹介を終えると三人はすぐに上のシャツを脱ぐ。するとシャルルは驚いていた

「いきなりでびっくりしたよ……えっと、悪いんだけど、あっち向

いていてくれる？」

シャルルの頼みに少し首をかしげたが、時間もないので気にせずすぐにそうした

「やれやれ、やっぱり着にくいよな、これ」

「そうですね、俺は始めて着ましたが……いろいろと引っかかって」

カタン、と何か音がした。気になって見てみると、すでに着替えていたシャルルが何か荷物を落としていたようだ。ほんのり顔も赤い

「どうしたんだ？　ってもう着替え終わったのか！？」

一夏は振り返って様子を見ると、すでに着替え終わったシャルルの姿に驚いていた

とりあえず、急いで三人も着替えを終わらせ、グラウンドに急いで向かうことにした

「そういえば、シャルルのスーツ、着やすそうだよな」

「うん、デュノア社製のオリジナルだよ」

「確かシャルルの名前って……」

「うん、そうだよ。僕の父が社長をしているんだ。一応フランスで一番大きな企業なんだよ」

シャルルの来ていたスーツの話題になっていた

「なるほど、道理で身のこなしがいいと思った」

「お、それ俺も思った」

遊星と十代の言葉に少し顔を背けた。その様子を見たのでそのままグラウンドまで黙っていた

授業開始1分くらい前に到着し、４人は最後列に並ぶことにした。すぐに千冬が前に立ち始める

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はい！」

「今日は戦闘実演をしてもらおう。凰！　オルコット！　お前たちは専用機持ちだからすぐに始められるだろう。前に出ろ」

指名された二人は前に出る。何で自分が……という愚痴をこぼしながら

すると千冬が彼女らに何か耳打ちをした。その瞬間、いきなりやる

気になっていた

「ところで、二人で戦うんですか？　織斑先生」

遊星が質問する

「まあ、待て。相手は……」

何か言おうとした時、大きな音がする

その音は一夏と十代のところに向かっていた

「だぁぁぁ、一夏、逃げるぞ」

「へ？」

ドカーン！！

一足早く行動した十代は何とか回避できたが、一夏は逃げ遅れあおむけの状態に倒れている

「ああ、織斑君！　大丈夫ですか！？　ってあわわわ……」

乗っていたのは山田先生だったようだ。今、彼女の胸が一夏の顔にあたっていることに気付いて慌てている

すぐに離れると同じくらいに一夏は起き上がる。しかし、彼の頭のあった所に何かが飛んでいた

「ホホホホ……外してしまいましたわ」

「……」

セシリアはレーザーを放っていた。鈴は黙って持っている武器を組合せ、双天牙月を作り出し、一夏に投げていた

一夏はいきなりのことでかわすことができなかった。しかし、山田先生が二発撃ちこんだだけで軌道を変え、一夏を救った

その光景に生徒全員は驚いた

「山田先生はああ見えて元代表候補生なんだ」

「そんな、候補生止まりですよ」

「さて、さっさと始めるぞ」

どうやら千冬は二対一を提案していた。それはさすがに……と誰もが思っていたが、数分後、彼女たちはあっさりと負けてしまった

「さて、ＩＳ学院の教師の実力は分かっただろう」

そう言った途端、一人手を上げる人物がいた

「はい、織斑先生。俺も山田先生と戦ってみたいです。教師の実力を直に試せるなんてセシリアと鈴ばっかりずるいです」

十代が希望した

「馬鹿者、そんな時間はない。とにかく、専用機持ちである織斑、

デュノア、オルコット、凰、ボーデヴィッヒ、それから遊城と不動はペアだ。7人グループとなって実習を行う。各グループのリーダーは専用機持ちだ。では、分かれろ」

千冬は十代の望みを切り捨て、すぐに授業を進める。しかし、女子は一夏、シャルル、十代・遊星ペアのところに集まった

「織斑君、よろしくお願いね」

「デュノア君、頑張ろうね」

「遊城君と不動君、私大丈夫だから」

このままでは授業が進まない。そう思い、千冬は声を上げる

「出席番号順に一人ずつ入れ。3分以内にやらなければ、お前たちにグラウンド百週させるからな」

これにはさすがにまずいと思い、急いで並んだ。最初からそうしてくれ、と千冬は思っているんだろうということは想像しやすかった

その後、山田先生からこれからやることの指示を言い渡された

一夏ｓｉｄｅ

「とりあえず、出席番号順にＩＳの装着と歩行をやろうか。最初は……」

すぐに始めよう。もたもたしていたら千冬姉に怒られるからな

って、なんか元気のいい子だな……

「じゃあ、始めようか……」

何だかやりにくい……シャルルや十代さんの所をちらりと見てみる

ああ、なんだか同じ感じだな……あ、シャルルの所の女子たちが千冬姉に殴られてる……

殴られるのは嫌なので、てきぱきと始めた。そのまま一人目が終わったが、二人目をやろうとしたときに問題が出た。コックピットに届かない

「どうしました？　ああ、高い位置で固定されているんですね」

ちょうど来てくれた山田先生がすぐに気付いてくれた。やっぱり頼りになる……けど、さっきのことを思い出すと顔が赤くなる……柔らかかったな

「では、織斑君が運んでください。白式を出してください」

「ちょっと待ってください！　運ばずとも踏み台になればいいのでは？」

箒が山田先生の意見を否定する。でも、運んだ方が安全だし……

「わかりました……運びます」

「？　織斑君？　顔が赤いですが大丈夫ですか？」

ああ、近づかないでください……余計に赤くなりそう

「先生、織斑君きっとさっきのアクシデントで困ってるんですよ」

そういうと山田先生も顔を赤らめる。ああ、気づいてくれたのか

「ああ……すみません、さっきは本当に……でも、その……」

困った……なんて言っていいのか困った

とりあえず、山田先生に大丈夫と言って続きをすることにした。

結局運ぶことにしたが箒の視線が痛い。後最初だった子の視線も

……なんか大変だ……

その後、箒の番となり、そこで昼食を屋上で食べることになった

やっぱり食事はみんなで取った方がいいし、シャルルと十代さん、

遊星さんも誘うか

十代ｓｉｄｅ

うーん、やっぱり一夏とシャルルも大変そうだな。そもそも俺、人

に教えるとか苦手だしな……遊星にたまに任せてしまうが、やっぱり俺が言った方がいいらしい。ＩＳに実際乗っているわけだからな

「じゃあ、次の人は……」

「は～い、私だよ。よろしくね～じゅうじゅう」

本音か、まあ友達だからやりやすいな。さっきから何でかしゃがんで解除してないから、わざわざ運ばないといけない

やっぱり軽いな……本音は。とりあえず、今までのように乗せる

「本音、大丈夫か？」

「大丈夫だよ、どうどう」

そういうだけあって結構うまいな。とりあえず、次の人の番って

またしゃがまないでやったよ……

「本音……」

「ごめんね～なんかみんなの視線がね～そうそう、じゅうじゅう、今日お昼は屋上行こう」

「ああ、いいけど……」

とりあえず、約束をする。それにしても……何でみんなそうするかな？

（十代に運ばれたいんだ……見ててあんまり気分が良くないけどね）

ユベルがぼそりと呟いてる。何言ってるんだろう？

そして授業が終わり昼休み

屋上にて一夏達は昼食をとっていた

「それにしても十代さんは先約、遊星さんは整備室に行ってて一緒にできなくて残念だったな」

「……そうだな」

箒はえらく不機嫌になっていた。彼女は一夏と二人きりで食べようと思っていた

しかし現実は、他にシャルル、鈴、セシリアがいる。このままいてもしょうがないと思い、箒はとりあえず弁当を広げた

それに合わせて鈴とセシリアも持ってきていた弁当を広げた。そのまま一夏に食べさせようとしていると屋上に誰か来た

「へえ、なかなかうまそうだな」

「そうだね～私もほしいな」

十代と本音だった。二人の手には購買で買ったものがある。だが見た感じ一夏のために作られたものだと分かる。しかしつまみたい。悩んでいると

「せっかくだから一緒に食べようぜ、やっぱりみんなで食べた方がいいしな。皆もいいよな？」

一夏の問いに嫌とは言えず、そのまま食べることになった

（……まあ、一夏が喜んでくれたからいいか、それにしても……遊城が何故ここに……？）

十代と本音は食べ終わると、日向ぼっこを始めていた。ちなみにハネクリボーも一緒にいる

その様子を見て一夏とシャルルは思った

（何だかのほほんとしてきた）

（十代の近くにいる羽の付いた子……かわいいな）

箒たちはどうしていいのかわからなかった

こうして昼休みは過ぎていった

第１４話　二人の転校生　屋上で楽しく……（後書き）

今回は遊星の影が薄い……
感想・指摘等あればよろしくお願いします

第15話　シャルルへの疑問

「つまりね、一夏がオルコットさんや凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を理解していないからだよ」

「そうなのか？　一応わかっているつもりだったんだけど……」

土曜日の午後、アリーナで特訓をしている。もちろん、十代と遊星と箒、セシリア、鈴もいる

今、一夏はシャルルに教えてもらっている

「そうだね、知識でわかっているだけって感じだな。さっき戦った時ほとんど間合いが詰められなかったでしょ？　一夏は近接オンリーだからより深く射撃武器の特性を知っておかないと勝てないよ」

先ほど、戦っていたらしいが一夏はシャルルに一方的に負けてしまった。その後の彼の説明は一夏にとってすごく理解しやすいものだった

ちなみにほかの方の説明は

「こう、ズバンとやってがきんとやるんだ」

「なんとなくよ。ほら、感覚ってもんがあるでしょ？」

「右斜め三十度ほど体を傾けて、その次は左に五センチほど動いて……」

こうである。ちなみに十代は説明が苦手なので、説明しないで、実戦で教えている

「さすがシャルルだな……俺は苦手だからな……説明するのは」

「ああ、うまいな」

十代と遊星は感心していたが

「ふん、私のアドバイスを聞かないからだ」

「あたしの分かりやすい言葉を聞かないなんて」

「理路整然とした私の説明に不満があるのでしょうか？」

女子三人は一夏に対して不満を言っていた

十代と遊星も一夏と一緒に訓練するために近づく

「そういえば、一夏の白式って後付武装がないんだよね？」

「ああ、何回か調べてみたけど、拡張領域が空いてないらしい」

「多分それってワンオフ・アビリティーの方に容量を使っているからだよ」

「確か、ワンオフ・アビリティーって確かＩＳが操縦者と最高状態の相性になった時に自然発生する能力……だよな？」

一夏が答えられたことに少し驚いたシャルル

「すごいね、まだ使い始めて二ヶ月くらいなのに」

「優秀な先生がいるからな」

「それって遊星と十代のこと？」

シャルルが振り向くと二人がいた

「いや、俺はそんな優秀じゃないって……一夏に何にも教えてないし」

「俺も大したことはしてない。一夏自身が優秀だからな」

お互いがお互いのことをよく言っている

「ふふふ、仲いいね。三人とも」

「シャルルだって友達だろ？」

十代の言葉に少し驚くシャルル。同時に嬉しくも思った

「……えへへ、ありがとう」

「いいって、それよりも一夏の特訓付き合うぜ。次はどうするんだ」

シャルルは少し考えて自身の射撃武器であるアサルトライフルを一夏に貸した。本来、他の人の武器を使うことはできないが、所有者が許可すれば大丈夫だ

初めての射撃だったので、不慣れにしている一夏をシャルルは丁寧に指導する

ためしに撃ってみると一夏は驚いていた

「何か……速いんだな」

「そう、速いんだよ。一夏の瞬間加速も速いけど、弾丸は面積が小さいからより速いんだ。だから相手に当てやすいし、外れても牽制になる。一夏は特攻するときに集中してるけど、どこかでブレーキがかかるからね」

「なるほど、だから間合いが空くし、続けて攻撃されるのか」

シャルルの説明に只々感心する一夏

しかし女子三人からは、教えていたはずだ、という感じの声がしていた

「シャルルの説明は参考になるな。正直俺が言いたいこと全部言っている気がするし」

「そんなことないよ。そういえば十代のＩＳってどうなっているの？　何だか色々な武器を使ったり、ＩＳ自身を強化したりって聞いたんだけど」

「ああ、そうだ。このカードを使って戦うんだ」

十代は持っていたカードを何枚か見せる。

「昔クラスの子がやっているのを見たことがあるよ……僕はあんまり興味なかったけど」

「まあ、そういうやつもいたけどな。少し見てみるか？　じゃあ、見せたこのカードなら今使えるから……」

十代は手元にあったカードをしまい、右手にスパークガンを出して射出した

「なるほど……本当にカードの絵と同じものが出てくるんだ」

「そういえば、シャルルの機体は訓練機のラファール・リヴァイブに似ているが……かなりいじっているな。どんな機体なんだ？」

遊星の質問にシャルルは答える

「この子の正式な名前はラファール・リヴァイブ・カスタム？。遊星の言うとおり、かなりいじって拡張領域を倍にして大体二十くらい装備ができるんだ。でも十代のほうがもっと装備があるかもね」

「ああ、だけどこいつちょっと癖があってな。選べるカードがランダムなんだ。まあ、その方が楽しいけどな」

「楽しいって……十代は変わってるね」

そう言ってお互い笑いあっていた。後ろの女子たちは以下略

その時、シャルルは十代の近くにいたハネクリボーに気が付いた

「……あれ？　十代の近くにさっき見せてもらったカードに描かれているのと同じのがいるね」

「！　シャルルも見えるのか！？」

「もって一夏も？」

十代も驚いた。まさか、精霊が見える人がさらにいるなんて……しかし、その驚きはすぐに終わる

何やら騒がしくなったと思い、他の女子が指差す方向を見ると、そこにはラウラがいた

「おい」

一夏に対して言ったのだろう。彼もそれには気づいていたので返事をした

「何だよ？」

「貴様も専用機持ちだな。私と戦え」

「嫌だ。理由がない」

「私にはある」

このやり取りを見ていた十代と遊星はラウラが一夏をどのように見ているかはっきりとした。憎しみだと

「貴様がいなければ教官が大会二連覇を成し遂げたことは確実。だ

からこそ……貴様の存在を認めるわけにはいかない」

そのままラウラは戦う姿勢に入ろうとしている

「随分と面白いことを言うな。ラウラ・ボーデヴィッヒ」

遊星が彼女に言う。もちろん、少し怒りを込めて

「戦えない者に用はない。邪魔をするな」

「そっちの理由は詳しく知らないけど、俺は友達の存在を認めないと言われて冷静にはできないぜ」

十代も構え始めた

しかしラウラはすぐに一夏に砲撃をした。その砲撃を防ぐ手段が、手元のカードでは難しい

どうするか考えていた時

ゴガギンッ！

「こんな密集した所でいきなり戦闘だなんて……ドイツの人は随分沸点が低いね」

シャルルが防いでいた

「フランスの第二世代型（アンティーク）ごときが立ちふさがるとはな」

「いまだに量産の目処が立たないドイツの第三世代型（ルーキー）よりはましだ

と思うよ」

シャルルとラウラはお互いにらみ合っている。一触即発の雰囲気だったが、突如スピーカーから響いた教師の注意の言葉によってその雰囲気は消えた

興が削がれたのかラウラはゲートへと去って行った

「さっきはありがとうな、シャルル」

「ううん、大丈夫なら良かったよ」

ちょうどアリーナの使用時間も終わり、片づけをしていた。それも終わり着替えになるのだが

「えっと、じゃあ先に着替えて戻ってて」

いつもこう言うのである。そこで一夏は少し考えて

「なあ、シャルル。たまには一緒に着替えようぜ」

誘ってみることにしたが、恥ずかしいという理由で拒否される

少し強引に誘おうとしたが、鈴に止められた

しょうがなくいつも通り一夏は、着替えに行った。十代達は別に用事があったため一人で着替えることになった

（う～ん、風呂に入りたい）

現在、男子は大浴場を使えない。風呂好きの彼にとって少し残念なことの一つである

しかしその後、山田先生がやってきて使えるようになったことを知ると、とても喜んでいた

その姿をシャルルに見られ、少し不思議そうにしていた。さらに一夏に用事があったのか、そのまま彼を連れて出て行った

（そんなにお風呂好きなのかな？）

そう考えながら着替えていた時、更衣室に十代達がやってきたことに気付いた。急いで着替えることにした

「ん？　シャルルか、一夏はどうしたんだ？」

「あ、さっき山田先生が来て用事だからとかって……十代！　いきなり着替えないでよ！？」

十代が上着を脱いだことに驚いて後ろを向くシャルル。それを不思議そうに見る二人

「あ……あはは、ごめんね。僕は先に戻ってるね」

何だか慌ててシャルルは更衣室を出て行った。その姿を見て十代はあることを思い出していた

（そういえば、1年の時レイがオシリス・レッドに来た時の反応に似てる……もしかして）

「なあ、遊星。シャルルってもしかして……」

「ええ、俺も同じことを考えてます」

「ふう、やっと終わった……あれ？　シャルはシャワー中かな？
……確かボディソープが切れてたから」

自室に戻り、シャワーの音が聞こえた。そこで一夏は親切に届けてやろうと思い、シャワー室のドアを開けた

その時、目の前には裸の女の子が立っていた

「いち……か？」

「へ……？」

お互いどうしていいのかわからず、ボーとしてしまう。その時、シャワー室の中に一匹の精霊が現れた。ハネクリボーだ。先にシャルルの方が気づき我に返ってシャワールームに入った

一夏も一夏で、我に返ってボディソープの替えを近くにおいて、脱衣場を後にした。ハネクリボーも一緒に

部屋には十代と遊星がいた。ハネクリボーが十代に何か話している。恐らく今の出来事だろう。ハネクリボーの言葉が一夏にもなんとなく伝わっていた

そして二人合わせて声を揃えて言った

「「やっぱり……女だったか」」

第１５話　シャルルへの疑問（後書き）

次回は少しオリジナルの展開が入るかもです。

第１６話　友のためにできること（前書き）

書かせていただきます
今回は大体本編と似た感じですのであまり面白みがないかもです…
…

第16話　友のためにできること

少しするとシャルルはシャワー室から出てきた。部屋にいた十代と遊星には特に驚かなかった。ハネクリボーが来たからというのもあるが、なんとなくそんな予感がしていたようだ

「……どうして、僕が女だと？」

「俺は小さなころ住んでいた場所は……まあ、スラムみたいな所だったんだが、そこで子供が逃げるためにそうやって男装したり女装したりするのを見ていたからな。その経験から最初に見た時に少し不自然に見えた。その後に女子に追いかけられたときにそのことが不思議そうにしていたので確信した。本当に男だったらそれくらいわかるはずだからな」

「俺も前に学校に通っていた時にシャルルと同じようにした子がいたんだ。更衣室で着替えを恥ずかしがるのを見て思い出したっていうわけ」

遊星と十代の推理にシャルルは乾いた笑いしか出なかった

「あはは……簡単にばれるものなんだね……」

一息ついてシャルルは話し始めた

「実家の方、つまりデュノア社の社長からの命令でね……そうしろって」

「命令って……親だろう？」

「僕が愛人の子だからだよ」

シャルルの言葉に三人は驚き、黙ってしまう。シャルルの話は続く

「二年前に僕のお母さんが亡くなった時に父の部下が僕のことを迎えに来たんだ。そこで検査をしていくとＩＳの適応が高いことが分かって、非公式だけどデュノア社のテストパイロットをやることになってね」

シャルルの顔はいつもどおりだがやはりつらいのだろうと三人は察した

「父に会ったのは二回くらいかな？　会話は数回だけ」

「それからね、デュノア社は経営危機に陥ったんだ」

「え？　だけど、デュノア社は量産機ＩＳのシェア世界第三位だろ？」

「……第二世代しか作れなかったからか？　ＩＳの開発は莫大な資金がかかる。だからこそ政府に頼る必要があるが、その援助を受けられなくなった……そんなところか？」

一夏の質問に遊星が代わりに話した。シャルルは少し驚き、そして苦笑いをしていた

「さすが遊星だね。自分でＩＳを修理しているだけあって情報を集めていたのかな？　まあ、大体そうだよ」

「大体話は分かったけど……何で男装することに繋がるんだ？」

「簡単だよ。広告塔になること。そして……同じ男子なら日本で登場した特異ケースと接触しやすい。可能ならば、使用機体と本人のデータをとれる。つまり、データを盗んで来いって言われたんだよ」

苛立ちを含んだ声で答えた

「まあ、もうばれちゃったから僕は本国に呼び戻されると思うよ。デュノア社は……つぶれるかどこかの傘下に入るかだね。どうでもいいことだけど」

「……何だか話したら楽になったよ。今まで嘘ついてごめんね」

シャルルは頭を下げる。だが、一夏は彼女の肩を掴んで顔を上げさていた

「いいのか、それで」

突然のことにシャルルは驚いて何を言っていいのかわからなくなっていた

「いいのかって聞いているんだよ！？　親が何だっていうんだよ！？　確かに親がいなければ子供は生まれない。けれど！　親が子供に何をしてもいいなんて、そんな馬鹿なことがあるか！　生き方を選ぶ権利は誰にだってあるんだ。それを、親なんかに邪魔されるいわれなんて無いはずだ」

一夏の感情が高ぶっている。誰が見てもそうだと答えるだろう。だ

が、十代と遊星は止めなかった。彼らもまた同じ意見であるからだ

「どうしたの？　一夏、変だよ？」

「……ごめん、熱くなりすぎた。俺も……俺と千冬姉は親に捨てられたから」

シャルルは何も言えなかった

「それはいいんだ、今更どうしたいとかないから……シャルルはこれからどうするんだ？」

「……時間の問題かな？　フランス政府もこのことを知ったら代表候補生をおろされて、良くて牢屋行きかな？　僕にはもう選ぶ道が……」

「「ふざけるな！」」

十代と遊星が、いきなり叫ぶ

「シャルル、お前はまだ何もしていないじゃないか！　それなのにもう諦めるのか！？」

「確かに今までつらかっただろう。だからこそ、そこから抜け出すべきなんじゃないのか！？」

十代と遊星の言葉に一夏は何かを思い出したかのように喋った

「！　特記事項第二一がある。つまり学園にいる間、三年間は大丈夫なんだろ？　その間に見つけよう。俺……俺たちが協力する！」

「……よく、覚えていたね」

シャルルは笑顔になっていた。するとハネクリボーがシャルルの頭の上に乗っかった。ハネクリボーなりの信頼のあかしなのかもしれない

「シャルルが決めてくれ、少なくとも俺はそれに従う」

彼女は頷く。何だか本当の彼女を見ている。そんな気がした三人だった

その時、ノックの音が響いた

「一夏さん、いらっしゃいます？　夕食をまだとられていないようですけど……」

（とりあえず、俺が出るからシャルルは隠れろ）

（う、うん）

突然来たセシリアに４人は慌てている。とりあえず、十代が出ることにした

「ああ、セシリアか……どうしたんだ？」

「十代さん、一夏さんは？」

「ああ、シャルルがちょっと体調崩したみたいで、一夏が寝かしていたんだ。シャルルが大丈夫って聞かないから少し時間がかかって……」

「あら、そうでしたの」

十代が何とかごまかしている。シャルルはとりあえず、ベッドに入る

「ごめんな、セシリア。今から夕食に行くけど、一緒に行くか？」

「ええ、そのつもりでこちらにお伺いいたしましたので行きましょ

う」

「シャルル、行ってくるけどベッドから抜け出すなよ。後で、夕食もっていくからな」

「俺が見ておくから安心しろ」

遊星がシャルルを見るということになってその場は何とかおさまった

夕食後、一夏と十代は二人のご飯を持って部屋に戻っていた。ちなみに焼き魚定食だ

「十代さん、俺シャルルを助けたいです。あんな風に親に使われるだけなんて我慢できないです……協力してほしいです」

一夏の頼みを聞いて十代は笑った。少し一夏はむっとした。自分は真剣に話しているのになぜ笑うのかと

「何だよ、そんな顔して……ん当たり前のこと聞くなよ。協力するに決まってるだろ？　俺と一夏と遊星、それにシャルルは友達なんだから」

その言葉を聞いて、一夏も笑顔になった

一夏の部屋に戻ると、十代と遊星はすぐに自分たちの部屋に戻っていた

「じゃあ、どうぞ」

「うん……！」

シャルルの表情が固まった。そのままというわけにもいかないので、すぐに箸を取り食べようとするがこぼしてしまう

そこで一夏は理解した。まだうまく箸が使えないのだと

「悪い。スプーンとフォークをもらってくるよ」

「いいよ、頑張って食べてみるから」

「遠慮しないでほしいな。俺達は友達だろ？　そうされると逆にさびしいからさ。甘えてみろよ」

「……じゃあさ、一夏が食べさせてよ」

一夏は少し惚けた。まさかそう言われるとは思っていなかったのだろう

「あ、甘えてもいいって言ったのは一夏なんだよ」

「わ、わかってるって。じゃあそうしよう」

シャルルがお願いなんてするのは始めてだった。だからこそ一夏は叶えてあげようと思った

「あ、あーん……」

「あーん」

お互いに恥ずかしがりながらも続けていた。落ち着かない雰囲気になっていて食事が終わるとすぐに二人は眠ってしまった

「……そうか、一夏が……もちろん協力します」

部屋に帰った後、十代と遊星は一夏が言っていたシャルルを助けたいということに対して話し合っていた

すぐに遊星はデュノア社のホームページを見る。少し調べるとあることを提案した

「明日朝、一夏に聞いてみよう。一夏の協力があればシャルルを助けることができる」

第16話　友のためにできること（後書き）

感想・指摘等あればよろしくお願いします

第17話　襲撃者再び（前書き）

書かせていただきます
後半はオリジナルです

第17話　襲撃者再び

次の日の早朝、シャルルの準備を待っている間に一夏に何とかなることを伝えた。しかし彼はまだその時じゃないと言った

「シャルルが決めるまで俺は何もしないでいようと考えています。あれから少し思ったんですけどやっぱり本人の意思を大切にしたいと思って……」

そういうと二人は頷いた。そしていつでも力を貸すと約束してくれた。同時にシャルルが出てきた

「一夏、お待たせ。ああ、二人も待たせちゃってごめんね。食堂に行こう」

「ああ、そうしよう」

そのまま四人は食堂に向かった。この日は休日のため朝食の後、四人は整備室に行き自身のＩＳの調整を行った

「そ、それは本当ですの？」

「ウソついてないでしょうね？」

さらに次の日の月曜日、廊下にまで聞こえる大きな声に疑問を持った

「何だろう？」

「本当だってば！　この噂は学校中で持ちきりなのよ？　月末の学年別トーナメントで優勝したら織斑君か遊城君と交際……」

「「俺がどうかしたって？」」

十代と一夏の名前が出てきたため、本人たちは聞いてみることにした。だが、いきなりの登場ということで女子たちは取り乱していた

その光景を四人は不思議そうに見ていた。鈴は自分のクラスに戻り、他の女子も席に戻った

気になったが、なんだか聞ける雰囲気ではなかったので十代達も自分の席に座ることにした

（十代と交際……ねえ、フフフできるものならやってみるといいよ。できるものならね）

（ユベル……何言っているんだ？）

一方、この状況を好ましく思っていない人物が一人いる。篠ノ之箒だ

彼女は、自分が優勝したら一夏と付き合うと言ったつもりだった。
しかし何故か優勝した人が一夏か十代と付き合えるというものになっている

（あの時大きな声で言ったことで誰かに聞かれたかもしれない……
だが、なぜ遊城も入って……そうか、あの時部屋にいたからか）

とにかく彼女にとっては困った状況になっている

（優勝すればいいんだ。そうすれば一夏と……大丈夫だ……昔みたいに強さを見誤らず戦えればいいが……）

過去にやってしまった失敗を思い出す。剣道の全国大会で相手を叩きのめすために戦ってしまった。それだけはやるまいと心に誓っていた

昼休み、一夏は一人でトイレに行ったその帰り、ある光景を目撃した

「こんな場所で教師をやっているのは何故ですか！？」

ラウラが千冬に向かって叫んでいる。普段の彼女のからすると考えられないことだ

「私には私の役目がある。それだけだ」

「このような極東の地で何の役目があるというのですか？　お願いです、教官。わがドイツで再びご指導を。ここではあなたの能力は半分も生かされません」

千冬は黙って聞いている

「大体、この学園の生徒は教官が教えるにたる人間ではありません。意識も低いうえ、ＩＳをファッションか何かと勘違いしている。その程度の者たちに教官が時間を割かれるなどと……」

「そこまでにしておけよ、小娘……ずいぶん偉くなったものだな。

もう選ばれた人間気取りとは恐れ入る」

千冬の言葉にラウラは黙ってしまう

「織斑先生にラウラか、珍しい組み合わせですね」

「よ、ラウラ。織斑先生、こんにちは」

その張りつめた空気に遊星と十代はやってきた。その瞬間、ラウラは去って行った。彼らに一睨みを加えて

「何だよ、あいつ……挨拶もなしかよ」

「そう言うな。大体お前たち、私たちが何を話していたか聞いていたのだろう？　そこにいる盗み聞きしていた男子も」

千冬は何でもお見通しなのかと思ってしまう。十代は少し気になっていたことを聞いてみた

「なぜラウラはあそこまで、織斑先生に？　昔指導を受けていたという理由だけでは……それと一夏に対する憎しみが分からないんですけど……」

「つまらん話だ。調べるのは自由だが、私から話す気はない。さっさと戻って授業の準備をしておけ」

千冬は去ってしまった。聞かれたくないことなのかと少し気になった十代

すると一夏から話してくれた。ＩＳの第二回世界大会で、自分が誘

拐されたこと。そのせいで、千冬は優勝を逃したこと。自分を発見してくれたドイツにお礼という形で軍の指導をしていたことを

そこまで聞いて遊星と十代は納得した

「俺が誘拐されてなければ……もっと強ければ……」

「そういうの考えてもしょうがないだろ？　大体一夏のせいじゃないって」

「後悔しても前には進めない。今一夏の感じているその想いが自分を強くする」

十代と遊星に励まされ、一夏の気分も少しは良くなった。そのまま授業に向かった

放課後、一夏とシャルルは訓練のため、第三アリーナに向かった。
一方十代と遊星は整備室に向かっている

遊星のＩＳがだいぶ修理できてきたため一気に直そうということだ
整備室に入ってみると先客がすでにいた。簪だ

「よ、今日も頑張ってるな」

「……ん、十代達も……頑張ってる」

「早く遊星と簪のＩＳ見たいしな。張り切るのも当然だろ？」

簪は首を傾げ、そのまま作業に戻った。よくわからなかったようだ
作業に戻ったのを見たら十代も遊星の手伝いを始めた。いつものように自分のＩＳを起動させてデータを遊星に見せたり遊星を作業する場所に届く位置に運んだりだ

少し外が騒がしかったが、三人は作業に集中している為、興味がなかった

何故か整備室に三人しかいない。だからすごく静かである。響くのは作業の音だけ

すると遊星が作業を中断した

「十代さん、少しテストがしたいので付き合ってもらえませんか？」

「ああ、もちろん！　簪も来ないか？　いい意見もらえる気がするし」

十代は簪を誘った。なんとなくこの部屋に一人にするのは良くないと思ったのか、それともただ単純にそう思ったのか

恐らく後者だろう

「……遠慮しておく。調整したいから」

「わかった。何かあったら力になる」

「それは大丈夫……それより、調整頑張って」

簪はいつも手伝いを断るが、十代達を気にしている。一人で頑張りたいと言っていたので、二人はそれを尊重しているから特に気にせず、整備室を出て行った

「空いているのは……第三くらいか……でもな、あんまり人に見せたくないからな」

十代は使えるアリーナを見てみて少し困っていた

「そうですね……整備室にいる人たちにもあまり見せてないですからね……少し教員に聞いてみますか？」

近くにいた教員に聞いてみると、ちょうど空いているアリーナがあるということなので案内してくれた

アリーナに到着すると教員は戻って行った

「来い、絆星！」

遊星のＩＳが出てくる。夜空のような薄い黒の機体が遊星の体に装着された

「じゃあ、俺も……決闘英雄（バトル・ヒーロー）」

十代も自身のＩＳを展開する

とりあえず、飛行テストや稼働テストを行う。遊星の思ったような動きができているか、何か不具合がないかなどを見ている

遊星のＩＳにはまだ装備はないが十代と同じ様にカードで戦うことになるだろうと思い、つけていない

「……やっぱり実際に使ってみるといろいろ違いますね……」

「だろ？　俺も最初は戸惑っていたからな。少し休憩しようぜ」

数十分動かしてみたところで、いったん解除しようとした

しかしその時

ダーン！

何者かの砲撃により、遊星のＩＳはダメージを負ってしまった。さらに急スピードで何かが近づいていることがお互いのセンサーでわかった

十代は装着しているＩＳで相手の剣による攻撃を受け止めた。仮面をつけた人物が訓練機に乗って遊星に切りかかってきた

「遊星！　逃げろ！」

遊星は頷きすぐに引こうとする。本当は彼にとって仲間を置いて逃げるということはしたくはない。だが、遊星は今戦うことはできず、回避することすら怪しい

そんな状況で残っても足手まとい以外の何物でもない

しかしＩＳのない状態で逃げようとしたのがまずかった。攻撃を仕掛けてきた人物は遊星を狙って再び切りかかる

すぐに十代はかばう。今持っているカードの中に防御用のカードが来ていない

「随分卑怯な手を使うんだな……戦えない人間を狙うなんて」

「……お前たちを始末する」

「させるかよ」

手札にあったワイルドマンを使い、大きな剣を出して対抗する

だが、彼女はすぐに切り払い、遊星を狙う。そのたびに十代が受けとめる。剣で受け止めることもあれば、直接右腕の装甲で受けることもあった

（俺が戦えれば、十代さんにかばってもらわなくても……かばってもらう？　まずい、そういうことか！）

「十代さん、奴の狙いは十代さんのシールド・エネルギーを削ることです！」

「ああ、ちょっとまずいことになってきたな……」

十代のＩＳの残量が四分の一を切ってしまった。先ほどの練習の後、すぐに襲撃されたため減っている状態で戦うことになる。その上、カードを召喚、維持するためにエネルギーは減るうえ、遊星を守るため直接受けることも多い。必然的に減ってしまっていた

「そろそろ終わりだ」

そういうと彼女は左手にライフルを構え、十代に乱射した後、右手に新しくもったグレネードを打ち込んだ

最初のライフルの乱射に右腕の装甲が耐えられず、破壊されてしまう。生身の右腕に命中した

「がぁぁぁぁ」

何とか直撃は避けだが、爆発による右腕のダメージはかなり大きい

「十代さん！！」

（十代、一気に決めろ！　このまま長引いては絶対に負ける）

ユベルの言葉に頷き、十代はすぐに召喚した

「融合発動！　スパークマンとエッジマンを融合！　プラズマヴァイスマンを召喚」

十代の両腕に電気を纏った巨大な金の装甲が付く

すぐに右腕で相手体を掴み放電させ、左腕で殴りつけた

二発ほど殴った所で、相手は気絶し、ＩＳが解除された。絶対防御が発動したのだろう

十代は自身のＩＳを解除し、相手の仮面を取る。その人物は先ほど、空いているアリーナを紹介してくれた人だった

「おい、お前たち何があった？」

「織斑先生……どうして……？」

駆け付けた千冬の登場に驚いた十代と遊星。正直なところ彼女で助かったという部分もある

「先ほど、別のアリーナで騒ぎがあったんだ。少し見回りをしていたんだ。それはそうと……その女は何だ？」

二人は何があったのかを説明した

「なるほど……だがこいつはここの教員ではない。一体どうやって……」

千冬は気絶している女性を担いだ

「ともかくこいつのことは私に任せろ。不動のＩＳはもう一度調整しておけ。今回の奇襲で不具合が出ている。遊城は保健室によっておけ。どうやら右腕の状態はあまりよくないだろうからな。両名とも、今月末の学年別トーナメントは欠席した方がいい。完全な状態になるには時間がギリギリだ」

そのまま千冬は去って行った

「……行きましょうか、十代さん」

「ああ、しかしトーナメントは残念だな……まあ、確かにこの怪我だと厳しいな。治るのに時間かかりそうな気がするし」

そのまま二人は保健室に向かって行った

第17話　襲撃者再び（後書き）

時間的に十代達がアリーナに到着した時に、一夏はラウラが戦っている所に乱入
襲撃者が出てきたときに千冬が乱入
といった感じです

感想・指摘等あればよろしくお願いします

第18話　トーナメントに向けて……

十代と遊星は保健室に着くとそこには先客がいた。一夏とシャルル、それにベッドの上にはセシリアと鈴がいた

ベッドの上の二人の体に包帯を巻いているのに気付いた

「どうしたんだ？　怪我したのか？」

「ええ、先ほどラウラと戦っていて……」

その時、十代達は先ほど千冬が言っていた騒ぎについて察した

「それより十代さんたちはどうしたんですか？」

「ああ、俺達は……」

言おうとした時、ものすごい地鳴りが聞こえてきた。何だと思ったその瞬間、ドアが開いた

「織斑君！」

「デュノア君！」

「あ、ちょうどいいや。遊城君と不動君！」

いきなり雪崩れ込んできた女子たちに驚きを隠せない四人

「な、何だ？」

一夏が聞こうとすると一人の女の子が一枚の紙を見せてくれた。どうやら緊急でのお知らせのようだ

内容はこうだ

学年別トーナメントは二人組で行う。締め切りまでに二人組が決まらなかった場合、決まっていない人同士で組むことになる

つまりここにいる女子たちは自分たちと組んでほしいということらしい

しかし

「ごめん、俺はシャルルと組むから諦めてくれ！」

「悪い。さっきちょっと怪我したから織斑先生にトーナメントに出るなって言われて……まあ、大した怪我じゃないから心配しなくても大丈夫」

「すまない、俺のＩＳも調整が間に合いそうにない」

それぞれの事情を聴いて沈黙……そしてしょうがない、男同士もいい等、色々言って去って行った。入れ代わりのように山田先生が入ってきた

そのまま十代は保健室の教員に自分の体を見てもらうことにした

千冬の考えていた通り、参加を見送った方がいいと言われた。一夏

とシャルルは怪我について心配したが、たいしたことないと言ってごまかしていた

セシリアたちもＩＳのダメージが大きすぎるため参加できないことを山田先生に言われた

「それにしても何があったんだ？」

「ラウラと戦ったんです……最初にセシリアと鈴が戦って、その後俺たちが乱入したという感じです」

そっか、と十代と遊星が納得した。二人はセシリアと鈴が戦っていた理由を聞こうと思ったが、なんだか聞ける雰囲気ではなかった

トーナメントの参加を禁止されて不機嫌になっているからだ

「と・に・か・く、絶対優勝しなさいよ！」

優勝者は一夏と付き合う。それを防ぐには本人たちが優勝するしかない。そのためにその言葉にはすごく迫力があった

「じゃあ俺たち織斑先生に呼ばれてるから後で飯の時間に会おうぜ」

寮に戻る途中、十代と遊星は一夏とシャルルと別れた。先ほどの襲撃者のことで話があるのだろう

事情を知らない一夏とシャルルはよくわからないという感じだが、あんまり聞かれたくないのかと察していた

「じゃあ、部屋に戻ろうぜ」

「うん、あ、さっきはありがとうね。保健室では助けてくれて」

「まあシャルルのこと知ってるのは俺達しかいないからサポートするのは当然だろ？　それよりもアリーナでは助かったよ」

「いいよ。僕も一夏を助けることができてとっても嬉しかったよ」

そんなシャルルの笑顔に照れて少し顔を背けた一夏。何とか話を切り替えようとする

「ところでさ……事情を知っている人がいる時は、無理して男口調じゃなくてもいいんじゃないか？」

「僕……私もそう思うけど正体がばれないようにって徹底的に覚えさせられたから……一夏が気になるなら直すようにするけど……」

「いや、無理しなくていいぞ。シャルルは可愛いんだから」

そう言った瞬間、今度はシャルルの顔が赤くなって顔を背けた

「あ、ありがとう……速く部屋に行こうか……」

（まったく……一夏は時々すごいこと言うよね……可愛いとか）

（でも……あの時の一夏は……）

俺はシャルルの決めたことに従う。その時のことがシャルルの頭を離れなかった

彼女にとって自分を信じてくれる人を見つけたのはすごく久しぶりな気がした。母親が死んでしまってからは生きている感じがしなかった。しかしあの時の彼の表情

（ふふふ僕も頑張りたいな。一夏が好きなあの子たちみたいに）

そんな自分を一夏は救ってくれた。そう彼女は思った。自然に心からの笑顔が出ている

そんな彼女の笑顔に一夏がドキッとしたのはまた別の話

「……残念だが、あいつの正体はわからなかった。ただ雇われただけの奴だった」

空き教室で千冬が十代と遊星に報告していた

「一体どうやってこの学園に？」

「それについては全く分からない。というよりも本人が覚えていなかった。少し話を聞けるようにしたのだがな……ほとんど効果がなかった」

その言葉に少し恐ろしさを感じた二人

「気を付けた方がいいだろう。今回の学年別トーナメントでも何か起こる気がする」

「わかりました。その日までに怪我を直しておきますね」

「頼んだ。不動は遊城ＩＳの整備を頼む。自分のを行ってもいいが、優先すべきは遊城のだ。いいな？」

「わかりました」

そこで解散となった。二人もトーナメントには参加できないが、戦う準備だけはしておこうと決意を新たにした。十代と遊星は整備室で、一夏とシャルルはアリーナで特訓とやるべきことをやることにした

そして、瞬く間に六月の週末……学年別トーナメントの日になった

アリーナの更衣室には二人の人しかいない。一夏とシャルルだ
そこに十代と遊星が入ってきた。二人の様子を見に来たのだろう

「お、準備完了みたいだな」

「今回のイベントでは、多くの人が来るんだな」

「そうですね……研究者とか企業の人とかいるんだな」

「三年生はスカウト、二年生は一年の成果の確認のためにね。一年生はあんまり関係ないけど、ここで活躍すればいい評価をもらえるからね」

客席を映し出しているモニターの人物についてシャルルが詳しく教えてくれた。しかし男三人は評価とかは興味がなさそうだった

「一夏はボーデヴィッヒさんのことだけが気になるんだよね。でも感情的にならないでね」

「ああ、気をつけろ。彼女は一年の中でも最強と言われているからな」

遊星とシャルルは冷静に相手を分析する

「でも……大丈夫なんだろ？　一夏とシャルルは十分に準備をしてきた。それは俺達もしっかり見てる」

「特訓を手伝ってくれてありがとうございます」

十代と遊星は直接戦闘を行った訳ではないが一夏とシャルルの特訓に付き合っていた

主に対抗策などを一緒に考えていた

「まあ、そんなに力入れないで、楽しくやれよ」

（クリ～）

十代とハネクリボーは笑顔で戦いに出る二人を励ます。つられて二人も笑顔になった

「十代は本当に面白いね……でも、そうだね。その方が自分の力を出せるからね」

すると、モニターの画面が客席からトーナメント表に変わった

それを見て四人は驚いた

「じゃあ、俺達は客席に戻ってる。気をつけろよ、一夏、シャルル」

「いきなり面白い展開になってきたな。頑張れよ」

二人は更衣室を後にした。一夏とシャルルは気合を入れなおした

何せ一回戦の試合は

一夏・シャルルＶＳラウラ・箒だったから

第１８話　トーナメントに向けて……（後書き）

次回は試合です。
それにしても一夏とシャルをもっと書きたい……
頑張ります

感想・指摘等あればよろしくお願いします

第１９話　完全なる理想郷（パーフェクト・ユートピア）（前書き）

久しぶりに投稿します。
忙しくて投稿できませんでした……すみません

第１９話　完全なる理想郷（パーフェクト・ユートピア）

試合が開始する前に十代と遊星は客席に戻ることができた。近くにはセシリアと鈴がいる

「どうでしたの？　二人の様子は？」

「いきなりラウラと当たるんだから結構緊張してるんじゃないの？」

その言葉に十代達は首を振った

「いや、そんなことないぜ。大体一夏は燃えてきてる感じだからな」

「その分シャルルが冷静になっているからいい感じだ」

直接見てきた二人の言葉をとりあえずは信じる二人

そのまま、アリーナの様子を見る

セシリアと鈴は少し不安そうにしているが、十代と遊星は逆に楽しそうに見ている

それもそのはず、遊星と十代は彼らの特訓に付き合っていたから彼らの実力は大体把握している

彼らのチームワークは抜群であると確信している。いくら学年最強と言われる相手でもこの戦いの勝敗は分からないと思っていた

しかし、戦いの最中にラウラが箒を投げ飛ばした瞬間、十代と遊星は確信した

この勝負、一夏とシャルルが勝つと

予想通り、シャルルの攻撃がラウラのお腹にヒットした。すでに彼女の負けは見えた

その時、何か嫌な空気を十代と遊星は感じた。

敗北しそうになったラウラは願った

（この状況を覆す力がほしい……自分の恩師である教官の顔に泥を塗った織斑一夏を倒す力がほしい）

その瞬間、ラウラのＩＳが変形……いや、溶けだし彼女を包み込んだ

それを見て急いで十代は試合を行っているアリーナに降りてきた。着地と同時に危険を察知したのか避難勧告が出され、防壁が出てきた。もう少し遅ければ、十代はここにいなかっただろう

そして彼女は剣を持った人の姿だが別の何かになっていた

「何だ!?　あれは!?」

「！　あの姿は……許せない！」

突然、一夏は切りかかる。しかし先ほどの戦いで消耗していたため、すぐに吹っ飛ばされた

「あの野郎……ふざけやがって！！」

すでにＩＳは解除され、生身のまま一夏は行こうとしたが、箒に止められた

「馬鹿者！！　死ぬ気か！？」

「離せ！　あいつはぶっとばしてやる」

「落ち着いて、一夏。一体何なの？」

シャルルはあまり刺激しないように質問した

「あれは、千冬姉のデータだ。千冬姉だけのものなんだ！　それをあんなふうに使いやがって……ラウラも気に食わないし、あのＩＳも気に食わない！」

「今のラウラは先生の姿をコピーして戦っているっていうわけか」

十代の言葉に頷く一夏

同時に教師陣がやってきてこの場を鎮圧しようとしていた

「今のお前に何ができる？　エネルギーがない状態で戦えないだろう？　それにお前がやらなくても先生たちがやってくれる。だから……」

「それは聞けない。俺はやりたいからやるんだ」

その言葉に箒はイラつく。だが、十代は笑った。その態度でますま

す彼女はイラついた

「一夏！　その覚悟、最高だな」

「エネルギーはどのみち……」

「ないなら他から持ってくればいい。僕のリヴァイヴならできる」

「頼む！　早速やってくれ！」

シャルルはすぐにエネルギーを移す準備をし始めた

「でも、約束して！　絶対負けないって」

「もちろん！　ここで負けたら男じゃないからな」

「じゃあもし負けたら明日から女子の制服で学校通ってね」

「じゃあ、俺は一週間昼飯おごってくれよな」

十代とシャルルの言葉に少しひるむが、落ち着くことができた

すぐにエネルギーを移す。移し終わったと同時にシャルルのＩＳが消え、代わりに一夏のＩＳの武器と右腕が復活した

「行ってくる」

「一夏……死ぬな！」

箒が叫ぶ。一夏は笑顔で大丈夫と返した

しかし彼の本心は違った

（千冬姉と戦うというのと同じことだよな……今のこの状況。強がったけど……）

データとはいえ実の姉と戦う、そんなプレッシャーに彼は襲われていた

「一夏！！」

十代は叫んだ

「今、お前の目の前にいる奴は誰だ？　千冬さんか！？　よく見てみろ！」

その言葉で理解した

（そうだよな……俺の目の前にいるのは千冬姉じゃない……ラウラだ！！）

そのまま一夏は切りかかった。すでに恐怖はなかった

理由はない。だが、なぜか……勝てる。そう確信していた

勝負は一瞬で決まった……黒い塊を一夏は切り裂いた。そこから出てきたラウラを彼は受け止めた

「まあ、ぶっ飛ばすのは勘弁してやる」

そう呟いた時

「一夏！　逃げろ！」

いきなり教師の一人が一夏を狙撃した。十代の声にすぐ反応できたのですぐにかわすことができた

狙撃した教師は一夏の前に降りてきた。同時に他にいた教師が急に倒れた

「い、一体何が……」

「一夏、聞け！」

何が起こっているかわからない状態で、いきなり千冬の声が聞こえた

「そいつはこの学園の教師ではない！　とにかく逃げろ！　デュノアと篠ノ之もだ！　急げ！！」

連絡が終わると同時に白式のエネルギーが切れてしまった。つまり生身で逃げなければならない

シャルルと箒はすぐに逃げることができる位置にいたため安心した。
しかし一夏は違う
ラウラを抱えながら……いや、一人で逃げるのも無理だと思った。
だが、せめて抱えているラウラだけでもそう思って走り出した
（守ってみせる……ラウラを）
そう思い、必死に走って逃げる
（なぜ私を救うのだ？）
（……何だ、この気持ち）
ラウラの心の中が何か温かくなった。そんな感じがしていた
「……あなたを傷つけるつもりはないのですが……しょうがないですね」
ライフルを再び構え、一夏の足を狙撃した。だが、彼に攻撃が当たることはなかった。十代がＩＳを起動させ、すぐに電撃で攻撃を受け流した
「てめえ……俺の友達に……」
「遊城十代……邪魔をしないでください。私はあの二人に用事があるのです」
「織斑一夏は、わが組織に……ラウラ・ボーデヴィッヒは違法なことをしたため……処刑します」

彼女の言葉に十代は怒りを爆発させる

「ふざけるな！　一夏が決死の覚悟で救ったラウラを殺させるかよ！　あいつには、一夏の可能性を見せてやるんだ！　絶対あきらめない強さを」

（あきらめない……強さ……？）

十代は構えなおす。今戦えるのは自分一人しかいない。だが、けがはまだ完治していない。その状態で戦うのは圧倒的に不利だ。だが、やるしかないと思った

「十代さん、俺も行きます」

遊星がアリーナに降りてきていた。防壁を解除してこの場所に来ていた

「！　だけど、遊星のＩＳは……」

「いいんです。誰かを救うために俺は戦う。一夏の頑張りを無駄にしないため……ラウラという仲間を守るために」

（仲間……）

遊星がＩＳを起動させようとしたが、相手は何か連絡を取っていた。それが終わると、ライフルをしまった

「……遊城十代、不動遊星、事情が変わったので今回は退きます……ですが覚えておいてください」

「われら、完全なる理想郷（パーフェクト・ユートピア）は織斑一夏を組織の一員にし、この世界のゆがみを直します」

そのまま去って行った

「完全（パーフェクト）なる理想郷（・ユートピア）……」

十代はＩＳを解除し、立ち尽くしていた

ラウラ　ｓｉｄｅ

目が覚めた。ずいぶん長いこと倒れていた気がした

「気が付いたか」

教官が付いていてくれたのか……

「私は……一体……」

「筋肉疲労と打撲だ。しばらく休んでいるといい」

違う、そんなことを聞きたいのではない。無理して起き上がることにした

教官が話してくれた

「ＶＴシステムがお前のＩＳにこっそりと仕組まれていた。どういう意味か分かるな？」

ＶＴシステム、過去の世界大会の優勝者……つまり教官の動きを真似するものだ

だがあれは違法なもので……

「機体のダメージ、操縦者の精神ダメージと願望。これらがそろった時に発動するようになっていたらしい、近いうちにドイツ軍に強制捜査が入る」

私が弱かったから誘惑に負けた。あの時、力を望んだ。得てはいけない力を……教官になる力を……

途端に自分に自信がなくなってきた。

「自分について悩んでいるのか。これからゆっくり考えるといい。三年もある。ちょうどいい仲間たちもいるからそいつらとも相談してみろ……それと私にはなれないぞ、あいつの姉は大変だからな」

そう言って出て行った……見透かされている気がした。あの姉弟にそう思うと、うれしかった。負けたのに……そんな気持ちは初めてだった

（仲間……か）

心地よい気持ちになった

ラウラ　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

あの後、トーナメント自体が中止になった。しかしデータを取るため模擬戦は行うらしい

そのため、多くの女子たちは交際のチャンスが消えてしまったことにショックを受けていた

勿論事情を知らない四人には何の事だか分らなかった

第１９話　完全なる理想郷（パーフェクト・ユートピア）（後書き）

何だか微妙ですね……もっと頑張って書いていこうと思います。

感想・指摘等あればよろしくお願いします。

第２０話　シャルルの決意　動き出す人たち（前書き）

書かせていただきます
少し詰め込んだ気がします……

第２０話　シャルルの決意　動き出す人たち

一夏とシャルルは食堂で夕食を取っていた。十代と遊星は千冬に呼ばれていない

「そういえば、あいつ何だったんだろうな？　教師に混ざって攻めてきた奴」

一夏達は十代が守ってくれた隙に急いで、アリーナから出たため話を聞いていない

「うん……でもすごいよね。一人で教師陣を倒すんだから」

話していたが、結局わからないということで決着をつけた

食べ終わり、部屋に帰ろうとしたときに箒を見つけた。彼女もまた、大会中止でショックを受けていた

一夏はそういえばと思い彼女に話しかけた

「なあ、箒。先月の約束だけど……いいぞ。付き合うってやつ」

「ほ、本当か！？」

一夏に近づいて締め上げた

「ちょ、やめてくれ……本当だから……」

手を放し、一夏を床に降ろす。少し落ち着いて一夏は続きを言った

「買い物だろ？　いや、十代さんも誘うとは思ってなかったからあの時は驚いたよ」

「……」

箒は黙る。シャルルはこれから何が起こるのかなんとなく察したのか少し離れた

「そんなことだろうと……思ったわ！」

一夏の腹に正拳付き。もちろん一夏は崩れ落ちた。そのまま彼女は不機嫌になって去って行った

そんな崩れた一夏にシャルルはしゃがんで話しかける

「一夏ってわざとやっているんじゃないかなってときどき思うよ」

一夏にはどういう意味か分からなかったがいつまでも崩れているわけにはいかないと思い、立ち上がることにした

何とか動けるようになったと同時に食堂に十代と遊星が入ってきて、一夏達の所に向かってきた

「ここにいたのか、ちょうどいい。山田先生からの伝言だ」

遊星が話し始めた

どうやら今日は男子が大浴場を使うことができる日のようだ。鍵を

持って待っているので、来てほしいということらしい

遊星と十代は先に食事を済ませてから入るつもりなので、一夏とシャルルが先に入ることになる

だが、ここで問題がある

「……やっぱり、一緒に入らないとまずいよな……」

十代の言葉に二人は少し気落ちする。そう、シャルルは本当は女だ。しかしそれを知っているのはここにいる三人だけ

「う～ん、どうしよう……」

考えてもいい答えが出ない。山田先生も待っているからとにかく行ってから考えた方がいいと遊星は言う

その意見に二人は賛成して、大浴場に向かった

「それではゆっくりしていってくださいね。鍵は不動君に渡しておいてください」

山田先生は鍵を一夏に渡して去っていった

脱衣場でシャルルと一夏はどうしようかまだ迷っていた

「……やっぱりシャルルが入った方がいいんじゃないか？　ほら、やっぱり疲れてるだろう？　俺は適当に時間つぶしてから部屋に戻るから」

「いいよ、僕そんなにお風呂好きじゃないから……一夏は確か好きだったでしょ？　僕はそこまで好きじゃないからさ」

このままだとどちらも入れないと思い、シャルルは少し強引に一夏に勧めた

それに負け、一夏は入ることにした

彼はすぐに体を洗い、湯船につかった

「生き返る～」

ものすごく気持ちよくなっている。少しボーとしていたため、彼の耳にドアが開いた音が聞こえなかった

「お、お邪魔します……」

一夏はその声に驚いた。そこにいたのはスポーツタオルで前を隠していたシャルルだ

もちろん、風呂なので一糸まとわぬ姿だ

「え？　え？　どうして？」

一夏は慌ててしまう

「僕が一緒だとイヤ？　あ、あとあんまりじろじろ見ないで。一夏のエッチ……」

シャルルも少し困ってしまう

「そんなことない。悪い！　俺出るから」

「ちょっと待って。大事な話があるから」

慌てて出ようとする一夏を止める。とりあえず、お互いに湯船に入る。もちろん背中合わせだ

「あのね……僕この学園に残ることにするよ。まだ居場所を見つけられていないから……」

シャルルは一夏の背中抱きしめた

「一夏は僕に道を見つけてくれる……そんな気がするから、僕は一夏のそばにいたいんだ」

「……そっか、分かった。協力するって約束したもんな」

平気そうに言っているが彼の心臓はバクバクしている

「それとね。僕のことはシャルロットって呼んでほしいな。二人きりの時だけでいいから」

「それが本当の……？」

「うん、お母さんがくれた本当の名前。あ、十代と遊星にはまだ秘密にしておいて」

一夏にはその意味が分からなかった。シャルロットはにっこりとしていた。

「わかった、シャルロット……ところで、そろそろまずい事態が起こりそうなんだけど……」

シャルロットも気づいたのか慌てて離れた。そのまま慌ただしく、お互いに風呂を出た

一夏は先にシャルロットを部屋に戻して、十代達に鍵を渡しに行くことにした

食堂に入ろうとしようとしたらちょうど会うことができた。そこでシャルロットがこの学園に残ることを伝えた

「一夏……俺がやろうとしていることは正直犯罪スレスレだ。それでもやるか？」

「……やらせてください、あいつを助けたいです」

遊星に言われたことに少し迷ったが、先ほどのシャルロットの言葉を思い出して決意した

一夏の顔を見て十代と遊星は安心した

「この紙にやってほしいことが書いてある。安心しろ、一夏ならできる」

遊星は封筒を一夏に渡して二人は浴場に行った。中をこっそり見るとディスクと神が入っておりこう書いてあった

今日の２３時にディスクを入れ、デュノア社のホームページにアクセスして放置しておいてほしい。後は俺がやる。くれぐれもシャルルにばれないように

一体何をするのかわからなかったがとにかく実行した

一夏はそのまま寝てしまった

翌日、色々なことが起こった

まず、シャルロットが女の子として改めて転校してきたということになった

そのため、女子から風呂にいっしょに入ったことがばれてしまった。

ちなみに遊星と十代には目撃者がいたため被害が出なかった

次に一夏はラウラにキスをされて、嫁と呼ばれることになった
遊星と十代は仲間らしい……一夏は羨ましがっていた
そんな感じで、朝はとんでもなく騒がしくなった
そんなホームルームの後、遊星はシャルロットにディスクと一枚の用紙を渡した
「これは？」
「シャルロットが命令された時の音声と映像のデータ。こっちの紙にはデュノア社の表沙汰にできないことがある」
そのようなものをどうやって……シャルロットは驚くしかなかった。内容を見てみると確かにデュノア社でやっていたことだとシャルロットは理解する
「ハッキング自体は俺がやったが、一夏も手伝ってくれた。あの程度なら朝飯前だ」
「シャルロット……これでお前は自由だ。これからは自分のために生きるんだ」
「俺達がいつでも手伝うから」
一夏に言われシャルロットは嬉しくなり少し涙を流した。そのことがきっかけで、また一悶着あったのはまた別の話

千冬　ｓｉｄｅ

「もすもす、終日？」

電話を切ってやった。もう一度かけてやる

「は～い、みんなのアイドル束さんだよ。って切らないでよ、ちーちゃん」

鬱陶しい……だが、こいつには聞きたいことがある

「今回、お前は何かしたのか？　ＶＴシステムについてだ」

「……ああ、あの不細工なシロモノね、束さんが作るわけないじゃん。私が作るものは全てにおいて完璧なんだから」

「でね、そこの研究所をつぶそうと思ったんだけど……ちょっとおかしいことがあってね」

何だ？　いつものこいつならすでに地図上から消すくらいのことをやってそうだが

「もう先に誰かがやってたみたい。死者はいなかったみたいだよ。束さん的には無駄な力を使わなくて済んだからいいんだけどね、破壊した奴らの画像データが見つかったから見てみたんだけど……よくわからないんだ。ちーちゃんのパソコンにデータを送るから」

「そうか……邪魔したな」

何か言っていたがそのままぶちきってやった

さて、あいつのことだからすぐにデータが……届いていた

「何だ？　この怪物達は……？　どこかで見たことがあるような……」

映っていたデータには、全身が黒く部分が共通していて、青い線の入っている人のような怪物と赤い線の入っている蜘蛛みたいな怪物だった

一体こいつは……ん？　続きがある

見てみると束が書いた文があった……なるほど

「こいつらってさ、ナスカの地上絵に描かれたのに似てるよね？」

千冬　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

？？？　ｓｉｄｅ

「うん、ありがとうね。さすが新聞部部長ね」

「いや、大変だったよ。たっちゃん」

私は彼女こと黛薫子ちゃんからある写真をもらった

遊城十代のＩＳについてだ。以前四月にみた時に不思議に思いこうやって調査している

織斑一夏だけでも大変なのに……これは計画を少し早めた方がいいかもね

？？？　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

次元の精霊　ｓｉｄｅ

やっと……見つかった

正直、十代と遊星が戦うべき相手をその世界から出さないようにするのに精一杯で別の次元に行くのは時間がかかった

そして彼を呼んだ

「ここは一体……」

「突然、呼んで申し訳ありません。私は次元の精霊。次元の行き来を制御しています」

「どういった理由で僕を……」

「あなたの力を貸してほしいのです。ある世界に精霊の力を悪用して自分の望むように世界を作り変えようとしてる人たちがいるのです。すでに現地にいる方もいらっしゃるのです。しかし相手の力は未知数」

「……分かりました。僕にできることがあれば協力します。精霊の力で世界を作りかえるなんて許されることじゃない」

良かった……この方に任せてみて……

「ありがとうございます。早速その世界に送りたいと言いたいのですが、今私は力が完全に回復していないので送れません。また近いうちに会いに行きます」

「その時に……ですね。大丈夫です。では、また」

そういって彼を元の世界に戻した。彼は信頼できる

私が送った遊城十代と不動遊星の先輩であり、名もなきファラオ…

…アテムを心に宿していた者

武藤遊戯

次元の精霊　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

第２０話　シャルルの決意　動き出す人たち（後書き）

ついに遊戯登場です。本編に絡むのはもう少し後ですが……
次回は番外編を少し
三作品のうち誰かのデッキに似た人とデュエルをします

感想・指摘等あればよろしくお願いします

対戦相手のヒント
普段は自重しないが、自重しすぎる時のある人のデッキ

番外編　その1　対決！　アイドルデュエリスト（前書き）

書かせていただきます
番外編はほとんどデュエルです
なので興味がない方はスルーしてくださっても結構です

番外編　その1　対決！　アイドルデュエリスト

シャルロットとして学園に転校してから少し経ったある日のこと
十代と遊星の周りに数人の女の子がやってきた

「ねえねえ、遊城君、不動君。確かデュエルモンスターズのカードゲームやってたよね？　教えてくれる？」

「私は弟からカードをうば……じゃなくて借りてきたから。対戦しようよ」

このような理由である。最近何故か流行りだしたようだ
理由を聞いてみると、ある有名なアイドルが、デュエルモンスターズをしているからだとか

十代は気になってそのアイドルがどんな人か聞いてみた。一人の女の子が雑誌を持ってきて表紙を見せてくれた
しかしその人を見た時、十代は驚いた。それもそのはず、表紙には

「何で……吹雪さんが？」

元の世界にいる自分の先輩に、ものすごく似ていたからだ

「……どうやら、同一人物というわけではなさそうだな。しかし驚いたぜ。こんなにも似ているなんて……」

その日の夜、十代はパソコンを使って今日見た男について調べていた。遊星は一夏の部屋にいる

名前は天海　吹雪　（てんかい　ふぶき）　芸名らしい　年齢は２２歳

トップアイドルで様々なドラマや映画に出演しているそうだ

最近デュエルモンスターズが好きだということが発覚したらしい

「フム……魂が天上院君に似ているとかそういうことだと思うにゃ」

パソコンを横から見ていた大徳寺が呟いた

「どういう意味だ？」

「つまり自分の知っている似た人がどこの世界・次元にもいるということなんだニャ。ただ、その人の性格とかは全く違うかもしれないんだけどニャ」

そんなことがあるのかと思っていると、部屋に誰か来たようだ。ノックをしたから遊星でないことはすぐに分かった

「私だ、遊城」

千冬の声がしたのですぐにドアを開けた

「どうしたんですか？」

「不動はいないのか？　まあいい、これをお前たちに渡しておこうと思ってな」

二つの封筒を手渡された。結構厚みがある

「今まで、お前たちの研究や先日の襲撃の阻止とかの謝礼金だ。不動にも渡しておけ。言っておくが返されても迷惑だからな」

そういって彼女は去って行った。どうしようと考え、とりあえず遊星が帰ってくるまで、待つことにした

（はあ、今日はつまらないデュエル大会になりそうだ……）

次の日の昼ごろ、とある場所で一人の男がため息をついていた。天海吹雪だ

今日彼はある町でデュエルイベントの特別ゲストとして参加する
彼はデュエリストとして結構な実力を持っている。しかし、彼はアイドル、負けることはテレビ的に面白くないということで、裏で工作されている

この事実に気が付いた彼はとたんにデュエルがつまらなく感じた。
どこかに正々堂々と戦えるデュエリストがいないのかと思っていた

「吹雪さん、そろそろスタンバイお願いします」

「わかりました」

彼は立ち上がり、マネージャーについて行った

「すまないな、一夏。買い物に付き合わせて」

「いいですよ。俺もちょうど用事がありましたし」

一夏と遊星と十代は買い物に来ていた。昨日もらったお金を使って生活用品を買い揃えようということになったのだが、場所が分から

ない。そこで一夏に頼んだという感じだ

「ん？　なんか騒がしいな？」

十代が広場の方に目を向けると大勢の人が集まっていた。若干、女子の方が多いようだ

近くにあった看板を見てみるとそこには「デュエルモンスターズの大会　特別ゲスト　天海吹雪」とあった

三人は興味がわいて少し見てみることにした。試合はどうやら決勝戦でもうすぐ終わるという感じだ

ステージの上にはデュエルをするための台があり、そこから映像でカードが出現している。簡単に言うとデュエルディスクの大型という感じか

一般の男とアイドルの吹雪が立っている。男の場には1枚セットカードがあるだけでライフは５００しかない

一方吹雪のライフは１８００で場には、攻撃力１８００のモンスターがいる。この攻撃が通れば勝ちという状況だ

「直接攻撃！」

そのまま決着はついた。しかし、その試合に遊星と十代は少し違和感があった

対戦相手の男はセットされていたカードを発動しようとしていた気がしたからだ

「優勝者は天海吹雪！　盛大な拍手を！！」

大きな拍手が起こる。やはり遊星と十代は拍手をしていない。そんな彼らが気になり一夏は質問した

「どうしたんですか？　二人とも」

「いや、対戦相手がなんで伏せてあったカードを発動させなかったんだろうって」

「明らかに発動させようとしていた気がしたんだが……」

「そんな！　もしかしてわざと……」

「あ、不動君に遊城君に織斑君だ」

「本当だ、ラッキー」

クラスの女子が話しかけてきた。彼女たちも買い物をしていたようだ

「かっこいいよね。吹雪様」

「うん、でも織斑君たちも十分かっこいいけどね」

ねーと言われたが、何と返していいかわからなかった

「さて、最後に僕に挑みたいというデュエリストはいないか？　腕に自信のある人はかかってきたまえ」

突然の吹雪の言葉に観客は驚く。手を上げる人が出るのかと思ったら誰も上げない

先ほどの試合を見て自分では勝てないから、そう思っているのだろう

「じゃあ、俺が……」

「十代さん、俺にやらせてくれませんか？　彼の本心が知りたいんです。あのデュエルでは彼が納得していないと思ってます」

「……分かった。俺だと有利かもしれないからな。相手のデッキ、知ってるから」

遊星の言葉に十代は納得した。そして遊星は手を上げる

「君からは何か強者の力を感じるよ。楽しみだ」

ステージに上がった遊星に吹雪は言葉を投げかける

「……始めようか」

「「デュエル！！」」

「僕の先攻、手札から魔法カード、調和の宝札を発動。手札の攻撃力１０００以下のドラゴン族チューナーを墓地に送って2枚カードを引く。僕は手札から攻撃力１００のガード・オブ・フレムベルを捨てて2枚ドローする」

調和の宝札　通常魔法
手札から攻撃力１０００以下のドラゴン族チューナー1体を捨てて発動する。自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「そして、黒竜の雛を召喚」

赤い卵から小さなドラゴンが顔を出した。その姿を見て女の子たちはかわいいなどの黄色い声を上げていた

「モンスター効果発動。このモンスターを墓地に送り、手札から真紅眼（レッドアイズ）の黒竜（ブラックドラゴン）を特殊召喚する」

小さな竜は成長して赤い目の黒い竜となった

黒竜の雛
星１　闇属性　ドラゴン族　ＡＴＫ８００　ＤＦＥ５００
自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードを墓地に送る事で、自分の手札から「真紅眼の黒竜」1体を特殊召喚する。

真紅眼の黒竜
レッドアイズ・ブラックドラゴン
星７　闇属性　ドラゴン族　ＡＴＫ２４００　ＤＦＥ２０００
真紅の眼を持つ黒竜。怒りの黒き炎はその眼に映る者全てを焼きつくす。

「手札から魔法カード、黒炎弾を発動。レッドアイズの元々の攻撃力分、ダメージを受けてもらう」

レッドアイズは火球を放ち、遊星にダメージを与える

黒炎弾　通常魔法
自分フィールド上に表側表示で存在する「真紅眼の黒竜」１体を選択して発動する。選択した「真紅眼の黒竜」の元々の攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。このカードを発動するターン「真紅眼の黒竜」は攻撃する事ができない。

遊星　ＬＰ４０００→１６００

「このターン、レッドアイズは攻撃できないが、先攻１ターン目なら関係ない。カードを１枚セットしてターンエンド」

吹雪　ＬＰ４０００　手札２枚
レッドアイズ・ブラックドラゴン　攻撃表示

セット1枚

「俺のターン、マックス・ウォリアーを召喚」

僧侶のような戦士が出てきた

「さらにマックス・ウォリアーをリリースしてターレット・ウォリアーを特殊召喚。ターレット・ウォリアーは自分の場の戦士族モンスターをリリースすることで特殊召喚できる。さらにこのカードの攻撃力はリリースした戦士族モンスターの攻撃力分アップする。このモンスターの攻撃力は１２００、マックス・ウォリアーの攻撃力は１８００。よって攻撃力は３０００」

僧侶のような戦士が消え、代わりに肩に砲台をつけた戦士が出てきた

ターレット・ウォリアー
星５　地属性　戦士族　ＡＴＫ１２００　ＤＦＥ２０００
このカードは自分フィールド上に存在する戦士族モンスター1体をリリースし、手札から特殊召喚する事ができる。この方法で特殊召喚したこのカードの攻撃力は、リリースしたモンスターの元々の攻撃力分アップする。

「バトル！　ターレット・ウォリアーでレッドアイズに攻撃！　リボルビング・ショット！！」

「罠（トラップ）カード、ドレインシールド。相手モンスターの攻撃を無効にして、そのモンスターの攻撃力分、僕のライフを回復させる」

マシンガンのような砲撃は一つの盾によって防がれた

ドレインシールド　通常罠
相手モンスター1体の攻撃を無効にし、そのモンスターの攻撃力分の数値だけ自分のライフポイントを回復する。

吹雪　ＬＰ４０００→７０００

「カードを1枚セットしてターンエンド」

遊星　ＬＰ１６００　手札3枚
ターレット・ウォリアー　攻撃表示
セット1枚

突然、吹雪は笑う

「ふふふ、楽しいよ。君。僕はこんなデュエルを待ち望んでいたんだ」

「……どうやら俺が思っていたような人だ。先ほどの試合は……」

「ああ、僕の望む形じゃないね。だからこそ、全力だ！」

「来い！」

遊星は安心した顔をして構えなおした

「僕のターン、レッドアイズ・ブラックドラゴンをリリースして真紅眼の闇竜（レッドアイズ・ダークネスドラゴン）を特殊召喚。さらにレッドアイズ・ワイバーンを召喚。レッドアイズ・ダークネスドラゴンは自分の墓地のドラゴン族モンスターの数×３００ポイント、攻撃力をアップさせる」

レッドアイズが炎に包まれ、新たな姿のドラゴンとなった。さらに攻撃力１８００の赤い目の黒い翼竜も出現する

真紅眼の闇竜（レッドアイズ・ダークネスドラゴン）
星９　闇属性　ドラゴン族　ＡＴＫ２４００　ＤＦＥ２０００
このカードは通常召喚できない。自分フィールド上に存在する「真紅眼の黒竜」１体をリリースした場合のみ特殊召喚する事ができる。このカードの攻撃力は、自分の墓地に存在するドラゴン族モンスター１体につき３００ポイントアップする。

レッドアイズ・ダークネスドラゴン　攻撃２４００→３３００

「バトル！　ダークネスドラゴンでターレット・ウォリアーに攻撃！　ダークネスギガフレイム」

漆黒の炎がターレット・ウォリアーを包み込み、焼却した

遊星　ＬＰ１６００→１３００

「レッドアイズ・ワイバーンで直接攻撃」

この攻撃が通ってしまえば遊星は負ける。だが、彼は伏せカードを発動させた

「奇跡の残照を発動。このターン、戦闘で破壊されたモンスターを１体復活させる。蘇れ、ターレット・ウォリアー」

空から一筋の光がさしてきてそこに先ほど破壊されたターレット・ウォリアーが守備表示で出てきた

奇跡の残照　通常罠
このターン戦闘によって破壊され自分の墓地へ送られたモンスター１体を選択して発動する。選択したモンスターを墓地から特殊召喚する。

ワイバーンでは勝てないので、攻撃を中断した

「カードを１枚セットしてターンエンド」

（セットされたカードは竜の逆鱗。次のターン、これを発動させて決める）

竜の逆鱗　永続罠
自分フィールド上に存在するドラゴン族モンスターが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

次のターン、遊星が壁モンスターを出してもこのカードの効果で貫通ダメージを食らってしまい、負けてしまう

吹雪　ＬＰ７０００　手札０枚
レッドアイズ・ダークネスドラゴン　レッドアイズ・ワイバーン
共に攻撃表示
セット１枚

吹雪はこのデュエルを楽しく思っていた。スタッフに何も言われず、正々堂々戦って勝てるのだから

だが、彼は勘違いをしていた

「俺のターン、ニトロ・シンクロンを召喚」

スプレー缶のようなモンスターが出てきた

「来るぞ、シンクロ召喚が」

十代はワクワクしていた。一夏も彼のワクワクが移ったみたいで見

ていて興奮している

「レベル５のターレット・ウォリアーにレベル２のニトロ・シンクロンをチューニング」

ニトロ・シンクロンは２つの輪となり、その輪をターレット・ウォリアーはくぐる

「集いし思いがここに新たな力となる。光さす道となれ！　シンクロ召喚！　燃え上がれ、ニトロ・ウォリアー！」

緑色の悪魔のようなモンスターが出てきた。しかしレッドアイズ・ダークネスドラゴンよりも攻撃力は下だ

「ニトロ・シンクロンをニトロと名の付くシンクロモンスターの素材にした時、カードを１枚ドローする。さらに俺は手札からワン・フォー・ワンを発動。手札のモンスターを１枚墓地に送ってデッキからレベル１のモンスターを特殊召喚する。ボルト・ヘッジホッグを墓地に送って、チェンジ・シンクロンを特殊召喚する」

小さな機械の翼をもつモンスターが出てくる

ニトロ・シンクロン
星２　炎属性　機械族　ＡＴＫ３００　ＤＦＥ１００
このカードが「ニトロ」と名のついたシンクロモンスターのシンクロ召喚に使用され墓地へ送られた場合、自分のデッキからカードを１枚ドローする。

ワン・フォー・ワン　通常魔法
手札からモンスター１体を墓地へ送って発動する。手札またはデッキからレベル１モンスター１体を自分フィールド上に特殊召喚する。

「自分の場にチューナーがいることで、墓地からボルト・ヘッジホッグを、手札からブースト・ウォリアーを特殊召喚する」

ボルト・ヘッジホッグ
星２　地属性　機械族　ＡＴＫ８００　ＤＦＥ８００
自分フィールド上にチューナーが表側表示で存在する場合、このカードを墓地から特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚したこのカードはフィールド上から離れた場合、ゲームから除外される。

ブースト・ウォリアー
星１　炎属性　戦士族　ＡＴＫ３００　ＤＦＥ２００
自分フィールド上にチューナーが表側表示で存在する場合、このカードは手札から表側守備表示で特殊召喚する事ができる。このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に表側表示で存在する戦士族モンスターの攻撃力は３００ポイントアップする。

針がボルトのハリネズミとブースターをつけた戦士が出てくる

次々と遊星の場にモンスターが出てくる。レベルの低いモンスターばかりとスタッフの人からはバカにされていたが、吹雪は気を引き

締めた

「レベル２のボルト・ヘッジホッグとレベル１のブースト・ウォリアーにレベル１のチェンジ・シンクロンをチューニング」

小さな機械のモンスターが輪となり、２体のモンスターがその輪に入る

「シンクロ召喚。アームズ・エイド」

機械の腕が出てきた

「シンクロ素材に使用されたチェンジ・シンクロンの効果によりレッドアイズ・ワイバーンを守備表示にする」

チェンジ・シンクロン　チューナー
星１　闇属性　機械族　ＡＴＫ０　ＤＦＥ０
このカードがシンクロモンスターのシンクロ召喚に使用され墓地へ送られた場合、相手フィールド上に存在するモンスター１体を選択して表示形式を変更する。

この行為に何の意味があるのか、この時誰も理解してなかった

「さらにアームズ・エイドの効果発動。ニトロ・ウォリアーの装備カードとなり、攻撃力を１０００ポイント上げる」

アームズ・エイドが、ニトロ・ウォリアーの右腕に装着され攻撃力が上昇した

ニトロ・ウォリアー　ＡＴＫ２８００→３８００

「攻撃力３８００だと!?」

吹雪だけでなくこの場にいる人全員が驚く

「バトル！　ニトロ・ウォリアーで、レッドアイズ・ダークネスドラゴンに攻撃!!　ダイナマイト・ナックル！」

「この瞬間、ニトロ・ウォリアーの効果発動。このターン、魔法カードを発動している場合、このモンスターの攻撃力を攻撃時のみ１度だけ１０００ポイントアップさせる。よって攻撃力は……」

「４８００!??」

レッドアイズ・ダークネスドラゴンは殴り飛ばされ破壊された

吹雪　ＬＰ７０００→５５００

「装備カードとなっているアームズ・エイドの効果発動。装備モンスターが破壊したモンスターの元々の攻撃力分、ダメージを与える」

装備されていた腕が光を放ち、吹雪にダメージを与える

アームズ・エイド
星４　光属性　機械族　ＡＴＫ１８００　ＤＦＥ１２００
チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
１ターンに１度、自分のメインフェイズ時に装備カード扱いとしてモンスターに装備、または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。この効果で装備カード扱いになっている場合のみ、装備モンスターの攻撃力は１０００ポイントアップする。装備モンスターが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

吹雪　ＬＰ５５００→３１００

「ニトロ・ウォリアーのもう一つの効果。このカードが相手モンスターを破壊した時、相手の表側守備表示モンスター１体を攻撃表示にし、もう一度だけバトルできる。ダイナマイト・インパクト」

衝撃波を放ち、守備表示になっていたレッドアイズ・ワイバーンを攻撃表示にした

ニトロ・ウォリアー
星７　炎属性　戦士族　ＡＴＫ２８００　ＤＦＥ１８００
「ニトロ・シンクロン」＋チューナー以外のモンスター１体以上
自分のターンに自分が魔法カードを発動した場合、そのターンのダメージ計算時のみ１度だけこのカードの攻撃力は１０００ポイントアップする。このカードの攻撃によって相手モンスターを破壊した

場合、相手フィールド上に表側守備表示で存在するモンスター1体を攻撃表示にしてそのモンスターを続けて攻撃する事ができる。

「！　このためにチェンジ・シンクロンを使ったのか」

気づいた時にはもう遅かった

「ダイナマイト・ナックル！！」

先ほどと同じことが起こり、吹雪は敗北と確信した。このターンで負けるとは思っていなかった

しかし、彼は笑顔だった

吹雪　ＬＰ３１００↓１１００

吹雪　ＬＰ１１００↓－７００

「……完敗だ、君のような素晴らしいデュエリストと戦えて嬉しか

った。僕もまだまだだということか」

「いいデュエルだった」

お互いに握手を交わした

少し沈黙があったがデュエルに感動して大きな拍手がわきあがった

「さて、僕はこれから仕事でこの子たちにサービスをしなければならない。ここらでお別れだ」

「……また、君と戦いたいな」

「いつでも待っている！」

そう言われた彼は、笑顔で手を振った。あんなにいい笑顔は始めてみると言われていた

こうしてイベントは終わった

充実した一日だった。そう多くのものが思っただろう

番外編　その1　対決！　アイドルデュエリスト（後書き）

今回は吹雪ＶＳ遊星となりました。
次回も一応決めてあります。いつになるかわかりませんが……
次回は巨大な力と戦います
感想・指摘等あればよろしくお願いします

第２１話　巨大すぎる力　前編（前書き）

書かせていただきます。
今回もデュエルありです

第２１話　巨大すぎる力　前編

「困った……」

早朝、一夏は困っていた

その理由は自分の部屋にいる何も着ないで寝ているラウラのことだ

先日、自分のことを嫁と宣言してから様々な行動に困っていた。風呂に潜入して来たり今日みたいに部屋に侵入して来たり

「なかなか苦労してるんだニャ～、一夏君は」

昨日部屋に止めていた猫のファラオとともにいた大徳寺が一夏に微笑みかけた

彼も一応教師なので、彼女の行為は止めようと思った

目覚めたラウラに大徳寺は話しかけた

「ラウラさん、一夏君の部屋に勝手に入るのはだめにゃんだニャ～」

「しかし夫婦というものは包み隠さないと聞いたのだが……」

「それはまだ君たちには早いのにゃ～。お互いのことをゆっくりと知ってから隠し事をなしにしたりするんだニャ～。そうしないと一

夏君に愛想を尽かされてしまうかもしれないからにゃ～」

ラウラは大徳寺の言葉に納得した。愛想を尽かされるのは良くないからだ

「うむ、すまなかったな。これからは気を付ける」

そういって彼女は（一夏に言われ服を着て）出て行った

一夏は一息ついてから大徳寺にお礼を言った

「気にすることないにゃ～。しかしラウラさんもシャルロットさんも積極的ですにゃ～。青春なんだニャ～」

大徳寺の言葉の意味を一夏は理解できなかった

始業時間ギリギリに遊星と十代が教室に入ってきた。いつもの彼らならもう少し時間に余裕を持って来ているはずなのにと疑問に思う人が多かった

聞きに行こうと思った人がいたみたいだが、すぐに千冬が入ってきたので、聞くことができなかった

「授業を始める。テストもあるから赤点なんかとるなよ」

その言葉に十代は苦笑いをする。元々勉強は得意ではないので、避けたいところだが、ここにいる以上それはできない

「それから来週から校外特別実習期間だが、忘れ物などせずに羽目を外しすぎるなよ」

そのままＳＨＲは終わった。すぐに十代達の所に人が集まった。ただ昨日夜更かししただけだから大丈夫とそれだけだった

納得はしていない人は多いが、すぐに授業が始まるのでみんな席に戻った

昼休み、十代と一夏と遊星は食堂で食事を取りながらこれからどうするか話し合っていた

「そういえば俺達は先日買い出しの時に水着を買ったが、一夏は良かったのか？」

「それなんですけど、あると思ったらなかったみたいだったので、

今日買いに行こうと思ってます」

その発言を聞いたシャルロットは、急いで彼のもとに行って一緒に行こうと誘おうとした

しかし、箒にセシリア、鈴にラウラも聞いていたため簡単にはいかず、少し空気が変わった

「まあ、俺達は今日用事があるから行けないんだ。誰か誘って行けば？」

十代の言葉にさらに反応した女子たち。いつもなら三人で一組だが今日は一夏だけ

ならばと思い、５人の女の子が一夏の所にやってきた

十代と遊星は一夏に一言「頑張れ」と言って落ち着いて食べられる場所に向かった

放課後、十代と遊星は職員室に向かっていた

「そういえば遊星の用事って？」

「俺は特別実習について聞きたいことがあるので……十代さんは？」

「ああ、俺はちょっと勉強の方が……な。後俺のＩＳの調整」

すぐに職員室につき、二人は別れた

夕方、十代は簪と二人で、寮に向かっていた

整備室で一緒になり、お互いに自分のＩＳを調整していた。十代は手伝うべきか考えていたが、以前から断られている為、遠慮しておいた

「特別実習、楽しみだな」

「……私は……別に……」

予想外の返事に少し首を傾げる十代

「……海は……好きじゃないから」

続きを聞いて納得した

「そっか……簪と遊べると思ったんだけどな……まあ、好きじゃないのに無理していくこともないか」

十代の答えに少し疑問を持ち、聞いてみようとした時

彼に突き飛ばされた

何を……と言おうとした瞬間、二人の間に青い炎の壁が出てきた

十代の近くには青く短い髪の女子がいた。年齢は恐らく高校生くらいだろう

「うまくかわしましたね」

「！　簪！　逃げろ！　こいつはただものじゃない」

そう十代は言うが簪は動けない

「私は完全な理想郷（パーフェクトユートピア）の創設者の一番弟子と呼ばれているものです。遊城十代……あなたを闇のゲームで葬る」

その言葉を最後に炎の壁が高くなり見えなくなった

（どうしよう……十代が……）

「どうしたのにゃ？」

おろおろしていると足元にファラオがすり寄っていて大徳寺が簪に話しかけていた

「……完全何（パーフェクト）とかという人が……十代を闇のゲームとかいうので葬るって」

（！　……闇のゲーム！？　とにかく遊星君に知らせるのと織斑先生に他の人に近づかせないように何とかしてもらわないと……）

「簪さん！　君は遊星君にこの場所に来るように伝えてほしいのにゃ。私は織斑先生に相談するのにゃ。急いで！」

すぐに指示を出し、二人は行動を始めた

（まさか闇のゲームの使い手がこの世界にいるなんて……十代君……）

彼女の服装はどこかの宗教にでもいるのか法衣だった

「……私がやりたいことが……理解できますね？」

彼女はそのままデュエルディスクを構えた。十代も同じように構え始めた

「わかっていると思いますが……この闇のゲーム、勝ったものだけが生き残れる」

「わかっている……さっさと始めるぞ」

「「デュエル！！」」

お互いの空気が重くなる

「私のターン、ボーガニアンを召喚、カードを3枚セットしてターンエンド」

彼女の場にボウガンを持った一つ目のモンスターが出てきた

女性　ＬＰ４０００　手札2枚
ボーガニアン　攻撃表示
セット3枚

「俺のターン」

（ボーガニアンがいる限り、奴のスタンバイフェイズが来るたびに６００ポイントのダメージを俺に与える。さっさと倒した方がいいだろう）

ボーガニアン
星3　闇属性　機械族　ＡＴＫ１３００　ＤＦＥ１０００
自分のスタンバイフェイズ毎に相手ライフに６００ポイントダメー

ジを与える。

「俺はワイルドマンを召喚！」

十代の場に大きな剣を持った野生児が出てきた

（なるほど、ワイルドマンは罠カードの効果を受けない。奴がいくらカードをセットしていようとも関係ないということか）

ユベルは十代の戦略に素直に感心する

Ｅ・ＨＥＲＯ　ワイルドマン
星４　地属性　戦士族　ＡＴＫ１５００　ＤＦＥ１６００
このカードは罠の効果を受けない。

「ワイルドマンで攻撃！　ワイルド・スラッシュ！」

大きな剣を使ってボーガニアンに切りかかった

「罠（トラップ）カード、アルケミー・サイクル発動。これにより私の場のモンスターの攻撃力は０になる。その代り、攻撃力が０になったモンスターが破壊された時、デッキからカードを１枚ドローする」

アルケミー・サイクル　通常罠

発動ターンのエンドフェイズ時まで、自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター全ての元々の攻撃力を0にする。この効果によって元々の攻撃力が0になっているモンスターが戦闘によって破壊され墓地へ送られる度に、自分のデッキからカードを1枚ドローする。

ボーガニアン　ＡＴＫ１３００→０

女性　ＬＰ４０００→２５００

女性は切り裂かれた衝撃で少しひるんだが、ものともせずデュエルを続ける

「そしてダメージを受けたこの瞬間、デモンバルサム・シードを発動。私の攻撃表示モンスターが戦闘で破壊された時、発生したダメージ５００ポイントにつき一体のトークンを場に出します。１５００ダメージだから3体のトークンを特殊召喚、さらにアルケミー・サイクルの効果で1枚ドロー」

彼女の場に種がまかれ、小さな花が3つ咲いた

デモンバルサム・シード　通常罠
自分フィールド上に表側攻撃表示で存在するモンスターが戦闘によって破壊された時に発動する事ができる。その戦闘によって自分が受けた戦闘ダメージ５００ポイントにつき、自分フィールド上に「デモンバルサムトークン」（植物族・闇・星1・攻／守１００）を

1体特殊召喚する。

（これが狙いなのか、次のターン、上級モンスターを召喚するかもしれない……だが）

十代は三体のトークンを狙って出されたかのような状況に嫌な予感がしていた

彼はカードを1枚伏せてターンを終了させた

十代　ＬＰ４０００　手札４枚
ワイルドマン　攻撃表示
セット１枚

「私のターン」

カードを引いた瞬間、とんでもない威圧感が出てきた

「くくく……遊城十代……ゲストも来たことだし、いいことを教えてあげる」

炎の周りには遊星と簪が、反対方向に一夏とシャルロットがいた

彼女は笑いながら話し始めた

「完璧（パーフェクト）なる理想郷（ユートピア）の創設者はあなたたちのことを知ってるわ。十代

と遊星が次元を超えてこの世界にやってきたことも、次元の精霊の頼みでここに来たことも。私たちの組織の目的は世界のゆがみを直すことあけどね、私にはどうでもいいの……」

急に高笑いを始めた

「私はあの方がいてくだされればそれでいい！　見せてあげる……あの方から学んだその力を！　三体の場のモンスターをリリース！」

そのカードが召喚された瞬間、遊星と十代は驚いた。それは本来あるはずのないカードなのだから……

一夏とシャルロット、そして簪はそのモンスターの圧倒的力に恐怖していた

「現れよ！　オベリスクの巨神兵！！」

第２１話　巨大すぎる力　前編（後書き）

神を登場させました。
何故持っているかなどは次回に

第２２話　巨大すぎる力　後編　（９／１９　加筆修正）

簪ｓｉｄｅ

大徳寺さんに言われて私は走って遊星の所に向かった

今、私にしかできないことを一生懸命やらないと……

すぐに彼の部屋の前に着いてから少し荒々しくノックをする

「どうした、簪……？」

「遊星……大変、十代が……闇のゲームとかいうのを……」

そう言った瞬間、彼の表情が変わった。すぐに窓の外を確認した

場所を確認した後、彼は窓を開けていた

「ありがとう簪。俺は今からあの場所に行く。お前は部屋に戻って避難してくれ」

そうするべき……何だろうか……

私は何か胸の奥で引っかかっていた。自分だけ逃げていいのか？

十代だけに戦わせていいのか？

「私も……行く」

いつもの私なら逃げていたかもしれない……でも、友達って言ってくれた彼を見捨てるのは……私の好きなヒーローならしない

「だが……分かった。その眼を見ればわかる。部屋に入ってドアを閉めておいてくれ」

言われたとおりにする。遊星は部屋にあったバイクを出して乗っていた

何をしているの？　と思った時、ヘルメットを投げ渡された

……もしかして

「後ろに乗れ！　しっかり捕まっていろよ！！」

彼はここから飛ぶんだ……でも、できると思う。信じれる

そう思って彼の後ろに乗った……すぐに着いたけど、ものすごく怖かった……あんな経験はもうしたくない……

簪　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

一夏　ｓｉｄｅ

ふう、今日の買い物は大変だった

まあ、シャルが楽しんでくれたからいいんだけど……っと、今日の買い物はシャルと行くことになった

その道中で、俺がシャルロットのことをシャルと呼ぶことにした。えらく笑顔だったみたいだけど、何でだ？

しかし途中からセシリアと鈴などに遭遇して色々と付き合わされ、結局帰るのがこんなに遅くなった

部屋に戻ろうと思った時、俺は不思議な青い炎が見えた

「なあ、何だ？　あの炎？」

「何を言っていますの？　一夏さん、炎なんてどこにもないですわよ？」

「寝ぼけてるんじゃないの？」

セシリアと鈴には見えていないみたいだが

「……何だろう、あの炎から嫌な感じがする」

シャルには見えているみたいだ。そして俺も嫌な予感がする

気になってしまい俺は炎に近づくことにした。シャルもどうやらついてきたみたいだ

何故か残りの二人は追いかけてこなかった……

炎に近づくと、その中には女の人と

「十代さん!?」

彼は……戦っているのか?

向こう側には簪と遊星さんがいる。合流した方がよさそうだ

しかしその途中、彼女の召喚したカードからとんでもない力を感じた

足がすくんでしまった。シャルも同じみたいだ……何なんだ……あの青い巨人は?

一夏　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

オベリスクの巨神兵
星１０　神属性　幻神獣族　ＡＴＫ４０００ＤＦＥ４０００
このカードを通常召喚する場合、自分フィールド上のモンスター３体をリリースして召喚しなければならない。このカードの召喚は無効化されない。このカードが召喚に成功した時、魔法・罠・効果モンスターの効果は発動できない。このカードは魔法・罠・効果モンスターの効果の対象にできない。このカードは特殊召喚した場合エンドフェイズ時に墓地へ送られる。自分フィールド上のモンスター２体をリリースする事で、相手フィールド上のモンスターを全て破壊する。この効果を発動する場合、このターンこのカードは攻撃宣言できない。

オベリスクと呼ばれた青い巨人が十代の前に立ちふさがる。その威圧感は並のものではない

「ふふふ、さすが神。コピーとはいえレベルが違う」

「！　コピーカードだと！？　やめろ！」

十代は彼女に使うのをやめさせようとした

「神のコピーカードを使ったものには裁きが下される……だが、遊城十代……お前は知っているだろう？　コピーの神を操る究極のカードを！！」

その言葉に十代は気づく。かつて最強の神のコピーカードを使ったデュエリストの作ったカードを

「このカードは次元を超え、そいつから奪ったカードだ！　神を従える究極のフィールド魔法、神縛りの塚を発動！！」

その瞬間、地面から出てきた3本の鎖がオベリスクを拘束した

この光景に外にいた遊星も怒った

「貴様！　神のカードをそんな形で操ってなんとも思わないのか！？」

「どういうことですか？」

一夏の疑問に遊星は答えた。コピーカードを使った者は裁きにより死亡したり廃人になったりすることを

「だが、これで私は神を超えた……この塚の前では貴様は無力！行け、オベリスク。ワイルドマンを攻撃！　ゴッド・ハンド・クラッシャー！！」

縛られながらも巨大な拳でワイルドマンを殴りつけ破壊した

同時に十代はその衝撃を受け、吹っ飛び炎の壁に激突した

「がぁぁぁ……」

十代　ＬＰ４０００→１５００

闇のゲームのことを知らない人たちにとっては何が起こっているかわからなかった

「この試合は……プレイヤーへのダメージが本当の痛みとなる。そしてライフが尽きたプレイヤーは……死亡すると言われている」

遊星の説明にシャルロットは声を上げる

「そんな馬鹿な話が……」

「だが、現実で目の前に起きている。彼らは今、命がけの戦いをしている」

いつの間にか戻ってきた大徳寺が状況を語っていた。いつもの口調はなかった

それだけことが深刻なのだろうと三人は思った

「まだだ！　神縛りの塚の効果発動！　レベル１０以上のモンスターが相手モンスターを破壊した時、相手に４００ポイントのダメージを与える」

突如落雷が降り、十代を襲った

「ああ……」

直撃し十代はひざを折った

十代　ＬＰ１５００→１１００

神縛りの塚　（アニメオリジナル）
フィールド魔法
フィールド上のレベル１０以上のモンスターは魔法・罠・モンスターの効果では破壊されない。レベル１０以上のモンスターが戦闘で相手モンスターを破壊した時、破壊されたモンスターのコントローラーは４００ポイントのダメージを受ける。

「……罠（トラップ）カード、ヒーロー・シグナル発動……自分の場のモンスターが破壊された時、デッキからレベル４以下の「Ｅ・ＨＥＲＯ」を１体特殊召喚できる。こっちに来て手に入れた新たなＨＥＲＯ、エアーマンを召喚」

何とか立ち上がりカードを発動。空にＨの文字が出てきてそこからプロペラを搭載されたヒーローが召喚された

ヒーロー・シグナル　通常罠
自分フィールド上のモンスターが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時に発動する事ができる。自分の手札またはデッキから「Ｅ・ＨＥＲＯ」という名のついたレベル４以下のモンスター１体を特殊召喚する。

「さらにエアーマンの効果発動。デッキから「ＨＥＲＯ」と名の付くモンスターを１枚手札に加える。Ｅ・ＨＥＲＯネオスを手札に加える」

E・HEROエアーマン
星4　風属性　戦士族　ATK1800　DFE300
このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、次の効果から1つを選択して発動する事ができる。
●自分フィールド上に存在するこのカード以外の「HERO」と名のついたモンスターの数まで、フィールド上に存在する魔法または罠カードを破壊する事ができる。
●自分のデッキから「HERO」と名のついたモンスター1体を手札に加える。

十代は何とか戦線を維持することができた

「私はこれでターンを終了」

女性　LP2500　手札2枚
オベリスクの巨神兵　攻撃表示
神縛りの塚　セット1枚

「俺のターン、ドロー」

引いたカードを見てすぐに戦術を考える

「N（ネオスペーシアン）・グラン・モールを召喚」

ドリルを持ったモグラが出てきた。このモンスターを見て遊星はよ

し、と喜んだ

「あのカードは攻撃した相手モンスターと自分を手札に戻す効果がある」

「神も？」

簪の質問に遊星は頷いた

「神が戻れば……」

「十代にも勝ち目があるってことだね」

一夏とシャルロットの言葉に大徳寺も頷く

ネオスペーシアン
N・グラン・モール
星３　地属性　岩石族　ＡＴＫ９００　ＤＦＥ３００
このカードが相手モンスターと戦闘を行う場合、ダメージ計算を行わず相手モンスターとこのカードを持ち主の手札に戻す事ができる。

「グラン・モールで攻撃！　ドリルモール！」

「させるか！　罠（トラップ）カード、拷問車輪」

突然、モグラが棘の付いた車輪に拘束された。

拷問車輪　永続罠
このカードがフィールド上に存在する限り、指定した相手モンスター1体は攻撃できず、表示形式も変更できない。自分のスタンバイフェイズ時、このカードは相手ライフに５００ポイントのダメージを与える。指定モンスターがフィールド上から離れた時、このカードを破壊する。

「そのカードを使われるとまずいし……対策くらい立てるわ」

「く、カードを1枚セット、エアーマンを守備表示にしてターンエンド」

十代　ＬＰ１１００　手札４枚
エアーマン　守備表示　グラン・モール　攻撃表示
セット１枚

「私のターン！　拷問車輪で傷つきなさい。あはははははははは」

拷問車輪が動き、十代の体を痛めつける

「ぐうううう……」

十代　ＬＰ１１００→６００

「このターンで……死になさい。幻銃士を召喚。その効果で、2体の銃士トークンを呼ぶ」

銃を背負った魔物が3体でてきた

幻銃士
星４　闇属性　悪魔族　ＡＴＫ１１００　ＤＦＥ８００
このカードが召喚・反転召喚に成功した時、自分フィールド上に存在するモンスターの数まで自分フィールド上に「銃士トークン」（悪魔族・闇・星４・攻／守５００）を特殊召喚する事ができる。また、自分のスタンバイフェイズ毎に自分フィールド上に表側表示で存在する「銃士」と名のついたモンスター1体につき相手ライフに３００ポイントダメージを与える事ができる。この効果を発動するターン、自分フィールド上に存在する「銃士」と名のついたモンスターは攻撃宣言をする事ができない。

「オベリスクの効果発動！　自分の場のモンスターを2体リリースすることで、相手モンスターをすべて破壊する。ゴッド・ハンド・インパクト！！」

オベリスクの両腕からエネルギーの波動を飛ばし、十代の場のモンスターを全滅させた

「これで終わりよ！　幻銃士で直接攻撃！」

背中に背負っていた銃を放つ。この攻撃が通れば終わってしまう

「「「「十代　（（さん））」」」」

砲撃が当たって煙が立ち込める。相手は笑っている
だが、十代は立っていた。うすい膜に守られていた

「な、何故？　何で立っているの？」

「お前がオベリスクの効果を使った時、このカードを発動させていたんだ。速攻魔法、クリボーを呼ぶ笛。この効果でハネクリボーを呼んだ。ハネクリボーは破壊されたターン、俺に戦闘ダメージは与えられない」

クリボーを呼ぶ笛　速攻魔法
自分のデッキから「クリボー」または「ハネクリボー」１体を選択し、手札に加えるか自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

ハネクリボー
星１　光属性　天使族　ＡＴＫ３００　ＤＦＥ２００
フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた時に発動する。発動後、このターンこのカードのコントローラーが受ける戦闘ダメージは全て０になる。

十代はハネクリボーの力で守られていた
このことに腹を立てる。だが、彼女は冷静に行動を起こした

「手札から速攻魔法、神秘の中華なべを発動。これで、幻銃士をリリースし、その攻撃力分、ライフを回復させる。カードを１枚セッ

トしてターンエンド」

神秘の中華なべ　速攻魔法
自分フィールド上のモンスター1体を生け贄に捧げる。生け贄に捧げたモンスターの攻撃力か守備力を選択し、その数値だけ自分のライフポイントを回復する。

女性　LP2500→3600

女性　LP3600　手札0枚
オベリスクの巨神兵　攻撃表示
神縛りの塚　セット1枚

（いくらあいつでもこのターンで神を倒せはしない。それにセットしたカードは禁じられた聖杯。奴が効果モンスターを使っても大丈夫だ）

禁じられた聖杯　速攻魔法
フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。エンドフェイズ時まで、選択したモンスターの攻撃力は400ポイントアップし、効果は無効化される。

女性は笑っている。次のターン、自分の勝ちだと予想していたから

だが、彼女は忘れていた。自分の相手が誰なのかを……

「俺のターン、手札から死者転生を発動。手札のカードを1枚墓地に送って墓地からモンスターを1枚手札に加える。俺はN・グラン・モールを手札に加える」

死者転生　通常魔法
手札を1枚捨てて発動する。自分の墓地に存在するモンスター1体を手札に加える。

彼女はにやけてしまう。効果モンスターを使っても無駄だというのにと

だが、十代の戦術は違った

「俺はエースカード、E・HEROネオスを召喚！」

全身が白い体系の良いHEROが現れた

そのモンスターから一夏、シャルロット、簪は
特別な力を感じた。何かまではわからなかったが

「馬鹿な……そのモンスターのレベルは7、2体のモンスターのリリースが必要なはず……」

「俺が何で死者転生を使ったのかわからないか？」

その言葉で、彼女は気が付いた。十代はモンスターを回収することが目的ではなく、手札のモンスターを墓地に送ること。そしてE・HEROの中に墓地にいることで力を発揮するモンスターがいる

「さっき、墓地にネクロダークマンを送った。このモンスターが墓地にある時、一度だけE・HEROのアドバンス召喚のリリースをなくすことができる」

E・HEROネクロダークマン
星5　闇属性　戦士族　ATK1600　DFE1800
このカードが墓地に存在する限り1度だけ、自分はレベル5以上の「E・HERO」と名のついた
モンスター1体をリリースなしで召喚する事ができる。

E・HEROネオス
星7　光属性　戦士族　ATK2500　DFE2000
ネオスペースからやってきた新たなるE・HERO。ネオスペーシアンとコンタクト融合することで、未知なる力を発揮する！十代のフェイバリットカードが召喚される

「ち、だがそいつの攻撃力は２５００。オベリスクの敵じゃない」

「手札から装備魔法、ネオス・フォースを発動！　このカードの効果で、ネオスの攻撃力を８００ポイント上昇させる」

Ｅ・ＨＥＲＯネオス　ＡＴＫ２５００→３３００

まだ足りていないが十代の反撃はまだ続いていた

「この舞台に幕を引く。神の誇りを取り戻させるために、フィールド魔法、摩天楼―スカイ・スクレイパー―！！」

そのカードの発動に女性はしまったという顔をしている

フィールド魔法はお互いに合計１枚しか場に表側で置くことができない。そして、後からカードを出した場合、元からあったカードは破壊される。つまり神縛りの塚は破壊されてしまう

十代がカードを発動させると神を縛っていた鎖と塚は破壊され、代わりに高層ビルが立ち並んだ

「お前みたいに、カードに鎖を縛りつけるような奴に十代さんは……いや、俺たちは負けない！」

「そんなことをして得た力など何の意味もないからな！」

遊星と十代の言葉に女はひるむ

従わせる力がなくなったため、神が反抗的な目で女性を見ている

「く……だが、それでもお前のモンスターの攻撃力は何も……」

「このフィールドで攻撃するＥ・ＨＥＲＯが相手モンスターよりも攻撃力が低い時、攻撃力を１０００ポイント上昇させる」

摩天楼－スカイスクレイパー－　フィールド魔法

「Ｅ・ＨＥＲＯ」と名のつくモンスターが攻撃する時、攻撃モンスターの攻撃力が攻撃対象モンスターの攻撃力よりも低い場合、攻撃モンスターの攻撃力はダメージ計算時のみ１０００ポイントアップする。

Ｅ・ＨＥＲＯネオス　ＡＴＫ３３００→４３００

「オベリスクの巨神兵の攻撃力を超えた……？　そんな……馬鹿なことが……」

「終わりだ！　ラス・オブ・ネオス！！」

勢いよく飛び上がり、右手の手刀で、オベリスクの巨神兵に真っ二つに切り裂く。そのまま神は崩れ落ちた

女性　ＬＰ３６００→３３００

強い衝撃で女性は飛ばされそうになるが、何とか堪える

「まだよ、まだデュエルは……」

「ネオス・フォースの効果発動、装備モンスターが相手モンスターを破壊した時、破壊したモンスターの攻撃力分、相手にダメージを与える」

ネオスは波動を作って彼女に放った

ネオス・フォース　装備魔法
「Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス」にのみ装備可能。装備モンスターの攻撃力は８００ポイントアップする。装備モンスターが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、
破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。
エンドフェイズ時にこのカードをデッキに加えてシャッフルする。

「そ、そんな……」

その波動を喰らいライフは尽きた

女性　ＬＰ３３００→０

デュエルが終わった瞬間、周りの青い炎が女性に向かっていき、そのまま彼女を包み込んだ

「ぎゃぁぁぁ」

炎に包まれる彼女の断末魔を一夏たちは見ることができず顔を背けた

一瞬、炎が強くなり、そのまま炎と女性は消えた。それと同時に十代は気絶してしまった

急いで駆け寄る一夏

「大丈夫ですか？」

口元に耳を当て呼吸を確認した所、息はしていたのでひとまず安心した

「ただダメージが残っているから休ませた方がいい。一夏君、手伝ってほしい。シャルロットさんと簪さんは先に十代達の部屋に戻って休ませる準備をお願いする」

大徳寺の指示に従い、すぐに一夏は十代を背負う。遊星は皆の荷物をＤ－ホイールに乗せ、シャルロットと簪は先に寮に戻った

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｖｉｅｗ

一人の女性が必死に歩いている。先ほどデュエルに負けた女性だ。
一瞬、炎が強くなった瞬間に逃げ出したようだ

「くそ……何とか回避できたが……このまま戻るには時間がかかりそ……ああ」

体が悲鳴を上げ、崩れ落ちた。意識を保っている方が奇跡だろう

「遊城十代……今度会ったら殺して……うう、熱い……炎から逃げたのにまだ焼かれている感じが……」

「そりゃ、闇のゲームの罰だからだよ」

彼女の前にアロハシャツを着て、サングラスをかけたいかにも軽そうな男がいた

「お前は……」

「おいおい、一応俺もあんたと同じ組織の一員だぜ。というよりも俺は幹部なんだよな。あんたの師匠直属のな」

「うる……さい……」

そんな男の軽い口調に我慢が出来なくなっていた

男は彼女の様子を見て、銃を取り出した

「な……に……を……？」

「だってよ、あんたこのまま死ぬぜ？　苦しみながら死ぬくらいなら今すぐ楽にしてやるよ」

「ま……」

そのまま彼は引き金を引き、彼女の眉間を打ち抜いた

死体を持って帰ろうとした時、男の前に一人の生徒が立ちふさがった

「嬢ちゃん……というのは失礼かな？」

「いえ、いいですよ……完全なる理想郷（パーフェクトユートピア）の幹部さん」

青い髪の生徒は警戒しながらも話す

「先ほどの炎の中で起こっていた試合……見させていただきました。あなたたちの目的は？　そしてあの試合は一体なんですか……？普通じゃなかった……」

構えようとするが、男は両手を上げて敵意がないことを示していた

「勘弁してくれよ。確かに俺たち完全なる理想郷（パーフェクトユートピア）の目的は……って知ってんだよな。あんたくらいの人なら」

「まあ、今回はこいつが勝手に行動してただけだ。信じるかは勝手だが、今日は俺自身、織斑の坊ちゃんにもこの学園にも用はねえよ。こいつの後始末だけだ……というわけだからここから逃げるわ。じゃあな、更識の嬢ちゃん」

その瞬間、彼は消えた。正確には高速で動いていなくなった

「聞きたければ十代と遊星に聞きな。あいつらなら教えてくれるんじゃねえか？　更識の嬢ちゃんも織斑の坊ちゃんも精霊が見えるみたいだからな」

更識と呼ばれた生徒は驚いていた。すでに姿は見えていないのに声だけ聞こえていたから

（逃げられた……でもあのスピード……そんなわけないか）

（それにしても精霊って……十代君の近くにいた小さな羽のついた子かしら……何にしても聞いてみた方がよさそうね）

そのまま彼女は十代達の部屋に行くことにした

第２２話　巨大すぎる力　後編　（９／１９　加筆修正）（後書き）

本編ではしばらくデュエルはないと思います。
次回から特別授業編です
感想・指摘等あればよろしくお願いします

第２３話　状況説明、そして臨海学校開始（前書き）

書かせていただきます
遅くなって申し訳ありませんでした

第２３話　状況説明、そして臨海学校開始

十代は部屋のベッドで寝ている。少しは落ち着いているようだ

「すまないが今日は戻った方がいい。十代さんが起きてから俺たちのことを話す」

先ほど戦った相手に次元を超えてきた。なんて言われて気になってしょうがない三人

しかし今は十代の回復を待つのが優先だと思った

「大丈夫だ。特別授業のある日までには元気になっているだろう」

ユベルの言葉を三人は受け取り、そのまま部屋に戻って行った

その５分後、部屋にノックの音が響いた

「はい、どなたですか？」

遊星がドアを開け、外を見てみると青い髪の女子が真剣な表情で立っていた

「失礼するわね」

許可なくそのまま彼女は部屋に入って行った

彼女は寝ている十代を見ると一息ついて二人を見た

「自己紹介がまだだったわね。私はこの学園の生徒会長、更識盾無よ」

「不動遊星です。そしてこちらが」

「十代だ……遊城十代だ」

目が覚めたのか、起き上がって答えた。だがまだ本調子ではないようだ

「無理しないで……と言いたいところだけどあなたたちに聞きたいことがあるの……まず、あなたたち何者なの？　近くにいる小さな羽の付いたかわいい子なんて私見たことないし……それにその子、見えること見えない子がいるのも気になるの」

盾無は質問する。彼女の言い方からごまかせそうにないと二人は感じた

「……信じてもらえないかもしれないが、俺達はこの世界の住人じゃない」

十代は説明を始めた。次元の精霊の力でこの世界に来たこと、この世界を守ってほしいと頼まれたこと。そして、敵である完全なる理想郷（パーフェクトユートピア）の目的が女尊男卑の撤廃でそのために織斑一夏を狙っていること、先ほどその相手と戦い負傷したことを

盾無は真剣に話を聞いていた。そして彼女も話を始めた

「さっきの戦い、私も遠くで見ていたの……で、やっぱり友達が青

い炎を確認できてなかった……これから考えるにあの炎……」

「精霊が見える人だけが見えるということでしょうか？」

遊星の言葉に彼女は頷いた。そして話は続く

「それともう一つ、織斑先生には報告したんだけど、十代君が戦ってた相手が生きていたのよ。でも問題はその後、同じ組織の幹部と言っていた男に射殺された。苦しまないようにって……捕えようとしたんだけれど逃げられたの……そして、その男……もしかしたらＩＳを使っていたかもしれないの」

そのことを聞き、遊星と十代は複雑な気持ちになった。まさか相手の組織の男もＩＳを使えるとは思っていなかったから

「……このことはここにいる私たちと織斑先生だけの秘密にした方がよさそうね。余計な不安を与えるべきではないから」

盾無の提案にここにいる者は全員賛成した

「じゃあ、私は帰るわね。今日ここであったことは三人の秘密よ」

語尾にハートが付くような感じで喋って帰った

彼女が帰った後、十代は少し笑っていた

「なんだか雰囲気違ったな。簪と」

「そうか、彼女たちは姉妹か……」

「ああ、苗字を聞いた時からわかってたが……それ以外にも何だか……似ている所がある気がするな……今日は寝ようぜ、明日は一夏達に話さないといけないんだからさ」

そのまま十代は布団をかぶって眠った。遊星もそのまま寝ることにした

次の日の朝、十代の体調はそれなりに回復していた。訪ねてきた一夏、シャルロット、簪には昨日と同じ感じで話した。もちろん、盾無とのことは話していない。彼女と会ったことも

「なんだか……とんでもない話ですね……」

「うん、でも相手の組織が女尊男卑を撤廃しようとしてるなんて……一体どうやって？」

「……分からないことが多すぎる」

簪の言葉にみんなは頷く

「でも……俺は頑張る。どんな理由があるかわからないけど……精霊をあんなふうに使うやつを許せない」

一夏の言葉に十代は笑顔になった

「そうだね、一夏がターゲットになっているなら守らないとね。敵の組織が一夏をどうするかわからないし」

シャルロットは握り拳を作って気合を入れていた

「……いつでも手伝う……私達は……友達だから」

小さくだが簪が呟いた

「ありがとう、皆。さてと、少し疲れたから寝てるな。また後で飯の時にでも」

そう言って十代は眠った。邪魔しては悪いと思い、三人は部屋から出て行った

遊星も昨日Ｄ－ホイールを一気に修理した時の疲れが出てきたのか眠ってしまった

「この空間……なるほどな」

十代と遊星は別の空間にいた。この場所にはある女性に会える

「大丈夫でしょうか？　神の攻撃を受けていたはずですが……」

「ああ、何とかな。ほら、俺って普通の人間じゃないからさ……」

少し苦笑いしながら話した。ちなみに十代の中にユベルがいること

と遊星の赤き龍の力のことは話していない

彼らを信頼はしているがまだ話す時ではないと思ったから

「……そういうことは言わないで下さい」

「ああ、悪かった……」

彼女は途端に暗い顔をしたため、さすがにまずいと思い十代は謝った

「こちらこそすみません。要件なのですが……武藤遊戯をそちらの世界に連れて行こうと思っています」

「「遊戯さんを!?」」

彼女の言葉に驚いた。まさかキングオブデュエリストと再び会えるとは思っていなかったからだ

「ですが申し訳ありません、完全なる理想郷（パーフェクトユートピア）の人達が他の世界に行けないよう、私のほとんどの力を使っているため、まだ武藤遊戯を呼べません。恐らく明後日の夕方になると思います」

「……分かりました。そのことを協力者に伝えておきます」

「ありがとうございます。彼にはこちらのことをすでに伝えてあります……もちろん、彼にも力を授けます。では、また」

そのまま彼女は消え、十代達も意識を失った

目が覚めた時には、夕食の時間だった。十代はほとんど回復しているみたいだ

「十代さん、織斑先生には俺から話しておきます」

「悪いな、頼んだ」

そのまま特に何も問題が臨海学校の日になった

臨海学校初日、バスで目的地に向かっていた

窓の外を見ると海が見える。しかし、仲にいる女子の視線は別の方向を見ていた

「かっこいいな」

「私も後ろに乗りたいな」

「それにしても……遊星君、バイクの運転すごいわね」

そう、遊星はバスに乗らずにＤ－ホイールで現地に向かっていた。

十代は遊星の後ろに乗っている。場所のデータはＤ－ホイールに表

示されているが、一応バスに合わせて走っている

「すごいよね、遊星」

「ああ、十代さんも運転できるらしいぜ」

そのスペックに只々驚く一夏とシャルロットだった

今日から始まる臨海学校

誰もがワクワクしている

どんな良いことが起こるのかと

第２３話　状況説明、そして臨海学校開始（後書き）

結局状況整理で臨海学校に全然触れてない……
次回は初日です。頑張ります
盾無会長をやっとからませることができました

感想・指摘等あればよろしくお願いします

第２４話　海だ！　刺身だ！　もう一人だ！？（前書き）

書かせていただきます
ついにあの人物を出します

第２４話　海だ！　刺身だ！　もう一人だ！？

少し一夏には疑問があった。何故か一つ空いている空席、千冬に聞いたが後で使うと言われただけだった。そしてもう一つ、今一夏の膝の上にはファラオがいる

（何でついてきたんだろう……？）

「一夏君はひどいのにゃ、私に一人で寂しく留守番していろというのかにゃ？」

いきなり大徳寺が出てきたので少し驚いた

「いえ、そういうわけでは……」

「まあ確かに気になるかも知れないけど、気にしないで楽しむといいにゃ。ほら、そろそろ目的地に着きそうだにゃ」

大徳寺の言うとおり、目的地の旅館に到着した

すぐに挨拶をして、皆が自分たちの部屋を目指した

ちなみに一夏は教員と同じ部屋、残り二人は教員の部屋のすぐ横。しかも大徳寺とファラオが監視しているうえ、少しでも騒げば教員の部屋に聞こえてしまうらしい

そのことを知った女子はショックを受けていた。隣の部屋には鬼教官こと織斑千冬がいるからもし部屋に入ったらどうなるか……想像

したくないのだろう

そんな落胆な事実を知らず、男子三人はそれぞれの部屋に入り荷物を置く

今日は一日中自由時間のため思いっきり遊べる。三人は着替えを持ってすぐに海に行くことにした。特に待ち合わせをしていたわけでもなかったので、それぞれ違う順番に海に向かった

一夏　ｓｉｄｅ

「ふう、海も久しぶりだな」

そう思って歩いていると地面に何か生えてる……ウサ耳？

……間違いない、あの人だ……

近くにいた箒なんて見た瞬間無視してるし……とにかく引っ張るか

少し力を入れて引っ張るとすぐに抜けた。しかし何もない

そう思った瞬間、上から何か降ってきた。慌てて避けるとそれは人

参でした……って何だよ！　これ！？

「いっくん、引っかかったね！」

人参が縦に割れ、中から出てきたのは予想通りの人物、篠ノ之束さんだ

「おひさ～ねえ、箒ちゃんどこかな？　さっきまで近くにいたよね？　まあ、私の頭にある箒ちゃんレーダーで探せるし大丈ぶい」

この人、自分の妹を探すレーダーなんて作ってるのか……さすが天才というべきか？

そのままトコトコ走って行ってしまった……俺も海に行こう……

すぐに着替え、海に出ると皆はしゃいでいる。やっぱり海はいいよな

「織斑君、後でビーチバレーやろう」

「わかった、その時に呼んでくれ」

誘えたって喜んでるけど、そんなに嬉しいのか？

「一夏さん！　サンオイルを塗るという約束をお願いしますわ」

「一夏！　次はあたしに付き合いなさいよね！！」

後ろからセシリアに声をかけられた。そうだった、十代さんの戦いを見るため、昨日そのままセシリアと鈴おいていったため、今日は一つ言うことを聞かないといけないらしい……

とりあえず、やることにしたが……サンオイルなんて塗ったことないから心配だ

その後鈴に何されるんだろう……

一夏　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

遊星　ｓｉｄｅ

海に行こうとも思ったが、その前にＤ－ホイールの調整をすることにした

昨日許可をもらえたのは正直意外だった。まあ、必要になる状況になってほしくはない

だが油断はできない……この臨海学校で何かが起こる……そんな気がする

よし、作業はこのくらいでいいか。しかし海か……最後に遊びで泳いだのはいつだろう……

まあ、気にしていてもしょうがない。準備を済ませ、行くことにした
クロウとジャックがいたら泳ぎで競争とかなりそうだな。そう考え
ながら海に向かった

着替えて海に着くとシャルロットと……全身にタオルを巻きつけて
ミイラみたいになっているのは……ラウラか？

彼女たちは不機嫌になりながら何かを見ている。その先を見てみる
と一夏がセシリアにサンオイルを塗っているようだ

「どうしたんだ？　そんなところで一夏を見てて」

「うわぁ！　遊星、驚かさないでよ」

「心臓に悪い……」

ミイラ姿のお前の方が悪い気がするが……

「それよりどうしたんだ？　一夏がセシリアにサンオイルを塗るこ
とがそんなにいやなのか？」

「えっと……いいの！　女の子にはいろいろあるんだよ」

そういう女の子とかなんとかは苦手だ。アキや龍可にもいろいろ言
われたことがあったか……まあ、ひとこと言っておくか

「何事も直接言った方がいいぞ。そうしないと伝わらないこともあ
る」

二人ともわかっているけど……という感じの表情だった……ラウラは顔が見えてないので本当かどうかわからないが

とにかくその場を去り、泳ぐことにした。何だか誰かに見られて騒がれている気がしたが、まあゆっくりするか

遊星　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

十代　ｓｉｄｅ

先に遊星が部屋から出て行った。何でもＤ－ホイールの調整らしいやっぱり警戒しているんだろうな……一応俺も昨日デッキとＩＳの調整をしている

でも今は自由時間だしな

「そうなんだニャ、休めるときにはしっかり休んでおくものだニャ」

大徳寺先生の言う通りかもしれない。よし、行くか

「あ、十代君。お魚を釣ってきてほしいんだニャ」

「あ～悪いんだけど、ここら辺って釣り禁止なんだって。さっき会った従業員の人が言ってた」

俺の言葉にファラオはショックを受けてた。まあ、食事の時になんかもらっとくか

そのまま海に出ることにした。アカデミアの時に遊んだ以来か

結構きれいなところだな……

「お～じゅうじゅうだ～。なかなか鍛えてるね～」

こののんびりしている感じは本音か……あれって水着なのか？　ただの着ぐるみにしか見えない……

「まあな、ところで何の用だ？」

「う～んとね、日向ぼっこする？　それとも砂のお城遊び？」

いや、泳ごうぜ、っと気になることがあった

「そういえば簪は？　本音って確か付き人なんだろ？」

「かんちゃんはね、海が好きじゃないの～暑いのも苦手だし、塩で髪がいたむからって」

髪のことを考える女子って大変だよな。俺の場合そういうの気にしないから

「ん～？　かんちゃんいなくて残念？」

「まあな、こういう風に遊べる機会ってあんまりないからな。でも

いやならしょうがない。俺の友達にも浮輪ないと海行きたくない奴いたし」

「そうだね～」

話していると本音の友達がビーチバレーをやるから参加しないかと誘われた

もちろん、俺は参加することにした。やっぱり海でしかできないことをやるべきだもんな

行ってみると一夏とシャルロット、ラウラもいた。なかなか楽しめそうだ

結局俺達は昼食の時間までたくさん遊んだ

ちなみに途中で来た織斑先生とビーチバレーをやったが、歯が立たなかった……あの人すごいよな……一夏もまさかあんなに……って感じだった

十代　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

遊んだあと、夕食の時間となりみんな広間に集まり、夕食を取っている

昼食もそうだったが、夕食も刺身である。そのことに多くの人は喜んでいた

「本当に俺、この学園に来てよかったよ。俺の修学旅行の時とは大違いだ。飯もうまいしな」

「へえ、十代さんの学園の修学旅行ってどんな感じだったんですか？」

一夏の言葉に女子はピクリと耳を傾けた。十代と遊星の情報はあまり手に入らない。そのため、こういう時に調査するのだ

「ああ、俺の学園ってさ、クラスによって待遇が違ったんだ。優秀な奴にはいい待遇って感じで。それで一番優秀なところは高級ホテルだったんだって、で次にいい所はここみたいな感じの民宿。俺は成績が良くなかったから一番下のクラスだったんだ。だからこういうところ初めてなんだ」

「何か、そういう階級って大変だね。いくら女尊男卑とはいえそこまで差はないのに」

「で、十代さんはどこに泊まったんですか？」

シャルロットと一夏の質問に答える

「俺らの所？　河原でテント張って野宿」

……沈黙が起きてしまった。まさかそんな回答をされるなんて予想していなかったから

（いくらなんでもその扱いって……）

（女尊男卑のレベルじゃないよね）

（デュエルアカデミアの階級の噂はアキたちに聞いたことがあったがそんなに酷かったなんて……）

「……十代さん、刺身少しあげます」

「僕も……」

「何だよ！　何でそんなかわいそうな目で見るんだよ！！」

文句を言うものの笑顔で話していた

「まったく騒がしい奴らだ……ほら、これをどうぞ」

「ありがとうございますにゃ。でも、こうやって楽しく食事をするのも彼らにとっていい経験になるのにゃ。まあ、少し度が過ぎたら一言言うくらいでいいんじゃないですかにゃ？」

大徳寺に……というよりファラオにご飯を与えながら二人は話している

「うむ、ではその度は過ぎたので一声行ってくる」

その姿に大徳寺は笑顔で見送った

「楽しそうですね」

「やっぱり生徒の笑顔を見るのは楽しいですにゃ、山田先生もそうでしょう？」

「ふふふ、確かに」

ファラオを撫でながら楽しく話していた

夕食も終わり、一夏が千冬にマッサージをしている頃、十代と遊星は海にいた。もちろん千冬の許可は取ってある

すると、そこに光があふれだし、中から人が現れた。少し金の混じった髪の毛を持った背の低い少年だ。彼の首には四角錐を逆さにしたものをペンダントにしていた

「「お久しぶりです、遊戯さん」」

遊戯と呼ばれた男は笑顔で答える

「うん、久しぶりだね。何だか二人とも前より強くなった感じがす

るよ」

「ああ、感じるぜ。二人の闘志がな」

突然の声に驚き、周りを見渡すが誰もいない

「驚かせてごめんね、これが僕のＩＳだよ。名前はアテム……君たちの時代にも伝わる名もなきファラオの名前を取ってつけたんだ」

「そしてこの中には僕の記憶からとったファラオの人格が入っている。ただのデータかもしれないけど僕は彼を本当の相棒だと思っているよ」

遊戯は自身について説明してくれた

「すごい……まさか名もなきファラオと呼ばれた人物の名前を知ることができるとは……」

「でもこのことは秘密にしておいた方がいいんですよね？」

十代の言葉に頷く。このことは本当に親しいものにしか教えない。そう遊戯は思っていたから

「部屋に戻りましょうか、疲れていますよね？」

「悪いけどそうしてもらえるかな？　それと僕はしばらく隠れていた方がいいんだよね？」

「ええ、こちらの協力者に後で会いに行きますので、それまではしばらく」

そのまま三人はこっそりと部屋に戻った

その後しばらくし、就寝時間から五分後、千冬は十代達の部屋に来た

「初めまして、武藤遊戯と言います。そしてこちらがＩＳ、アテムです」

「よろしく頼む」

千冬は遊戯のペンダントに少し驚いたが、すぐにデータが入っていると分かると納得した

「わかった、武藤、お前をクラスに紹介は臨海学校後になる。騒がれるからな……それと」

「わかっています。完全なる理想郷（パーフェクトユートピア）ですね」

「ああ、襲撃があった時は出てもらうかもしれない……頼む」

すぐに彼女は部屋を出て行った

「これからよろしくね、二人とも」

「「はい、よろしくお願いします」」

ここに三人の戦士が終結した

第２４話　海だ！　刺身だ！　もう一人だ！？（後書き）

遊戯の詳しいスペックはもう少ししたら書きます
とりあえず本物のアテムはいないけどデータだけのアテムはいるという感じです
感想・指摘等あればよろしくお願いします

第２５話　天才？　天災？　登場（前書き）

書かせていただきます
天才のあのお方が登場です

第２５話　天才？　天災？　登場

次の日の早朝、遊戯を部屋に残して十代と遊星は海岸に向かった
もちろん、旅館の人には遊戯がいることを話してある
今日は１日中、ＩＳの各種装備試験運用とデータ採取になる
しかし十代と遊星のＩＳは特殊すぎるため、他の人の手伝いということになる

「全員、迅速に行動を取れ！　それと篠ノ之。ちょっとこっちにこい」

千冬は生徒に指示を出す。だが、一人箒を呼んだ

「今日からお前は……」

「ちーちゃ～ん！！」

どこからやってきたのか砂煙をあげながら無茶苦茶速く走ってくる人がいた
その人は両手を広げながら飛び、千冬に抱きつこうとした

「うるさい、束」

そう一言言って顔面にアイアンクローをかました

その光景に多くに人はぽかんとした。十代と遊星、大徳寺も例外ではない

「束、自己紹介しろ。うちの生徒たちが困っている」

「ハイハイ、私が天才の束さんだよ。以上！」

たったそれだけの挨拶だったが、周りが騒ぐのには十分だった

「遊星、確か束ってＩＳを開発した人だよな？」

「ええ、そうなんですが……想像と違いました」

こそこそと二人は話していた

「姉さん、頼んでいたものは……」

「ふふん、公開しちゃうよ～箒ちゃんの専用機、紅椿！　全スペックが現行ＩＳを上回る束ねさんのお手製だよ」

いきなり空から降りてきた金属の塊が開いて中から真紅の装甲に包まれたＩＳが出てきた

「さあ！　今からフィッティングとかしちゃうから。超特急で終わらせちゃうからね」

すぐに箒は紅椿を装着する。束は一気に作業を始めた

その作業の速さに多くのものは驚いた。しかし遊星と十代、大徳寺

は別のことが気になった

束がいくら話しかけても箒は無視するか、他人行儀に返事を返すだけだった

「一夏君、彼女たちは姉妹なんですよね？　それなのにあの空気……いったいどういうことですかにゃ？」

「俺も詳しくは知らないんですが、束さんがＩＳを開発したせいで、箒が転校しないといけなくなったらしいんですよ」

束と箒に聞こえないようにひそひそと大徳寺と話していた

そのころ、別の生徒が身内で専用機をもらえるのはずるいと言ったことに束は指摘していた

「後は自動で終わるからその間にいっくんの白式を見せて……ってこの猫邪魔なんだけど」

束はファラオを蹴り飛ばそうとしたが、気が付いたのか慌てて逃げ出した。束は全くという感じだったがすぐに笑顔で一夏の所に来たすぐに一夏は白式を展開して束に見てもらった

「ふ～ん、見たことのない感じだね……おや？　この部分は誰がやったのかな？　なかなか面白いね」

ディスプレイを何個も出して一夏のデータを見ていた

そこに一人の女子が束に近づいていた

「あ、あの！　篠ノ之博士のご高名はかねがね承っております。よろしければ私のＩＳを見ていただけないでしょうか？」

その女子はセシリアだった。いつもの自信満々な態度ではなく、目をキラキラさせていた。しかし、束の返事は

「やなこった。私の知り合いに金髪なんていないよ。今はちーちゃんにいっくんと箒ちゃんとの数年ぶりの再会なのに邪魔するなんて理解不能だね」

とても冷たい返事だった。彼女の視線も同じく冷たくなっていた

「え？」

「うるさいからあっち行っててよ」

その言葉にセシリアはショックを受け、去って行った

「まったく変な金髪だったね。外国人を図々しくて嫌だね。日本人最高だよ。まあ日本人もどうでもいいんだけどね。いっくんにちーちゃんと箒ちゃん以外は」

「それよりさ……いっくんのＩＳをいじったのって誰？」

「えっと……」

束は一夏の視線の先を見る。十代と遊星、それに大徳寺の姿がそこにあった

先ほどの束の対応にどうやって話せばいいかわからずにいた

「この人たちは？」

「えっと右から十代さん、遊星さん、大徳寺さんです。大徳寺さんはホログラムらしいんです。実際にやってくれたのは遊星さんです」

その瞬間、束は笑っていた

「やだな、いっくん。あれはホログラムじゃないよ～それにさ……なんかあの二人、人間離れした力を持っているみたいだし」

その言葉に生徒全員は驚く。何を言っているのかこの人はという感じになった

「まあ、どうでもいいや。それよりそろそろ箒ちゃんの調整が終わるや」

そのままどうでもよさそうに箒の所に行った。その間に十代達に束のことを少し話していた

彼女は、人間の区別がつかない。一夏と千冬、箒に両親だけが分かるらしい。酷かった時は、他人を徹底的に無視していたらしい

「何というか……天才っていうのもすごいな」

「変人と言ってもいいかもしれないんだニャー」

４人は箒と束の二人を呆れながら見ていた。とりあえず箒のＩＳの様子見ることにした

空へものすごい速さで上がって行き、束の用意したミサイルを一気に切り裂いていた

箒はものすごい笑顔になっていた。自分に新しい力が手に入った事への笑顔なのだろう

束の所に戻ってきた。その瞬間、山田先生が慌てて千冬の所にやってきた

何やら普通でない手話を行っていた

「私は他の先生に伝えてきます」

「了解した。全員、注目！　今日のテストを中止。ＩＳを片付け、旅館に戻り部屋で待機しておけ。許可なく部屋を出たものは我々で身柄を拘束する」

騒がしくなっていたが、千冬の忠告により急いで行動をした

「専用機持ちは集合しろ！　織斑、凰、オルコット、デュノア、ボーデッヴィッヒ、遊城、不動！　それと篠ノ之も来い」

気のせいか箒は何故かご機嫌だった

「2時間前にハワイ沖で試験稼働にあったアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用ＩＳ、銀の福音が暴走した」

集められた人たちは旅館の一番奥の部屋で作戦会議を行っていた。どうも、暴走したＩＳを生徒たちの手で止めなくてはならなくなったようだ

そしてまとめられた意見として、一夏が必要になった。しかしこれは訓練ではなく実戦

無理強いはせず、覚悟がないならやめるべきだと千冬に言われた

「……俺、やります」

覚悟を決めた一夏の顔を見て千冬は笑顔になった

「……分かった、では作戦だが……」

「ちょっと待った！　いい作戦があるよ」

天上から出てきたのは束、しかも首が逆さになっている

「うわ！　天才ってすごい事するんだな……」

「でしょ？　私はそんじょそこらの天才とは違うからね」

十代の言葉にエッヘンという感じになっている

「まあそれはいいとして……ここは断然！　紅椿の出番だよ！」

束が作戦を説明。紅椿にある展開装甲を使えばよいらしい。その結果、箒と一夏のタッグが出陣することになった

しかし十代と遊星、それに千冬は不安に思っていた。理由は一つ、箒の様子だ

二人が準備している中、十代は千冬に聞いてみた

「先生、篠ノ之のやつ……浮かれていますよね」

十代の質問に頷いた。このままでは一夏が危ない。そう思い、二人は自分の部屋に向かった

作戦開始時間になった。正午少し前ということもあり、日が照っている

砂浜には一夏と箒が並んでいた

「来い、白式」

「行くぞ、紅椿」

二人の体を包むかのように装甲が展開された。これから命がけの戦いに一夏は少し不安になっていた

その様子を見て箒は笑いながら話す

「一夏、大丈夫だ。何も心配するな、大船に乗ったつもりで行け」

「……ああ、わかった」

一夏は彼女の言葉に逆に不安になった

千冬に短期戦で決めること、無理だけはするなと最後に指示をされ、作戦を開始しようとしたその時

「ちょっと待った」

一夏達の下に一人の男がやってきた。十代だ

「何のようだ、遊城！？　私たちはこれから」

「わかってるって……一夏、これを首にかけて持って行ってくれ」

十代の手には長方形の薄いお守りみたいなものがあった

「お守りだ！　初めての実戦なんだろ？　ＩＳに乗っている時は、楽しく……な」

「……はい！」

一夏にとって十代の言葉のほうが不安を取り除くことができた。そのまま彼は旅館に戻って行った

「……全く……何が楽しくだ。一夏も一夏だ。あんな奴の言葉よりも私の言葉を信じてほしいのに……」

先ほどの様子を見ていた箒は不機嫌になっていた。だが、すぐに切り替える

自分は一夏のパートナーだから、彼を守れるのは自分だけだ

そう言い聞かせ

「行くぞ、一夏！」

「おう」

作戦は開始された

第２５話　天才？　天災？　登場　（後書き）

何だか色々飛ばしてますね……
感想・指摘等あればよろしくお願いします

第２６話　ＶＳ銀の福音……？　新たな作戦（前書き）

書かせていただきます
敵さんも活躍です

第２６話　ＶＳ銀の福音……？　新たな作戦

紅椿のものすごい速さで一夏と箒はすぐに福音の所にたどり着いた
すぐに一夏は切りかかろうとしたが、かわされてしまい相手は戦闘態勢に入ってしまった
銀色の翼持つ福音はまるで泳ぐかのように一夏の攻撃を避けていく
さらに悪いことにその翼は砲口にもなっていた
そこから撃ち出されるエネルギーの弾丸は威力が高いだけでなく連射力もある
このままでは攻撃は当てられない。そう思った一夏は箒と協力し、攻めることにした
「箒、左右から同時に攻める。左は頼んだ！」
「了解した！」
同時に攻撃をするがあまり意味はなく楽々とかわされてしまう
「こうなったら私が隙を作る。その間にやってくれ！」
「わかった！」

箒は二刀流と腕の装甲から出たエネルギーの刃を使って様々な方向から一気に攻める

これには福音も防御をしなければならなくなっていた。福音は反撃のため、全方位に向けて砲撃をした

その瞬間、隙ができた。しかし同時に一夏は海面であるものを発見した

彼は福音を狙わず、一発の砲弾を消した

「何をしている!?　せっかくのチャンスを」

「船がいるんだ!　どうしてこんな所に……密漁船か!」

その船を助けることはできた。だがその代償として、一夏のＩＳのエネルギーが切れてしまった。つまり作戦は失敗にしてしまった

「馬鹿者!!　そんな犯罪者など放っておけばよかったのに……それをお前は!」

「箒!!」

一夏の一言に箒は驚いた。彼の寂しそうに見る表情に

「どうしてそんなことを言うんだよ……力を手にしたら弱い奴はどうでもいいのか?　全然お前らしくない……」

箒は動揺してしまった。その結果彼女のＩＳのエネルギーも切れてしまった

（！　嫌な予感がする！　福音だけのせいじゃない……一体……）

その瞬間、一夏の耳に声が響いた

「ターゲット停止。攻撃できますね？」

「大丈夫です。狙いもばっちりです」

福音の上に謎のＩＳが２体存在していた。福音も箒に狙いをつけていた。同時に謎のＩＳ２体も彼女に標準を定めていた

「彼を巻き込んではいけませんよ。彼女だけを狙いなさい」

「わかっていますよ」

（箒……ダメだ！　気が付いてない……間に合え！）

一夏は刀を捨て最後のエネルギーを全て使い、瞬間加速

呆然とした状態で攻撃を受けたらどうなるかわからない。だからこそ守らないといけない

そう思いながら加速を続けた

「ハイパーブレイズ！！」

「ダイジェスティブ・ブレス！！」

一方から螺旋状の炎がレーザーのように撃ち出され、もう一方も黒いエネルギー体がレーザーのように撃たれた

福音もエネルギー弾を一気に放った

（頼む！　白式！　頼む！）

ぎりぎり間に合い、一夏は３つの攻撃を背中で受け止め、箒をかばった

エネルギー弾の爆発だけでも激痛なのに炎ともう一つの黒いエネルギー体の攻撃で一夏は死ぬのかと思った

（クリ～！）

（！　どうしてハネクリボーが……このお守りから出てきた？）

突然出てきたハネクリボーが光の膜を作って一夏のダメージを軽減してくれている

だが敵の力が強すぎて大きな効果はなかった。しかし、一夏が死ぬことはなかったようだ

（ありがとう……ハネクリボー……ありがとう……十代さん……）

心の中でお礼を言い、箒の方を笑顔で見ていた

（……無事で良かった。泣きそうな顔だ、本当に似合わないんだな）

「一夏、一夏っ！　一夏ぁっ！！」

そのまま二人は海へとまっさかさまに落ちて行った。気を失うまで、彼は最後の力を振り絞って箒を守っていた

その様子を見ていた二人の女性は困惑していた

「どうするんだよ？　間に合う訳ないって言ったのはあんたでしょ！？　あいつ死ぬかもしれないのよ」

「……とりあえず、あの船をどうにかしておきましょう……」

「おい、そんな場合か？　それに今なら篠ノ之博士の妹のＩＳを」

相方の提案に首を振った

「……いったん彼女たちを放っておくようにとあの方からの連絡です。私たちは良い世界を作るために活動している者……完全なる理想郷（ユートピア）（パーフェクトユ）なのですから船の中にいる人達を守るのも私たちの使命の一つです」

そのまま彼女たちは福音に悟られないように海に向かって行った

あれから三時間は経過しただろうか……

一夏は旅館の一室にいる。ただし眠っていて、彼の体には至る所に包帯が巻かれている

近くにいた箒はうなだれていた。彼女のいつものリボンがないため髪は垂れていた

「……私のせいで……」

二人が海から引き上げられ、どうにか旅館に戻った彼女に待っていたのは

「作戦は失敗だ。以降、状況に変化があれば招集する。それまで各自現状待機をしろ」

千冬の言葉だった。そのまま彼女は一夏の治療の指示をした後、作戦室に戻って行った

その際、遊星が彼の首にかかっていたお守りを回収していた。彼は一度箒を見て、何も言わずに去って行った

箒にとって自分を責めてくれた方が何倍もよかった

「どうして……いつも……」

そのまま彼女はうなだれていた

「織斑先生、僕たちに出撃の許可を」

「現状待機、そう言ったはずだ」

一夏が運ばれて少しした後、シャルロットは作戦室のドアをノックし自分たちのしたいことを告げる

しかし千冬にすぐに却下される。ドアすらあけてもらえない

（……やっぱり、黙って行くしか……勝算は低いかもしれない……けど、このままなんて嫌だ）

シャルロットは考えながら歩いていると、遊星とすれ違ったことに気が付いた

彼も作戦室に用事なのだろうかと思い、こっそりと見てみた

少し話すと、千冬は作戦室から出てきて遊星と共にこちらに向かってきた

「すまない、シャルロット。通してくれ」

「あ、ごめん、遊星」

道を開けるが、彼女は気になり、後をつけることにした

目的地は十代と遊星の部屋。そこに二人は入って行った。シャルロットも入ろうとした。しかし

「ここは通せないのにゃ」

ファラオと大徳寺が立ちふさがる

「どうして……ですか？　今がどういう状況だか」

「わかっているからこういうことをやっているのにゃ。シャルロットさん、君は一夏君の仇を取りたい……そう思っているのは分かるのにゃ……でも、今はそれだけじゃないのにゃ……ここにいる人達はそれを話し合ってる……だから戻ってほしいのにゃ」

シャルロットに優しく戻るように言う大徳寺。納得はいかない、そう思っていたが、彼女は戻ることにした

（さっき遊星が一夏から何かを回収した時、ハネクリボーも一緒にいた……関係がありそうだけど……僕には何もできない）

「……大丈夫か？　遊城」

「何とか……しかしこんなことになるなんて」

「うん、僕も予想していなかった」

ここにいる四人は先ほどの戦いの様子を見ていた

実は一夏に渡したお守りには仕掛けがあった。一つ目はハネクリボーのカードを入れていた。このため、あの状況で出てきてくれた。ただ、十代が力を使ったため、少し疲弊している

二つ目は小型のカメラをつけていたこと。これにより今見ることができる

ちなみにこのお守りは特別な素材で作られているうえ精霊の力もあったため、傷一つついていない

「三幻魔の力に……」

「三邪神の力……」

十代と遊戯は呟く

「一体何だ？　それは？」

千冬の質問に答える

「まず、僕たちのやっているデュエルモンスターズのカードの中に、三幻神と呼ばれたカードがあったんです」

『それを抑止するために作られたのが三邪神のカード、実力も十分にある……今回あいつらが使っていたのはイレイザーと呼ばれる神の抹殺をつかさどる邪神だ』

「三幻魔は俺のいた学校に封印されていたカードだったんです。三幻神に匹敵する力を持っているモンスターです。今回出てきたモンスターは神炎皇ウリア……」

「……一人一種類ずつの力を持っているみたいですが、それぞれ三体の力をコントロールできているかはわかりませんね……」

遊星は画面を見て呟いていた

「神に匹敵する力か……だがお前たちは打ち破ったことがある……

そうだな」

千冬の言葉に頷く二人

「……福音だけでも厄介なのにそんな力を持つ奴らがいたとは……幸いなのは福音とは無関係なことか……だが、奴らの目的は何なんだ……なぜ篠ノ之のＩＳを狙ったんだ？」

千冬は頭を抱えるがすぐに三人に言う

「お前たちには出撃の許可を与える。完全なる理想郷（パーフェクトユートピア）を止めることができればどんなことをしてもよしとする。作戦は任せる！　福音のことはこちらでやる」

千冬は部屋を出て行った。三人はそのまま考える。その時遊星は、あることに気が付いた

「……セシリアたちが外で……まさかあいつら！」

「一夏君の仇を！？」

「どうする？　一夏の奴も目が覚めて皆がいないなんてことに気が付いたら……」

「間違いなく出撃するね。あの男はそういうやつだ」

ユベルの意見に頷く遊星と十代。遊戯はまだ会ったことがないのでよくわからないという感じだった

「そんな無茶はさせられない……僕は一夏君の所に行く。そして彼

を止める。今他の人は部屋で待機のはずだから外に行っても大丈夫だしね」

遊戯の意見に頷く二人

「わかりました。十代さん、俺達は……」

「ああ、あいつらを止めよう！　調整は大丈夫だよな？」

「もちろんです。十代さんのＩＳも、俺のＩＳも。そして遊戯さんのＩＳも、三人ともいつでも出撃できます」

遊星の言葉に二人は笑顔で返す

「行こう！」

「「はい！！」」

遊戯の一声で気合を入れ、それぞれ持ち場に行くことにした

第２６話　ＶＳ銀の福音……？　新たな作戦（後書き）

感想・指摘等あればよろしくお願いします

第２７話　束の考え　それぞれの想い（前書き）

書かせていただきます

第27話　束の考え　それぞれの想い

目的地に行こうとドアを開けると一人の女性が立っていた

篠ノ之束だ

「どこに行くのかな？　少しお話がしたいんだけど。あ、君たちに拒否権はないよ。断るならここにいた猫を始末しちゃうから」

彼女はファラオの首根っこを掴んで脅していた

従うしかなく部屋に戻る三人。束は笑顔で手を放して、部屋に入ってきた

「うんうん、素直な人たちはいいね……さてと、無駄なことはしたくないから聞くけど、君たちってこの世界の住人じゃないんでしょう？」

いきなり言い当てられ驚く三人

「ふふん、超天才の束さんをなめちゃいけないよ。いっくんのＩＳに組み込まれたものを見た時は驚いたね。あんな技術があるなんてね。まあそこで気が付いたんだけどね」

「教えてほしいな、どうして君たちはこの世界に来たのかな？」

この人には勝てない。そう思って三人は話し始めた。異世界から来たこと、完全なる理想郷（パーフェクトユートピア）が一夏を狙っていること。敵の力が自分た

ちと同じ世界から来ているのではないかということ

話を聞いて束は真剣な顔になった

「……君たち、これを見てくれるかな？　きっと心当たりがあると思うよ」

束が一枚の写真データを見せた。そこには全身が真っ黒でところどころに青い線の入った巨人のような怪物が写っていた

「これは！　地縛神！？　こいつまで来ていたのか？」

遊星は驚き、大声をあげた。そのことを謝り遊星は地縛神について話した

ナスカの地上絵がモデルのモンスターであること、ダークシグナーと呼ばれる人が使っていたこと。使用した際に周りの人間の魂を奪うこと

だが、束は一つ反論した

「う～ん、魂を奪うって言ってたけど、ここにいた人たちは生きてたよ。すごく衰弱していただけで。だから力は完全に再現できてないのかもね」

束の意見になるほどと思った

「……うん、なかなか面白かったよ。そろそろちょうどいい時間だよ。彼女らは量子変換（インストール）してたからあのまま行ってもボーと待っているだけだったんだ。それにいっくんの部屋にはまだ人がいるしね。

う〜ん、私っていい人」

そのまま彼女は部屋を出ていこうとしていた

「多分ね、いっくんは止まらないよ。だから君達はいっくんを導いてあげる方がいいと思うよ。天才の言うことだから間違いないね」

去り際にそう言い放つ。その言葉を彼らは考える

そして遊戯は決めた。一夏にすることを、そして十代達は海岸に行くことにした

「……ト、シャルロット！」

「シャルロットさん！」

一夏の部屋に向かう三人の女子、ラウラとシャルロット、セシリアだ。ちなみに鈴は先に向かっていた

シャルロットが少しボーとしていたため、二人は心配になって声をかけていた

「ああ、ごめんね。少し考え事してたから」

「それならいいが……福音戦では気を抜くなよ」

「大丈夫」

そうは言ったが、シャルロットは不安に思っていた

（さっき大徳寺さんが言っていたこと……それがどうしても気になる）

大徳寺に言われた一夏について十代達が話していること

何故彼らが話すのか……精霊が関係しているとしてもシャルロットには分からないことが多すぎる。彼女は見えて話ができるだけだからだろう

少し遠くからドアが開く音が聞こえた。恐らく鈴が部屋に入ったのだろう

三人も入ろうとしたが、鈴が話し始めたのを聞いて少し様子を見ることにした

「あーあ、わかりやすいわね、あんた」

箒は何も返事をしていない。うなだれたままなのだろう

「一夏は自分のせいでこうなった。だから落ち込んでますって？ふざけたことしてんじゃないわよ！！」

「いい！？　私たちは今、戦わないといけないのよ！」

「私は……もう、ＩＳを……使いたくない……」

そんな弱々しい箒の返事の後、バシンッ！　という音が響いた。鈴が箒をはたいたのだろう

「甘ったれるんじゃないわよ！　専用機持ちになった人はね、そういうわがままを言える立場じゃないの」

「なら……もう……」

「戦いたくないって言ったら本気でぶん殴るわよ！　この臆病者！

！」

その言葉に火が付いたのか箒は大声を出す

「……ど、どうしろというんだ！？　敵の場所が分からないんだぞ！　私だって……一夏の仇を取りたい……」

その言葉を聞いて鈴は、安心したような目で彼女を見た

「やっと言ったか……めんどくさかった。場所ならね」

「ここから三十キロ離れた沖合上空に目標を確認した」

さすがに大丈夫だと思い、外にいた三人は部屋に入ってきた

「僕たちはみんな準備完了している」

そして箒の方を四人は見て

「箒はどうするの？」

「……戦う！　今度こそ負けない！」

「わかったわ、じゃあ作戦会議ね。今度こそ確実にやるわよ」

そのまま五人は作戦会議を始めた

十数分で作戦会議は終わり、行くことにした

シャルロットは部屋を出る前に一夏を見て心の中で彼に話した

（一夏、行ってくるね。もしかしたら大変かもしれないけど……絶対勝ってくるから……待っててね）

そう言い残して、彼女は仲間の下に向かった

五人は砂浜に出てきた。すでにＩＳを装着している状態だ

「よし、行くぞ！」

「待ってもらおうか」

ラウラの指示で皆が飛び出そうとした時、彼女たちの前に二人の人物が現れ、静止した

「……何をしに来た？　不動に遊城」

箒は質問する

「お前たちに出撃させるわけにはいかない……戻ってもらおうか」

「俺達が後はやるから」

二人の言葉は気分を害するものだった

「あんたたち、何言っているの！？　戻れですって？　ふざけんじゃないわよ！！」

「そうですわ。私たちの力をなめないでくださいますか！？」

「私たちの邪魔をするな！！」

鈴にセシリア、箒は叫ぶ。だが、ラウラとシャルロットは冷静だった

「……説明してもらおうか、いくらなんでも何も聞かされずに帰れるわけがないだろう」

ラウラの言葉を聞き、遊星は話し始めた

「……状況が変わった。今のお前たちが行けば、厄介なことになる。そのために俺達が行かないといけない」

「一夏を倒した奴を倒したいっていう気持ちはわかる。だけど今お前たちに出られると迷惑なんだ」

迷惑という言葉には我慢ができなかったのか箒は十代に切りかかろ

うとした。だが

「待って！」

意外なことにシャルロットが止めた

「おい！？　どうして止める！？　私達が迷惑と言われて何とも思わないのか？」

箒の言葉を無視して、シャルロットは質問をした

「もしかして……完全なる理想郷（パーフェクト　ユートピア）が関係しているの？」

その言葉に男子二人は頷いた。そこでシャルロットは納得した。なぜ彼らが出てきたのか……自分たちに帰れといった理由も

「完全なる理想郷（パーフェクト　ユートピア）……確か最近できた変な集団だったな」

「祖国でも聞きましたわ。何でもこの世界の歪みである女尊男卑を直すとか……」

ラウラとセシリアは存在だけは知っているようだ。しかし本当の目的は知らないみたいだ

「で？　そいつらがどうしたのよ？」

「奴らの狙いは一夏だ。そしてどういうわけか先ほどの戦いで篠ノ之のＩＳを狙っていた。敵の力は強大だ。だが……あいつらに対抗できる力を俺達は持っている」

「だから……お前たちは帰ってくれ。お前たちが勝てる相手じゃないし、俺達はお前たちを守りながら戦える自信がない」

鈴の質問に遊星は冷静に答え、十代は突き放すかのように言った

そのことが我慢できなかったのか、箒はシャルロットの制止を振り切り十代に切りかかった

十代は左腕に構えたデュエルディスクに一枚のカードを出した。それと同時に彼の眼の色がユベルと同じ色に変わった

「ネオスを召喚！」

十代の前に現れたネオスが箒の剣を受け止める。その光景に女子の皆は驚いた

彼らが使っているデュエルディスクで出てくるモンスターは映像のはず

だけど箒の攻撃を受け止めた。そんなことは不可能のはず

「これが俺の力だ……これ以上、容赦はしない。本気で来るつもりなら、俺達も本気でいくぞ！」

「何が本気だ！　お前ひとりで私たち五人を……」

「やめないか！　篠ノ之！」

遊星の一言で、箒は剣をおろし、下を向いた。そのまま遊星はシャルロットの方を向く

「……シャルロット、お前ならわかってるはずだ。あいつらがどういう奴らか」

「確かにこの前のことを見て思った……僕はあの力に対抗できないって……でも、だからって引けないんだ。ここで引いたら……僕は自分を許せなくなりそうだから……一夏をこんな目に合わせた奴らを目の前に何もしないのは」

「……十代、遊星。私たちを守らなくていい。それが私の軍人として……そして、一夏の婿としての覚悟だ」

シャルロットとラウラの覚悟を聞き、遊星と十代は考えた。彼女たちの決意を崩したくはない。いや、崩せないだろう……だが、本当に危険な相手だ。もしものことがあれば一夏は自身を責める。そういうやつだからこそ困っていた。どうしたらいいのか

そう考えていた時

「……遊城……私と戦え……もし私が万が一にでも負けたらおとなしく帰ろう……だが、私が勝った時は……」

「わかった。何でも聞いてやる……それで納得してくれるならいい」

箒の挑戦を十代は受けた。彼女の頭には血が上っているのか周りが見えていないようだ

「ちょっと箒さん？　作戦に必要なエネルギーが……」

「待った、あたしがやる。私が戦う分には余裕があるし、何よりも

あんたには福音を倒す練習台になってもらうから」

鈴も戦う気満々だった。だがこのままだと二対一になってしまう

その時

「ならば俺が出よう。二対二だ。頭数くらいは合わせておいた方が、お前たちもやりやすいだろう」

遊星は名乗りを上げた。彼のＩＳはまだ戦えない。そう言われている

「ふ～ん、いいわよね？　箒？」

「何だっていい、さっさとしろ」

箒の言葉を聞き、遊星はチョーカーに触れた

「行くぞ！　絆星！！」

遊星のＩＳが展開された。その夜空のような薄い黒の装甲は今までとは違い、遊星の左腕の装甲が十代と同じ様になっていた

さらに十二個のランプがついている

「決闘英雄（バトルヒーロー）改め……銀河英雄（ギャラクシーヒーロー）！！」

十代のＩＳが展開される。全身がかなり濃い赤の装甲だったのだが、左腕の装甲だけ輝いていた

二人の新たな姿にここにいた女子たちは驚いた

遊星はすでにＩＳの修理を終え、戦える状態になっており

十代は……第二形態移行をしていたから

第２７話　束の考え　それぞれの想い（後書き）

今回で遊星のＩＳがまともに戦える状態登場＆十代のＩＳがパワーアップしました
実力及び詳細は次回

感想・指摘等あればよろしくお願いします

第２８話　新たな力　絆星と銀河英雄　本当に戦うべき相手（前書き）

書かせていただきます
少し短いかもしれません

第２８話　新たな力　絆星と銀河英雄　本当に戦うべき相手

遊戯ｓｉｄｅ

この光景は……一夏君の夢の中かな？　何だかどこか孤島の静かな砂浜みたいだ

僕の持っているＩＳ、アテムには少し変わった力がある。今やっている人の夢を見ることだ

昔もう一人の僕の心の部屋に入った事がある。その力なのかな？原理は良くわからない

僕はその光景を見るだけにしている。あまりかかわるのも悪いから

一夏君は、さまようように歩いていた。けどすぐに足を止めた

女の子の歌声が聞こえたからだ

彼はその歌の聞こえるところに向かった。僕も行くことにする

そこには白いワンピースを着た女の子がいた

この子は一体……？

遊戯ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

箒　ｓｉｄｅ

く、なぜこんな力が奴らに……

不動のＩＳは遊城と同じように三種類のカードを使って戦っているが……恐ろしいくらいまでに奴の移動スピードが速い……気のせいかどんどん速度が上がっているようにも思える

遊城のＩＳは今までの機体より精密に攻撃ができるようになっている。第二形態移行したらこんなにも強くなるのか？

私の赤椿は、姉が作った現在出回っているどのＩＳよりも強いはず……なのに、勝てる気がしない……いかん、こんなことでは余計に勝てない

たとえ相手がどんな奴でも……勝たなければならない！　特に……遊城には

あいつは、いつも楽しくと言っている。真剣勝負において楽しむなんて意味のないことだ

一夏も影響されている！　ええい、情けない！！

だから証明したい……私の考えが正しいということを

私は持っている剣を構えなおした

その瞬間、センサーが何かを感知した……敵のＩＳ！？　馬鹿な！？　福音がここまで来たというのか？

そう考えていた瞬間、奴らは私たちに背を向けて

「罠（トラップ）カード、ヒーロー・バリア！！」

「罠（トラップ）発動！　くず鉄のかかし！」

敵の突進による攻撃から二つの防御カードのおかげで私と鈴は守られた

「……こういうことですか……遊城十代、不動遊星」

「あんた一人で来るとは思ってなかったぜ」

遊城は相手を知っていた？

すぐに不動は私たちの方を向いた

「今福音のそばには完全（パーフェクト）なる理想郷（ユートピア）は一人しかいない。こいつをすぐに倒して俺達も行く。お前たちは今すぐ出発するんだ！　行け！！」

どういうことだ？　こいつらは私たちを止めるために……

「行くよ！　箒！　このチャンスを無駄にしたらダメだ！」

シャルロットに言われ、私はすぐに目的地に行こうとした

だが……何だ？　いつもより体が重い……いや、ＩＳの動きが鈍い

どうやら私だけでなく、この場にいる敵以外皆のようだ

く、これでは……

そう思った時、いきなり体が軽くなった

そのまま私たちは福音の下に向かった

「もしかしたら十代達は完全なる理想郷（パーフェクト　ユートピア）の誰かがこっちに来ることを予想していたのかもね。だから僕たちを足止めして時間を稼ぎ、

相手がしびれを切らして敵がこちらに来てから僕たちを出撃させたのかもね」

シャルロットの言葉にラウラも納得していた。どういうことだ？

「あいつの力よくわからなかったが、私たち全員のＩＳの力を半分にしていた……福音がいるときにあんな力がある奴と戦っていたらと思うと恐ろしい。勝てないと言われたのも納得できる……だからこそ敵を一人でも減らしてくれた彼らに感謝すべきだな」

「確かに……でも十代さんたちはどうやってそのことを？」

そうだ、とにかくそれが分からない

「まあ、あいつらにいいように利用されてる感じがするのが嫌だけど……とにかく！　行くわよ！！」

鈴の言うとおりだ……私は……勝つ！！

箒　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

十代　ｓｉｄｅ

どうやらうまくいったようだ。以前、何回か学園を襲撃してきた奴だだが、今回は勝たせてもらうぜ

「……なぜ、力が……」

相手は戸惑っている。無理もないな

「俺の使ったエフェクト・ヴェーラーの効果でしばらく邪神ドレッドルートの効果は無効にさせてもらった」

「！　邪神のことに気づいていたのか！？」

「ああ、そしてもう一つ……邪神は全部で三体いるはずだがお前はアバターの力が使えない」

遊星の言葉に奴は動揺した。そうか、だからあいつは一人で来たのか

「邪神ドレッドルート……場に恐怖を与える邪神……それは味方にも影響してしまう……だからもう一人を連れてこれなかった」

「それだけじゃない。もしアバターの力が使えるのならば、もう一人の奴を連れてきて三幻魔の力も使った方が確実に俺達を倒せる。それをしないのはお前がアバターの力を使えないからだ！！」

俺達の言葉を聞き、奴は逃げる。どうやら福音の近くにまで行くつもりだろうが……させるか！

「銀河英雄（ギャラクシー・ヒーロー）の力、俺の周りをネオスペースに変える。これによりネオスの力を最大限引き出せる！」

そのまま奴に追いつき殴り飛ばした

「く、ドレッドルートを選んだのは失敗だった……イレイザーのプログラム変更まであと五分かかる」

なるほど、奴のＩＳは二体の邪神の能力を使えるが、どちらかを選んだらしばらく選べないようだ

「けど！　エフェクト・ヴェーラーの効果はもうすぐ消えるはず……そうすれば逃げ切れる！」

「Ｎ（ネオスペーシアン）・ブラック・パンサーを召喚！　コンタクト融合！！　ブラック・ネオス！！」

俺の背中に黒い翼を生やし、両手にかぎづめを持つ

ブラック・ネオスの力を使って相手の能力を消す

「しまった！　だったら逃げるしか……」

「逃げられると思っているのか？」

さすが遊星、あいつの前にまで回り込んでいる

「俺の機体は大体十代さんと同じ……だが、決定的に違うところがある。俺はライディング・デュエルをしながら戦っているようなもの……つまり、時間がたつにつれこの機体の速度も上がる！！」

そのことを知ると彼女の顔は真っ青になった

「そんな……馬鹿なことが……」

そのまま俺達は一気に彼女に攻撃した

ＩＳで戦う場合、デュエルと違って相手モンスターの攻撃力の方が高くても相手にダメージが行く。逆に倒すこともできる

これは俺と遊星で模擬戦をしていた時に分かったことだ

遊星はすでにシンクロモンスター、ジャンク・ウォリアーを呼んでいた

「行くぞ！　遊星！　ラス・オブ・ブラック・ネオス！！」

「スクラップ・フィスト！！」

二人の攻撃が当たり、彼女にかなりのダメージを与えた

けどまだ何とかなっているみたいだ。さすがにあの邪神を操るだけはある

そう思った時、閃光弾を放ってきた。逃げる気だ

「くず鉄のかかしを発動！」

光の威力を抑えることはできたが、少しばかし遠くに逃げられた

「追いましょう！　何としても福音と戦っている彼女たちに近づけてはいけない！」

「もちろんだ！」

俺達は再び追いかけることにした

第２８話　新たな力　絆星と銀河英雄　本当に戦うべき相手（後書き）

設定の所を更新しておきます
遊戯の出番はそろそろ……のはずです

感想・指摘等あればよろしくお願いします

第２９話　一夏の覚醒　二つの心を持つＩＳ（前書き）

書かせていただきます
体調不良＋うまく書けない＋忙しいでなかなか投稿できませんでした……
遊戯がやっと活躍します

第２９話　一夏の覚醒　二つの心を持つＩＳ

シャルロット　ｓｉｄｅ

はあ、はあ……

何とか戦えているけどここまで厳しかったなんて

福音もそうだけどもう一人の相手がつらい

「落ちろ、雷！！　失楽の霹靂！！」

黄色の機体を装着した敵、完全なる理想郷（パーフェクト　ユートピア）の一人の攻撃力の高さだ

正直言ってまともに当ったら死ぬかもしれないくらいの威力だ

作戦通りに攻撃は進めているつもりだけどもう一人の敵のせいで正直いつ失敗するかひやひやしている

「遊星と十代の言うとおりだったな。こんな相手に対して守りながら戦えるという大口を叩く馬鹿を私は見てみたい」

「そうですわね、ラウラさん……でも、幸いなことに……あの方も困っているようですわね」

セシリアの言うとおり彼女も困っている

「ち、私は関係ないのに……攻撃してないのにエネルギー弾を当てるんじゃないわよ！」

福音は彼女も敵と認めているようだ

これは幸いと思い、すぐに鈴と箒の連携により何とかして海に叩き落とすことができた

完全なる理想郷（パーフェクト ユートピア）の彼女のおかげでかく乱できたというのも気分がいいものではないが、これで福音は終わった……ここにいるだれもがそう思った

その瞬間、海面に強力な光が放たれた

僕は一体何が起こっているのかわからなかった

「!?　まずい！　第二形態移行（セカンド・シフト）だ！」

ラウラが叫ぶとすぐに福音はラウラの足を掴んでいた

そのまま福音はエネルギーの翼を生やしていた。いけない！

「ラウラを離せ!!」

「よせ！　来る……」

ラウラが何を言ったのかわからないけど早く助けないと

けど、その前にラウラはエネルギーの翼に包まれ、エネルギー弾をゼロ距離で喰らっていた

ボロボロになった彼女は、そのまま海に落ちて行った……よくも……僕の大切な友達を！

僕はショットガンを持ち出し、福音の顔面に向けて放とうとしたが、その前に僕は吹き飛んでいた……え？

そっか、福音の機体のあちこちから小型のエネルギーの翼が生えてきて……そこから撃たれたエネルギー弾に僕はやられたんだ……

……ダメだ、強さのレベルが違う。僕は閉じ行く意識の中、他のメンバーがやられてしまうのを見た……

このままだとあいつに……そう思ったけど、すでに彼女の姿は見えなかった

一緒にやられたのかな……もう……何も考えられない

ごめんね、一夏……

シャルロット　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

一夏　ｓｉｄｅ

波の音をバックに俺は一人の少女の歌を聞いていた

ふと気が付くと少女は歌うのをやめ、空を見上げていた。不思議に思い、少女に近づいて聞いてみたが返事をしてくれない

気になり、一緒に空を見上げると

「呼んでる。行かなきゃ」

その声が気になり、周りを見渡したが誰もいない。女の子はどこに行ったのか考えていると

「力を欲しますか……？」

後ろから声をかけられた。振り向くと一人の女性がいた。白い甲冑を着ていて、手には大きな剣が、顔はガードで隠されていて、半分ほどしか見えなかった

この人は一体……？

「何のために力を欲しますか……？」

難しいことを聞く人だ。でも、俺は何故かすぐに答えを言った

「仲間を守るためだな。世の中にはいろいろ戦わないといけないことがあるだろ？　腕力だけじゃなくって」

「そういう時にある不条理なことからできるだけ仲間を助けたいと思ってる。この世界で一緒に戦ってくれる仲間を」

「……そうですか」

彼女は静かに頷いた

「じゃあ行かないと」

再び後ろから声をかけられた。さっき歌っていた白いワンピースの女の子だ

無邪気な笑顔で俺の手を掴んできた。ちょっと照れてしまった

その瞬間、急に目の前が輝き始めた。いや、海も空も何もかも……

目の前の光景がぼやけていく……夢の終わりという感じか……

そういえばあの女性、白い騎士に似ていた

そのまま俺は……

「まだだよ。君はまだここで目覚める時じゃない」

いきなり声が聞こえた

「誰だ？」

ぼやけた空間から一瞬で変わり、どこか広い空間にいた

奥の方を見てみると、金と黒の色にフニャリとした特徴的な髪形のひとりの男の子がこちらに向かってくる……中学……いや、小学生か？　それにあの逆三角のペンダントは……

「背のことは結構気にしてるからあんまり言わないでほしいんだけど」

うわ、口に出ていたのか、まあそんなことより

「あなたは一体……？」

「僕の名前は武藤遊戯、織斑一夏君……君に戦う力をしっかりと理解させるために僕はこの空間を作った」

何を言っているんだ……この人は？　空間を作った？

そう思っていると彼のペンダントが光り……黄土色のＩＳを身に着

けていた

男でＩＳを使えることにはもう驚くことはないと思う。けど、彼のＩＳもまた十代さんと同じ左腕に何かついている。もしかしてこの人はあの二人の知り合い？

彼は一本の剣を構えた。彼の背丈くらいの長さの剣だ

あれ？　何でまだペンダントをしたまんまなんだ？

「さあ、一夏君。君もＩＳを展開するんだ。今から僕と……戦ってもらうよ！」

俺はＩＳを展開して構え始める。この人を倒して……この空間について……え？

俺のＩＳが……変化してる？　雪羅？　左腕のこれか！　でもどうして？

「今、君のＩＳは白式が第二形態に成長したんだ。僕が言わなくても君の頭の中に入ってきているよね？　自分自身のＩＳのことが」

彼の言うとおり確かに頭に入ってきている。何だ？　この力は？

すごい！

俺は新たに手に入れた力、雪羅を使ってみる。左手をエネルギー刃のクローに変換し、強化されたウイングスラスターを使って一気に加速。一気に決めてやる！

だが、切り裂こうとした所に、相手がもういなかった……どういう

ことだ？

「一夏君、こっちだよ」

な！？　俺よりも早く動いて避けたのか？　そんな馬鹿な！？

彼は持っていた剣で切りかかってきた。あの長さの剣なら……！？

ってどういうことだ！？　剣が長くなってるし、さっきよりも強力なオーラを放っている

右手に持っていた零落白夜で対抗しようと受け止めたが、逆に押されてる……

「一夏君……君のエネルギーの残量はもう半分しかないね」

！　本当だ！　でも……そうか！　俺の新しい武器、雪羅も自分のシールドエネルギーを使って発動するのか

もしあのまま目覚めて戦場に行って何も知らずに使っていたらと思うと……

そのまま俺は切られ、シールドエネルギーは尽きた

「そう、君は何も知らないまま出ていこうとしたんだ。でも、ここで自分の力を確認できる」

「そうそう、僕の力も教えておくね……僕も十代君と遊星君と同じ戦い方ができるんだ。そしてこの剣はサイレント・ソードマンというモンスターの持ち物なんだ。特徴として、時間がたつにつれ強く

なる」

それで最初に見た時よりも強力になったのか……でも、時間がたつにつれって言ったけどいくらなんでも成長速度が速い気がする

「ちなみにね、さっき君の攻撃をかわしたのは時の飛躍を使わせてもらったんだ。これは周りの時間をしばらく進めることができる魔法カードだよ。これで一気に時間を進めて剣を強化してかわしたんだ」

丁寧に説明をしてくれる……というかそれ、零落白夜と相性が悪いな……

「……一夏君は、零落白夜の使い方が良くないと思うよ。フルパワーでぶった切るだけだからね……戦場に戻る前に今から少し特訓してみない？」

いきなり俺の悩んでいる所を言われた……でも、特訓って何をやるんだ？　いつもほかのメンバーとやってるけど

「じゃあ今から君にはいつも使っている半分の力を維持したまま僕と戦ってくれないかな……よし、これで君のエネルギーは完全に回復したからすぐにできるよ」

本当に回復してる……彼の目的は一体……

あれから五回ほどしただろうか、完璧とまでは言わないがなんとなくわかってきた気がする

どのくらいの力を使ったらどのくらい持つのか、力の入れ具合の感

覚等だ。

時間があったらもっと調査しておきたかった

「……じゃあ、最後にもう一度戦ってもらおうか……けど、相手は僕じゃないよ」

どういうことだ？　俺は不思議に思い周りを見てみる

しかし誰もいない

その瞬間、彼の逆三角のペンダントが光った。その光が終わるとそこにはかわらず遊戯さんがいた。けど、さっきまでの彼とは何かが違う……

「行くぞ一夏！」

あれ？　さっきまでの彼と言葉遣いが違う。遊戯さんの性格が……変わった？　いや、何だろう。二重人格とかそういうのじゃないように思える

「俺は古のルールを使い、ブラック・マジシャンを召喚！」

彼の手に、魔法使いが持つような杖があった

何だ……！？　途方もない力を感じる……

急いで零落白夜を構える。雪羅は……緊急の時だ

そう俺は思った。だが、緊急の時というのはあっさり来た

「行くぜ、黒・魔・導！！」

黒い塊のエネルギー体をぶつけてきた。あれは……防ぐしかない。
直感でそう感じた

すぐに雪羅のシールドを使った。だが、すぐに相殺し爆発

爆発の煙で一気に周りが見えなくなった

「一気に終わらすぜ、一夏！　千本（サウザンド）ナイフ！」

煙が晴れ、正面にいた遊戯さんの後ろから言葉通りの数のナイフが現れ、飛んできた。受けるためのエネルギーでは間に合わないから、かわそうとしてみたが、敵わずすぐに負けた

「どうして……？　戦術がまるで違う。それにまるで別人とやっているみたいだ」

「それが俺のＩＳの真の力だ。俺は本来、ＩＳの中のデータという存在だけで生きている。基本的には相棒……お前が最初に会っていた方が本当の俺だ。こうやって表舞台に出ることができるのは相棒の許可があり、そのうえＩＳを起動している時だけだ。この時だけは体を借りることができる」

何ともわかりにくい……つまりＩＳ起動中だけでてくる二重人格っていうのでいいのか？

「一夏、まだ甘いが……空間がもう持たない、そろそろ時間だな。最後にいくつかアドバイスをしておく」

俺は彼のアドバイスをいくつか聞いた。それが終わると同時に空間が崩れていく

崩れるのと同時に俺は……

「気が付いた？」

目を覚ました。ここは、旅館……ということは、現実？

すぐに行かないと

「遊戯さん、行ってきます」

「頑張ってね。僕も後から駆け付ける」

そのまま俺は部屋を出て、すぐにＩＳを起動。福音の所に向かった。

どうしてかわからないけど、行く方向は分かっていた

一夏　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

遊戯　ｓｉｄｅ

行ったか

「相棒、俺達も」

ペンダントからする声、もう二度と聞けないと思っていた声を聴け

て嬉しい

「うん、急ごう。十代君と遊星君に加勢しないと」

僕も部屋を飛び出し、誰にも見つからないように海岸に向かいＩＳを起動させた

「アテム、行こう！」

そのまま僕は空に向かって飛んだ

第２９話　一夏の覚醒　二つの心を持つＩＳ（後書き）

次回は一夏と遊戯が戦場に乱入です
できたらなるべく早く更新したいです

感想・指摘等あればよろしくお願いします

第３０話　福音と幻魔と邪神　三つの決着（前書き）

書かせていただきます
少し駆け足気味だったかも……

第３０話　福音と幻魔と邪神　三つの決着

福音は箒の首を掴んでいた。さらにエネルギー状の翼が箒を包む

これで終わりと思い、目を閉じた時

一夏が福音を吹き飛ばした。新たな装備、雪羅の荷電粒子砲で

「待たせた！」

「い、一夏なのか……？　体は？」

箒は一夏に近づいた。そしてすぐに涙を流した

「よかった……よかった……」

「泣くなよ。心配してくれたのは嬉しいけど」

「う、泣いてないし、心配も……」

無理に強がる箒に一夏は笑顔になった。ふと見ると彼女の髪形はいつものポニーテールではなかった。リボンがないのだ

「これやるよ。誕生日プレゼント」

「リボン……そっか……今日は」

七月七日、箒の誕生日だ。リボンは先日シャルロットと買い物した時に買ったものだ

「せっかくだから使ってくれ。俺は……もうひと頑張りしてくる」

一夏は再び福音に立ち向かう。大丈夫だと自分に言い聞かせる

（確かに相手もパワーアップしている。けど、俺もした、さらに遊戯さんに……）

「一夏、相手の力を見て、どのくらいのシールドエネルギーを使って零落白夜を使うかをすぐに判断するんだ。最初は当たらなくてもいい。これは経験がものを言うからな。戦っている途中で少しずつ調整するんだ。お前がいつもやっているように全力で攻撃するのは、相手を確実に倒せると判断した時だけだ。その方がいいぜ」

「でも……そんな器用なマネが俺に……」

「ふ、俺……いや、俺達はお前ができるって思ってるぜ。千冬の弟だからじゃない。一夏、お前の心の強さを知っているからだ」

俺達というのは遊戯の二つの人格だけじゃなくって十代と遊星も入っている

一夏にはそう思えた

（少し弱すぎる……よし、これくらいで……）

雪羅をエネルギー刃のクローにして切り裂く。攻撃を受けた福音は反撃とばかりに翼を広げた

（今度は使う量を少し減らして……よし）

今度はシールドモードにして攻撃を相殺。相手の攻撃より少し上回ることができ防ぐことができた

（何とか戦えているけど調整するのはやっぱり難しいし、神経を使うな……なるべくなら一気に決めるべきだけど……まずいな）

次に相手は全方位に攻撃を仕掛けようとしている。一夏自身は先ほ

どと同じ要領でかわすことができるが、他のメンバーは負傷中。位置もばらばらなため、うまく守れるかわからなかった

「一夏！　あたしたちは代表候補生なの！　あんたが心配するほどじゃないからさっさと終わらせなさい！」

鈴の怒鳴り声に一夏は頷き、一気に福音に近づいた

一方、箒は願っていた。来てくれた人と一緒に戦う力がほしいと

その瞬間、紅椿が赤い光を放ち、自身のエネルギーを回復させていた。ワンオフ・アビリティ―である絢爛舞踏が発動した

これにより自分はまだ戦えることが分かった。箒は一夏からもらったリボンをつけて彼の下に向かった

一夏は苦戦していた。いくら調整しながら戦っているとは言ってもまだ慣れていないため、そろそろエネルギーがまずいことになった。なのに相手に決定打を与えていない

このままではまずいと思った。その時、箒が近づいてきた

「大丈夫なのか？」

「それよりもこれを受け取れ！」

箒は一夏にエネルギーを与え、全力で切りかかることができるようになった

このまま箒と一夏は協力し、一気に福音を切り裂いた

何とかＩＳを停止させることができた。アーマーを失いスーツ姿の操縦者は海に落ちて行ったが鈴が受け止めた

これで福音との戦いは終わった

「ご苦労様、じゃあ今からあんたたちは私に潰されるから、宜しく」

先ほどまでどこにいたのか、目つきと口の悪い黄色い装甲を着ていた女性が出てきた

それともう一人、彼女の後ろにいた。眼鏡をつけた女性だ。先ほどまで十代と遊星と戦っていたため、かなりボロボロだ

「何とか逃げることができましたよ。あなたの口調を直してほしいのですがまあいいです……さて、私は負傷していますし、逃げる途中で弾薬もほとんど使い切りましたが、それはあなたたちも同じ……おとなしく降参してほしいのですが……」

その彼女のセリフに体力を回復させたセシリア、シャルロット、ラウラも加わり、全員で拒否した

「……そうですか、では、織斑一夏は本人のまま、それ以外はＩＳだけを確保して帰りましょう。行きますよ。イレイザープログラム始動！」

彼女の右腕に新たに大砲が装着された

「消えなさい！　ダイジェスティブ・ブレス！！」

「喰らえ！　失楽の霹靂！！」

巨大な雷と大砲から撃たれたエネルギー砲を六人は何とかかわした。特に鈴は人を抱えているので、回避を優先させなければならない

「何だ、この威力は！？　あの女は私たちのＩＳの力を奪うのではないのか？」

「多分、それも持っている……という感じだね」

ラウラはエネルギー砲の威力に驚き、シャルロットが冷静に分析していた

「とにかく反撃をいたしませんと……」

セシリアは持っていたライフルで弱っている彼女を狙った。しかし、黄色い装甲の彼女の方向に攻撃がそれてしまった

「は、残念だけど弱ってるやつを狙われることなんて承知してるんだよ。お前は私にしか攻撃できないようになってんだよ」

下品に笑い、セシリアに電撃を飛ばす。ギリギリのところでかわすことができた

「どうする？　このままでは……」

「そう、死ぬんだよ！　ＩＳを残してな！　考えても無駄なんだよ！！　何をしようとお前たちは私しか狙えないんだよ！！」

箒の言葉に対して絶望の答えを残した

「終わりだ！　地獄の贖罪！」

雷を何発も撃ち六人をまとめて葬り去ろうとした

「ハモンが自身に攻撃対象を向ける効果を使えるのは、防御している時だけだ。つまり攻撃している今ならあいつを攻撃できる！」

海から姿を現す一つの影、彼の手には鉾が持たれていた

「な！？　海からですか？」

「ああ、Ｅ・ＨＥＲＯオーシャンにアクア・ドルフィンの力を使わせてもらった。なかなか楽しかったぜ、海に入ったのは。でも、今は……お前を倒す！」

そのままメガネの女性を殴りつけた。即座に二体をリリースしてネオスを召喚していた

そして連続する雷の前にものすごいスピードで誰かが入ってきた

「レベル３のセカンド・ブースターにレベル３のジャンク・シンクロンをチューニング！　疾風の使者に鋼の願いが集う時、その願いは鉄壁の盾となる！　光さす道となれ！　シンクロ召喚！　現れよ、ジャンク・ガードナー！！」

背中のブースターが消滅し、代わりに遊星の両腕が盾となり六人を守った

「このまま攻める！　ニトロ・シンクロンを召喚。レベル６のジャンク・ガードナーにレベル２のニトロ・シンクロンをチューニング

！　集いし願いが新たに輝く星となる。光さす道となれ！　シンクロ召喚！　飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン！」。

遊星の背中から大きな風の翼を生やし、右腕は竜の腕となり、風の纏った剣を構えていた

「響け！　シューティング・ソニック！！」

一振りしただけで突風が吹き、その衝撃で、雷撃を放った女性を切り裂いた

二人の強さを見て、六人はただ驚いていた。強いのは分かっていた。けどまさかこれほどとは……

「さて、君たちは早く戻ってほしいな。負傷している女性の今持っている力は相手がいればいるほど強くなるから」

六人の後ろから一人の少年に話しかけられていた。女子たちは誰かわからない

「遊戯さん！」

「一夏君、君たちの目的は達成できたんだね。じゃあ、後は僕たちがあの二人を倒す。来たばかりの僕を信用してもらうのは無理だと思う……でもここは戻ってほしい」

彼の言葉には強い意志が感じられた。それに従い、戻ろうとした

「させるかよ！」

目つきの悪い女性は殴りかかってきた。何故か彼女の装甲は青色に変わっていた

しかし遊戯は冷静に攻撃をかわしていた

「十代君から話は聞いてるよ。ラビエルを出すならもっと早いタイミングで出さないとまずいんじゃないの？　そのモンスターは敵の増援を確認してピットを増やし、ピットを破壊した分だけＩＳの能力を上げる能力でしょ？」

「てめえ！」

完全に手の内を読まれている。その焦りから攻撃が当たらなくなっている

このままでは負ける。完全なる理想郷（パーフェクトユートピア）の二人は確信した

だからこそ、切り札を使うしかないと思った。眼鏡の女性が戦場の中心に立った

「イレイザープログラムをオーバーロードさせます！」

「な！　てめえ、こんな所で！」

「何をするつもりなんですの？」

「まずい！　彼女は自爆して全てを道連れにしようとしてる。恐らく今から逃げても間に合わない」

遊戯の言葉を聞いて何か手はないかと六人は考えるが何も思いつか

ない

そのまま眼鏡の彼女の機体は点滅し、今まさに爆発しようとしていた

だがその瞬間

「スターダスト・ドラゴンの効果発動！　ヴィクテム・サンクチュアリ！！」

遊星の背中の翼が大きくなり、彼女を包み込み、その中で爆発を抑え込んだ。全て遊星一人で受け止めている

「やめてくれ！　そんなの一人では……」

「遊星！　あんたそんな無茶……」

「ラウラ！　鈴！　俺を友というのなら……信じて待っていろ！」

その一言でみんな黙ってしまった

そのまま一気に爆発を止めた。遊星は少し怪我をしたくらいで特に問題はなかった

眼鏡の女性はアーマーが解除され、スーツ姿のまま落ちて行った。すぐに遊星は、彼女を拾い上げた

その光景を見ていた目つきの悪い女性は、何かつぶやいていた

「やるしかない……やるしかない……」

「私は、ウリア、ハモン、ラビエルのプログラムを全て起動させて……あア、混沌幻魔アーミタイル……起動……殺……ス……」

三つのプログラムが混ざり合った瞬間、彼女の自我は崩壊し、巨大な黒いエネルギーの塊を作り始めた

「な、何あれ……？」

「力に……飲まれてる？」

シャルロットと一夏は暴走した彼女を見て驚いていた

「以前、ラウラさんがＶＴシステムに乗っ取られた時と同じ感じですわね……ですが」

「ああ、あの時より酷い……本当に暴走してる」

セシリアと箒は彼女を見て思ったことを言っていた

その間にも球体はどんどん大きくなっている

「アーミタイル……攻撃するときはとんでもない力を発揮するが、その後は隙だらけ……」

「皆！　急いで回避して！　すぐに僕と十代君で反撃するから」

十代と遊戯はすぐにこの状況を打破する作戦を伝えた。しかし少し遅かった

彼女の作りだした球体は打ち出され、ゆっくりだが向かっている

必死になってセシリアたちが反撃をしているがまるで効いてない
もう少しで当たる。誰もがそう思った時、十代が球体の中心に向かって突進していった
「戦う相手の力を自分のものにするオネストの力……使わせてもらう！」
一枚のカードを使用すると十代の背中から光り輝く羽が生え、黒い球体を殴り破壊した
「終わりだよ！　サイレント・バーニング！！」
遊戯の持っていた杖から炎の塊を繰り出し、暴走していた彼女を包んで倒した
勿論、スーツ姿の彼女は十代の手によって回収された
「終わった……」
「うん、終わったね」
皆が自覚した。長くつらい戦いが今
終わった

第３０話　福音と幻魔と邪神　三つの決着（後書き）

次回で臨海学校編は終了の予定です。
一つ番外編を挟んでから次章に行きたいと思います

感想・指摘等あればよろしくお願いします

第３１話　臨海学校終了　敵の語り（前書き）

書かせていただきます
今回で臨海学校編は終了です

第３１話　臨海学校終了　敵の語り

「作戦完了……と言いたいところだが、お前たちは独自行動により重大な違反を犯した。帰ったらすぐに反省文の提出と懲罰の特別トレーニングを用意してやるから、そのつもりでいろ」

「「「「「「……はい」」」」」」

六人を待っていたのは千冬のお説教の言葉であった。十代達は遠くでその様子を見ている。彼らは許可をもらってからの出撃だったためお咎めはない

「織斑先生、怪我人もいるからその辺りで……」

大徳寺先生の仲裁のおかげで、少し短くなった

「じゃあ、一度休憩してから診断しましょう。とりあえず、部屋に戻ってください。あ、十代君達はここに残ってくださいね。織斑先生から話があるそうです」

山田先生の指示で部屋に戻った六人

部屋に他の人がいないか確認した後、千冬は三人に頭を下げた

「礼を言う。あいつらを守ってくれて」

その言葉に三人は笑顔で返す

「当然じゃないですか」

「一夏達は仲間です」

「だから助けないっていう選択は僕たちにはないんですよ」

三人の言葉に千冬はフッと笑った

「そうか……そう言ってくれて嬉しい……ところで完全なる理想郷（パーフェクト　ユートピア）の二人だが、一人は重傷でしばらく目覚めそうにない。もう一人は精神が崩壊していて聞ける状況じゃない」

そのセリフに笑顔は消えた

「やっぱり三幻魔や邪神の力を無理矢理使った代償だな」

「大きすぎる力は大きな災いを呼ぶ……だね」

十代と遊戯の言葉に遊星も頷いていた。同じ意見なのだろう

「しかしこれでは、敵の情報が分かりませんね。まあ、聞ける状態になった所で、話してくれるとは思えませんが」

「何安心しろ、不動。無理やりにでも聞いてやるさ」

その時の千冬の言葉に少し恐怖を覚えた三人だった

夕食時、遊戯を皆に紹介した。十代と遊星の先輩と言うと皆が驚いた。勿論騒がしくなる前に、千冬が黙るように命令した

とりあえず遊戯は十代と遊星の近くに座って夕食を取ることにした

色々と、質問攻めがあったが何とかかわした。遊戯は何だか大変疲れた感じになっていた

彼は夜風にあたるために夕食後、海岸へ散歩に向かった。もちろん千冬の許可を取ってある

少し散歩をしていると、水着を着ている男女を見つけた。箒と一夏だ

遊戯は気になって話しかけた

「どうしたの？　二人とも？」

遊戯が話しかけた時、二人の顔が真っ赤になっていた。遊戯は良くわからないという感じだ

何かを思い出したのか箒は遊戯に質問をした

「そういえばあなたは遊城の先輩だったな……聞きたいことがあるのだが」

「うん、僕で答えることができるのなら」

「遊城がよく楽しんで戦うと言っているのだが……あれは一体……？」

箒の質問に遊戯はにっこりとほほ笑んで答えを言う

「確か篠ノ之さんって、剣道をやっているよね。君は剣道をどうして続けてるの？」

急に質問され、答えることができなかった

「きっと篠ノ之さんは剣道が好きだからだと思うよ」

遊戯の言葉に頷く。この話は一夏も聞いている

「好きだから楽しい……だから続けられる」

「だからね、僕も十代君も遊星君もどんな時にでも楽しむ気持ちを忘れない。真剣な戦いだからこそ、それを楽しむ気持ちを忘れたら勝つことなんてできない。僕はそう思うよ」

そう言われ、二人は考えた。真剣な戦いだからこそ、楽しむ気持ちを忘れない

箒は、剣道を楽しくやっていた時のことを思い出した。始めたばかりのころはつらくもあったが、同時に上達が分かると楽しく、嬉しかった

しかし今では上達するのは当たり前で、何も考えていなかった

（そうか……だから遊城は……）

箒は気が付く。楽しくやることが悪い事ではないと

（遊城に謝っておかなければ……）

「あれ？　お前ら何やってんだ？」

岩場近くから声がした。十代の声だ

「十代さん！　邪魔しないでくださいませ」

「あんた少し空気を読みなさいよね」

「十代、なぜお前がここに……」

「えっと……」

十代の他にも岩場には四人の女の子がいた。どうやらこの四人は一夏が海に行ったのを見てついてきたようだ

十代は遊戯を探してここに来たらしい

「遊戯さん、一夏。そろそろ戻った方がいいと思うぜ、寒くなりそうだから」

「そうだね、皆もそれでいいかな？」

遊戯の言葉に皆同意した。箒は少し残念そうだった
だがすぐに自分のやることを思い出した
「遊城、今まですまなかった……お前のその……楽しむということを否定していて」
いきなり謝られて訳が分からないという感じの十代
「う～ん、まあ何だ。そんな気にしないでくれ。人によって考え方なんてそれぞれだからさ……俺の仲間にも勝利だけを追求する人がいたしな」
そう言い残して、十代は遊戯を連れて旅館に戻った
「十代さん全然気にしてないみたいだな。あの人らしいというか」
一夏の言葉に箒はとりあえず納得したという感じだった
そのままみんな部屋に戻ることにした
「紅椿の稼働率は……こんなもんか……」

月を見上げながら束は空中投影のディスプレイを見ていた
鼻歌を歌いながら今度は白式の第二形態の戦闘映像を見ていた
「それにしても驚いたな……白式に操縦者の生体再生までできるなんて……まるで……」
「まるで白騎士だな。お前が最初に作った機体だな」
千冬が束の所に来た。お互い顔を合わせていないが、お互いに信頼感があるのだろう
「ふふふ、遊星君。どうしてここにいるのかな？　まあ、偶然かな？」
「まあ、そんな所だ。それより……いや、俺はここから離れることにしよう。お互いに積もる話もあるはずだからな」
「なかなか空気が読める子だね。少し聞きたいことがあるんだけど……君たちのこともっと詳しく知りたいんだけど？」
束の質問に遊星は悩んだが、すでに彼女にはなんとなく正体がばれている気がする。そんな気がした
遊星は心の中で十代と遊戯に謝り、話すことにした
「このことは……黙っていてください。まず、遊戯さんは……かつて名も無きエジプトのファラオと呼ばれた者の魂を心に宿していました。十代さんは、デュエルモンスターズの精霊と呼ばれる者と魂

を融合させています。その力のおかげで、彼はデュエルモンスターズのカードを実体化させることができます。大徳寺さんはすでに死んでいるようで、魂だけの存在だと聞いています。そして俺は……」

遊星は上着を脱ぎ、背中に描かれた赤き龍の痣を見せた

「俺達の世界にいる赤き龍と呼ばれる神の力を持っています」

「そっか……うん、黙っておくね。何だか調べてみたいけど……いろいろと手におえないみたいだから……ありがと、完全なる理想郷（パーフェクトユートピア）について少し聞きたいけど、今度ね」

束の言葉を聞いて遊星はその場を去った

彼が見えなくなってから話し始めた

「ふふふ、なかなか面白いことになってるね。ちーちゃんは知ってたんだよね？」

「ああ、あいつらがこちらの世界にやってきたときに色々とな」

「なんだか楽しそうだね。束さん、ちょっと嫉妬しちゃうな」

その後二人は何か話していた。そのまま束はどこかへと消えてしまった

次の日、一夏が銀の福音の操縦者にお礼と言われ、キスされたことにより騒がしくなったのはまた別の話

遠く離れた何処かの建物の一室、その部屋の空気は重く冷たい

部屋には男性が二人、女性が二人、女の子が一人いた。皆椅子に座ってモニターを見ていた

「……あの二人が負けてしまいましたか……」

執事のような服を着た二十代半ばくらいの青年が、その部屋にいる人全員に紅茶を出していた

一人の少女にはミルクと砂糖をつけて

「やっぱり不完全な状態で出撃したからじゃないの？　三幻魔のお姉ちゃんなんか特に」

「違いないね、あいつは血の気が多いからな……」

フリフリのドレスを着た少女の言葉に先日、学園に潜入し、オベリスクを使った女性を回収したサングラスをかけた青年が同意していた

「しかし……遊城十代と不動遊星でも厄介なのにそこに武藤遊戯が加わるとなると……」

「これからの活動が大変になりますね」

顔の右半分を仮面で隠している女性の言葉に着物を着ている女性が頷いた

この着物を着ている女性がここの一番のトップらしい

「私たちは優秀な人たちを失ってしまいました。ですが、奪還するのは難しいでしょう……恐らく彼女たちはＩＳ学園に幽閉されると予想されます。そうなっては我々も無傷で取り返すというわけにはいかないと思います」

「だなぁ……教師相手ってのも面倒ですけど生徒の中には教師と同レベル、あるいはそれ以上っていう化け物みたいな奴らもいますしね」

「ええ、それ以上に異世界から来た三人が非常に厄介です。私達でも負けるかもしれない相手ですからね」

トップの女性の言葉を補足するかのように男性陣は話していた

「……じゃあ、しばらくはボランティアってやつだね。楽しいからいいんだけどね」

少女の言葉にみんな頷いた。それを見てトコトコと部屋から出ていってしまった

それにつられてサングラスをかけた青年も部屋を出ていった

「もう一杯お茶を飲みますか？」

「いただくわ、でも悪いわね。組織のナンバー2のあなたにこんなことさせて」

「お構いなく。私が好きでやっていることなので。総帥はどうしますか？」

「少し疲れたから部屋に戻って休みますので結構です。それと総帥はやめてください」

着物の女性は少し不機嫌になって部屋を出ていった

その様子を見て二人は苦笑いをしていた

「やれやれ、どうなるのかしらね？　私達完全なる理想郷（パーフェクトユートピア）のこれからは」

「何なら占ってみますか？」

「やめておくわ。それより……ＩＳの回収はどうなっているの？」

「難しいですね。軍施設からこっそり取るのは不可能ですし、あまり目立つ行動は避けたいですしね」

「ま、こっちは気長にやるように総帥がおっしゃっていたからいいわね。織斑一夏の確保が優先……ね」

「ええ、そうですね」

二人は難しい顔をしていた。自分たちがどうなるのか……

第３１話　臨海学校終了　敵の語り（後書き）

次回は番外編を一つ書こうと思います
デュエルします

感想・指摘等あればよろしくお願いします

番外編　その２　別の時間の精霊世界で　前編（前書き）

書かせていただきます

お気に入り１００突破
うれしいです
これからも頑張っていきます

番外編　その2　別の時間の精霊世界で　前編

臨海学校も終わり、学園に返ってきた日、疲れていたのかすぐに眠ってしまった

そんな彼は夢を見た

「ここ……何処だ？」

十代は目を覚ますと森の中にいた。もちろん夢であることは気が付いていない

周りを見渡してみると、デュエルモンスターズの精霊がいた

「ここは……？　精霊世界？　でも……この場所見たことない。ユベルは？」

「いや、僕も知らない……」

「私もだ……だが、予想できることがある」

十代がユベルとネオスと話していると、遠くから獅子がやってきた

十代は見たことがないみたいだ

「貴様達！　一体どうやってこの場所に！？」

「ええと……俺達はここにどうやって来たのか……分からないんだ。

それよりここは？」

十代が獅子と話していると、十代の周りにネオスペーシアンたちが出てきた

どうやらこの世界に興味があったようだ

その獅子がネオスペーシアンたちを見た瞬間、驚いていた

「な、そのモンスターたちは……まさかお前……いや、あなたは遊城十代なのか？」

「え？　ああ、そうだけど……」

「申し訳ございません！　無礼な態度を取ってしまい……」

いきなり謝り始めたので十代はどうしていいのかわからなくなった

「……このモンスターから何か力を感じる」

ユベルとネオスは呟いていた

十代　ｓｉｄｅ

「ここは未来の精霊世界なのか……なんか落ち着いたところだな」

俺は周りを見渡していた

「先ほどは申し訳ございませんでした。あなたのことは様々な形で伝わっています。破滅の光を倒した英雄、正しき闇の力を持つ者等、素晴らしい活躍を聞いています」

どうやらこの獅子の名前はレグルスというらしい。この精霊世界の主の部下と言っていた

俺、未来だと何だかすごい事になってるんだ……

そしてその主、エンシェント・フェアリー・ドラゴンについて話していると気になることがあった。遊星が持っているドラゴンって確か……

俺は一つ聞いてみた

「なあ、お前が言っていた主って遊星のスターダストと一緒なのか？」

「スターダストを知っているのか……少々待っていてくれ」

レグルスは、主の下へ向かったらしい

しばらくすると俺の前に一人の少女が現れた

「君は？」

「あなたは？」

緑の髪をした女の子だ。だけど、この子……何か力を持っている？

龍可　ｓｉｄｅ

私がネオドミノシティを離れてしばらくたった

パパとママ一緒に暮らせるのはやっぱり楽しい

新しいデュエルアカデミアでも楽しく過ごしている

まあ、竜亞が、チーム５Ｄ’ｓの一員だったことをばらしたときは騒がしかったけど……

でもそれも落ち着いていろんな友達もできた

今日は疲れたから早く寝ることにした

そして私は夢を……ううん、精霊の世界に行ったみたい

ものすごく久しぶりだな。みんな元気かな？

残念なことにまだ精霊と話せる人と会ったことはない
少しさびしいけどしょうがない
精霊の世界で少し歩くとそこには一人の男の人がいた
「君は？」
「あなたは？」
お互いに声を合わせて聞いてしまった
「俺は遊城十代、この世界には……まあ、何でかよくわからないんだけど、来たんだ。それより君の近くにいるクリボーみたいな子って君の精霊？」
十代さん！　精霊のことを知ってるの？　よく見ると彼の近くにも羽の付いたクリボーがいる。ううん、それだけじゃない。他にも見たことのないモンスターたちがいる
私は嬉しくなって話し始めた
「うん、この子はクリボンっていうの。十代さんは精霊がたくさんいるのね」
「ああ、皆俺の仲間なんだ。ネオスペーシアンにネオス、ユベルにハネクリボーってね。それと十代でいいよ。なんかさん付けは慣れないし、えっと……」

「あ、ごめんなさい、私の名前は龍可。よろしくね」

それからいろいろとおしゃべりをした

十代が過去の世界の人っていうのは驚いたけど、少し思い出したことがあった

デュエルアカデミアの資料に彼の名前があったことを、今度調べてみようかしら

そして私の持っていたエンシェント・フェアリー・ドラゴンを見た時、何かを感じたらしい

遊星と会ったことがあると聞いた時、話はもっと盛り上がった

疲れて眠くなるまで、私たちは楽しく話していた。また会えるといいな

気が付いた時には自分の部屋のベッドだった

ずっと話していたのに不思議と疲れはなかった

（ふふ、楽しかったな。今日は学校で十代のことを調べてみようかしら）

私はすぐにアカデミアに行く支度し、双子の兄の竜亞を起こすことにした

今日は楽しい一日になりそう

龍可　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

十代は目を覚ました

（あれは……夢？　って感じでもなさそうだな。まあ楽しかったからいいや）

そのまま起き上がり、朝食を食べに食堂に向かった。今日は休日のため、のんびりしてもよかったのだが、目が覚めたと同時にお腹がすいたらしい

食堂には先客がいた。遊戯と遊星に一夏だった

「よ、ここいいか？」

「もちろんだよ」

十代は遊戯の隣に座る。男子四人が固まって座っているのを他の女子は

自分も近くに行きたい、でもそんな勇気が出ない

等様々なことを言っていた。勿論彼らには聞こえない

「そうそう、昨日の夜さ、精霊の世界に行ったんだ。どうも遊星達の世界でさ、そこで龍可って子にあったぜ」

十代が話すと遊星と遊戯は興味を持って聞いていた

「へえ、やっぱり精霊の世界ってあるんだ。僕は一度くらいしか行った事がないからうらやましいな」

「龍可に会ったんですか。元気でしたか?」

「ああ、遊星の仲間なんだってな」

三人は盛り上がっていたが、一夏はついていけなかった

(何だろう……精霊の世界って?)

その日の夜も十代は精霊の世界に来ていた。正直どうしていけるのかはわかっていない

でも彼にとってあまり関係なさそうだ

「お、龍可。来てたのか」

「うん、十代も元気そうね。それに精霊の皆も」
いつも通り十代とおしゃべりをしていた
その時
「おい、お前！　龍可に何してるんだ！？」
一人の男の子の声が聞こえた。その声に龍可は驚いた
十代は彼の姿に驚いた。龍可そっくりだからだ
「龍亞！　どうしてここに？」
「龍可が精霊の世界に行くような気がしたから俺も祈ったらここに……それよりお前、一体誰だ！？」

竜亞　ｓｉｄｅ

何だか面白くない
今日龍可の奴、なんだか熱心に調べものとか言って図書館に寄っていた
しかもいつもは一緒に帰ってるのに先に帰っててくれって
どうもおかしい、デュエルする約束を忘れてるのか？

しょうがないから少し待ってたけど、なかなか来ないから少し頭にきて先に帰った

家に帰ってからママに龍可は調べものしたいから先に帰ってくれって龍可に言われたと言ったら何だか微笑んでた

どうやら何か知ってるみたいだ

少ししたら龍可の奴が帰ってきた。夕食の後にデュエルをしようと思い、先に宿題を終わらせた

けど、夕食が終わるとすぐに龍可は寝る用意をしてた

「ねえ、今日デュエルするって約束してたじゃん！」

「あ、ごめん。でも、今日はちょっと疲れちゃったから……明日ね」

そのまま龍可は眠ってしまった

こっそりと部屋を見てみると、龍可はぐっすり寝てた

でも、この寝顔……どこかで……！

思い出した、精霊の世界とかいう所に行っている時だ

俺は龍可の手を握って祈った

（俺も精霊の世界に連れてってください）

すると、いきなり意識を失った

気が付いたらどこかの森にいた

辺りを見渡したらすぐに龍可を見つけた

「龍……」

「お、龍可。来てたのか」

「うん、十代も元気そうね。それに精霊の皆も」

誰だ？　あいつ？

何だか龍可と馴れ馴れしい……しかも龍可の奴、楽しそう

俺にもあんな笑顔見せたことないのに……俺は龍可の兄貴なんだ

どこの誰とも知らない奴に龍可を渡せるか！

「おい、お前！　龍可に何してるんだ！？」

俺が叫ぶと二人は驚いていた

「龍亞！　どうしてここに？」

「龍可が精霊の世界に行くような気がしたから俺も祈ったらここに……それよりお前、一体誰だ！？」

あいつ、一体何に驚いているんだ？

「へえ、双子って初めて見た。本当に似てるんだな」

……何だ？　こいつ？　それよりも龍可を守らないと

「おい、龍可に何をしようとした？　もしも龍可に何かあったら許さないぞ！」

「……何言ってんだ？」

く、とぼけたって無駄だ

「俺とデュエルしろ！　俺が勝ったら今後一切龍可に近づくな！」

「よくわからないけど……そのデュエル、受けるぜ！！」

相手の男はデュエルディスクを構えた。何だか古い型のディスクだな

「ちょっと……」

「大丈夫だよ、君の兄の龍亞だろ？　あいつもお前や遊星と同じ龍の力を持っているんだろ。そんな奴と戦えるなんてワクワクしてく

るぜ。デュエルの後に話すさ」

遊星のことを知ってる！？　本当に何者なんだろう……この人

いや、しっかりしろ、俺！　龍可を守るって決めたんだ

相手が誰だろうとやってやる。デュエルディスクを構え

「「デュエル！！」」

龍可、待っててね。絶対助けてやるから

番外編　その2　別の時間の精霊世界で　前編（後書き）

次回デュエルになってしまった……
なるべく早く書こうと思います

感想・指摘等あればよろしくお願いします

番外編その２　別の時間の精霊世界で　後編（前書き）

書かせていただきます
デュエルしてます

番外編その2　別の時間の精霊世界で　後編

デュエルが始まる。龍可は誤解を解こうとした。しかし、ハネクリボーとユベルに止められた

「まあ、見ていればいいさ。そんなに悪い状況になるとは思えないし」

しょうがないと思い、龍可は見てることにした。この世界にいる精霊たちも興味があるのかこのデュエルを見ている

「俺のターン、ドロー」

先攻は十代のようだ

（どんな手で来るかわからないけど、俺の手札はそんなに悪くない……いける！）

龍亞は自分の手札に自信を持っているようだ

「N（ネオスペーシアン）・アクア・ドルフィンを召喚！」

二本足で立つイルカが召喚される

「手札を一枚捨てモンスター効果発動！　相手の手札を確認する。エコー・ロケーション！！」

アクア・ドルフィンは龍亞の手札に向かって超音波を放つ

龍亞の手札

D・モバホン（ディフォーマー）　ＡＴＫ１００

ディフォーム　罠

緊急同調　罠

集中防御盾（セントラル・シールド）　装備魔法

貪欲な壺　魔法

「その後、相手の手札にある自分の場のモンスターの攻撃力以下のモンスターを一枚破壊し、相手に５００ポイントのダメージを与える。俺はＤ・モバホンを破壊！　パルス・バースト！！」

超音波の衝撃波が龍亞の手札のモバホンを破壊して、彼にダメージを与えた

龍亞　ＬＰ４０００→３５００

N・アクア・ドルフィン（ネオスペーシアン）　星３　水　戦士族

ＡＫＴ６００　ＤＦＥ８００

手札を１枚捨てる。相手の手札を確認してモンスターカード１枚を選択する。選択したモンスターの攻撃力以上のモンスターが自分フィールド上に存在する場合、選択したモンスターカードを破壊して

相手ライフに５００ポイントダメージを与える。選択したモンスターの攻撃力以上のモンスターが自分フィールド上に存在しない場合、自分は５００ポイントダメージを受ける。この効果は１ターンに１度しか使用できない。

十代はカードを一枚セットしてターンを終了した

十代
ＬＰ４０００　手札３枚
Ｎ・アクア・ドルフィン（ネオスペーシアン）　攻撃表示
セット一枚

「俺のターン、ドロー！」

（くそ、いきなりモバホンが破壊されるなんて……でもいいカードを引いたぞ）

「俺はＤ・ラジカッセン（ディフォーマー）を召喚」

龍亞の場に攻撃力１２００のラジカセが変形したモンスターが出てくる

「ラジカッセンで攻撃」

ＣＤを飛ばして攻撃を仕掛けた。しかし

「カウンター罠、攻撃の無力化！　相手モンスターの攻撃を無効に

して、バトルフェイズを終了させる」

突然現れた渦にCDが吸い込まれ、攻撃が止まってしまった

「危なかったぜ、そいつって確か攻撃表示の時は2回攻撃できる能力を持っていたからな」

龍亞の使うモンスター、D（ディフォーマー）は表示形式によって効果が変わるのが特徴

どうやら十代は知っていたようだ

「カードを一枚セットしてターンエンド」

龍亞　LP3500　手札3枚
D（ディフォーマー）・ラジカッセン　攻撃表示
セット1枚

（さあ、攻撃して来い！）

龍亞は自分の戦術に自信があるようだ

「俺のターン、ドロー！　……N（ネオスペーシアン）・ブラック・パンサーを召喚」

十代は少し考えた後、黒い豹のモンスターを出した

「ブラック・パンサーのモンスター効果発動！　1ターンに1度、相手のモンスターを選択し、そのモンスターと同じ名前と効果を得る。俺はD（ディフォーマー）・ラジカッセンを選択する、シャドー・イリュージョン！」

ブラック・パンサーの体は泥のように溶けてD（ディフォーマー）・ラジカッセンの姿になった

N（ネオスペーシアン）・ブラック・パンサー　星３　闇　獣族
ＡＴＫ１０００　ＤＦＥ５００
相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択する事ができる。このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、このカードはエンドフェイズ時まで選択したモンスターと同名カードとして扱い、選択したモンスターと同じ効果を得る。この効果は１ターンに１度しか使用できない。

「さらに魔法カード、Ｈ－ヒートハートを発動。このカードの効果でブラック・パンサーの攻撃力を５００ポイント上昇させる」

炎で縁取ったＨの文字がブラック・パンサーに力を与えた

「バトル！　ラジカッセンとなったブラック・パンサーで攻撃！」

「罠カード、ディフォーム！　相手モンスターがD（ディフォーマー）に攻撃してきたとき、そのモンスターの攻撃を無効にして俺の場のD（ディフォーマー）の表示形式を変更する。ラジカッセンを守備表示に」

ラジカセの姿に変形することで、ブラック・パンサーの攻撃を止めた

ディフォーム　通常罠
自分フィールド上に表側表示で存在する「D（ディフォーマー）」と名のついたモンス

ターが攻撃対象に選択された時に発動する事ができる。攻撃モンスター1体の攻撃を無効にし、攻撃対象に選択された「D（ディフォーマー）」と名のついたモンスター1体の表示形式を変更する。

「残念だったね。これで攻撃は防いだよ」

「まだまだ、アクア・ドルフィンで攻撃！」

イルカが殴りかかる

「無駄だよ！　ラジカッセンは守備表示の時、一ターンに一度、相手モンスターの攻撃を無効にするんだ」

ラジカセから音を発してアクア・ドルフィンの攻撃を止めた

D（ディフォーマー）・ラジカッセン　星4　地　機械族

ＡＴＫ１２００　ＤＦＥ４００

このカードはこのカードの表示形式によって以下の効果を得る。●攻撃表示：このカードは1度のバトルフェイズ時に2回攻撃する事ができる。●守備表示：自分フィールド上に表側表示で存在する「D（ディフォーマー）」と名のついたモンスターが攻撃対象に選択された時、その戦闘を無効にする事ができる。この効果は1ターンに1度しか使用できない。

「残念だったね。このターンの攻撃は無駄になったね」

龍亞はご機嫌だった。しかし十代もまたにやけていた

「何言ってるんだ。俺のターンの攻撃は終わってないぜ、ブラック・パンサーの効果は相手モンスターの効果を得ること。つまり、こいつはラジカッセンと同じ効果を持っているんだ。どういうことかわかるか？」

見ていた龍可はすぐに気が付いた

「そうか、もう一回攻撃ができるのね」

龍可の言葉に頷き、十代はデュエルを続行する

「そういうことだ。ラジカッセンに攻撃」

ラジカッセンに変身していたブラック・パンサーはもう一度攻撃してラジカッセンを破壊した

龍亞　ＬＰ３５００→２４００

「どうしてライフが……？」

「ヒートハートは攻撃力を上げるだけじゃなくて守備モンスターに貫通ダメージを与える効果も持っているのさ」

Ｈ－ヒートハート　通常魔法

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択して発動する。選択したモンスターの攻撃力は５００ポイントアップす

る。そのカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が越えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。この効果は発動ターンのエンドフェイズまで続く。

ここまでのデュエルを見て龍可は十代の実力に驚いていた

「すごい……あの人、龍亞の防御をあっさりと……」

「でも……どうして……？」

龍亞は不思議に思っていた。二段構えの防御をしていた。にもかかわらず、それが簡単に打ち破られた

まるで見透かされていたかのように

「へへ、最初に俺がアクア・ドルフィンの効果でお前の手札を見ただろ、あの時に次のターンに伏せるお前のセットカードがわかったのさ」

「そうか、龍亞の手札にはすぐに使えるセットカードはディフォームだけだった。他のカードを伏せても意味がないから予想できたってわけね」

「そういうこと、俺はカードを一枚セットしてターンエンド！」

十代　ＬＰ４０００　手札１枚
Ｎ・アクア・ドルフィン（ネオスペーシアン）　Ｎ・ブラック・パンサー（ネオスペーシアン）　共に攻撃表示
セット１枚

龍亞は相手の実力の高さに少しおびえていた

（しっかりして龍可を守らないと……でも、この人……どこかで）

「俺のターン、よし、手札から魔法カード、打ち出の小槌を発動。手札を全部デッキに戻してシャッフル。その後戻した枚数、三枚をドローする」

打ち出の小槌　通常魔法
自分の手札を任意の枚数選択し、デッキに加えてシャッフルする。
その後、デッキに加えた枚数分のカードをドローする。

手札を交換した所で、龍亞の表情が変わる

「俺はD（ディフォーマー）・スコープンを召喚。モンスター効果発動！　手札からレベル４以下のDを一体特殊召喚する。出てこい、D（ディフォーマー）・ビデオン」

龍亞の場に顕微鏡が変形したモンスターとビデオデッキが変形したモンスターが並んだ

D（ディフォーマー）・スコープン　星３　光　機械族　チューナー
ＡＴＫ８００　ＤＦＥ１４００
このカードはこのカードの表示形式によって以下の効果を得る。●攻撃表示：１ターンに１度、手札からレベル４の「D（ディフォーマー）」と名のつい

たモンスター1体を特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚したモンスターはエンドフェイズ時に破壊される。●守備表示：このカードがフィールド上に表側守備表示で存在する限り、このカードのレベルは4になる。

「お、シンクロ召喚か。どんなモンスターが出てくるのか楽しみだぜ」

十代はワクワクしていた

（何だ、この人……とにかくやるぞ！）

「レベル4のビデオンにレベル3のスコープンをチューニング！」

スコープンは三つの輪となり、その中をビデオンがくぐっていき、四つの星となる

「世界の平和を守るため、勇気と力をドッキング！　シンクロ召喚！　愛と正義の使者、パワー・ツール・ドラゴン！」

龍亞の場に機械の龍が召喚された。十代は何かを感じた気がしたが気のせいだと思った

「パワー・ツール・ドラゴンの効果発動！　デッキから装備魔法を三枚選択し、そのうち一枚を相手にランダムに選ばせ、選んだカードを手札に加える。パワー・サーチ！」

龍亞のデュエルディスクから三枚のカードが出てきた。十代はそのうち一枚を選び、龍亞の手札に加えさせた

「装備魔法、ブレイク・ドローをパワー・ツール・ドラゴンに装備。装備モンスターが相手モンスターを破壊した時、デッキからカードを一枚ドローできる」

ブレイク・ドロー　装備魔法
機械族モンスターにのみ装備可能。装備モンスターが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、自分のデッキからカードを1枚ドローする。このカードは発動後3回目の自分のエンドフェイズ時に破壊される。

「パワー・ツール・ドラゴンでブラック・パンサーに攻撃！　クラフティ・ブレイク！！」

パワー・ツール・ドラゴンが殴りかかる

「罠カード、フローラル・シールドを発動！　相手モンスターの攻撃を無効にして、カードを1枚ドローする」

突然出てきた無数の花びらが壁となってパワー・ツール・ドラゴンの攻撃を止めた

そのまま十代はカードを一枚ひいた

フローラル・シールド　通常罠　（アニメオリジナル）
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。その相手モンスターの攻撃宣言を無効にし、　自分のデッキからカードを1枚ドローする。

この攻撃も防がれた。龍亞はカードを一枚セットしてターンを終了させた

龍亞　ＬＰ２４００　手札０枚
パワー・ツール・ドラゴン　攻撃表示
ブレイク・ドロー（パワー・ツール・ドラゴンに装備）　セット一枚

（大丈夫、パワー・ツール・ドラゴンにはもう一つの効果がある。たとえ倒されても一度だけなら何とかなる）

パワー・ツール・ドラゴン　星７　地　機械族
ＡＴＫ２３００　ＤＦＥ２５００
チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
１ターンに１度、自分のメインフェイズ時に発動する事ができる。自分のデッキから装備魔法カードを３枚選択し、相手はその中からランダムに１枚選択する。相手が選択したカード１枚を自分の手札に加え、残りのカードをデッキに戻してシャッフルする。また、装備魔法カードを装備したこのカードが破壊される場合、代わりにこのカードに装備された装備魔法カードを墓地へ送る事ができる。

パワー・ツール・ドラゴンには、装備している装備カードを墓地に送れば破壊されない効果を持っている

龍亞はこの防御効果に頼ることにした

「俺のターン、よし、手札から魔法カード、スペーシア・ギフトを発動！　自分の場のN（ネオスペーシアン）、一種類につき一枚、カードをドローする。今場には二種類のモンスターがいる、よって二枚ドローする」

スペーシア・ギフト　通常魔法
自分フィールド上に表側表示で存在する「N（ネオスペーシアン）」と名のついたモンスター1種類につき、自分のデッキからカードを1枚ドローする。

十代はカードをドローした後、少し考えた

（おそらく、あの機械の龍、何かもう一つくらい効果がありそうだな。だったら、いっちょやってみるか）

「墓地のネクロダークマンの効果を使って、ネオスをリリースなしで召喚！」

十代の場にエースモンスター、ネオスが出てきた

（ネオス……って！　あの人もしかして！！）

「遊城十代？」

龍亞は恐る恐る聞いてみると十代はニカッと笑って頷いた

「ああ、そうだぜ。未来の後輩と戦ってるなんて面白いぜ。さて、お前のエース、パワー・ツール・ドラゴンに俺のエース、ネオスが揃った」

「って、ちょっと待って！　ネクロダークマンがなんで墓地に……」

「最初のアクア・ドルフィンの効果よ」

龍可の指摘に龍亞は気づいた。最初に手札から捨てたカードがまさかそのモンスターだったなんて思ってなかった

Ｅ・ＨＥＲＯネクロダークマン
星５　闇属性　戦士族　ＡＴＫ１６００　ＤＦＥ１８００
このカードが墓地に存在する限り１度だけ、自分はレベル５以上の「Ｅ・ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター１体をリリースなしで召喚する事ができる。

Ｅ・ＨＥＲＯネオス
星７　光属性　戦士族　ＡＴＫ２５００　ＤＦＥ２０００
ネオスペースからやってきた新たなるＥ・ＨＥＲＯ。ネオスペーシアンとコンタクト融合することで、未知なる力を発揮する！

「いくぜ！　ネオスとブラック・パンサーをコンタクト融合！　来い！　ブラック・ネオス！！」

二体のモンスターは空に向かって飛びあがり、宇宙で体を重ね、一つのモンスター、黒い体に鉤爪を持ったモンスターが戻ってきた

「初めて見る融合方法だ……他のカードも使わないで融合するなんて……さすがデュエルアカデミア、伝説のデュエリスト！」

「何か態度変わってるな。まあ、今の方が楽しいデュエルができるからいいんだけどな。ブラック・ネオスの効果発動！　相手モンス

ターの効果を無効にする」

ブラック・ネオスがパワー・ツール・ドラゴンを睨んだ瞬間、力が失われていった

Ｅ・ＨＥＲＯ　ブラック・ネオス　星７　闇　戦士族
ＡＴＫ２５００　ＤＦＥ２０００
「Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス」＋「Ｎ・ブラック・パンサー」
自分フィールド上に存在する上記のカードをデッキに戻した場合のみ、融合デッキから特殊召喚が可能（「融合」魔法カードは必要としない）。フィールド上に表側表示で存在する効果モンスター１体を選択する事ができる。このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、選択したモンスターはフィールド上から離れるまで効果が無効化される（この効果で選択できるモンスターは１体まで）。エンドフェイズ時にこのカードは融合デッキに戻る。

「バトル！　パワー・ツール・ドラゴンに攻撃！　ラス・オブ・ブラック・ネオス！！」

爪で切り裂き、パワー・ツール・ドラゴンを破壊した。効果が無効になっている為、装備魔法を墓地に送れなかった

龍亞　ＬＰ２４００→２２００

「じゃあ、アクア・ドルフィンで……」

「させない！　ライフを８００ポイント払って罠カード、ウィキッ

ド・リボーンを発動！　パワー・ツール・ドラゴンを復活させる。けど、この効果で復活したモンスターの効果は無効になる」

ウィキッド・リボーン　永続罠
８００ライフポイントを払い、自分の墓地に存在するシンクロモンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターを表側攻撃表示で特殊召喚する。この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、このターン攻撃宣言をする事ができない。このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

龍亞　ＬＰ２２００→１４００
パワー・ツール・ドラゴンが出てきたことにより、アクア・ドルフィンの攻撃をやめた

「装備魔法、インスタント・ネオスペースをブラック・ネオスに装備。ターンエンド」

十代　ＬＰ４０００　手札２枚
Ｅ・ＨＥＲＯブラック・ネオス　Ｎ・アクア・ドルフィン（ネオスペーシアン）　共に攻撃表示
インスタント・ネオスペース（ブラック・ネオスに装備）

龍亞のターン

（まだ、大丈夫……あのカードが来れば……）

勢いよくカードを引く

「……俺はD（ディフォーマー）・ライトンを召喚。そしてレベル7のパワー・ツール・ドラゴンにレベル1のライトンをチューニング！」

懐中電灯のモンスターが出てきてすぐに輪となり、その輪をパワー・ツール・ドラゴンはくぐっていった

十代は驚いた。パワー・ツール・ドラゴンをシンクロ召喚の素材に使用することに

「見せてあげる。俺に本当の切り札を！　世界の未来を守るため、勇気と力がレボリューション！　シンクロ召喚！　進化せよ、ライフ・ストリーム・ドラゴン！」

パワー・ツール・ドラゴンの装甲が壊れ、中から本当のドラゴンが出てきた

（さっき感じた力の正体はこれだったのか。しかもこのモンスター、遊星のスターダストや龍可のエンシェント・フェアリーと同じ力を感じる）

十代は構えた。相手のモンスターの強さを警戒するかのように

「ライフ・ストリーム・ドラゴンの効果発動！　俺のライフを４００にする」

龍亞　ＬＰ１４００→４０００

「ライフ・ストリーム・ドラゴンで、ブラック・ネオスに攻撃！
ライフ・イズ・ビューティ・ホール！！」

ライフ・ストリーム・ドラゴンの吐くエネルギーのブレスにブラック・ネオスは耐えきれず、破壊された

十代　ＬＰ４０００→３６００

「く、インスタント・ネオスペースの効果により、デッキからネオスを特殊召喚する」

インスタント・ネオスペース　装備魔法
「Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス」を融合素材とする融合モンスターにのみ装備可能。このカードを装備した融合モンスターは、エンドフェイズ時にデッキに戻る効果を発動しなくてもよい。装備モンスターがフィールド上から離れた場合、自分の手札・デッキ・墓地から「Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス」１体を特殊召喚する事ができる。

龍亞はこのままターンを終了させた

龍亞　ＬＰ４０００　手札０枚
ライフ・ストリーム・ドラゴン　攻撃表示

「すげえドラゴンだな。でも、俺のネオスも負けないぜ」

「やれるもんならやってみろ！」

お互いデュエルを楽しんでいる。その雰囲気に龍可も笑顔になっていた

「俺のターン、ドロー。来たぜ。魔法カード、融合を発動！　手札のバースト・レディとネオスを融合！　現れよ、Ｅ・ＨＥＲＯネオス・ナイト！！」

手に大きな上下ともに刃で真ん中が持ち手の剣を持ったネオスが融合召喚された

「ネオス・ナイトの攻撃力は、融合素材にした戦士族モンスターの攻撃力の半分が上昇する。バースト・レディの攻撃力は１２００、つまり６００ポイントアップだ！」

ネオス・ナイト　ＡＴＫ２５００→３１００

「ネオス・ナイトで、ライフ・ストリーム・ドラゴンに攻撃！　ラス・オブ・ネオス・スラッシュ！！」

上部分の剣で、ライフ・ストリーム・ドラゴンを切り裂いた。しかし破壊されずに生き残っている

「ライフ・ストリーム・ドラゴンの効果、墓地の装備魔法を除外することで、破壊を無効にできる」

ライフ・ストリーム・ドラゴン　星８　地　ドラゴン族　チューナー
ＡＴＫ２９００　ＤＦＥ２４００
チューナー＋「パワー・ツール・ドラゴン」
このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分のライフポイントを４０００にする事ができる。このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分が受ける効果ダメージは０になる。また、フィールド上に表側表示で存在するこのカードが破壊される場合、代わりに自分の墓地に存在する装備魔法カード１枚をゲームから除外する事ができる。

破壊を防ぐことができた。しかしひとつ違和感があった

龍亞　ＬＰ４０００

「俺のライフが減ってない？」

「ネオス・ナイトは、相手のライフを削ることはできない」

それなら勝てると龍亞は思った。次の一言を聞くまでは

「その代わり、もう一度攻撃ができる。もう一撃ぶちかませ！！」

ネオス・ナイトはそのままライフ・ストリーム・ドラゴンに二回目

の刃を刺した
これには耐えきれず、破壊されてしまった

Ｅ・ＨＥＲＯネオス・ナイト　星７　光　戦士族
ＡＴＫ２５００　ＤＦＥ１０００
「Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス」＋戦士族モンスター
このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。このカードの攻撃力は、このカードの融合素材とした「Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス」以外のモンスターの攻撃力の半分の数値分アップする。このカードは１度のバトルフェイズ中に２回攻撃する事ができる。このカードが戦闘を行う場合、相手プレイヤーが受ける戦闘ダメージは０になる。

「そのままアクア・ドルフィンで直接攻撃！」
殴って竜亞にダメージを与えた

龍亞　ＬＰ４０００→３４００

「でもこれで攻撃は終了……」

「速攻魔法、融合解除！　ネオス・ナイトの融合を解除。場にネオスとバースト・レディを呼ぶ」

融合解除　速攻魔法

フィールド上に表側表示で存在する融合モンスター1体を選択してエクストラデッキに戻す。さらに、エクストラデッキに戻したこのモンスターの融合召喚に使用した融合素材モンスター一組が自分の墓地に揃っていれば、この一組を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

二体のモンスターが出てきた。勿論このモンスターたちは攻撃が可能だ

攻撃力の合計は３７００、龍亞のライフは３４００

「二体で直接攻撃！！」

「うわぁぁ……」

龍亞　ＬＰ３４００→０

「ごめんなさい！　龍可の友達に俺……」

デュエルが終わった後、龍可は十代について話すと龍亞は慌てて謝った

十代は笑って許してくれた

「気にするなよ。お前にとっては龍可は大事な妹なんだからしっかり守ってやれよ」

「うん、ありがとう」

すると、十代は大きな欠伸をした

「なんだか眠くなってきた……今日はここまでかな？」

なんとなくだが十代はこの精霊世界から出ていく気がした

「また会えるよね？」

「また会おうぜ、龍亞、龍可」

「うん、またお話ししようね。クリボンも楽しみにしてるから」

そう話していると、双子も眠くなってしまいそのまま三人は精霊世界から出ていった

「ねえ、龍可。俺、十代みたいになりたいな」

「ふふふ、遊星みたいになるんじゃないの？」

「じゃあ、どっちにもなる！」

「またデュエルしようぜ、龍亞ガッチャ！！」

番外編その２　別の時間の精霊世界で　後編（後書き）

パワー・ツール・ドラゴンとライフ・ストリーム・ドラゴンの効果はＯＣＧにしました

感想・指摘等あればよろしくお願いします

第３２話　会長登場！　終業式は男子達の厄日？（前書き）

書かせていただきます
なんとなく会長を早く出してみました

第３２話　会長登場！　終業式は男子達の厄日？

修学旅行から帰ってからしばらく時間がたった
期末テストも終了し、今日は終業式前日の最後の授業だ。ちなみに十代は死にそうな顔をしているらしい
それはともかく、一夏は最後のＩＳを使う授業に出るため、更衣室で着替えていた時、彼の目の前が真っ暗になった
「だーれだ？」
恐らく誰かが、後ろから手で一夏の視線を隠しているのだろう
一夏は答えれなかった。本当に誰かわからなかったから
「時間切れ～」
解放され、一夏は後ろを振り向くとそこには知らない女性が立っていた
青い髪、リボンの色からして二年生、扇子を持った何だか悪戯するのが好きそうな顔をした人だった
「えっと？　あなたは？」
聞いても笑っているだけで答えてくれない

「また今度ね、そろそろ行かないと織斑先生に怒られると思うよ」

一夏は時計を見ると驚いた。走ってぎりぎり間に合うかくらいの時間になっていたからだ

彼は慌てて準備をした。今までで一番早く着替えていたのではないだろうか

「一夏君、時間ないよ」

更衣室の外で待っていた遊戯が声をかけていた

彼は初めての授業で、千冬から一夏に案内してもらうよう言われていた

ちなみに十代と遊星は、授業の準備の手伝いをするために先にアリーナに行っていた

「ごめんなさい。変な妨害があって……」

「さっき部屋から出ていった女の人のこと？　あの人、僕にも話しかけてきたけど、どういう人なんだろうね」

『あまりいい人という感じはしなかったな』

走りながら会話をしている二人……いや、三人

何とか授業開始に間に合ったが、千冬に少し怒られた

「お前は時間に余裕を持って行動ができないのか？」

「えっと、織斑先生……僕たちの学年でない人で青い髪の扇子を持った人って知ってます？　一夏君、彼女に悪戯されていたみたいで……」

遊戯の言葉を聞くと、千冬は頭を抱え、ため息をついていた

周りは何事かと騒がしくなっていた

「あ～お前たち黙れ、さっさと授業を始めるから散れ。……織斑、狐にでも騙されたと思っておけ……あいつ、何をやらかす気だ？」

そのまま授業が始まった。千冬の謎の言葉を残して

授業も終わり、昼食の時間になった。男子四人は食堂で食事を取りながら話していた

「千冬さんが言っていたのってどういう意味なんだろうね」

「う～ん、そんなに大変な人なんでしょうか？」

「確か二年生なんだろ。一夏心当たりないのか？」

「無いですよ……上級生とかかわりなんて」

四人は千冬の何をする気なんだ……という言葉が気になっていた

『あの千冬が頭を抱えてため息だからな、何かあるな』

アテムの言葉に四人は同意していた

そしてその予想は……的中した

次の日、四人は固まって逃げていた。後ろや横から女子がものすごい勢いで追ってくる

「何でこんなことになっているんだろうね？」

「あの人のせいですね……」

「本当だよな……」

「喋っている暇なさそうですよ。とにかく散りましょう」

四人は一気に散らばる。同時に女子も狙いを定めて散らばった

なぜこうなっているかというと、数分前の終業式

先生の話だけで終わるかと思ったら、最後に生徒会長が現れた

「一年生の諸君は初めまして。この学園の生徒会長、更識盾無よ。よろしくね」

挨拶した時に一夏と遊戯は昨日出会った人だと気が付いた。十代と遊星は以前会っているためさほど驚いていなかった

しかし、この四人を驚かせることをこの人は言うのだ

「この学園には四人の男の子がいます。今から彼らのうち誰かを捕まえたら明日一日だけその子と同室できます。生徒会長権限で！男子諸君、五分待ってあげるから一時間逃げてね」

にこっと笑って退場していった

その瞬間、女子の目が野獣に変わり、四人を見ていた

恐怖を覚え、彼らは逃げることにした

「はあ、はあ、どうすれば……」

十代は息絶え絶えになりながらも周りを見て走っていた

その時、教室のドアから手招きする人がいるのが見えた。罠かと思ったが、すぐに顔を出してくれた。簪だった

十代はこっそりと教室に入った

「ふう、何の用？　逃げないとまずいんだけど」

「……自分の部屋に行くのは？」

簪の言葉に十代は忘れていたという感じだった。自分の部屋ならば、確かに安全だ

十代はお礼を言って去ろうとしたが一つ疑問に思ったことがあった

「簪は俺と同室になりたくないのか？」

「十代の部屋には……遊びに行けるし……困った時に助けるのが友達……だから」

「そっか、ありがとな、また今度みんなでどこか行こうぜ」

こくんと頷いたのを確認して、十代は寮の自室に向かった

「……頑張って……ヒーローさん……」
教室に残った簪は笑顔で応援していた

「おお、一夏。お前も」

「ええ、とりあえず部屋に戻れば……って来ました。とりあえず、俺の部屋に」

寮で一夏と再会した十代。しかし、女子に捕まりそうになったため、一夏は十代の手を引いて自分の部屋に入った
すぐに鍵を閉め、一息ついたら

「うふふ、残念。ここに来ることは予想してたわよ」

部屋に先客がいた。この騒動を起こした本人、更識盾無だ
二人は落胆した。まさかこんな所にボスキャラがいるとは思っていなかったから

「そのまま二人は捕まりましたとさ、めでたしめでたし」

盾無は笑顔で二人に近寄ってタッチした

「君たちにはちょっと聞きたいことがあるんだ。というわけでお茶にしない？　そろそろ鬼ごっこの時間も終わりだから残りの二人も呼んでさ」

その発言通り、鬼ごっこ終了を知らせるチャイムが鳴った

「……用件は何でしょうか？」

「もう、遊星君。そんなに不機嫌にならなくてもいいじゃない。ただ親交を深めたいだけよ」

「なら普通に来てください……何もこんな方法を取らなくても……」

一夏の意見に頷く三人。今彼らは、外の喫茶店にいる。お店にはほかにお客がいない

盾無曰く隠れた名店とのこと

「まあいいじゃない。あんまり細かいことは気にしないで。うふふ、

かわいいわね。十代君と遊戯君の近くにいる子達は」

その言葉に一夏は驚く。盾無も精霊が見えていることだ

「私でもどうしてかわからないんだけどね。じゃあ本題に入りましょう。君たちは、完全なる理想郷（パーフェクトユートピア）について教えてほしいの。彼女たちはこの前学園に来てたわよね？　十代君が戦う前から」

急に真剣な表情になったため、四人は少し戸惑ったが、一応答えることにした

「……多くは分かりませんが、あいつらの狙いは女尊男卑の撤廃と一夏です」

「相手の力は僕たちの使っているカードと同じものです」

他にも話したが、特に大きな発見はなかったみたいだ

「……そう、分かったわ。一応私は生徒会長だから自分の学園の生徒たちは守りたいの……敵はそれだけじゃないしね」

盾無はぼそりと呟いた言葉を聞くことはできなかった

「ありがとうね。私今から仕事しないといけないから帰るわね。ここはおごってあげるから。じゃあ、いい夏休みを過ごしてね」

去り際に

「また会うかもね」

笑いながら去って行った。四人は彼女を見てこう思った

少し警戒した方がいいかもしれない

そして

いい夏休みを過ごすために妨害してほしくないと

後日、勝者が生徒会長ということを知ってショックを受けた女子が大勢いたとか

第３２話　会長登場！　終業式は男子達の厄日？（後書き）

次回から夏休み編に入ります

感想・指摘等あればよろしくお願いします

第３３話　夏休み開始　十代ＶＳ鈴＆セシリア（前書き）

書かせていただきます
原作見たく進めていくと思います

第３３話　夏休み開始　十代ＶＳ鈴＆セシリア

ＩＳ学園は遅い夏休みに入っていた。ほとんどの人は自分の国に帰国していた

無論帰らない人もいる。鈴もその一人である

自分の部屋に戻る途中の彼女はにやにやしていた。先ほど一夏に最近できたばかりで人気のレジャーランド、ウォーターワールドに誘うことができたからだ

（さーてと、これからどうしようかしら）

「お、鈴じゃん。何だかご機嫌だな」

鈴は正面から声が聞こえたため顔を上げると目の前に十代がいた

「ん？　そのチケット……そっか、誰かと遊びに行くのか？」

「まあね、あんたはどうしたの？」

「また検査だよ、俺のＩＳが第二形態に移行したのと遊星はＩＳが使えるようになったから、遊戯さんは新しいＩＳが出てきたからな。研究者にとってはいい対象さ。俺は先に終わったから部屋に戻るところ」

ため息をついている十代に鈴は少し同情していた

確かに検査はめんどくさい。そのうえ、彼らは特殊すぎる。そんな人たちを放っておくわけがないのだろう

「確かに面倒よね。でもまた前みたいになる気がするわ。あんたたちのＩＳって訳が分からないから」

「だよな」

お互いに笑っていた。そのまま二人は別れた

（あいつらも大変なんだ。一夏にリフレッシュさせるように頼んでおこうかな？　一応友達だし）

そのまま鈴は部屋に戻った。もう一度、明日の一夏とのデートを思い浮かべながら

しかし、その願いは散った

次の日、鈴は約束の場所に待っているとセシリアが来ただけで肝心の一夏が来ない

イライラして遂に一夏に電話をした。そこで一夏は行けなくなったことを話した

勿論昨日話そうとしたのだが、電話にも出ないし直接行ったらもう寝てると同室の人に言われた

それを聞いて鈴はショックを受けた。まさかそんなことになるとは思っていなかったから

そしてセシリアに自分のチケットを譲ったらしい

そのことをセシリアに話すと、お互いにがっかりして帰ろうとしていた

その時

「本日のメインイベント、水上ペアタッグ障害物レースは午後一時から開始です。参加したい方は、十二時までにフロントに来てください。そして、優勝者には五泊六日の沖縄旅行をペアでプレゼントします」

この放送を聞いた時、二人はこれだ！　と感じたらしい

お互いに手を取り

「「目指せ、優勝！！」」

「では、本日開催のメインイベント。水上ペアタッグ障害物レースを開催したいと思います！！」

司会のお姉さんのテンションに合わせ、会場の歓声と拍手が入り乱れる

「では、参加者に大きな拍手を！」

さらに大きな拍手が起こった

鈴とセシリアはどうでもよさそうに準備運動をしていた

（さてと、優勝賞品はセシリアから奪うとして……）

（鈴さんには適当なものを渡しておけばいいですわね）

お互いパートナーのはずなのだが、商品は奪い合いになっている

それもそのはず、お互いにこの商品を使って一夏と行こうと思っているからだ

「さて、ルールの確認の確認です。この五〇×五〇メートルの巨大

なプールの中央の島のフラッグを取ったペアが優勝となります。なお、円を描くように中央の島へと続いています。障害はペアで協力して抜けてくださいね」

プールを見てみると、ショートカットはできず、一度落ちると最初からやり直しのようだ

これを見て、鈴とセシリアは勝てると思った。相手は一般人。自分たちは軍のトレーニングを受けた。よって圧倒的に有利

だが、司会の人の言葉にはまだ続きがあった

「そして、今回参加者とは別にこちらから二組ほど、妨害役を用意しました。この方たちが先にゴールしたらもちろん、その方たちが優勝となります。みなさん、頑張ってくださいね」

司会のお姉さんの言葉を受け四人の人物が出てきた。そのうちの一人に鈴とセシリアは驚く

（（じゅ、十代　（さん）！？　何でここに……））

「観客の皆さん、妨害役は全員男性の方。彼らが勝たないように女性を応援してくださいね」

観客はより騒がしくなった

十代も鈴とセシリアに気が付いたのか近づいてきた

「何だ、お前たち。これに出るなんてな」

「そんなことより何であんたがここに！？」

「バイトだよ、夏休みだから少しくらいやった方がいいと思って千冬さんとかいろんな先生に相談したらここを教えてもらったんだ。やるからには負けないぜ」

そう言い残して、十代は妨害役のスタートラインに向かった

この勝負、油断ができない。女子二人はそう感じた

「それではよーい、スタート」

一気に飛び出していく参加者たち

しかしこのレース、妨害がアリなためいきなり足を引っ掛けようとしている人もいる

勿論かわすが、先頭グループの中に十代とそのペアの姿があった

どうやら彼らは、さっさと逃げ切るらしい

（どうするんですの？　このままだと負けてしまいますわよ）

（軽く妨害してさっさと先に行くわよ。勝たなきゃいけないんだから）

ＩＳのプライベート・チャンネルを使って話し、一気に妨害する人たちをプールへ落していった

そのまま彼女たちは軽く障害物を超えていく

（は、こんなの楽勝よ）

（レベルが低いですわね）

ノリノリで突破していく二人。しかし問題が発生した

目の前のペアが柔道とレスリングのメダリスト、そしてその先に十代とそのペア

二組とも曲芸師のように障害物を軽くこなしていた

それはまだいい、問題はこのまま同じ速度で走っていては確実に負けてしまう

「セシリア、あんた私を投げ飛ばしたりとかできない？」

「無茶言わないでください！　前の方のような体つきではないのですから」

勿論メダリストのことである。考えても答えが出ない

「ええい、こうなったら……」

「ちょっと鈴さん……しょうがないですわね」

鈴とセシリアはいきなりＩＳを起動させようとしていた。しかし、やろうとした瞬間、急に足場が揺れ、二人は島から落ちてしまった

何が起きたのかわからない……そう思って二人は上を見た時、十代

の左腕にデュエルディスクが装着されていることに気が付いた

「あ、あんた！　なんかモンスター呼んだの！？」

「悪いな、俺と相方のバイト代かかってるから」

そのまま十代達のペアが優勝した

「納得いかないわ！！　優勝賞品渡しなさいよ！」

「そうですわよ、十代さん！　いくらなんでも卑怯な行いなのでは

ありませんか？」

「ＩＳ起動させようとしてたやつが言うことかよ……」

イベントの後、十代と鈴、セシリアは喫茶店にいた

あの後、十代とその相方に商品が渡され、その後彼らはこっそり司会の人に返していた。バイト代と交換で

「あ、あの、十代さん」

十代と組んでいた人が走ってやってきた

「今日はありがとうございます。おかげで何とかなりそうです」

「気にするなよ。俺もあんだけ動けたから楽しかったし、速く妹の所に行った方がいいと思うぜ」

十代は笑顔で彼を送り出していた

「あいつさ、なんか病気の妹がいて金が必要なんだって。それで短期のバイトでさっきの妨害役。勝たないともらえないからさ」

十代の説明を受けると二人はさっきまでの文句の顔がなくなってしまった

「まあ、そういうことなら」

「許してあげなくもないですけど……」

その様子を遠目から見ていたユベルは呆れるように見ていた

十代は素直じゃないと笑ったら二人に怒られ、喫茶店でいろいろ奢らされたらしい

こうして十代のバイト兼鈴たちの勝負は終わった

夏休みはまだ続く……

第３３話　夏休み開始　十代ＶＳ鈴＆セシリア（後書き）

一夏の出番が少ない……
まあ、これから増やしていければなと思います。
次はシャルとラウラ　そして遊戯王サイドからもう一名です

感想・指摘等あればよろしくお願いします

第３４話　執事とメイドと修理屋さんの活躍　異世界人の談義（前書き）

書かせていただきます
何やら原作者がもう書かないかもという話をちらほら聞きますが、
書けるところまで書いていこうと思います

第３４話　執事とメイドと修理屋さんの活躍　異世界人の談義

シャルロットは執事服、ラウラはメイド服を着て@クルーズという喫茶店の接客している

こんなことになっているのにはわけがある

彼女たちは買い物をしていた時に喫茶店の店長から泣いて頼まれたのでしょうがなく受けた感じだ

最初は仕方なくやっていた感じだったが、だんだんやっているうちに楽しくなってきた

シャルロットは丁寧に対応し、ラウラは冷ややかな態度で接客していた

どちらもお客にものすごく良い評価を受けていた

そんなにぎわっているお店にとんでもない客が来た

「全員動くな！！」

三人の男がドアを蹴破るかのように店に入り、銃声を聞かせた

その音に店の人達は驚き、悲鳴が上がった

「騒ぐんじゃねえ！」

覆面にジャンパー、そして彼らの手には札束の入った鞄があった

銀行強盗をした後の犯人なのだろうと多くの人が予想できた

外で警察が対応しているが、店の中に人がいるためうかつに手が出せない

犯人が要求を警察に告げている間、シャルロットは状況を分析していた

（ハンドガンに、ショットガン、それからマシンガンだね。何か隠し持っている可能性もあるけど……今は……！？）

分析している時、すでにラウラが犯人の目の前に立っていた

（もう、もっと時期を待ってから……って言ってもしょうがないよね。やるしかないか）

ラウラの行動に合わせ、シャルロットも犯人に攻撃を加える

彼女たちは国の候補生である。よって戦いというものに慣れている

この程度の相手ならば、後れを取ることはない

そう思っていたが、リーダー格の男が店長を人質にとり、こめかみに銃を突き付けていた

「お前ら、それ以上動いたらこいつを殺す！」

普通ならば、これくらいどうということもない。しかし、二人とも相手との距離が離れている

人質を殺される前に、相手を倒すのは不可能

そう思った時

「随分と姑息な手を使うんだな」

犯人の後ろから声がした。そしてその犯人の後頭部にスパナがぶつけられた

その隙にラウラは人質となっていた店長を救い、犯人の武器を回収した

二人は犯人の後ろにいた人を見た。遊星がスパナを投げていたようだ

「遊星か、助かった。だが、どうして」

「バイトで、この店の空調や調理器具の修理を頼まれていたんだ。だが、こんなことに巻き込まれるとは思ってなかったがな」

遊星はそう言いながら素早く犯人の腕を取って関節を決め、抑え込んだ

「……シャルロット、こいつ爆弾か何かを隠し持っている。悪いが、取ってくれないか？」

「あ、うん。そっか、抑えた時に音がしたんだね」

シャルロットの言葉に遊星は頷く。遊星の言葉通り、彼はプラスチック爆弾の腹巻を身に着けていた

すぐに無効化させ、制圧を完了させた

「た、助かったのか？」

「ありがとうメイドさん、執事さん、修理屋さん」

お客さんが口々にお礼を言っていた。そして警察の人も犯人を連行するために入ってきた

目立ってしまうこの状況は少しまずいと思い、三人は店を出ることにした

その去っていく姿を見た店長は何か事情があるのかと察したのか

「またのご来店を」

それだけ言っていた

何とか店を出て、落ち着いたところに出てきた三人

「なんだか大変だったね」

「だが楽勝だったぞ？」

「いや、ラウラ。そういう意味じゃない」

遊星とシャルロットはラウラの言葉に笑っていた

「お前たちはまだ買い物を続けるのか？」

「うん、まああとは軽く……かな？」

「まだ行くのか……いったい何を買うというのだ？」

ラウラは少し文句を言っている

「そういうな、ラウラ。そういう付き合いも大事だと俺は思うぞ。……悪いがまだ用事があるから俺は行く。また後でな、二人とも」

遊星はそのまま去って行った。見送ってからラウラとシャルロットは自分たちの買い物を再開した

その日の夕食、十代と遊戯、遊星の三人で食べていた。一夏はレポートが終わってから食事をするらしい

男子三人の所に行こうとして少しためらう人が多いようだ

勿論、いつもの五人も近くにいる

「ねえ、そういえばさ。一夏君って誰のことが好きなんだろうね？」

ふと言った遊戯の一言で周りが静かになった。男子の意見が聞ける重要な場面だ。聞かないなんて選択肢があるわけがない

三人は特に気にせず話し始めた

「う～ん、やっぱりいつもの五人なんじゃないんですか？」

「俺達の知らない人……は考えにくいですね」

男子の意見にみんなは耳を傾ける

「五人の中だったら誰でしょうね？」

「篠ノ之さんは、料理がうまいよね。僕お弁当を見せてもらったことあるけど、すごく丁寧だよね」

遊戯の言葉に箒はガッツポーズを小さくしていた

「でもさ、結構一夏を結構殴ってますよね？　木刀で」

『ああ、あれは見ていていつか一夏の奴死ぬんじゃないかとひやひやするぜ』

遊戯のペンダントから聞こえた声にここにいる男子だけでなく多くの人は納得していた

「僕、今一夏君と同室だけど、朝容赦なく連れ出すんだ。朝五時半

とかまだ眠いよ」

「ああ、朝練でしたっけ？　一夏……長生きできるのかな？」

十代のボヤキに箒はショックを受けていた

「箒さん……」

「ち、違う。私はあいつを叩きなおしてやろうと……」

セシリアに対して言い訳をしていたが、すぐに十代達の話が再開した

「セシリアは、何というかお嬢様っていうオーラが出てるよな」

「……だが料理がな……一夏の奴、大丈夫だろうか？　顔が蒼くなっていたのを見たことがある」

「鈴さんの奴が作る酢豚、あれはすごいよね。それになんだかんだでいろいろ言い合える仲だもんね」

「でもあいつ何でか知らないけど、一夏の分は冷めたのを渡してるんだよな。この前一夏のつまみ食いした時に驚いたぜ、しかも自分の分はちゃんと温まってるし」

「シャルロットは結構気が利くよな。ああいう気配りってすごいと思うぜ」

「しかしシャルロットは何というか嫉妬深い気がする。少しでもほかの女性に優しくしたら不機嫌になる感じがするんだが」

「ラウラなら一夏を守ってやれるんじゃないか？　軍で鍛えた力は伊達じゃないだろう」

「でも彼女は間違った知識を吸収しすぎだよね。朝から一夏君の布団の中に全裸で入るのはちょっと……しかも僕目隠しされてるし」

それぞれ良いところと悪いところを言っていた。お互いにそれが分かっているのか頷きながら会話をしていた

ちょっと気になり、女子五人組が何か言おうとした時

「まあでも結局一夏が決めることだから俺達が言っても意味ないもんな。もしかしたら本当に俺達の知らない子を選ぶかもしれないし」

「そうだね。一夏君、結構鈍いところあるけど、ちゃんと誰かを選ぶ気がするな」

「あいつはそういう所はしっかり決めそうだからな」

三人の結論を聞いて、黙ってしまった。確かに一夏自身が決めることだ。だから周りが言うことじゃない

その話が終わると同時くらいに一夏がやってきて、遊戯達の席に座った

「お、終わったのか」

「何とか……そうだ、明後日って空いてますか？　俺の友達を紹介したいんですけど」

「うん、いいよ」

「そういえば会ったことがなかったか」

男子達はそのまま話が盛り上がっていた。それを見て女子も自分たちの食事に戻った

夏休みはまだ続きそう……

第３４話　執事とメイドと修理屋さんの活躍　異世界人の談義（後書き）

次回はオリジナルの話になると思います
感想・指摘等あればよろしくお願いします

第３５話　ある日の昼食　（前書き）

書かせていただきます
いいタイトル名が思いつかないです……

第３５話　ある日の昼食

夏休みのある日、一夏は整備室に向かっていた。自分のＩＳが新しくなったため、調整しようと思っていた

（う～ん、でもどうやって調整しよう……？　やっぱり遊星さんに相談した方がいいのかな？）

考えながら歩いていると、誰かにぶつかってしまった

「ごめん！　あ、シャル」

「こちらこそ……一夏」

どうやらお互いに考え事をしていたようだ

「一夏はどこに行こうとしてたの？」

「ちょっと整備室に行こうと思っていたんだ。少し前に第二次移行したから調整しようと思ったんだ」

そういうとシャルロットは少し考えていた

「僕も付き合っていいかな？　少しくらいならアドバイスできるかもしれないし」

「いいのか？　じゃあ頼むよ。遊星さんに毎回相談していたからた

まにはほかの人にも聞いていた方がいいかなって思っていたところだから」

一夏がそう言うと、シャルロットは笑顔で引き受けた

（えへへ、一夏と一緒に作業……嬉しいな）

ずっとニコニコしながら整備室に向かった

「……一夏、久しぶり」

「お～おりむ～、でゅっち。久しぶり～」

先客がいた。簪と本音の二人だ

簪はいつも通り、自分のＩＳを調整中、本音はＩＳの調整を手伝わず、お世話をしていた。一人でやりたいという意思を尊重しているのだろう

「こんにちは、えっと……」

「更識簪……あなた達とは、別のクラスだから知らないのも無理はない」

シャルロットが聞こうとしたらすぐ答えてくれた

「更識って確か……生徒会長の……」

その言葉を聞くと不機嫌そうにそっぽを向いて、作業を続けてしまった

どうしたのかと一夏とシャルロットは首を傾げた

「えっとね、ちょっとかんちゃんと会長は仲が良くないの。だからあんまりお話に出してほしくないんだって」

本音が二人に説明してくれた

すぐにシャルロットは謝ったが、無視されてしまう

しょうがないと思い、二人は作業を始めた

一夏はシャルロットに色々と聞いて、自分のＩＳの調整をしている。
シャルロットも同じように作業をしていた

「よう、いないと思ったらここにいたのか」

作業を始めて一時間くらい経った頃に十代がやってきた

「どうしたんですか？」

「いや、そろそろ昼飯の時間なんだけど、遊戯さんと遊星は用事でいないんだ。で、一人で食べるのはつまんないから誰か探してたところ」

十代の言葉に一夏達は納得した。確かに一人で食べるご飯はつまらない

「うん、僕はいいよ」

「俺も一緒に行きます。簪たちはどうする？」

「もちろんだよ」

「私は……」

簪は断ろうとしたのだが

「行こうぜ、俺や本音だけじゃなくってみんなで食べた方がいいって」

「じゅーじゅーの言うとおりだね～かんちゃん、行こう」

「……わかった……騒がしくしないなら……いい」

十代と本音に言われ、しょうがなく同意してしまった

食堂に着き、すぐにご飯を食べることにした

十代は焼肉定食、一夏は冷やし中華、シャルロットは冷菜パスタ、箒はきつねうどん、本音はお茶漬け

「やっぱり、皆で食べる飯はいいよな」

「ですよね」

「僕もそう思うよ」

「だね～」

明るく食事をしている。本音がズズッとすすっているのが気になるが……

箒も静かに食べている

「そういえばじゅーじゅーはどうして整備室に来たの？」

「さっきも言ったけど一緒に飯食う人を探してたんだ。整備室なら大体箒がいると思って」

「……え？」

その言葉に少しドキッとしてしまう簪

「私に……会いに？」

「ん？　まあ、そうだな。確かにそうかもな、最近簪と一緒に飯食ってなかったから」

「そっか……」

十代にとって簪は友達だ。簪も同じなのだが、なんだか悔しい気分になっていた

（う～ん、簪さんって十代のことどう思っているんだろうな？）

「なあ、少しパスタもらってもいいか？」

「ふえ？」

シャルロットが考え事をしていると急に一夏が話しかけてきたので、変な声を出してしまった

「ごめん、見ておいしそうだなって思って……」

「ううん、僕も考え事してたから。それより、どうぞ」

「お、サンキュー。じゃあ俺のも」

お互いの料理を食べ、二人とも笑顔になった

一夏は素直に料理がおいしくて笑顔になったが、シャルロットはそれだけでなく一夏の料理をもらえたのも嬉しかったらしい

（……シャルロットは……一夏のことが気になるのかな？）

ちらりと見た簪はそんな感想を持った

そして本音は相変わらずすすって食べている

食事も終わりこれからどうしようかと思った時、山田先生がやってきた

「ちょうどいいところにいました。織斑君、少し確認してほしい資料があるので、来てもらえますか？」

断る理由もないのですぐに片づけを始めた

「じゃあごちそうさま。シャル、今日はありがとうな」

そう言い残して、一夏は山田先生について行った

「私は……もうひと頑張りする」

「じゃあ、かんちゃんに付き合うね～」

二人はやることが決まっていたみたいで、すぐに片づけをしていた

残ったのは十代とシャルロットだ

「何かシャルロットと二人きりってはじめてかもな」

「そうだね」

お互いに笑顔になった。そこにハネクリボーも加わって笑った

「ねえ、どうして十代は簪さんを気にしてるの？」

シャルロットの突然の質問に十代は少し考え答えた

「簪はさ、俺の友達に色々と似ているんだ」

少し懐かしそうな目をしていた

「そいつにも兄貴がいて、学園最強だったからプレッシャーを感じてたと思うんだ。自分もそうならないといけないって」

シャルロットは盾無のことを思い出した。会長とは学園最強の証と、そしてこの学園、唯一の代表生。優秀だ、彼女の目から見てもそう思う

「簪とは友達だからさ、俺は助けてやりたいんだ。自分のお姉さんを超えるつもりで頑張れって」

（そっか、十代は簪さんのことをそういう風に考えていたんだ。でも、あの時の十代を見る目は、友達って感じがしなかったな）

「そういうシャルロットは一夏のことどうなんだよ？　何か見てる友達以上の感じがするけど」

「え！？」

十代の言葉に驚いて大きな声を出してしまうシャルロット

「ど、どどどどうしてそんなことを聞くの！？」

「何か気になってさ。やっぱりあれかな？　前に一夏と一緒の部屋だったからかな？　俺には何となくシャルロットと一緒にいる一夏が一番楽しそうに見えるな。まあ、俺達には負けるけどな」

十代は笑顔で語っていたが、シャルロットの顔は真っ赤になっていた

その様子を見ていたハネクリボーは首を傾げながらシャルロットを見つめていた

見つめられて恥ずかしくなったのか顔を背けた

「ん？　シャルロット、どうしたんだ？」

「なななな何でもないよ？！！　気にしなくていいから」

（どうしよう……一夏は僕と一緒にいると楽しいって……男の子の目から見たらそう見えるんだ……）

シャルロットの頭の中の小さなシャルロットが総動員して落ち着こうとしている

ハネクリボーは不思議そうにしながらシャルロットの頭の上に載った

その様子を十代は笑顔で見ていた

少ししたら落ち着いたのかシャルロットは、一息ついた

「じゃあ僕はもう行くね」

「そうだな、俺も部屋に戻るか。また一緒に飯食おうぜ」

「うん、じゃあね」

そう言って二人は別れた

十代が部屋に戻る途中、千冬に会った

「ちょうどよかった。お前に話しておきたいことがある」

「この前の臨海学校の時にいた完全なる理想郷（パーフェクトユートピア）二人だが……お前達が言っていた三幻魔を使った女性は精神が崩壊して廃人になっていたから何を言っても反応しなくてなっていた。邪神の方の女性は喋らないつもりなのだろう。口を割らせようとしたが、手強くてな……」

「そうですか……でも、油断はできないですよね。相手の組織の人は他にもいますし、とんでもなく強力な力を持っていると思います」

「そうだな。何かわかったことがあったら教えてくれ。またあいつから口を割らせるから、今言ったことを不動と武藤にも伝えておいてくれ」

そのまま千冬は戻って行った

「千冬先生、怖いな」

（だね、一体どんな方法を使っているんだろうな……？）

十代とユベルは感想を言っていた。考えてもしょうがないと思い、

部屋に戻った

昼ごはんが充実した気がした日だった

第３５話　ある日の昼食　（後書き）

なんとなくルートが決まってきた気がしました

いつくっつくかはまだ秘密ですが

感想・指摘等あればよろしくお願いします

第３６話　突撃！！　一夏のいる実家へ

「……ここで間違いないよね」

シャルロットは織斑と書かれた表札を見ていた

今、彼女がいるのは寮の廊下ではなく路上。つまり、彼の実家である

（今日は家にいるって言ってたし……迷惑じゃないよね？）

よしと思いインターフォンを鳴らそうとしたら

「あれ？　シャル、どうしたんだ？」

「おはよう、シャルロットさん」

一夏と遊戯がシャルロットの後ろから話しかけていた

「え、えっと本日はお日柄もよく……じゃなくて……」

シャルロットが慌てているのを見て一夏は首を傾げたが遊戯にはわかったようだ

「き、来ちゃった」

（うわ～どうして気のきいた言葉が言えないんだろう……）

自分で言って自分で後悔していた

「まあ、とにかく上がっていけよ。あんまりいいもてなしはできないけど」

「い、いいの？　上がっても？」

興奮気味のシャルロットを見て遊戯は何かを考えて言う

「シャルロットさん、落ち着いて……僕少し出かけようかな？　買いたいものを思い出したから。遅くてもお昼ごろに戻ってくるよ」

「え？　そんないいよ、気を遣わなくても……」

遊戯の言葉に遠慮をするシャルロット

「でも、一夏君に会いに来たんでしょ？」

一夏には聞こえないようにこっそりと言うとシャルロットは顔を少し赤くして頷いた

その様子を見て遊戯は笑顔になり、そのまま出かけてしまった

「遊戯さんの買い物って何だろうな？　とりあえず暑いから中に入ろうぜ」

「うん、ありがとうね。一夏」

一夏に誘われ、そのまま中に入ることにしたシャルロット

自分の想いの人の家に入れてドキドキしている彼女は飲み物を用意
している彼の姿を見て本当に家事が得意なんだと感心していた

出された麦茶を飲んでいると、チャイムの音がした

一夏が出迎えるとシャルロットにとって聞き覚えのある声が聞こえた

そこにはセシリアの姿があった

「「え？」」

お互いに発した言葉だった

その後、二人は一夏に部屋を見せてもらう、だがその時にまた来客。
箒、鈴、ラウラだった

結局いつもの五人が集まった

（（（（みんな考えることは同じか））））

そう思っていると、遊戯と十代、遊星がやってきた

「何だ、皆来てたのか」

「一夏、昼食はどうする？」

「できることがあったら僕たちも手伝うよ」

この日の昼食は男性四人が作ることになった。まあ、人数が多いのでそうめんになったのだが

「しかし、皆来るなら一言くらい言ってくれてもよかったのに」

一夏の言葉にみんなは少し黙ってしまう

それぞれ、偶然来ちゃった。というのをやりたかったのだ

「まあ、いいじゃないか。こういうにぎやかなのもいいしな」

「だが、やはりきついか……」

「そうだね」

『この人数だからな。しょうがないさ』

男の子たちは少し窮屈そうにしていた

「午後はどうするんだ？　俺の家にいたいんだよな？」

一夏がそう言うと当然！　と女子たちは口を合わせて言った

それを見た遊戯は笑顔になっていた。皆一夏のことが好きなんだと思って

十代と遊星はあんまり理解していないようだ

皆が食べ終えると、一夏は立ち上がってお茶を入れようと台所に向かった

すぐにシャルロットが手伝いに参加した。これには残りのメンバーはしまったと思った

二人で片づけをしている様子を見て

「何か夫婦って感じだな」

「十代さん、なかなかいい表現ですね」

その言葉に顔を赤くした一夏とシャルロット。そして、十代をギロリとにらむ視線があった

「へ？　俺何かしたか？」

（君は相変わらずだね。まあそこがいい所なんだけどね）

ぼそりとユベルは呟いた

（十代さん、いきなりなんてこと言うんだよ。確かにシャルはかわいいけど、夫婦って表現は、ちょっと違うような……悪い気分ではないけど……）

（十代は本当にすごい発言するよね……本当にそう思っちゃうよ……）

（く、遊城のやつ。一体どういうつもりで言ったんだ？）

（わたくしがもっと早く手伝えば……）

（シャルロットよりあたしの方がいいに決まってんじゃない！）

（十代の奴、一夏は私の嫁のことを忘れて発言したのか？）

それぞれ色々と思っていた

片づけも終わった所で、鈴の持ってきたボードゲームで遊ぶことになった

しかし皆は知らなかった。この場にゲーム屋の孫がいることを

勿論ゲームは遊戯の圧勝。十代と遊星がたまに勝つという結果に終わった

「何で遊戯こんなに強いのよ！」

「これやったことあったから、久しぶりだったけど結構覚えていたから」

「確か遊戯さんって実家がゲーム屋でしたよね？」

「な、卑怯ではありませんか？」

「く、だがこれも戦い……しょうがない」

「それならしょうがないですね」

この結果に様々な意見が出ていた。騒いでいると、千冬が帰ってきた

「賑やかだと思ったらお前たちか」

「お帰り、千冬姉」

すぐに一夏は立ち上がって千冬の世話をしていた。まるで執事のように

その様子を見ていた女子たちの視線を感じ、千冬はすぐに出かけることにした。泊ることのないようにと釘を刺して

それを見て遊戯達は立ち上がった

「僕たちはそろそろ寮に帰るね。一夏君、今日はありがとうね」

「俺は今日の分の課題やらないといけないから」

「じゃあまた今度な」

一緒に千冬と玄関を出た

「……何故お前たちも帰ることにしたんだ？」

「あの子たちの邪魔をしたらいけないかなって思いまして」

「俺は本当に課題があるので……でも確かにあのまま俺達いたら気まずいですよね」

「そうですね。何を言われるかわかったもんじゃないからな」

三人の意見を聞いて千冬は笑っていた

「ねえ、千冬さんは一夏君が誰を好きになると思います？」

「さあな、私はあいつではないからな」

遊戯の質問をひらりとかわした

「そうだ、お前たちも……って未成年だったな、誘うことはできないか。気を付けて帰れよ」

軽く手を振ってそのまま去って行った。その姿を見送って遊戯達は寮に戻ることにした

「そういえば十代君と遊星君は午前中どこに行っていたの？」

「弾の家でバイトしていました」

「俺は修理のバイトを」

それぞれのバイトをしていたようだ。ちなみに遊戯も一応バイトはしているらしい

「ねえ、明後日カードショップに行ってみない？　この前三人で一緒に行ったところ」

「いいですね、行きましょう」

十代のテンションは上がって興奮していた

遊星も嬉しそうにしていた

こうして夏休みは終盤を迎える

第３６話　突撃！！　一夏のいる実家へ（後書き）

次回はオリジナルにする予定です
ちなみに一夏は夏祭りに行っているということにしておいてください

感想・指摘等あればよろしくお願いします

第37話　みんなでカードショップに　気づいた想い（前書き）

書かせていただきます
今回は視点が何回か変更します

第37話　みんなでカードショップに　気づいた想い

一夏　ｓｉｄｅ

……あんまり眠れなかった

もうすぐ夏休みも終わるということで、寮に帰ってきた

しかしいろいろと困ったことがある。夜に眠れなくなってしまった

原因は……この前のあれかな？

俺が実家に帰っていた時、いつもの皆が家にやってきた

その時に十代さんが言った言葉

「なんだか夫婦みたいだな」

これが気になってしょうがない

シャルとは友達だって思っていた。でも……最近……夜シャルのことを考えてしまい眠れなくなっている気がする

起きている時に会うのも少し緊張することがある

今まで自覚したことがなかったけど、やっぱりこれって……

何だか誰かに聞いてもらいたい……でも誰に？

「う～ん、一夏君。おはよう、やっぱり早いね」

「あ、おはようございます。遊戯さん」

今一緒の部屋にいる遊戯さんが目を覚ました。まだ、七時前だから少し早めに起こしてしまったか

「今日は気持ちがいい朝になりそうだね。少し早いけど、朝ご飯を食べに食堂に行こうか」

遊戯さんがカーテンを開け、外を見て言った

うん、確かにいい天気だ。俺は遊戯さんの提案に賛成した

すぐに着替えて、食堂に向かった。到着すると珍しいことに遊星さんと十代さんがすでにいた

十代さんは寝起きが悪い方だと思っていたけど

「よ、一夏。なんかいい朝だから目が覚めてさ。早い朝食に来たってところだ」

なるほど、彼も遊戯さんと同じだったか

とりあえず、朝食を頼んで食べることにした

「そういえば今日は暇か？　俺達はこれからカードショップに行くんだが良かったら一緒に行かないか？」

遊星さんが俺を誘ってくれたようだ

この前の帰省で部屋を掃除していたら昔使っていたカードがあった。
一応この三人とも戦えると思うが、絶対に負ける

どんなカードがあるか興味もあるし、いいかな？　それに少し気分転換をしてみるのもいいかもしれない

俺は了解の返事をする。そのすぐ後くらいに声をかけられた

振り向くとそこにはシャルがいた

一夏　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

シャルロット　ｓｉｄｅ

……また、夢を見た

夢を見始めたのはこの前一夏の家に行った日の夜から

最初は一夏とデートする夢、キスしそうなところで目が覚めた

そして今日の夢は僕と一夏の結婚式だった。同じようなところで目が覚めた

何だかすごく恥ずかしい……そのため目が覚めてしまった

ラウラは……珍しくまだ寝てる

何だかおなかがすいたな、早いけど朝食にしよう。ラウラにはメモを残しておけばいいよね

着替えてメモを残して食堂に向かった

朝早いからか、人はやっぱり少ない。適当に注文して席を探すと、四人の男の子がいた

一夏達だとすぐわかった。というよりも彼らしかこの学園には男の子はいないのだからわかって当然か

一緒に食べようかな。うん、そうしよう

「一夏、ここいいかな？」

そう言って僕は声をかけた

もちろんという感じで、席を空けてもらい座ることにした

「そうだ、シャルロットも行かないか？　今日俺達、近くにあるカードショップに行こうと思うんだ」

「う～ん、十代達がやってるカードゲームだよね？　女の子もやってるの？」

前から疑問に思っていたことを聞いてみた

「いたよ、僕の世界にも多くの女性デュエリストがいたんだ」

「学校にも女子生徒がいたしな」

「俺の仲間にもいた。女だからと言ってやらない人は少なかったな」

三人そろって言った。そんなに人気があったんだ

「俺も行ってみようと思ってるけどシャルもどうだ？　まあ、つまらないかもしれないけど」

どうしようかな？　気分転換って意味で行ってみようかな

行くことを告げると、十時に校門前で集合ということになった

時間はあるけどいろいろ用意してからいかないと

でも、ラウラとか誘った方がいいのかな？　聞こうと思った時にはすでに遊戯達は席を立っていた

……やっぱり秘密にしておこうかな？　抜け駆けしたって言われても遊戯達がいたって言えば大丈夫だと思う

すぐに朝食を終わらせ、部屋に戻るとラウラの姿がなかった

どうしたのかと思ったら僕の書いたメモ書きに何か足されていた

「新兵器を試すため今日は訓練をすることになった。今日は一日中、訓練することになると思う」

これではしょうがないと思い、準備を始めた

思ったよりもすぐに約束の時間が来たため、集合場所に集まった

行ってみるとまだ約束の時間まで十分くらいあるのに一夏はいた

「早いんだね」

「ああ、そういうシャルこそまだ時間に余裕があるのに……」

な、なんだか緊張しちゃうな

一夏と二人っきり……ちらりと顔を見てみると

一夏の顔もほんのり赤い気がする

これって……

そう思いながら黙っていると、すぐに遊戯達がやってきた

会話が続かなかったから助かった半面、もう少し二人きりにしてほしかったな

女の子の感情は難しいんだよ

そのまま、僕たちはカードショップに向かった。歩いている途中、なんだか見られている気がしたけど気のせいかな？

歩いて十五分くらいしたところに目的のお店があった

店に入ると中にはいろいろな人がいた。大人から子供、それに男の子も女の子も

こんなにも多くの人がやっているのかと少しびっくりして見ていた。一夏も同じことを思ったのか、びっくりしている

「驚いているみたいだな。俺も最初にここに来たときはお前たちと同じように思った。ここにいる人達はいい顔で楽しんでいると」

遊星が僕たちの反応に対して答えてくれた

色々と売られているカードを見てみると、面白いものを見つけた

「へえ、この騎士のカードってフランス語だね。こういうカードもあるんだ」

僕が見つけたのはフルール・ド・シュバリエという白い枠のカード

遊星が使っているシンクロモンスターというカードなのだろう

「俺の知り合いのそのモンスターを切り札に使っていた奴がいた」

「俺の学校の先生にも確かフランス人の先生がいたな」

遊星と十代の二人から説明を聞いた。本当に色々な人がやっているんだな

一夏を見てみると何か見ている。横から見てみると

「Ｎｏ．１０白騎士イルミネイター……何だか白式と名前が似てるな」

枠が黒いカードなんて初めて見た。一体どんなカード何だろう？

「ああ、君たちが武藤君たちの友達だね。ちょっとこっちに来てくれるかな？」

このお店の店主であろう人に僕たちはついていくことにした

そこには席が用意されていた。テーブルの上には二つ分のデッキ

これってもしかして……

「この前彼らにお世話になってね。そのお礼ということで、君たちにデュエルを教えてほしいと頼まれたんだ。やっていくかい？」

そうだな……僕はやってみたいけど一夏は……どうやらいいみたい

お互いに笑顔で頷いて

「「よろしくお願いします」」

お辞儀をしてから席に座って教えてもらうことにした

一夏は初めてじゃなかったからすぐに理解していたけど、僕は分からないところが多かった

でもそのたびに一夏や店長さんに教えてもらった

……一夏に教えてもらっている時は何だかうれしかった。いつもＩＳのことを教えているけどこういう時は一夏が先生なんだ

「ふふふ、君たちは仲がいいね。見ていると、心が落ち着くよ。まるで恋人同士みたいだね」

笑顔で言ってるけどなんだか少し恥ずかしい……あれ、一夏も……

シャルロット　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

一夏　ｓｉｄｅ

ううん、店長さん……そうじゃないのに

でも、いつもなら否定するのに何だかしないで黙ってしまった

「ああ、ごめんね。私も年だからね。君達みたいに仲の良い男女を見ているとつい……そうだ、良かったらこれをもらってくれないかな？」

店長の手にはさっき俺達が見ていたカードがあった

「どうやら君たちに使ってほしいってカード達が言っている気がしてね。お代なんかいらないよ」

そのまま手渡されてしまった。どうしようかとシャルと悩んでいたら遊戯さんたちに

「そのカードが君たちの所に行きたかったんだと思うよ。だから大切に持っていた方がいいと思うな」

と教えられたので、ありがたくもらうことにした

もらったカードと相性のいいカードを買って帰ることにした

帰り道、俺はシャルと話している

「今日は楽しかったな」

「そうだね。ねえ、今日もらったカードは記念にしようね。僕たちが初めてデュエルモンスターズをした記念に」

その笑顔に俺は見惚れた

それで気が付いた。ああ、俺はやっぱり

シャルのことが……

第37話　みんなでカードショップに　気づいた想い（後書き）

一夏のフラグはシャルということで

次回から5巻の内容に入ると思います。
完全なる理想郷も積極的に動くと思います

ちなみに十代と遊戯のフラグは決まっていますが、遊星はまだ完全に決定していません。候補はあるのですが……

感想・指摘等あればよろしくお願いします

第３８話　衝撃！　景品は男子達！？（前書き）

書かせていただきます
今回から5巻の内容です

第３８話　衝撃！　景品は男子達！？

夏休み明けの実戦訓練の授業

一夏と鈴が戦っている

最初は一夏が押していたが、後半になると不利になっていた

鈴は一夏の弱点である燃費の悪さが分かっていたため、長引かせていた

十代達との特訓である程度、エネルギーの使い方を学んでいたが、まだ甘いところもあった

それに対して、鈴のＩＳ甲龍は燃費と安定性を第一に考えられているためエネルギーは充分だ

そのまま衝撃砲を当てて決着をつけた

「今日は二連勝させてもらったわ。ほれほれ、なんか奢りなさいよ」

「ぐう……」

授業も終わり、いつものメンバーで昼食をとることになった

一夏は負けて悔しそうにしている

「あんまり気にしなくてもいいと思うよ、一夏君。経験の差で言えば圧倒的に鈴さんの方が上なんだし」

「そうですけど悔しいものは悔しいですよ」

「その想いがお前を強くする」

「ああ、俺達はいつでも特訓には付き合うからな」

三人の励ましを受け、一夏の顔に笑顔が戻った

それを見ていた女子たちは少し面白くないという表情をしていた

しかしその面白くない状況を打ち破る子がいた

「あのさ、特訓なら僕も付き合うよ」

「本当か、助かるよ。シャル」

一夏は笑顔で返事をした。それもまた面白くないと思われたのか他の子達も特訓を手伝うと一斉に言ってきた

その様子を遊戯達は外で見ているだけだった

しかしそんなのんびりとした雰囲気は崩れる

次の日の朝、全校集会があった

今月半ばにある学園祭についての話だ

「それでは、生徒会長からのお話です。お願いします」

役員の一人が宣言すると、すぐに壇上に盾無が上がった

「やあおはよう。生徒会長の更識盾無だよ」

「今回のメインイベント、学園祭に面白い特別ルールをつけることにしたの」

空間投影ディスプレイが出てきて、そこに文字が浮かび上がった

その文字を見た瞬間、男子四人は叫んだ

「「「「な、何だ。それ！！？」」」」

そこには

各部対抗男子四人を丸ごと争奪戦

と書かれていた

「ハイハイ、話すから少し待ってね。学園祭で各部活はそれぞれ催しをしてそれに対して投票を行い、上位の部活に特別助成金を出すことになっています。しかしそれではつまらないので、こうしました。優勝した所には男子四人が全員強制入部させます」

盾無の言葉にみんな雄叫びを上げていた

商品にされた男子達はポカンとしていた

その日の放課後に今度はクラスでの出し物を話し合っていた

しかし出る意見といえば

「織斑君のホストクラブ」

「遊城君とツイスターゲーム」

「武藤君とポッキーゲーム」

「不動君と王様ゲーム」

こんな感じである。当然、当の本人たちは却下している

その後出てきたメイド喫茶という意見で決定になった

男子達は執事の格好をすることに

そのことを一夏と十代は千冬に報告しに行った

その帰り道

「やあ、ご機嫌いかがかな？」

騒ぎの元を作った人物に二人は出会った

一夏は警戒し、十代は少し呆れた感じで見ていた

「あれなんですか？　会長」

「やん、十代君。会長って呼ぶのはやめて。盾無って呼んでほしいな」

おちゃめに返す

「それに一夏君もそんなにふさぎ込まないでほしいな。こんな状況にした代わりにあなたのコーチしてあげるから」

「……コーチは間に合っています」

「……ああ、そっか。言い忘れてたわね、この学園の生徒会長っていうのはね」

喋っている途中に運動系の女子が彼女を襲撃した

何とかしようと一夏は二人の間に入り、十代は盾無をかばおうとした

「あら、素敵な心がけね。でも大丈夫よ」

言っている途中にその女子を軽くいなし、さらにもう一人の襲撃者も一撃で倒した

「生徒会長は最強であれ……てね。私を倒したら生徒会長の座を譲るとは言っていたけど、久しぶりに襲われたわ。私の実力が分かっていないわけではなさそうなのに」

その立ち振る舞いに十代は感激していた

「すっげー、盾無会長ってすごいんですね」

「あはは、褒めても何も出さないわよ。十代君」

二人は笑い合っていつの間にか仲良しになっていた

「そうそう、残りの二人の男の子たちもつれてきてくれる？　今から君たちを招待したい所があるから」

盾無の指示通り、一夏は遊戯と遊星を呼び、四人は盾無の後について行った

どうやら目的の場所は生徒会室だったようだ

入ろうとした時に馴染みののんびりした声が聞こえた

「もしかして……本音がいるのか？」

「そういえば同じクラスだったわね」

盾無はすぐにドアを開けて中に入った

「お帰りなさい。会長」

「お帰り～、お～会長が男の子を連れてきた」

一人は本音だがもう一人のメガネをかけた人は初めて見る人だったらしく四人は首を傾げた

「初めまして、私は布仏虚。名字でわかるかもしれないけどこの子の姉」

一礼した後、彼女は皆の分の紅茶を用意し始めた

本音はのんびりケーキを持ってきたが、ケーキのフィルムについたクリームを舐めていたため怒られていた

「本音ちゃん、そういうのはあんまりやっちゃだめだよ」

「だってみんな仲良しなんだよ。親しい人たちだけなんだから……」

「本音、殴られたりないのかしら？」

「あわわ、ごめんなさい」

姉妹の掛け合いに遊戯は笑顔で見ていた

「仲の良さを見せるはいいから本題に入るわね。君たちが部活に入らないということで、苦情が来ちゃっているのよ」

「それで今回の学園祭を利用した。そういうことですか、盾無会長」

「あら、頭の回転が速い子は好きよ。遊星君」

彼女の手にはあっぱれと書かれた扇子があった

「そうね、まあさっきも言ったけど代わりに一夏君は私が鍛えてあげるわ。遊戯君たちには完全なる理想郷（パーフェクトユートピア）についての情報を提供する。悪い条件じゃないと思うのだけれど」

「だから遠慮しますって」

一夏はかたくなに断る。その一方で、遊戯達はすぐに承諾し、紅茶を飲んでいた

「おいしいですね」

「紅茶はあまり飲まないが、うまいな」

「ありがとうね。そう言っていただけると淹れたかいがあるわ」

楽しく談笑していた

「そもそもどうして盾無会長は、一夏を鍛えようと思ってるんだ？」

「ん？　彼が弱いからよ」

十代の質問に軽く答えた

「そんなことないですよ」

「ううん、めちゃくちゃ弱いね。だからちょっとでもましになるように私が鍛えてあげるわ。十代君たちとのトレーニングで不足している部分をね」

ここまで言われて一夏は黙っていられず、反論した

「じゃあ、勝負しましょう。負けたら従いますから」

「うん」

『一夏の奴、あいつの手のひらでいいように動かされてないか？』

「僕もそんな感じがした」

遊戯とアテムはこっそり話していた

その後、武道場で一夏がボコボコにされた

その様子を見て、十代はかっこいいと目を輝かせていた

盾無はそんな彼に優しく微笑みながら手を振っていた。一夏を軽く

たたきのめしながら

第３８話　衝撃！　景品は男子達！？（後書き）

まったり進んでいくと思います

感想・指摘等あればよろしくお願いします

第３９話　新たな入居者？　一夏の新たなコーチ（前書き）

書かせていただきます
ちょっとあるフラグ成立中

第３９話　新たな入居者？　一夏の新たなコーチ

一夏が盾無にボコボコにされた後、十代は彼を保健室に運んでいた

盾無はもちろん、遊戯と遊星も一緒について行っている

「学園最強ということだけはありますね。俺の住んでいたところでもあれほどの使い手はいないと思いますよ」

「あはは、ありがとうね。遊星君」

「一体どんな特訓をすればああなるんだろうね」

『ああ、並の努力ではないんだろうな』

「生徒会長ってすごいんだな」

四人　（アテムも入れれば五人）は楽しく話していた

保健室につき、一夏をベッドに寝かせた

「一夏君が目を覚ましたらアリーナに行って特訓をするけど、君たちはどうする？」

「盾無会長の実力が見てみたいから俺は参加するぜ。何か俺達も得られるものがありそうだし」

十代の言葉に二人は同意した

「うふふ、向上心があるのはいい事よね。じゃあ、一夏君が起きるまで待ちましょう。たぶんそんなにかからないから」

彼女の言葉通り数分で一夏は目を覚ました。それと同時にラウラが入ってきた

「一夏！　この女にやられたのか！？」

盾無に襲いかかろうとしたが、彼女は軽く扇子一本で倒してしまった

「むう……」

「素直な子は好きよ。じゃあ、アリーナに行きましょう」

「……え？」

一夏は何が何だかわからないという顔だったがほっといてアリーナに向かっていた

行く途中にいつものメンバーに会ったので、一緒に行くことにした

アリーナについた途端、盾無は女子たちに宣言した

「そうそう、一夏君のコーチをするからよろしくね」

その言葉に五人は驚いた

「ど、どういうこと一夏！？」

「一夏、貴様……！」

「ま、待ってくれ、これは勝負の結果なんだ」

「負けた方がいいなりになるっていうね」

一夏が必死にごまかしているのに盾無はさらにかき回した

そのせいで、遊戯達には止められなくなった

（（（大変だな、一夏　（君）も）

何とか説得してから特訓が始まった

シャルロットとセシリアの二人で、円を描きながらの移動と射撃の同時操作を行っていた。お互いに不規則に速度を変えて、相手の攻撃をかわしながら自分の攻撃を当てようと射撃していた

「これは……」

「気づいたみたいだね。射撃と高度なマニュアル機体制御を同時に行っているんだよ。回避と命中の二つを一緒に意識しながらやらないといけないの。機体を完全に自分のものにしないとできない技術ね」

盾無の解説が入る

「君にはこういった高度なマニュアル制御も必要なの。わ・か・る？」

一夏の耳に息を吹きかける。それを見ていたセシリアとシャルロットが驚く

そのせいで失敗してしまい墜落してしまった

「だ、大丈夫？」

恐る恐る一夏が聞いてみたが、二人は一気に一夏の所に詰め寄った

「もう！　僕たちが頑張っているのに遊ばないでよ」

「ううん、シャル。すまん、盾無さんにいつの間にかやられてた」

素直に謝るとシャルロットは顔を赤めていた

「……うん、いいよ。もう油断したらダメだからね」

「ちょっと一夏さん、わたくしへの謝罪は？」

何だか二人の雰囲気が良くなっていたのに耐えられず、セシリアは口を挟んだ

これでまたイザコザが起こってしまうのはまた別の話

一夏　ｓｉｄｅ

それから俺は盾無さんによる猛特訓に明けていた。遊戯さん達も参加している

「ほら、一夏君。集中して、スピードが落ちているわよ」

「わかりました」

ううん、なんだかうまくいかない

遊戯さん達はそれなりにうまくできている

特に遊星さんが一番うまい

「遊星君はうまいわね。バイクに乗っている時間が長いからかしら？」

「そうかもしれないな。こういった動作は運転でしたことがある」

そうかと俺は納得していた

そのまま特訓を続けたが、次の段階でうまくいかず、そのまま終了してしまった

帰り道、少し不機嫌になってしまった

「遊戯さんたちはうまくいっているのにどうして俺だけ……」

つい愚痴をこぼしてしまう

「だって俺達ある意味ズルしているからな」

「まあ、そう言えなくもないかもね」

……十代さんと遊戯さんの言葉の意味が分からなかった

「俺達はカードの力に頼らなければいけない。だが一夏、お前は自分でＩＳの力を学んでいる。そういった自分の力だけでＩＳを動かす技術は俺達にはまだできないからな」

「そうだぜ、一夏。気にしすぎなんだよ。確かに周りは優秀な奴ばっかりかもしれないけどさ。お前が不貞腐れていても何にも意味ないって。大体俺だって、座学の成績は一夏より酷いし」

「千冬さんの弟だからとか考えなくていいと思うよ。少なくとも僕たちは一夏君自身を見ているんだから」

『一夏、お前自身の今までやってきたことを信じるんだ。努力したことは必ず結果として出てくる。いつか必ずな』

……皆そう思っていてくれたのか……

「……ありがとうございます。何だか情けないですね」

「そんなことないよ。一夏君くらいの年の人なら誰だってそういうこと思うんだから」

「いつでも俺達を頼ってくれよ」

「俺達は仲間だからな」

三人の言葉が嬉しい

気分が晴れ、そのまま部屋に戻ることにした。その途中、虚先輩に出会って忠告を受けた

盾無会長には振り回されるからと

その言葉通りのことが部屋に戻った瞬間に起こった

「お帰りなさい、ご飯にする？　お風呂にする？　それとも私？」

……何故ここに？

隣にいた十代さんも驚いている

「あら？　ここって一夏君と遊戯君の部屋じゃないの？」

「ああ、俺たちは毎月部屋を交換しようってことにしていたんだ。勿論先生にも許可をもらっているけど……とりあえずご飯がいいです」

「うふふ、一夏君は？」

どうして十代さんは答えることができるんだろう

とりあえず、部屋に入って話を聞くことにした

「生徒会長権限でちょっと入ってみたの。二人部屋だけど、布団持ってきたから泊めて」

語尾にハートが付いている感じがした

「な、何故ですか？」

「う～ん、なんとなく一夏君の観察」

そんな理由で泊まらないでください……

「……俺、遊戯さんの所に行った方がいいですか？」

「あら大丈夫よ。十代君、それよりハネクリボーちゃんを抱っこしたいから来てほしいな」

そういう理由で出て行かなくていいんですか……

十代さんはしょうがないという感じでハネクリボーにお願いしていた

ハネクリボーもやれやれという感じで盾無に抱っこされにいった

「ん～いいわね。そうそう、知り合いからお菓子もらったから三人で食べましょう」

こうして俺と十代さんの部屋は占拠されていた

それからいろいろと悪戯されていた

お風呂に侵入して来たり、俺達の教室に来てあーんと盾無さんが作ってきたお弁当を食べさせたり等々

……でもやけに十代さんにもかまっていたな

おいしいって言われた時、いつもより笑顔だったな

ある日の放課後、食堂で少しぐったりしていると、シャルがお茶を持ってきてくれた

「ああ、ありがとうな。助かるよ」

「大丈夫？　最近一夏大変そうだよね？　訓練を少し見てたけど、結構ハードだよ」

「ああ、何とか生きてるから……でも、この後、文化祭の準備もし

ないといけないから頑張らないとな」

一杯飲んで立ち上がる

「あんまり無理しないでね。倒れたら心配するから」

「ありがとうな、じゃあ困ったらシャルに頼るから」

「う、うん、任せて」

顔を赤めながら教室に戻って行った……なんだか恥ずかしいことを言ってしまった気がした

やっぱりシャルといると落ち着く

よし！　頑張るか

気合を入れて教室に向かった

第３９話　新たな入居者？　一夏の新たなコーチ（後書き）

次回は文化祭です。
敵さんも少し動き出します

感想・指摘等あればよろしくお願いします

第４０話　学園祭開始　不思議な女の子（前書き）

書かせていただきます

第４０話　学園祭開始　不思議な女の子

Ｓｉｄｅ　？？？

ここがＩＳ学園か……

あの人は何回か入っているからよく知っていそうだけど、なんだか迷いそうだな

「君ちょっといいかな？」

眼鏡のかけたお姉さんに声をかけられた。あの人よりは年下かな？

「チケットがないとここに入れないんだけど持ってる？」

そうだった。この前おじさんからもらったチケットを出さないとポケットからそのチケットを出すと、チェックしてもらってすぐに返してもらった

「いいわよ。それにしてもお嬢ちゃん、最近来た武藤君から招待状をもらうなんて……どういう関係？」

「このチケットはもらい物なんです。知り合いのおじ様が用事で行けないから代わりに行ってきてくれって言われて」

納得してくれたのか、そのまま通してくれた

そのまま学園の中に入った

フフフ、楽しみだな。初めて生で見るんだよね

……一夏お兄ちゃん達を

Ｓｉｄｅ　？？？　エンド

Ｓｉｄｅ　一夏

学園祭が始まってからうちのクラスのお客さんの数はものすごかった

「聞いた？　一年一組ってメイド喫茶って言われているけど執事が四人もいるんだって」

「知ってる、知ってる。しかもご奉仕してくれるんでしょ！？」

「ツーショットの写真に握手もしてくれる……これは行かなきゃね」

こんな感じで大盛況。俺達を目的に多くの人が来た

「どうぞ、お嬢様。ケーキセットになります」

「こちらは紅茶です」

「……分かりました。ではシャッターをお願いします」

なんだかんだで遊戯さんたちも楽しくやっている。俺も気合入れてやらないとな

その矢先、チャイナドレスを着た鈴がやってきて俺に対して、あるセットを頼んでいた

「執事にご褒美セット……ですね。かしこまりました。では失礼して」

鈴の目の前に座る。内容を説明した

まあ執事に食べさせることができるっていったい誰得だよって感じなんだけどな

一つビスケットをつまませてもらった。うん、うまい

「ねえ、あんたからも……」

「お嬢様、当店ではそのようなサービスはしておりませんので」

笑顔でシャルが迫っていた。ちょっと怖い

残念そうに鈴は去って行った

「もう、一夏！　ちゃんと断らないとだめだよ」

「悪かったよ。それよりこの混み具合だから仕事に戻らないと大変なことになりそうだな」

「そうだね。お互い頑張ろう」

この笑顔は可愛かった。正直器用に笑顔を使い分けられるってすごいよな

あれこれ作業していると十代さんに声をかけられた

「なあ、そろそろ弾と数馬と蘭が来る時間じゃないか？　一夏、迎えに行った方だいいと思うぜ」

時計を見てみると、確かにそんな時間だ

「店のことは気にするな。俺達が何とかやっておく」

「クラスの子達にも事情は話しておくから」

待たせるのは良くないよな。じゃあ、お言葉に甘えて

「じゃあ、ちょっと行ってきます」

遊戯さんたちにお礼を言って、上着を脱いですぐに出ていった

その途中、いろんな女子に声をかけられたが、軽く挨拶をして急いだ

しかし一人そうはいかない人がいた

「ちょっとよろしいでしょうか？　私、こういうものです」

声をかけてきた女性から受け取った名刺を見て分かった。ＩＳ関係の会社の人だ

そしてその目的も

「すみません、新しい装備については学園側に許可を取っていただかないと……」

「そう言わずに、こちらのカタログを」

ダメだ、こっちの話を聞いてない

それに腕を思いっきりつかまれているため逃げられない

困った、そう思った時

「ねえ、お兄ちゃん」

フリフリの黒いドレスを着た女の子が俺のもう片方の手を引いてきた

女性の手を振り払おうとしている

「ごめんね、お嬢ちゃん。いま大切な話をしているから」

「やだ！　お兄ちゃんに連れてってもらいたいところがあるからその手を放して」

女の子は強引に女性の手を離させて俺を引っ張って行った

この子、相当力があるな。それにものすごく速い

ついていくだけで精一杯だ

気が付いた時には弾たちと待ち合わせをしている正面ゲート前についていた

到着したと同時に女の子が俺の方を振り向いてくれた

「大変だったね。まったくあのおばさんしつこかったよ」

「ありがとうね。ちょうど困っていたから。それで君は？」

「私？　リリーナだよ、一夏お兄ちゃん」

「リリーナちゃん、それで君はどこに行きたかったの？」

そういえば連れて行ってほしいところがあるって言っていたのを思い出したので聞いてみた

「うんとね、お兄ちゃんたちの教室。でも何か用事があったんだよね？　それが終わってからでいいよ」

そうだ、弾たちは……

見渡すとすぐに見つけた

とりあえず合流することにした

「おー、一夏。やっぱりすごい所だな」

「女子のレベルが高いな」

「私来年ここに入れるか不安になってしまいました……ところでそちらの女の子は？」

蘭が何だか不満たっぷりな目で見てきた。そんな目で見ないで欲しい

「リリーナっていうの。一夏お兄ちゃんには道案内を頼んだの。あなたたちは一夏お兄ちゃんの友達？」

丁寧にあいさつしたからかフリフリドレスの少女はすぐに三人と仲良しになった

やっぱり仲がいいのはいいよな

「じゃあ、行こうか。俺のクラスでいいよな？」

「よろしくお願いします」

「行こう、一夏お兄ちゃん」

蘭はいつも通り礼儀正しくお辞儀をしていた

リリーナちゃんは楽しいのかはしゃいでいる。兄の弾や数馬ときたら周りをきょろきょろしすぎだ。別の意味ではしゃいでいる

……あれ？　俺、リリーナちゃんに名乗ったっけ？

まあ、テレビで出ているから有名なんだろうな

それと……リリーナちゃんの近くにいる二体の小さな悪霊のようなモンスター……あれってまさか……

「すごいですね。紅茶がおいしいです」

「ケーキもうまいな」

「しかし何より」

「「「あの笑顔はすごい」」」

弾たちを俺達のクラスに招待した後、それぞれ紅茶とケーキを頼んでくれたのだが……

リリーナちゃんの笑顔にみんな見惚れていた

「どこの子なんだろうね？　可愛いよね」

「あんな妹いたら毎日着せ替えとかしちゃうわ」

周りの女の子もはしゃいでいる

「一夏お兄ちゃん、ありがとうね。ものすごくおいしい。他の執事さんもありがとう。すごく楽しいよ」

ニコリとした笑顔をくれた

「……一夏、なんだかあの子ばっかり見てるね」

「いや、何というか……ものすごく楽しんでいるって感じがして何だかうれしいんだ」

「そう、でもあんまり見てると失礼だから仕事した方がいいよ」

……シャルは何だか不機嫌だった。まあ、確かに仕事はしないといけないし

一時間くらい経っただろうか。一度お店の体勢を整えるため休憩時間をもらえた

「よーし、俺行きたいところがあったんだ。悪いけどお先」

十代さんは上着をぬいで急いで教室から出ていった

元気だな……

遊戯さんと遊星さんもどこか行ってしまった

さて、どうしようかと思った時、腕を引っ張られた。セシリアだ

「さあ、一夏さん。行きましょうか」

「ああ、ずるいよ。セシリア。僕も行きたいよ」

「私も行くぞ」

「嫁は私と一緒でなければな」

さすがにこの人数は周りに迷惑になりそうだな……

「……私も行きたいけど会わないといけない人がいるから……じゃあね、一夏お兄ちゃん」

「わ、私も一夏さんと……」

リリーナちゃんは残念そうに教室を出ていった

というか蘭、君も行きたいのか。どうしよう……そうだ！

「一人十分くらいの持ち時間でそれぞれ順番に行こうか」

そう言った瞬間、何を思ったのかみんなでじゃんけんを始めた

皆、何だか……怖いな

「一夏、お前……もげろ！」

「幸せもんだな……このリア充」

弾と数馬はいきなり文句を言ってくる。何だよ、一体……

さて、誰が最初になるのかな？

第４０話　学園祭開始　不思議な女の子（後書き）

次回は学園祭後半部分です
戦いはその次……の予定です

感想・指摘等あればよろしくお願いします

第４１話　休憩時間と演劇　新たな襲撃者と戦うもの（前書き）

書かせていただきます
視点はずっと一夏で

第４１話　休憩時間と演劇　新たな襲撃者と戦うもの

「えへへ、一緒に行こう。行きたいところがあるんだ」

一番目はシャルだった。どうやら料理部に行きたいみたいだ

「でもどうしてだ？　シャルは料理普通にうまいよな？」

何回かお弁当をもらったことがあるが腕は充分だよな

「う～んとね、日本の伝統料理を学びたいなって思って」

なるほどな。しかしシャルは偉いな

「じゃあ、今度一緒に作ろうぜ。俺にも教えることがあれば教えるし」

「う、うん。よろしくね」

顔が少し赤くなっている気がする

どうしたのか聞こうと思ったけど、目的地に着いてしまった

入ってみると様々な料理が大皿の上に並んでいた。これはすごい

「あ、織斑君にデュノアさんだ。何々？　執事とメイドの逢引き？って言ってもミンチじゃないわよ。合挽きだけに！」

恐らく料理部の部長なのだが……テンションが高いな。そしてこの人と何だか気が合いそうな気がした

「よかったら好きなのをどうぞ。写真とうちに投票してくれるならお代はいいから」

いきなり不正を発見してしまった

「いえ、お代はしっかり払わせてもらうので……」

そのまま俺達は煮物を頼むと、すぐに用意してくれた。どうやら違う種類の煮物を用意してくれたみたいだ

一つつまんでみる。これは……

「おいしい」

そう言うと料理部部長はえっへんという感じになっていた

コツを聞こうとしたが、教えてくれなかった。さすがにそれはダメかそういえばシャルの煮物もおいしそうだよな

「なあ、シャルの食べていいか？」

「あ、うんいいよ。僕も一夏の食べてみたかったから」

お互いの煮物を食べていると

「ねえ、食べさせ合いっこ　とかしないの？　いい絵になるのに」

その言葉で俺は顔が赤くなった気がした。シャルは顔が真っ赤になっていた

「あ、あの……えっと……」

シャルが何か言おうとした時にぱしゃりと写真を撮られていた

「いい絵が撮れちゃった。よかったらいつでも遊びに来てね」

ニコリと言われた。後なんかシャルに耳打ちしていた。とりあえずお金だけ払って出ることにした

「……なんだか恥ずかしかったな」

「……そうだね。ねえ一夏は僕が料理うまくなったら嬉しい？」

「今でも十分だけどそうだな。俺も励みになるからうれしいかな？」

「えへへ、そっか」

ご機嫌になっていた。おっと、そろそろ時間だな

「そろそろ教室に戻ろうか」

「もうそんな時間なんだ……一夏……今日学園祭が終わって片付けが終わった後、ちょっと話したいことがあるんだ。二人っきりで話したい大事な話なんだ」

いつも以上に真剣な目で見てくる。それに俺は答えようと思った

「わかった。じゃあ、俺の部屋でいいかな？」

「うん、約束だよ。他の子は絶対入れちゃだめだからね」

そう言われてシャルと別れた。うん、約束は覚えておかないと

さて、次は誰かな？　そう思って教室をのぞいてみると

「一夏さん、私です。いきましょう」

どうやら蘭みたいだ。あれ？　弾と数馬は？

「お兄たちなら先ほど出ていかれましたよ。出会いを求めるって言って」

……何も言うまい

「それより一夏さん、私見てみたいところがあるんです。案内をお願いします」

何処に行きたいんだろう？　聞いてみると意外な答えだった

目的地に着くと蘭は驚いていた

「広いんですね……アリーナって」

「そうだな。まあこれくらい広くないと十分に戦えないからな」

今、俺達が訓練や試合に使っているアリーナの一つにいる
来年ここ、ＩＳ学園に通おうと思っているらしい。今のうちに色々見ておきたいのだろう

「じゃあ次は……って結構時間がたってしまいましたね」

「残念だけど、今回はこれで終わりだな。戻ろうか」

教室に戻ろうとした時、蘭に服の裾を掴まれた。何かな？

「……一夏さん。いつか戦っている姿を見せてください」

「じゃあ、そういうイベントがあって見に来てもいいようだったら連絡するよ」

そう言うとにっこりとした笑顔をしてくれた。喜んでもらえたらしい
次は……

「私の番ね」

俺の目の前に盾無さんが現れた。逃げたい

「しかし回り込まれた」

くそ、一体何が目的なんだ？

「ああ、ちょっと生徒会のお手伝いをしてほしいの。遊戯君たちにもお願いしたから後は君だけ。いいかな？　後、箒ちゃんたちとの

休憩時間はないよ。私が事情を話して何とかしたから」

……断るって選択肢はないんだよな。きっと

「蘭、悪いんだけど……」

「……大丈夫ですよ、お兄を探して合流します。どうせ、ふられてショック受けていると思いますから」

何という発言だ。弾……頑張れ

そのまま俺は盾無さんに引っ張られていた。一体何をやらされるのだろう……

連れてこられたのは第４アリーナの更衣室
そこにはすでに遊戯さんたちがいた。何故か王子様風の衣装に着替えている
どうやら俺の分もあるらしい
急いで着替えると盾無さんがノックもせずに入ってきた
「キャッってもう着てるんだ。なんかつまらないな」
「そういうことはやめてください」
「それはどうでもいいとして、これをかぶってもらえるかな？」
……何だ？　この王冠？
人数分用意されているみたいだが……
とりあえずかぶっておく。その後、舞台袖に案内してもらった
「俺、演劇とか初めてだけど大丈夫かな？」
「大丈夫よ。シンデレラっていうメジャーなものだし、ほとんどセリフはアドリブだから」
十代さんの質問にあっさり答えた
「……それは劇といえるのか？」

「細かいことは気にしちゃだめよ。さあ、幕開けよ。アナウンスを流すからその通りに話を進めてね」

ブザーが鳴り、幕が開いた。ものすごい数の観客だ

「あるところにシンデレラという……王子の冠の秘密を手に入れるための者たちの称号を持つ少女たちが立ち上がる」

……俺達は黙ってしまった

だがその瞬間、俺の眉間に何か狙われている感じがした

とっさに避けると赤い光線が飛んできた

「……ひとつわかったことがあるんだ。一夏君」

「奇遇ですね、遊戯さん。俺も今何やらないといけないかわかりました」

「一夏……遊星……散らばった方がいいよな？」

「そうですね、皆……無事なことを祈ってます」

そう言って俺達は必死に逃げ回ることにした

「待て！　一夏！！」

「おとなしく王冠を渡せ！！」

箒とラウラが襲ってきた。って二人とも武器持ってるよ！！

必死に避けるしかない。その時、誰かに足を引っ張られた

誰かに誘導され、気が付くと更衣室にいた

「あの……」

見てみると先ほど、ＩＳの装備を勧めていた社員の人だ

「なぜここに？」

「あなたの白式をいただこうかと思いまして」

……は？

「いいからさっさとよこせよ、ガキ」

訳が分からない、そう思っているといきなり強烈なけりを腹に喰らわされた

……まさか、敵なのか？

「くそ、白式！」

「は、さっさと片付けてやるよ」

相手の女の背中から蜘蛛のような足が出てきた

八つの銃口から繰り出された砲撃を何とかかわしていく

「少しはやるなぁ」

「お前ら一体……？」

「知らねえのか？　悪の組織の人間だよ。秘密結社、亡国企業のオータム様っていうんだ」

ふざけている……わけじゃなさそうだな。ああいう目は不気味だ

一気に決めてやる。そう思って切りかかったが、八本の足が器用に受け止める

「甘えよ」

そのまま奴の手に持っていたマシンガンの攻撃を喰らってしまった

このままだとまずい。とにかくいったん回避、そこから隙を見つけないと

相手の銃弾を何とかかわして行けた。盾無さんの特訓がさっそく役に立つとは

「このアラクネを前によくやりやがる。だからいいことを教えてやるよ。第二回モンド・グロッソでお前を拉致したのはうちの組織だよ。感動のご対面ってか？　ハハハハ」

その瞬間、俺の沸点は越えた。だったら……

「その借りを今返してやる！！」

「バカじゃねえの！？　こんな真正面から突っ込んできやがって」

エネルギー・ワイヤーで構成された塊が弾けて網となって俺の前に飛んできた

切り裂こうとしたが、体自体に絡まってしまった

「本当に楽勝だな。蜘蛛の糸を舐めるからこうなるんだよ」

くそ、早く何とかしないと

「まったく、私たちのお昼寝の邪魔をするのは誰？」

この声って……

俺の目の前に黒いフリフリのドレスを着た少女、リリーナちゃんがやってきた。ダメだ、逃げろ！

「……そこのおばさんなんだ。私とコストンのお昼寝を邪魔したの……」

「ああ？　何だ？　このくそガキが？　死ぬか！？」

亡国企業の敵がリリーナちゃんに銃口を向けていた。動け、動けよ！

「大丈夫だよ。一夏お兄ちゃん、リリーはね……こんな雑魚に負けないよ」

ニコリと笑った瞬間、マシンガンが破壊されていた。彼女の近くにいた二体の悪霊たちも笑っている

いつの間に！？

「アハハハ……その程度の蜘蛛で自信満々って……おばさんは本当に面白いね。私が見せてあげるよ……本当の力を……出てきて。グランド・イモータル！！」

リリーナちゃんのＩＳが展開されていく。黒い装甲に様々な色のラインがついていた

同時に近くの地面に何か描かれていく。これは……蜘蛛？

「私の蜘蛛を見せてあげる……Ｕｒｕ（ウル）をね」

リリーナちゃんは本当に楽しそうに笑っていた

その笑顔はまるで……新しいおもちゃを見つけたようだった

逆にその無邪気な笑顔が……恐ろしかった

第４１話　休憩時間と演劇　新たな襲撃者と戦うもの（後書き）

次回はリリーナが戦います。盾無さんの出番も一応ありますよ

オリジナルの敵の設定ももう少ししたら作成します

感想・指摘等あればよろしくお願いします

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1113u/

IS（インフィニット・ストラトス）精霊と赤き竜とＩＳと

2011年12月8日01時52分発行